新潟県埋蔵文化財調査報告書　第171集

一般国道253号

上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅳ

狐　宮　遺　跡

２００７

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道253号

上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅳ

狐宮（きつのみや）遺跡

２００７

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

上越三和道路は、上越市寺と上越市三和区を結ぶ地域高規格道路（自動車専用道路）で、上越市から南魚沼市六日町に至る延長約60kmの一般国道253号上越魚沼地域振興快速道路の一部です。この地域高規格道路は、地域の活性化と他地域との交流を促進することを目的として建設される道路です。上越地域においては、高規格幹線道路である北陸自動車道・上信越自動車道と併せて、信頼性の高い循環型広域ネットワークを形成することを目指し、これによって、沿線地域の産業・経済・文化の交流発展が促進されるものと期待されています。

本書は、この上越三和道路建設に先立ち、平成17年度に行なった狐宮遺跡の発掘調査報告書です。調査の結果、奈良・平安時代の遺構・遺物が多く発見され、沖積微高地上に営まれた集落跡であることが明らかになりました。また、科学分析の結果から古墳時代の所産とした底面に木杭を備えた陥し穴と考えられる遺構や縄文時代の遺物も出土しています。これらの発見は、当該地の生業活動の開始や土地利用のあり方を考える上で多くの情報を提供するものと思われます。

今回の調査成果が、地域の歴史を解明するための資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大なご協力とご援助を賜った上越市教育委員会、並びに地元の方々、発掘調査から報告書刊行に至るまで格別のご高配を賜った国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所に対し厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

新潟県教育委員会

教育長　武　藤　克　己

例　　言

1　本報告書は新潟県上越市大字門田新田字江向147番地ほかに所在する狐宮遺跡の発掘調査記録である。

2　発掘調査は上越三和道路建設に伴い国土交通省から新潟県教育委員会（以下、県教委と略す）が受託したものである。

3　発掘調査は県教委が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団と略す）に委託し、平成17年度に実施したものである。

4　埋文事業団は、発掘調査および関連諸工事を株式会社吉田建設に委託した。

5　出土遺物及び調査に係る各種資料は、一括して県教委が保管・管理している。

6　遺物の註記は狐宮遺跡の略記号「キツミヤ」とし、出土地点や層位を続けて記した。

7　本書の図中で示す方位は、すべて真北である。

8　遺物番号は種別に係りなく通し番号とし、本文および観察表・図面図版・写真図版の番号は一致している。

9　本文中の註は脚註とした。また、引用文献は著者および発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。ただし、第Ⅵ章の自然科学分析については、章末に記載した。

10　本文中の敬称は省略した。

11　自然科学分析は以下の機関に委託した。

木製品の樹種同定……株式会社加速器分析研究所

木杭年代測定……株式会社パレオ・ラボ

土壌年代測定……株式会社加速器分析研究所

12　調査成果の一部は現地説明会（平成17年11月3日）で公表しているが、本報告書をもって正式な報告とする。

13　遺構・遺物図のトレース及び各種図版作成・編集に関しては、株式会社セビアスに委託した。写真は全てデジタルデータを使用し、遺構写真はポジフィルムからデジタルデータ（フォトCD）化し、遺物写真はデジタルカメラ（ニコンD100）で撮影した。なお図版作成・編集作業に係り、業者に支給した資料は以下のとおりである。

本文・挿図：Word形式・Excel形式データ、トレース原図・貼り込み版下

遺構図面図版：DXF形式・PDF形式の測量データ・原図・レイアウト図・文字データ

遺物図面図版：個別トレース図・原図・レイアウト図

写真図版：デジタルデータ（CD）・レイアウト図

14　本書の執筆は、飯坂盛泰（埋文事業団　班長）、河崎昭一（同　主任調査員）、桐原雅史（同　主任調査員）、野水晃子（株式会社吉田建設埋蔵文化財事業部　調査員）、山下　研（同　調査員）がこれにあたり、編集は飯坂、野水が担当した。また、第Ⅴ章2Bの縄文時代草創期の尖頭器の記述は加藤　学（埋文事業団　班長）が行った。執筆分担は以下のとおりである。

第Ⅰ章、第Ⅱ章1、第Ⅲ章2、第Ⅳ章、第Ⅴ章2B・3B～D・5B、第Ⅶ章3……飯坂

第Ⅱ章2、第Ⅲ章1、第Ⅳ章……桐原

第Ⅱ章3、第Ⅳ章……河崎

第Ⅳ章、第Ⅴ章1・2A・3A、4A、第Ⅶ章2……野水

第Ⅳ章、第Ⅴ章3E・4B、5A・C・D、第Ⅶ章1……山下

15　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々および機関から多くのご教示・ご協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。（敬称略　五十音順）

金子優子　　小島幸雄　　笹澤正史　　佐藤宏之　　杉本哲雄

国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所　　上越市教育委員会

目　　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査と整理作業 …… 1

A　試掘確認調査 …… 1

B　本発掘調査 …… 2

C　調査体制 …… 3

D　整理作業 …… 4

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 5

1　遺跡の概要 …… 5

2　遺跡周辺の地理的環境 …… 5

3　歴史的環境 …… 6

第Ⅲ章　調査の概要 …… 9

1　グリッドの設定 …… 9

2　層　　序 …… 9

第Ⅳ章　遺　　構 …… 11

1　概　　要 …… 11

2　遺構の記述と表記方法 …… 11

3　古代の遺構 …… 12

A　掘立柱建物 …… 12

B　竪穴建物 …… 14

C　井　　戸 …… 14

D　土　　坑 …… 15

E　畝状小溝 …… 16

F　性格不明 …… 17

G　川　　跡 …… 17

4　古墳時代の遺構 …… 18

5　中世の遺構 …… 18

6　近世以降の遺構 …… 19

第Ⅴ章　遺　　物 …… 20
1　概　　要 …… 20
2　縄文時代の遺物 …… 20
A　土　　器 …… 20
B　石　　器 …… 21
3　古代の遺物 …… 21
A　土　　器 …… 21
B　瓦 …… 34
C　土　製　品 …… 34
D　石製品・石器 …… 34
E　部材・木製品 …… 34
4　古墳時代の遺物 …… 35
A　土　　器 …… 35
B　木　　杭 …… 35
5　中・近世の遺物 …… 35
A　土　　器 …… 35
B　石　　器 …… 36
C　銭　　貨 …… 36
D　木　製　品 …… 36
第Ⅵ章　自然科学分析 …… 37
1　年 代 測 定 …… 37
A　陥し穴出土杭の年代測定 …… 37
B　Ⅴ層の年代測定 …… 39
2　樹 種 同 定 …… 41
A　試　　料 …… 41
B　観 察 方 法 …… 41
C　結　　果 …… 41
第Ⅶ章　ま　と　め …… 45
1　遺構について …… 45
A　SE116について …… 45
B　陥し穴について …… 45
2　遺物について …… 47
A　縄文時代の遺物について …… 47
B　古代の土器について …… 47
3　総　　括 …… 51
《要　　約》 …… 53
《引 用 文 献》 …… 53
《観　察　表》 …… 55

挿図目次

第 1 図　試掘調査トレンチ位置図……2
第 2 図　遺跡の位置と周辺の遺跡……7
第 3 図　グリッド設定図……9
第 4 図　狐宮遺跡の層序 ……10
第 5 図　門田新田土地更正図 ……19
第 6 図　縄文土器分布図（破片数）……22
第 7 図　古代の土器　須恵器器種分類図 ……23
第 8 図　古代の土器　土師器器種分類図 ……25
第 9 図　暦年較正結果……38
第10図　木製品の切片顕微鏡写真 ……44
第11図　井戸側模式図……45
第12図　陥し穴の類例……46
第13図　狐宮遺跡土器変遷図……50

表目次

第 1 表　周辺の遺跡 ……6
第 2 表　測定試料及び処理 ……39
第 3 表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果 ·39
第 4 表　年代測定結果 ……40
第 5 表　器種構成比率……47 · 48
第 6 表　食膳具構成比率 ……49

図版目次

［図面］
図版 1　遺構全体配置図
図版 2　遺構分割図（1）
図版 3　遺構分割図（2）
図版 4　遺構分割図（3）
図版 5　遺構分割図（4）
図版 6　遺構分割図（5）
図版 7　個別図1　掘立柱建物（1）
図版 8　個別図2　掘立柱建物（2）
図版 9　個別図3　掘立柱建物（3）
図版10　個別図4　掘立柱建物（4）
図版11　個別図5　掘立柱建物（5）
図版12　個別図6　掘立柱建物（6）
図版13　個別図7　竪穴建物・井戸（1）
図版14　個別図8　井戸（2）・土坑（1）
図版15　個別図9　土坑（2）
図版16　個別図10　性格不明遺構・古墳時代の遺構
図版17　個別図11　溝・畝状小溝・川跡・近世以降の遺構
図版18　縄文時代の土器・石器
図版19　古代の土器（1）
図版20　古代の土器（2）
図版21　古代の土器（3）
図版22　古代の土器（4）
図版23　古代の土器（5）
図版24　古代の土器（6）
図版25　古代の土器（7）
図版26　古代の土器（8）
図版27　古代の土器（9）
図版28　古代の土器（10）
図版29　古代の土器（11）
図版30　古代の土器（12）
図版31　古代の土製品・石製品
図版32　古代の木製品（1）
図版33　古代の木製品（2）
図版34　古墳時代・中世・近世の遺物

［写真図版］
図版35　SE116、古墳時代の陥し穴SK258
図版36　遺跡近景、遺跡全景
図版37　SB1周辺、SB2・SI394周辺
図版38　SB8～SB10周辺、SB12・SB13周辺
図版39　SI31、SI394周辺
図版40　基本層序、古代：掘立柱建物（1）
図版41　古代：掘立柱建物（2）
図版42　古代：掘立柱建物（3）
図版43　古代：掘立柱建物（4）
図版44　古代：掘立柱建物（5）

図版45　古代：掘立柱建物（6）
図版46　古代：掘立柱建物（7）
図版47　古代：掘立柱建物（8）
図版48　古代：掘立柱建物（9）
図版49　古代：竪穴建物、井戸
図版50　古代：井戸、土坑（1）
図版51　古代：土坑（2）
図版52　古代：土坑（3）、性格不明遺構、溝（1）
図版53　古代：溝（2）、川跡
図版54　縄文時代、古墳時代、近世溝
図版55　近世溝、その他
図版56　縄文時代の土器・石器、古代の土器（1）
図版57　古代の土器（2）
図版58　古代の土器（3）
図版59　古代の土器（4）
図版60　古代の土器（5）
図版61　古代の土器（6）
図版62　古代の土器（7）
図版63　古代の土器（8）・瓦・土製品・石製品・木製品（1）
図版64　古代の木製品（2）、古墳時代の遺物、中世・近世の遺物
図版65　墨書土器

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

上越三和道路は、上越魚沼地域振興快速道路（一般国道253号）のうち、新潟県上越市寺から、上越市三和区本郷までの延長約7.4kmの区間である。上越魚沼地域振興快速道路は平成10（1998）年12月に整備区間に指定され、上越市と南魚沼市を結ぶ延長約60km自動車専用の地域高規格道路として計画された。完成すれば、上越地方と首都圏を結ぶ最短経路として広域的な交流が促進されることが期待されている。

国土交通省は、上新バイパスにつながる上越三和道路の着工に向けて県教委に計画予定地内における埋蔵文化財の分布調査を依頼した。県教委は平成13（2001）年4月に分布調査を実施し、範囲内の24か所から主に古代・中世の遺物が採集されたため、ほぼ全域にわたり試掘調査による遺跡の存在確認が必要との旨を報告した。

上越市大字門田新田・大字本道地内の試掘調査は、国土交通省の委託を受けて県教委は埋文事業団に委託をし、調査対象範囲25,700m^{2}を平成16（2004）年5月17日から6月11日まで実施した。調査の結果、古代・中世の新たな遺跡が発見され、9,450m^{2}について本発掘調査が必要であることを国土交通省に報告した。遺跡は、この時点では下の輩（しもやから）遺跡と呼称したが、その後調査地点の地名の誤りの指摘を受け平成17年3月に土地の通称名から狐宮（きつのみや）遺跡と呼称変更することを県教委に伝えた。本発掘調査は、国土交通省、県教委、埋文事業団の三者で協議し、平成17年度に狐宮遺跡9,450m^{2}の本発掘調査を実施することに決定した。その後、平成16年度の試掘調査時に判断保留になっていた1,750m^{2}の発掘調査も行うことになり、合わせて11,200m^{2}の発掘調査を実施した。

2　調査と整理作業

A　試掘確認調査（第1図）

平成16年度

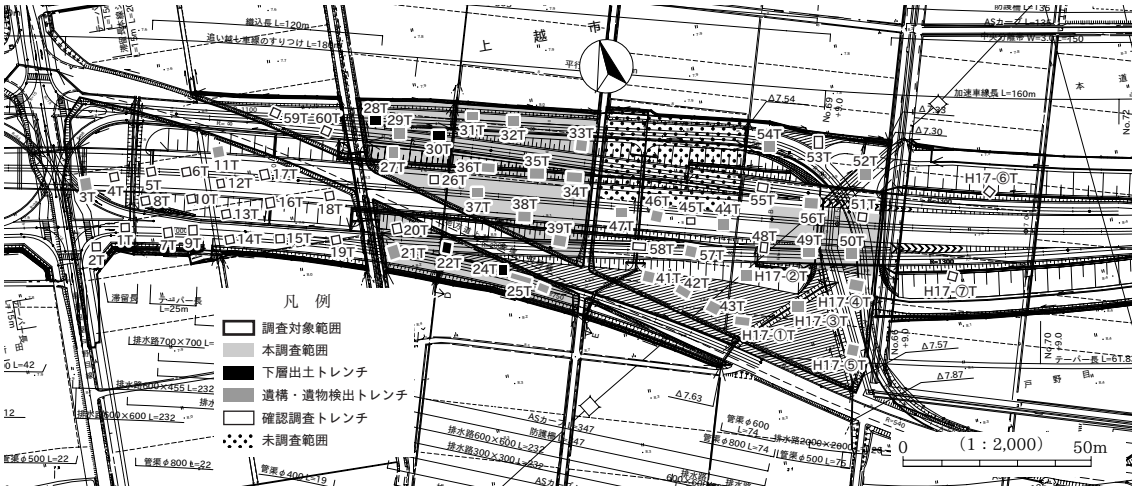
平成16年5月17日から6月11日まで、25,000m^{2}を対象として埋文事業団が調査を実施した。調査は対象地の任意の位置に60か所の試掘坑（トレンチ）を設定し、バックホーと人力により掘削を行い、精査をして遺構・遺物の有無、土層の堆積状況を確認し、図面・写真に記録した。

調査対象地は沖積地であることから地下2mまで掘り下げて確認した。その結果、地表下20cmで、多くのトレンチから古代の遺物が出土した。また、22・23・30・31・34トレンチでは古代の包含層よりも下位から古墳時代のものと考えられる遺物が出土した。遺構は、21・22・25・26～28・30・32・33トレンチで土坑、溝、ピットを検出した。下層の遺構は22トレンチでピットを検出した。以上の結果から、20～39トレンチ周辺の上層9,450m^{2}の本調査が必要であると判断し、以下は周辺の三角田遺跡、延命寺遺跡の状況と類似することから下層が存在する可能性があり、上層の調査終了後に遺構・遺物の有無を確認することにした。また、40～56トレンチ周辺は未買収地があり、その範囲の試掘調査

が済むまで判断保留とした。

平成17年度調査

前年度未買収で試掘確認調査が実施できなかった範囲3,640m^{2}を対象に実施した。調査は平成17年4月6日から8日までの期間で、7か所の試掘坑についてバックホーと人力により掘削・精査を行った。その結果、H17①～⑤トレンチで古代の遺物が出土したが量は少なく、遺構が検出されなかったことから対象地の本調査の必要はないと判断した。また、前年度判断保留としていた範囲で48～56トレンチの区域は、今回と同様な状況と想定し本調査の必要はないと判断した。49・50トレンチ周辺は相当数遺物が出土したことから、その周辺1,750m^{2}はトレンチ調査などの発掘調査が必要と判断した。



第1図　試掘調査トレンチ位置図

B　本発掘調査（第3図）

平成17年4月11日～平成17年11月18日まで実施した。

調査区は、県道上越・安塚・柏崎線によって北側と南側に2分割されている。4月11日から現場作業を開始した。最初に、北側調査区の4C・5Cに残る諏訪社が祀られていた高まりが古墳もしく塚ではないかということで地形測量とトレンチ調査を実施した。諏訪社の御神体はすでに移され、石祠の一部の残骸が残るだけであった。『上越市史』によるとこの諏訪社は寛永十年（1633年）に門田新田開村の際建てられたとしている［上越市編纂2001］。結果として、その高まりは水田構築前の旧地表面に周辺の掘削した土を盛ったもので、古墳もしくは塚ではないことが判明した。高まりからは、古代の包含層を削ったためか近世の遺物と混在して古代の遺物が出土した。

4月18日に北側調査区の西端からバックホーによる表土除去を開始した。4月25日には南側調査区の表土除去に着手し、北側では土層観察を兼ねて排水のための開渠を掘削した。5月9日から作業員60名程で、北側調査区の西半側から調査を開始した。3Aから7A周辺で柱穴、多数の小溝を確認した。また、西端で近世に掘られた用水路（SD240）を検出した。6月中は確認した遺構の調査を進めた。7月に入り、10A～13A周辺と6E・7E周辺の調査を行った。8月下旬から、南側調査区の開渠を掘削し、調査を始めた。北側調査区はこれまでの包含層の遺物出土状況を勘案し、作業の進捗も考えて残る10～13列の県道寄り部分の包含層掘削をバックホーで行うことにした。遺構確認に重点を置き、その結果SB11～

13などの建物を検出した。10月上旬、7I・6I周辺で多数の柱穴、小溝を検出したが、作業も迅速に進んだ。

10月27日に遺跡の空撮を行い、11月3日に現地説明会を開いた。11月4日以降は、遺構の平面測量を進めながら、試掘調査で下層の存在が指摘されていたことから、トレンチによる下層確認調査を行った。トレンチ設定か所は、今回の調査で縄文時代の遺物が出土した地点周辺を重点的に調査した。結果として、遺物は少量出土したが明確な遺構が検出しなかったことで下層の全面調査は必要ないと判断した。一方、11月8日からは試掘調査で遺物が多く出土したため調査が必要とされていた49・50トレンチ周辺（第1図）の1,750m^{2}の範囲をバックホーによるトレンチ調査を実施した。その結果は、古代の遺物が少量出土したが遺構は検出しなかったので、これ以上の調査は必要ないと判断した。本発掘調査の面積はこの範囲を含めて、最終的に11,200m^{2}である。現場作業は、11月15日に県教委から調査終了の確認を得て、11月18日に終了した。

C　調査体制

	試掘確認調査（平成16年度）	試掘確認調査（平成17年度）
調査期間	平成16年5月17日～6月11日	平成17年4月6日～4月8日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　武藤克己）	同左
調　　査	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団	同左
総　　括	黒井　幸一　（事務局長）	波多　俊二（事務局長）
管　　理	長谷川二三夫（総務課長）	同左
庶　　務	高野　正司　（総務課班長）	長谷川　靖（総務課班長）
調査・総括	藤巻　正信　（調査課長）	同左
担　　当	山本　　肇　（調査課課長代理）	寺崎　裕助（調査課課長代理）
職　　員	田中　一穂　（調査課嘱託員）	田中　一穂（調査課嘱託員）

	本発掘調査
調査期間	平成17年4月11日～11月18日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　武藤克己）
調　　査	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	波多　俊二（事務局長）
管　　理	長谷川二三夫（総務課長）
庶　　務	長谷川　靖（総務課班長）
調査・総括	藤巻　正信（調査課長）
指　　導	田海　義正（調査課本発掘調査担当課長代理）
担　　当	飯坂　盛泰（調査課班長）
職　　員	河崎　昭一（調査課主任調査員）
	桐原　雅史（調査課主任調査員）
支　　援	株式会社吉田建設 現場代理人　大野　哲也（株式会社吉田建設土木部工務係長） 調　査　員　野水　晃子（株式会社吉田建設埋蔵文化財事業部）

D　整 理 作 業

遺構図面の基礎整理・出土遺物の水洗・註記作業は、調査現場で発掘調査と並行して実施した。遺物の復元、遺物の写真撮影、図版作成と編集、原稿の執筆は、株式会社吉田建設の巻作業所で行った。

	整理作業
調 査 期 間	平成17年11月21日～平成18年3月31日
調 査 主 体	新潟県教育委員会（教育長　武藤克己）
調　　査	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	波多　俊二（事務局長）
管　　理	長谷川二三夫（総務課長）
庶　　務	長谷川　靖（総務課班長）
調査・総括	藤巻　正信（調査課長）
指　　導	田海　義正（調査課本発掘調査担当課長代理）
担　　当	飯坂　盛泰（調査課班長）
職　　員	河崎　昭一（調査課主任調査員）
	桐原　雅史（調査課主任調査員）
支　　援	株式会社吉田建設 調　査　員　野水　晃子（株式会社吉田建設埋蔵文化財事業部） 整理作業員　山下　研・古俣優子・中原友子・蕗谷容子・渡部洋子

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　遺跡の概要

狐宮遺跡の西側は戸野目川が南北に流れ、周辺には水田が広がっている。遺跡の標高は7.8～8mで、北西方向に向かって次第に低くなるが、その勾配は極めて緩やかである。今回の調査では、地表下30～50cmで古代の遺構を多く検出した。遺構は、南から北方向に蛇行しながら流れていた川跡両側の自然堤防上に築かれている。

2　遺跡周辺の地理的環境

狐宮遺跡が立地する高田平野は、新潟県南西部に位置する沖積平野である。その形状は、上越市五智、上越市柿崎区竹鼻、上越市三和区岡田、妙高市小出雲付近を頂点とする不等辺四角形に概ねなっている。北辺は、長さ約20kmにわたり潟町砂丘が発達し、海岸と平野とを区画している。東辺から南東辺には、東頸城丘陵が広がり、柏崎平野・越後平野・十日町盆地・長野盆地と高田平野とを隔てている。東頸城丘陵北端には米山を主峰とする米山山地、南東部には信越国境をなす関田山脈、南端には斑尾山がそびえている。西辺には西頸城丘陵が広がっている。この丘陵は、海岸に沿って西方に延び、糸魚川市の平野部と高田平野とを隔てている。西頸城丘陵南方には西頸城山地が連なり、その北端には青田難波山、南端には主峰の火打山（2,462m）がそびえている。さらに、その南には、富士火山帯の北端をなす、焼山（2,400m）および妙高山（2,454m）の両火山がそびえ、平野南端は、妙高山の岩屑流、火砕流により形成された丘陵と接している。

平野には、これら周辺の山地・山脈、丘陵から多数の河川が流入している。平野最大の河川である関川は、火打山・妙高山及び長野県との境をなす高妻山・乙妻山の地域を水源とし、平野を西偏しながら北流し、日本海に注いでいる。途中、妙高山から白田切川・大田切川などが、西頸城山地から矢代川・青田川などが、西頸城丘陵から儀明川・正善寺川などが関川に合流する。また、東頸城丘陵や関田山脈からは、大熊川・別所川・櫛池川・飯田川・保倉川などの中小河川が関川に合流する。平野の北東部では、東頸城丘陵・米山山地を水源とする吉川・大出口川・柿崎川などが平野に流れ出し、直接日本海に注いでいる。北東部から南西部にかけて、関川や矢代川をはじめ、大熊川・別所川・櫛池川・飯田川などにより形成された扇状地が発達している。

高田平野の地形面は、階段状であり、最も低い関川氾濫原面・関川面・最も高い高田面と２段の沖積段丘を形成している。狐宮遺跡をのせる高田面は主に礫・砂・シルトの互層からなる高田層によって形成された堆積面であり、その分布は平野の大部分を占める。平野の中央部において高田面の表層地質やその珪藻遺骸について検討した結果、この地域にはかつて沼沢地のような環境が広がっていたことが明らかになった［高田平原団体研究グループ1962］。一方、関川面は、関川とその支流に沿って分布する氾濫原堆積物である関川層からなっている。平野に分布する遺跡の時代を検討した結果、高田面は古墳時代初頭から段丘化し始め、数回に及ぶ洪水性堆積物によって覆われながら平安時代には完全に段丘化したものと考

えられている［高田平野団体研究グループ1981、岡本1999］。しかしながら、本遺跡の発掘調査で、縄文時代の草創期の石器や縄文時代後・晩期の土器が出土したことにより、少なくとも縄文時代の後半には人々が居住し得る環境が整っていた可能性があり、高田面の形成年代について検討が必要であろう。飯田川と関川との間には、小規模な自然堤防が点在し、その分布は、一定の方向性をもって配列している。その配列に従って灌漑水路が通り、戸野目川・重川のような小河川が流れているので、かつてはここに丘陵地から流れ出した川が流れているのではないかと推察される［高野2002］。このような自然堤防上の微高地に、現集落が成立している。

3　歴史的環境（第２図）

周辺の遺跡

狐宮遺跡周辺に広がる縄文時代・古墳時代・古代の主要な遺跡の分布は、第２図に示すとおりである。以下、時代ごとに整理して周辺の遺跡について概観する。なお、古墳・古代の様相については『三角田遺跡』の「第Ⅱ章２歴史的環境」に一部拠った［大島2006］。

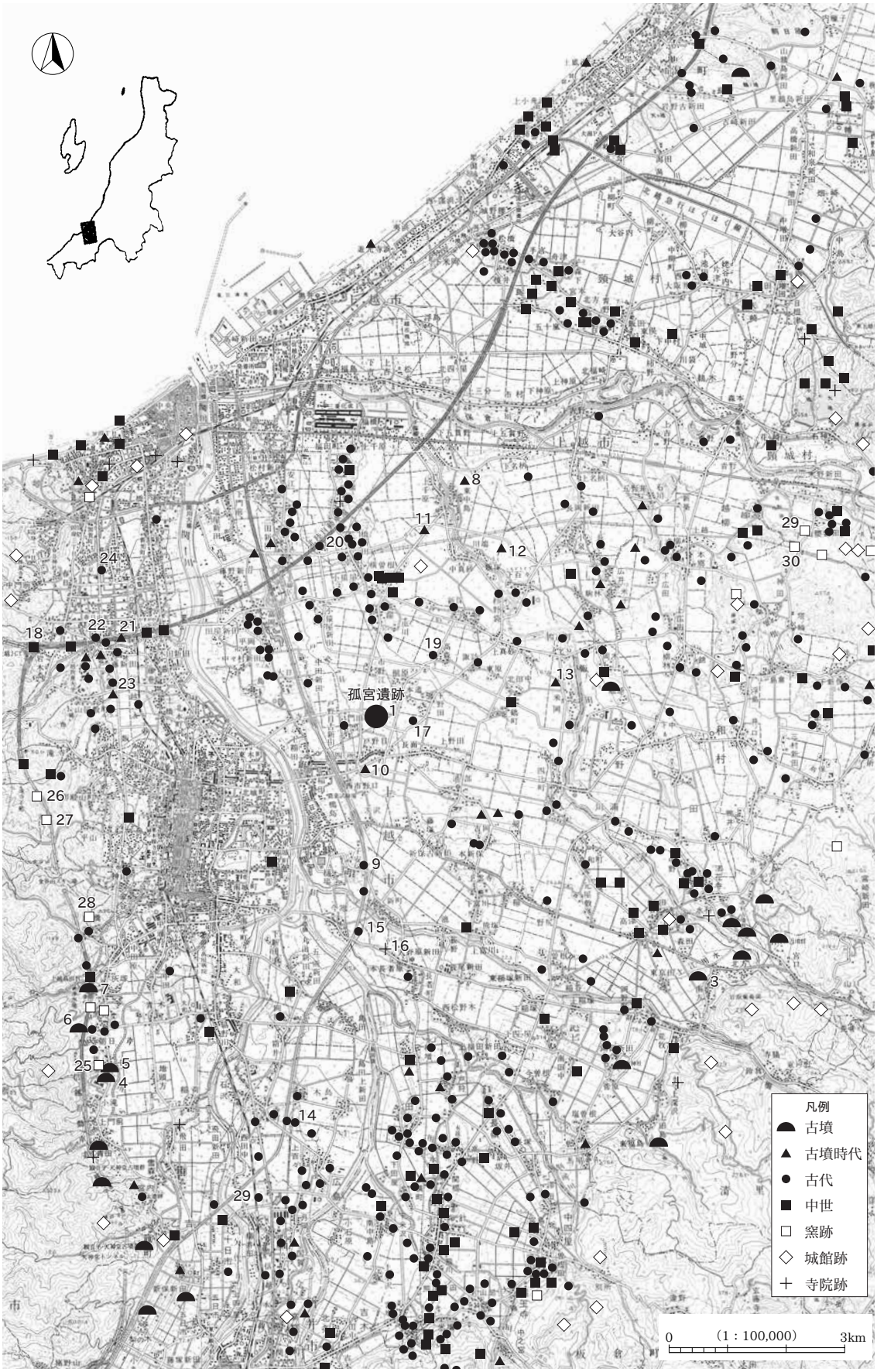
縄文時代　高田平野周辺の縄文遺跡は、関川左岸の丘陵部に多く確認されているが、沖積地では深く埋没していることなどの要因で発見されている遺跡は少ない。その中で、北陸自動車道建設に伴い発掘調査された八反田遺跡（22）は沖積地の埋没した段丘上に、池田遺跡（2）は沖積地の自然堤防上に立地し、前者は前期後葉の集落跡などが［江口・寺崎2002］、後者は晩期中葉の土器が発見されている［鈴木・寺崎・肥田野1985］。沖積地に位置する縄文遺跡の状況は不透明であるが、今後本遺跡のように沖積地に埋没している遺跡が発見される可能性は高い。

古墳時代　高田平野の南東部と南西部の丘陵上などには中～後期の古墳群が多く存在し、それら周辺の沖積微高地上に集落が点在する。

狐宮遺跡周辺に分布する遺跡には、前期の北割遺跡（8）・子安遺跡（9）中島廻り遺跡（10）津倉田遺跡（11）と中期の前田遺跡（12）や2km東にある下割遺跡（13）などがある。中島廻り遺跡では、前期古墳２基の検出が報告されている。［小島1991・2003］。後期と考えられる遺跡は少ないが、一之口遺跡（21）・山畑遺跡（18）は竪穴住居を主体とした集落である。津倉田遺跡は古墳時代初頭、７世紀中葉～８世紀初頭を中心とし、竪穴・平地式・掘立柱の建物等が確認され、沖積平野における集落形態が把握された［笹澤・小島1999］。峪ノ上遺跡（14）でも竪穴住居が検出された［渡邊2005］。

No.	遺構名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	狐宮	縄文・古代・中世	11	津倉田	古墳・奈良	21	一之口	古墳～中世
2	池田	縄文・古墳～近世	12	前田	古墳・古代	22	八反田	縄文～中世
3	高士古墳群	古墳後期	13	下割	古墳～近世	23	江向	古代・中世
4	稲荷山古墳群	古墳後期	14	峪ノ上	古墳・古代	24	四ッ谷	古代
5	南山古墳群	古墳後期	15	今池	古墳～中世	25	下馬場古窯跡群	古代
6	黒田古墳群	古墳中期	16	本長者原廃寺	古代	26	滝寺古窯跡群	古代
7	灰塚古墳群	古墳後期	17	三角田	古代～近世	27	大貫古窯跡群	古代
8	北割	古墳	18	山畑	古代	28	向橋古窯跡群	古代
9	子安	弥生～中世	19	保坂	古代・中世	29	神田長峰２号窯跡	古代
10	中島廻り	古墳・奈良	20	宮野	古代	30	末野古窯跡	古代

第１表　周辺の遺跡



第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡

（国土地理院発行 平成13年「高田西部」平成11年「高田東部」平成10年「柿崎」1:50,000原図）

古　　代　関川右岸の沖積段丘高田面縁辺に位置する今池遺跡（15）は８世紀前葉～９世紀頃の遺跡で、掘立柱建物・柵・竪穴住居・井戸・土坑・溝などが検出された。掘立柱建物は約120棟確認され、大半が東西棟である。桁５間以上になる大規模建物が十数棟存在する。出土遺物では、円面硯・瓦塔や畿内からの搬入土器が注目される。地方官衙ないし地方官人層の居宅と考えられる。また関川流域には条里制の遺構もみられ、これらと有機的な関係を持つと考えられている［坂井ほか1984］。近接する子安遺跡は古墳時代～近世の遺跡であるが、今池遺跡の衰退後、遺構が増大し、この地域の中核となる。施釉陶器や二彩陶器・瓦塔・海獣葡萄鏡が出土した［笹澤2003］。今池遺跡の東には本長者原廃寺（16）があり、基壇跡と思われる遺構が検出され、瓦が出土している［小島ほか1984］。今池遺跡・本長者原廃寺・子安遺跡の周辺は、古代の越後国府の有力な推定地である。

狐宮遺跡の東700mの三角田遺跡（17）は、８世紀後半を中心に集落跡と大規模な畑跡が検出され、自然堤防とその周辺において断続的に居住と生産活動が行われた遺跡と推定できる［沢田ほか2006］。
狐宮遺跡の北東2kmの保坂遺跡（19）は９世紀後半～10世紀前半を主体とする。総柱の掘立柱建物群が道路状遺構もしくは区画溝と考えられる遺構を基準に整然と配置されている。溝に一括廃棄された土師器や大型甕・三足盤など特異な器形の緑釉陶器が出土している［笹澤ほか1997］。また、狐宮遺跡の南西1kmの中島廻り遺跡では、掘立柱建物などから８世紀前半の土器が多く出土した［小島1991］。宮野遺跡（20）では掘立柱建物３棟、布掘りの建物などが検出され、転用硯・石銙、施釉陶器が出土した。荘園関連遺跡と考えられている［戸根ほか1985］。

春日山山麓の沖積地にある古代の遺跡には一之口遺跡（21）、八反田遺跡（22）などがある。一之口遺跡は９世紀後半～10世紀前半の遺跡で、掘立柱建物、井戸跡、畝状小溝などが検出された集落跡である。八反田遺跡では、平安時代の掘立柱建物５棟などが検出された。９世紀後半の江向遺跡（23）からは古代青銅印が出土している［北野2003a］。四ツ屋遺跡（24）からは大型廂付掘立柱建物跡が検出され、石銙や多量の施釉陶器が出土している［四ツ屋遺跡調査団1988］。

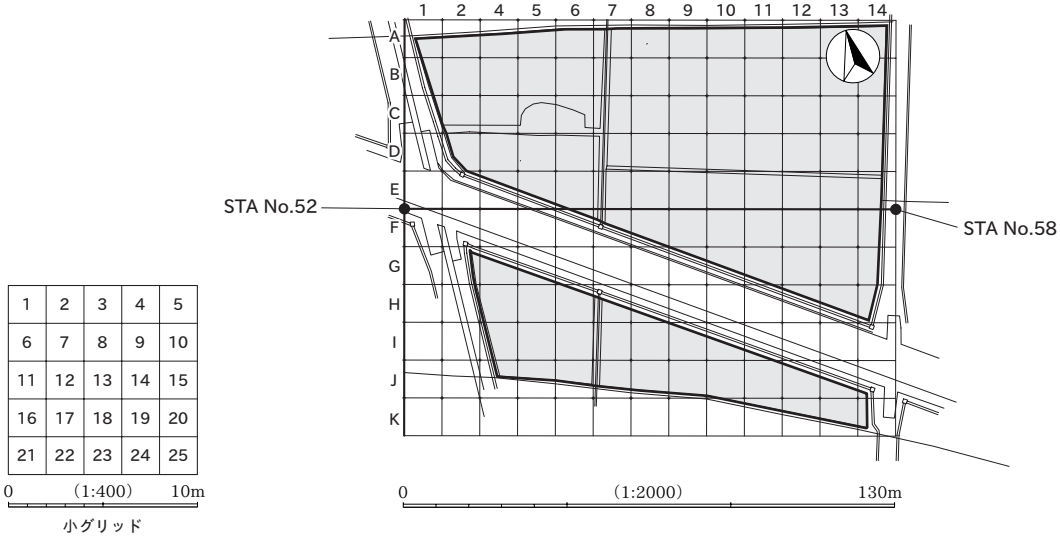
古代の窯跡は高田平野周縁の丘陵に立地する。西側の丘陵裾には、下馬場古窯跡群（25）、滝寺・大貫古窯跡群（26・27）、向橋古窯跡群（28）などがあり、東側の丘陵裾には、神田長峰古窯跡（29）、末野古窯跡（30）、日向古窯跡などがある。これらの古窯跡は、７世紀末から９世紀代にかけて消長しながら平野部の集落に須恵器を供給した。

第Ⅲ章　調査の概要

1　グリッドの設定（第３図）

グリッドの設定は、上越三和道路の法線に沿うよう、道路建設予定地内のセンター杭２点を基準とした。調査範囲西端付近の道路センター杭STA-No52（1F杭：X＝125308.9807、Y＝－19554.9063）と調査区東端付近のSTA-No58（13F杭：X＝125277.7351、Y＝－19439.0515）を結んだ線を横軸とし、これに直交して起点を通る線を縦軸とする主軸を設定した。グリッド基準線の方位は、縦軸が真北から７度58分24秒５東偏している。

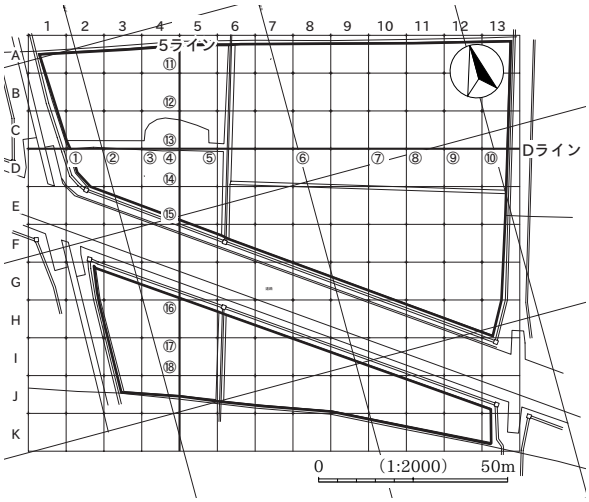
調査では大小２種類のグリッドを使用した。大グリッドは10m間隔で、横軸では算用数字を使用して西から東に向かって「1、2、3、4…」列、縦軸では北から南に向かって「A、B、C、D…」列とし、大グリッド名は北西隅の基準線の交点により「1A、1B、1C…」と呼称した。小グリッドは大グリッドを2m方眼に25分割し、北西隅が１とし、南東隅を25とし算用数字順で表した。グリッドは「7B1」のように呼称した。



第３図　グリッド設定図

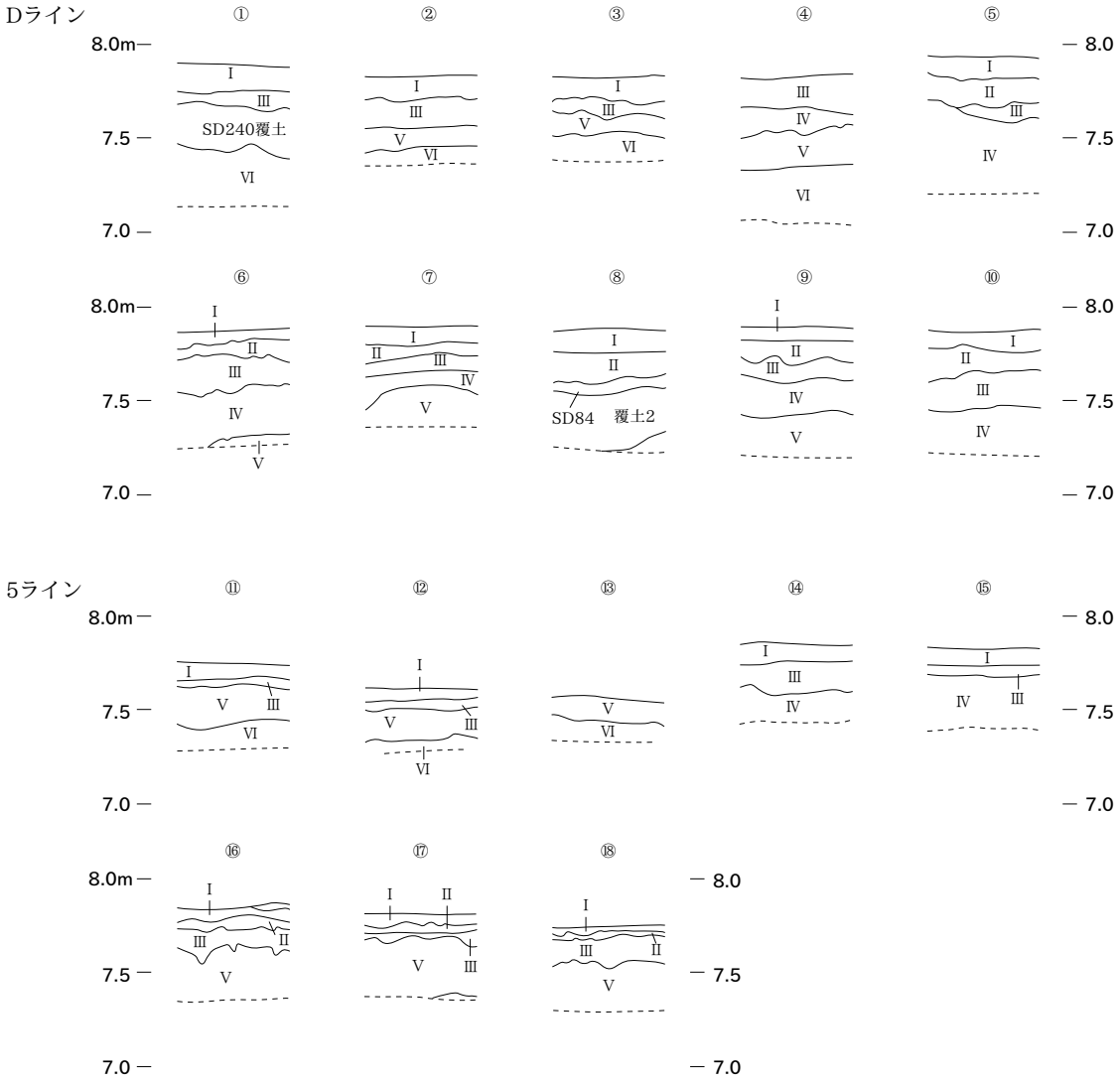
2　層　　序（第４図）

遺跡の現地形は、北西方向に向かって極めて緩やかに傾斜するが、県道北側調査区の10列より東側、県道南側調査区の５列より東側でⅤ層が急激に落ち込む。古代の遺構は、Ⅴ層が落ち込む場所ではその上に堆積するⅣ層上に築かれ、逆にそれよりも以西はⅣ層の堆積が薄くもしくは堆積がなく、Ⅴ層上面で遺構確認を行った。Ⅴ層からは縄文時代草創期の石器、後・晩期の土器が少量出土した。そのⅤ層の堆積年代を把握するため放射性年代測定を行ったところ、後・晩期の土器の年代に近い約3,000年前の結果が得られた（第Ⅵ章Ｂを参照）。



基本層序

Ⅰ層；7.5YR3/3暗褐色粘土　粘性やや弱
　　しまり強（水田耕作土）
Ⅱ層；10YR5/1褐灰色粘土　粘性やや強
　　しまりふつう
Ⅲ層；7.5YR4/2灰褐色粘土　粘性やや強
　　しまりふつう（古代包含層）
Ⅳ層；7.5YR7/1明褐灰色粘土　粘性やや強
　　しまりふつう（洪水性堆積物）
Ⅴ層；7.5YR2/1黒色粘土粘性強　しまりやや強
　　植物遺体あり（縄文時代遺物出土）
Ⅵ層；5Y5/2灰オリーブシルト　粘性弱
　　しまり弱



第４図　狐宮遺跡の層序

第Ⅳ章　遺　　構

1　概　　要

遺構は、西から東へ蛇行する川跡（SD84）周辺で、古代（奈良・平安時代）のものを主体に、古墳時代、中世、近世のものが検出された。旧地形は、第２章第１節の地理的環境でも述べたように調査区の北西半側が自然堤防上で、南東半側が小谷状を呈している。その小谷は古代の遺構が形成される以前に堆積が進み埋まったと思われる。そのため、南東半側の古代の遺構は小谷を埋めた堆積物であるⅣ層上面で検出でき、北西半側はⅣ層の堆積が少なくⅤ層上面で検出した。

古代の遺構は、掘立柱建物12棟、竪穴建物２棟、井戸５基、土坑・ピット487基、畝状小溝８群、溝132条、川跡１筋を検出した。時期は、出土遺物から９世紀前葉から後葉が主体で、一部８世紀代のものがある。遺構の分布状況は、SB1、SB2、SB8～SB10の各建物周辺の３地点で遺構密度が高く、遺物も多く出土した。古代の遺構は検出状況から北、南、東方向の調査区外に延伸することは確実である。

ほかの時代の遺構は、古墳時代の遺構がSD84の北側で陥し穴を３基検出した。古墳時代の遺構は、古代の遺構を検出したⅤ層上面の同一面上で検出した。中世の遺構は土坑を１基、近世の遺構は用水路と考えられる溝を検出した。

2　遺構の記述と表記方法

遺構の説明は、本文、観察表、図面図版、写真図版を用いる。遺構の呼称は、遺構種別の略号と番号を組み合わせて表記した。遺構種別は、掘立柱建物（SB）、竪穴建物（SI）、井戸（SE）、土坑（SK）、ピット（P）、溝・川跡（SD）である。番号は、掘立柱建物を除き種別に関係なく１から通し番号を付けた。ただし、溝など調査区の広範囲を占める遺構は現場作業段階に別番号を付していたが、後で同一のものと判断したものは早い番号を生かし後の番号は欠番とした。また、現場作業の進行の過程で番号の欠番がある。遺構の形状・計測値は、遺構確認面での数値である。

掘立柱建物は、柱間の多い方（原則として長軸）を桁行、少ない方を梁行とした。ただし、柱間が同じ場合は長辺の方を桁行とし、正方形の場合は用いない。建物の主軸方向は、南北方向に対する建物軸の傾きを示している。

土坑、ピットの区分は、深さに関係なく長径（軸）が80cm以上のものを土坑とした。遺構の平面形と断面形は、『和泉Ａ遺跡』の分類基準［荒川・加藤1999］を参考に記載し、規模の記述は、円形・楕円形状のものは径（長径・短径）を用い、方形、不整形状のものは軸（長軸・短軸）を用いた。

遺構の図面図版は、遺構全体図と分割図、主要な遺構の個別図で構成している。土層断面図の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修の「新版標準土色帳」を使用した。

遺構写真は、調査の過程に応じ検出状況、断面、遺物出土状況、完掘写真などを撮影しているが、本文掲載遺構、遺物出土状況を中心に選択して掲載した。

3　古代の遺構

A　掘立柱建物

SB1　付SD1　SD172　SD189（図版２・７・37・40・41）

2Aに位置する桁行３間（6.0m）×梁行２間（4.8m）の側柱建物で、面積は28.8m^{2}である。主軸方向は東偏７°を向く東西棟である。柱間寸法は、梁行がほぼ等間であるが、桁行は北辺と南辺とも不揃い。柱掘方は方形と楕円形のものがあり、規模は検出面の高低の影響もあり揃っていない。確認された柱痕は、直径20cm前後の円形である。

建物の四方には雨落ち溝と考えられるSD1、SD172、SD189がある。SD1は建物に沿って西辺から北辺にかけてＬ字に巡っている溝で、南端は近世の溝SD178に切られている。溝の内部から９世紀前葉から中葉頃の須恵器や土師器が多く出土しており、SB1の所属時期を示す資料といえる。SD172とSD189は建物東辺と南辺に沿っている溝で、SD178に切られているが本来同一のものでＬ字に巡っていた可能性がある。SD172は幅80cm、深さ16cmである。SD189は幅112cm、深さ20cmである。

SB2　付SK327　SD61（図版３・８・41～43）

6A・7Aに位置する桁行５間（13m）×梁行３間（4.9m）の内部に間仕切りのある側柱建物で、面積は63.7m^{2}で今回検出した掘立柱建物の中で最も大きい。主軸方向は東偏４°を向く東西棟である。柱間寸法は、桁行が東側２間分で不規則になる以外は2.3m前後で、梁行は2.4～2.5mでほぼ等間である。柱掘方は１辺または直径1m前後の方形あるいは円形で、柱痕は直径20cm前後、35cm前後、48cm前後の３種のものを確認した。建物周辺の包含層中から石製腰帯具の丸鞆（№332）が出土した。時期は、柱穴内部から出土した土器から９世紀前葉から中葉頃で、畝状小溝４群に切られている。

SK327は、SB2に関わる土坑としてここで取り上げる。SK327はSD61東方にある土坑で長径172cm、短径110cmの楕円形で、深さ4.2cmの浅い土坑である。遺構内から須恵器の有台杯、土師器の椀などが出土した。SD61はSB2の南辺に沿う雨落ち溝で、幅96cm、深さ10cmである。

SB4（図版３・９・43）

6A・7Aに位置する桁行１間（4.03m）×梁行２間（2.76m）の側柱建物で、面積は11.12m^{2}である。主軸方向は東偏１°を向く東西棟である。柱堀方は径32～47mの円形で、柱痕は直径15cm前後のものを確認した。建物はSB2と重なるが、切り合いがないことから新旧関係は不明である。また、畝状小溝４群の方が建物より新しい。柱穴内部からの出土遺物がないため時期の詳細は不明である。

SB5（図版３・９・44）

6Eに位置する。梁行の１辺で柱穴がない部分があるが、桁行２間（3.5m）×梁行２間（2.8m）の側柱建物と考えられる。主軸方向は東西に沿った建物で、面積は9.8m^{2}である。柱間寸法は桁行が1.7m前後でほぼ等間であるが、梁行は1.6mと1.2mで不規則である。柱掘方は１辺あるいは直径26～44cmの方形と円形である。柱痕は全てで認められ、直径20cm程の柱材と思われる。柱穴などから遺物の出土はなく所属時期の詳細は不明である。

SB6（図版５・９・44）

7Fに位置する。調査外に延びるため全容は不明である。柱掘方は楕円形のP429以外は直径36～38cmの円形である。柱痕は全てで認められ、直径15～20cmの柱材と思われる。遺物は皆無で時期は

不明である。

SB7（図版５・９・44）

7Hに位置する。調査区端に位置するため全容は不明であるが、桁行２間以上×梁行１間の側柱建物と推測する。柱掘方はP737のみ１辺120cmの方形を呈し、その他は径58～92cmの楕円形である。P729には柱根が残存し、ほかの柱穴は直径15cm前後の柱痕を確認した。時期は、P730の内部から把手付瓶が出土していて９世紀代であるのは確実であるが、詳細な時期までは判断できない。

SB8　付SD476　SD747　SD800（図版５・10・45）

6Jに位置する。南辺と東辺で間の柱穴が確認できていないが、正方形の２間（3.74m）×２間（3.74m）の側柱建物と推測する。面積は13.99m^{2}で、主軸方向は東偏11°である。柱間寸法は、西辺、北辺ともに不規則である。柱掘方はP890のみ方形で、他は円形、楕円形である。P888とP892には柱根が残存し、ほかの柱穴は直径20cm前後の柱痕を確認した。建物の北側にSD476、西側にSD800、南側にSD747があり、建物の３方向をコの字状に囲む。SD476は幅108cm、深さ20cmで、SD747は幅72cm、深さ20cm、SD800は幅102cm、深さ40cmである。これらの溝から９世紀代の須恵器・土師器が出土した。

SB9　付SD475　SD743（図版５・11・46）

7Iに位置する桁行３間（6.42m）×梁行２間（4.8m）の側柱建物で、面積は30.81m^{2}である。主軸方向は東偏９°を向く東西棟である。柱間寸法は桁行が1.84m～2.5mとやや不規則であり、梁行は2.26m～2.42mとほぼ等間である。柱掘方はP792のみ円形を呈し、そのほかは全て楕円形である。P781の底面には礎板が残存していた。柱痕は全てで確認でき、直径20cm前後の円形である。SB10と重複するが切り合いがないので新旧関係は不明である。

SD475・SD743はSB9とSB10の西側に位置するが、SB9とSB10のどちらに付属するのか判断できなかった。SD475は幅80cm、深さ36cm、SD743は幅56cm、深さ40cmである。柱穴内部や周囲の溝から佐渡小泊産の須恵器や土師器の椀が出土したことから９世紀後葉に位置付けた。

SB10　付SD475　SD743（図版５・11・46・47）

7Iに位置する桁行３間（7.0m）×梁行１間（4.84m）の側柱建物で、面積は33.88m^{2}である。主軸方向は東偏８°を向く東西棟である。柱間寸法は桁行が2.05m～2.54mとほぼ等間である。柱掘方はP770が方形、P798が不整形、P771が楕円形であるほかは円形を呈する。柱痕はP770以外で確認でき、直径15～20cmの円形である。時期は柱穴から出土した土師器からSB9と同時期の９世紀後葉である。SB9との新旧関係は不明であるが、短期間に建て替えが行われた可能性がある。

SB11（図版４・12・47）

10Fに位置する桁行３間（6.2m）×梁行２間（3.9m）の内部に間仕切りのある側柱建物で、面積は24.18m^{2}である。南辺は柱穴が１本多く変則的である。主軸方向は西偏５°を向く東西棟である。柱間寸法は、桁行で間仕切りより西側が2.14～2.34m、東側が1.76～1.88mと不規則である。梁行は、ほぼ等間である。柱掘方は方形、円形、楕円形のものがある。P555には長方形の柱根が残存し、ほかの柱穴も直径20cm前後の柱痕が認められた。柱穴内部から佐渡小泊産の須恵器が出土しており、時期は９世紀後葉に位置付けた。

SB12　付SD512　SD513（図版４・12・48）

13Cに位置する。建物は東側の調査区外に延伸することは確実で、全容は明らかでないが桁行２間以上（4.9m）×梁行２間（3.55m）の総柱建物と考えられる。主軸は東西方向に沿う。柱間寸法は桁行、梁行と

もにほぼ等間で、柱掘方は方形、円形、楕円形と不規則である。東柱のP706、P705は側辺の柱穴と比して小型である。柱痕は全てで確認でき、直径20～25の円形である。P711の内部から礎板もしくは柱材の残骸と考えられるものが出土した。

建物北側のSD512とSD513は建物に伴う雨落ち溝と考えられる。SD512とSD513ともに幅64cm、深さ8cmである。SB12とSB13の新旧関係は、柱穴P983がSB13の廂の柱穴に切られていることからSB12の方が古い。詳細な時期は出土遺物がないことから不明であるが、9世紀後葉に位置付けられるSB13の切り合い関係からそれ以前となる。

SB13　付SD514　SD980（図版4・12・48）

12Dに位置する。建物は、桁行3間（5.9m）×梁行2間（4.04m）の内部に間仕切りがある北面廂付側柱建物で、面積は23.84m^{2}である。主軸方向は東偏3°を向く東西棟である。柱間寸法は、桁行、梁行ともに規則的である。柱掘方は方形、円形、楕円形があり不規則である。P983には、直径20cmの柱根が、P974からは長方形の礎板が残存した。時期は、柱穴内部から出土した土師器の椀・小甕から9世紀後葉に位置付けた。

北側に位置するSD514とSD980は建物に伴う雨落ち溝と考えられる。SD514は幅56cm、深さ4cm、SD980は幅72cm、深さ10cmである。所属時期は、柱穴内部から出土した土師器の椀、小甕から9世紀後葉に位置付けた。

B　竪穴建物

SI31（図版2・13・49）

3D・4Dに位置する。平面形はやや不整形ではあるが隅丸方形を呈する。規模は長軸3.1m、短軸2.7m、面積は17.35m^{2}を測る。壁高は15～18cmと浅い。カマドは検出されていない。床面から径15～40cmの大小のピットが多数検出されたが、規則的な配置は確認できなかった。覆土は1～5層に分かれ、自然堆積と推測する。遺物は、土器が256点出土したが、土師器の長甕が全体の47％を占める（第5表）。時期は9世紀中葉である。

SI394（図版3・13・49）

8A・Bグリッドに位置する。平面形は長軸4.66m、短軸3.84mの方形を、断面形は台形状を呈し、深さは28cmで面積は17.89m^{2}である。南東側壁面から北側壁面にかけて階段状に掘り込みがみられるが、東側壁面にはそれが認められない。床面でピット3基が検出されたが、柱穴として確認できなかった。カマド及び床面硬化部分も認められなかった。覆土は、褐灰色粘質土で2層に分層され、自然堆積と推測する。1層は、炭化物が帯状に堆積する部分があり、褐灰色粘質土ブロック・灰白色粘質土ブロックを含む。2層は、明褐灰色粘質土ブロック・褐灰色粘質土ブロック、黒褐色粘質土粒が混じる。遺物は、土器が373点出土し、土師器の長甕が全体の47％を占め、SI31と同様の傾向を示している（第5表）。時期は、佐渡小泊産の須恵器などから9世紀中葉である。

C　井　　戸

SE116（図版2・13・35・49）

4Dに位置する。平面形は不整方形を呈し、断面形状は袋状に中位で大きく外に膨らむ。掘方の形状や覆土から、壁面の崩落が推測される。また、曲物の底板の上に方形に組まれた井戸側が据えられており、

4辺の向きは方位と対応する。構造は横板組みで、長さ65cm前後、幅12～22cm、厚さ1.3～3.1cmの板材に溝状の切込みを片方、あるいは両方に入れて積み上げたもので、6段目まで残存していた。遺物は須恵器の無台杯、杯蓋と土師器の無台椀、長甕が出土し、時期は9世紀前葉から中葉である。

SE378（図版3・14・49）

8B12に位置する。平面形は楕円形で、断面形はU字状を呈する素掘りの井戸である。規模は、長径92cm、短径78cm、深さ124cmを測る。覆土は3層に分けられ、遺構内から体部に墨書された土師器椀（№116）や須恵器の有台杯が出土した。時期は、9世紀中葉である。

SE554（図版4・14・50）

11F25に位置する。平面形は円形、断面形は漏斗状を呈する素掘りの井戸である。15層に分層した覆土のうち、1～3層は炭化物を少量含み、1層には井戸が埋まった後に廃棄されたと思われる土師器の長甕が出土した。4層より下部には小規模ながら壁面が崩落した痕跡が認められる。7層以下は植物遺体を多く含み、14層からは須恵器の長頸瓶が出土した。

SE757（図版6・14・49）

9J17に位置する。平面形は楕円形で、断面形は漏斗状を呈する素掘りの井戸である。規模は、長径170cm、短径124cm、深さ112cmを測る。覆土は7層に分けられ、底面に近いところから土師器椀やひょうたんの実などが出土した。

SE784（図版5・14・50）

7J19に位置する。平面形は楕円形で、断面形は漏斗状を呈する素掘りの井戸である。規模は、長径78cm、短径66cm、深さ110cmを測る。覆土は4層に分けられ、遺構内から土師器椀や黒色土器が出土した。

D　土　　坑

SK74（図版3・8・43）

7B3に位置する。平面形は長軸174cm、短軸76cmの楕円形を呈し、断面形は深さ15cmの浅い皿状の土坑である。遺構内から土師器の杯や長甕が出土し、8世紀後葉に位置付けられる。SB2の柱穴SK66に切られている。遺構の性格としては、この遺構の近くにSB2以外の柱穴もいくつか見られ、建物として認識できなかったがSB2が建てられる以前の建物があり、SK74はこの雨落ち溝の可能性が高い。

SK106（図版3・14・50）

6E6・7に位置する。東側部分が既存の水路下になっていたため、調査が前後し形状が不自然になった。平面形は長方形状で、断面形は台形状になるものではないかと思われる。底面は凹凸があり、断面形は弧状を呈する。

SK298（図版2・15・50）

5B23、5C3に位置する。平面形は長楕円形で、断面形は弧状である。規模は長径170cm、短径68cm、深さは26cmで緩やかに立ち上がる。覆土は2層に分層でき、遺構内から須恵器の甕片や土師器の長甕、小甕が出土した。

SK472（図版5・15・51）

8I16に位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径184cm、短径128cm、深さ12cmを測り、緩やかに立ち上がる。覆土は3層に分かれる。1層は褐灰色粘質土、2層は黒色炭層、

3層は灰色粘質土である。

SK526（図版4・15・51）

10D6に位置する。平面は円形で、断面形は弧状である。規模は、径176cm、深さ50cmで立ち上がりは急である。覆土は2層で分層でき、2層目から須恵器片が出土している。

SK593（図版3・15・51）

9C2に位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は長径78cm、短径53cm、深さ6.5cmで、立ち上がりは急である。SD604、SD605に切られている。覆土は1層で焼土、炭化物を多く含み遺物も出土している。

SK721（図版3・15・51）

8I11に位置する。平面は円形で、断面形は弧状である。規模は、長径108cm、短径88cm、深さ12cmで、立ち上がりは緩やかである。SK722を切っている。覆土は1層で、黒褐色粘質土である。

SK722（図版3・15・51）

7I15に位置する。平面形は円形で、断面形は台形状である。規模は、長径138cm、短径140cm、深さ28cmで、立ち上がりは緩やかである。SK721により切られている。覆土は4層に分かれ、1層は、褐灰色粘質土、2層は黒色炭層で2～6cmの厚さで遺構全体に堆積し、その中から土師器・黒色土器・須恵器が出土している。3層は黒褐色粘質土、4層は褐灰色粘質土である。

SK779（図版3・15・51）

8J16に位置している。開渠によって切られているため全形は不明であるが、残存する平面形は方形で、断面形は弧状である。規模は、長軸116cm、短軸92cm、深さ20cmで、立ち上がりは緩やかである。SD786を切っている。覆土は4層に分かれる。1層は褐灰色粘質土で炭化物と径1cmの灰白色粘質土ブロックを多量に含み、2層は褐灰色粘質土、3・4層は灰色シルトである。

SK972（図版3・15・52）

12D18・19に位置する。平面形は長楕円形で、断面形は、弧状である。規模は、長径106cm、短径68cm、深さ8cmで緩やかに立ち上がる。覆土は1層で、黒褐色粘土である。

E　畝状小溝

小溝1群（図版2・17・37）

4Aに位置する。SD226、SD229、SD232、SD233（SD227、SD166）、SD838（SD230）からなる。全長652cm～876cm、幅28cm～60cm、深さ8～13cmの規模である。断面形は弧状でどれも緩やかに立ち上がる。小溝群の長軸は東偏73°を向く。

小溝2群（図版2）

3B、4B、4Cに位置する。SD223～SD225、SD228、SD295からなる。全長236～876cm、幅28cm～60cm、深さ8～13cmの規模である。断面形は弧状でどれも緩やかに立ち上がる。小溝群の長軸は東偏74°を向く。

小溝3群（図版3・17・37）

6B・Cに位置する。SD2～SD6、SD338、SD336からなる。全長68～608cm、幅16～36cm、深さ4～6cmの規模である。断面形は弧状でどれも緩やかに立ち上がる。小溝群の長軸は東偏87°の方向を向く。すべての覆土に炭化物を少量混じる。

小溝４群（図版３・17・37・52）

6A・Bに位置する。SD7～SD19、SD637、SD357からなる。全長140cm～11.2m、幅14cm～68cm、深さ４～8cmの規模である。断面形は弧状でどれも緩やかに立ち上がる。小溝群の長軸は東偏70°の方向を向く。掘立柱建物SB2・４を切っている。

小溝５群（図版３・37・52）

7・8Aに位置する。SD42～44、SD46、SD47、SD53、SD54、SD64、SD69　SD76、SD355、SD356、SD399、SD400からなる。全長224cm～22.13m、幅22～90cm深さ5cm～12cmの規模である。断面形は、弧状でどれも緩やかに立ち上がる。小溝群の長軸は東偏79°を向く。

小溝６群（図版３・53）

9Bに位置する。SD607～SD610、SD612～SD621、SD594、SD570、SD644からなる。全長100cm～866cm、幅8cm～63cm、深さ4cm～13cmの規模である。断面形は弧状でどれも緩やかに立ち上がる。小溝群の長軸は東偏83°を向く。

小溝７群（図版５・６・17・53）

8I～J・9I～Jに位置する。SD762～SD765、SD752、SD952～SD954、SD959、SD1062、SD1057、SD766～SD769、SD882～SD886、SD1049、SD1050からなる。全長2.76m～10.16m、幅10cm～84cm、深さ3cm～24cmの規模である。断面形は弧状で、いずれも緩やかに立ち上がる。小溝群の長軸は西偏74°を向く。SD958・SD959、SD752・SD1062、SD767・SD766、SD886・SD885・SD884及び、SD764・SD765については、SD885がSD884を切っている以外、覆土が同じで切り合いはない。覆土は、SD762が、１層褐灰色粘土・２層灰色粘土と分けられる以外、褐灰色粘土の単層である。

小溝８群（図版６）

10Jに位置する。SD1075～1082、SD1085～1088からなる。全長1.52m～5.66m、幅20cm～44cm、深さ3cm～11cmの規模である。断面形は弧状で、いずれも緩やかに立ち上がる。小溝群の長軸は西偏50°を向く。

F　性格不明

SX438（図版６・16・52）

9G7に位置する隅丸方形の土坑である。覆土は２層に分層でき、最下層に炭層が堆積する。SK722の覆土の堆積状況と酷似するが、この遺構からは遺物は出土していない。

SX660（図版３・16・52）

8B18に位置する竪穴状の遺構である。形状が竪穴建物に似るが、掘形・構造などから建物として確証が得られなかったので性格不明とした。覆土は２層に分けられ、１層は灰色シルト土のブロックを含んだ黒褐色土で、２層はⅤ層を基調とする黒味の強い黒色土である。内部から８世紀代の可能性が高い土師器の甕や９世紀代の土師器の椀、小甕などが出土した。

G　川　　跡

SD84（図版２～４・17・53）

北側調査区のほぼ中央を4Aから8Cまで西から東に流れ、8C付近で流れを南に変え、9E、10Eグリ

ッドで鋭角に曲がり、向きを北に変え蛇行しながら調査区外に出る。全長は119.2m以上、幅は広い所で671cmを測り、狭い所で146cmを測る。深さは浅いところで7cm、深いところで58cmの規模である。覆土は1層で、基本土層のⅣ層を基調とする。10E9付近から「真浄」と墨書された須恵器の長頸瓶（№227）が出土した。

4　古墳時代の遺構

古墳時代の土坑を3基検出した。この3基の土坑は、県道北側調査区の7列から西側にあり、Ⅴ層上面の古代の遺構と同じ面で検出した。いずれも底部に杭が残存し、形態から陥し穴と考えた。遺物は出土していない。そのため時期決定は困難であったが、杭材の放射性炭素年代測定により古墳時代中期に相当する結果が得られたことから、古墳時代の遺構と判断した。

これら3基の遺構は、東から西に向けてSK341、SK258、SK303の順に、27m、23.5mの間隔をおいて位置する。いずれも底部長軸上の端部に杭が打たれていることが特徴である。

SK258（図版2・16・35）

5B13に位置する。上端は後世に撹乱を受け、本来の形状を失っている。下端の長さは138cm、幅36cm、深さは88cmを測る。底面の長軸は上端と異なり南北を向く。覆土は黄灰色粘質土で、最下層は植物遺体を少量含む。陥し穴本来の平面形は不明であるが、ほかの2基同様隅丸長方形を呈していた可能性がある。SK258の底部には、南北の長軸上の両端に杭が残存していた。共に杭の上端は遺存しておらず、互いがハの字に向かい合うか、または交差するように斜位に打ち込まれていたものと考えられる。

SK303（図版2・16・54）

3C11に位置する。上端の平面形は隅丸長方形、下端は楕円形で、断面形は漏斗状を呈する。上端は長さ148cm、幅72cm、下端は長さ120cm、幅48cmで、深さは78cmを測る。長軸は南北を向き、底部の長軸北端には杭が残存する。杭は南側に向かって斜位に打たれており、上端は遺存していない。底部南端にも杭と思われる木片が残存し、その状況から北側と同様に斜位に打たれていたものと推測される。覆土は褐灰色、黒褐色粘質土である。

SK341（図版3・16・54）

7A14に位置する。上端、下端の平面形は隅丸長方形、断面形はU字状を呈する。上端は長さ135cm、幅32cm、下端は長さ110cm、幅21cm、深さは76cmを測る。短い溝状を呈し、長軸は南北を向く。底部長軸上の南端には杭が北側に向かって斜位に打たれていた。北側にも杭と思われる木片が南端と同様に残存していたが、遺存状況が不良で図化はできなかった。覆土は灰色、暗灰色の粘質土で、炭化物が混入する。

5　中世の遺構

SK120（図版2・14）

5E21に位置する。遺構は南側の県道に延伸し全容は明らかではないが、平面形は方形と考えられる。深さは76cmで、立ち上がりは急である。遺構内から中国の渡来銭が6枚まとまって出土した。最も新しいもので紹聖元寶（初鋳1094年）を含むことから中世の遺構と考えた。

6　近世以降の遺構

以下の遺構は、明治の土地更正図（第５図）にも表れている近世あるいはそれ以降に作られた用水路である。遺構内から近世の陶器片や煙管などが出土した。

SD104（図版３・17・55）

調査区北側の５列に沿う南北に伸びる溝状である。全長49.5m以上、幅76cm深さ10cmの規模である。断面形は、弧状である。

SD178（図版２・３・17・54）

北側調査区の西側のSD240に直交し、東西に直線上に延びる溝である。全長46.5cm以上、幅202cm、深さ24cmの規模である。断面形は弧状である。

SD240（図版２・17・54）

北側調査区の西端に位置し、ほぼ南北に延びる幅408cm、深さ42cmの大規模な溝である。現在の用水路と平行にあり、主要用水路と思われる。

SD360（図版３・４・17・54）

調査区北側の北端にあり、東西に延びている溝である。全長37.5cm、幅62cm、深さ12cmの規模である。断面形は、弧状である。

SD745（図版５・17・54）

調査区南側のほぼ６列から検出された溝である。全長19.25m以上、幅69cm、深さ8cm以上の規模で、断面形は弧状である。6Iから北側の溝幅が広がるところでは東西２列の、南側の溝幅が狭まるところでは１列の杭が検出した。

第５図　門田新田土地更正図（明治９年測図、昭和４年複写に一部改変）

第Ⅴ章　遺　　物

1　概　　要

狐宮遺跡からは縄文時代・古墳時代・古代・中近世の遺物が出土した。このうち主体をなすのは古代の遺物であり、土器が平箱で144箱、瓦が20点、木製品が62点のほか、土器片円盤などの土製品、石製腰帯具などの石製品がある。縄文土器は平箱で１箱、石器は３点出土した。古墳時代の土器はごく少量であり、中近世の陶磁器は平箱で８箱出土した。

古代の遺物出土状況は、遺構が集中する地区ほど出土量は多い。特に７・8A・Ｂの包含層および遺構からは多数の遺物が出土した。

遺構出土の遺物は、遺構の時期および器種組成を把握するため、小破片のものでも図化している。包含層出土の遺物は、残存率の良いものや、遺構出土のものから欠落する器種を中心に抽出し図化した。

2　縄文時代の遺物

A　土　　器

縄文土器の大部分は小破片で摩耗が著しく、器形を復元できるものはごく少数である。この中から文様が残存し時期を特定できるものを選択し図化した。図化した土器は全体量の約３分の１であり、１点のみ中期末葉～後期前葉の土器があるほかは、後期～晩期の所属である。

縄文土器は黒色土（Ⅴ層）上面から出土した。縄文土器の出土分布が調査区全域にわたっているわけではなく、４～9A・４～7Bおよび5H・Ｉの範囲に特に多く出土している（第６図）。また川跡（SD240）の中とその近辺、9F・Ｇに少量出土している。

中期～後期（図版18・56－１～５）

１は深鉢で太い沈線によって楕円が描かれているようである。横方向の沈線の間には撚りの弱い縄文が施される。時期は中期末葉～後期前葉と推測する。

２～４は後期前葉三十稲葉式に類似する深鉢である。外面には横方向からの円形刺突文がある。５は後期前葉の深鉢である。外反する口縁部に球胴形の体部が付く器形と推定する。口縁部外面は無文でミガキが施される。口縁部内面には２条の沈線で平行線文が描かれ、上位沈線の先端は渦を巻く。下位沈線の先端および渦巻文の背面に円形刺突が施される。

晩期（図版18・56－６～17）

６・７は晩期前葉の波状口縁の深鉢である。６は摩耗が著しいが、磨消縄文が施される。７は表面の磨耗が激しく、拓本に表現できなかったが、２本の粘土紐が貼り付けされ、この文様帯間に刺突列が施されているものである。信州の佐野Ⅰ式土器と推測する。８は晩期中葉の深鉢である。口縁部が「く」の字状に外反する器形と推測する。口唇部には突起があり、口縁部内外面にはミガキが施される。９・10は同一個体で晩期中葉の深鉢である。口縁部が「く」の字状に外反し、体部がゆるくふくらむ器形と推測できる。２条の沈線間には刺突列がある。11は晩期中葉の大洞C1式の浅鉢である。２条の沈線間には截痕が

あり、その下に雲形文が施される。摩耗が著しく雲形文は不明瞭である。12は晩期中葉の北陸中屋式の深鉢である。口唇部は強くつまみ上げられ、口縁部は外反する。外面には縄文が施文される。13は晩期前葉から中葉の佐野Ⅱ式の深鉢である。体部外面は無文で口縁部外面に３条の沈線が入る。器壁は厚く粘土紐の接合痕が残る。14は深鉢で磨消縄文による文様帯をもつ。晩期前半頃のものと考える。15・16は同一個体で晩期中葉大洞C2式の鉢である。口縁部は肥厚し、幅の狭い無文帯を挟んで円形の刺突列と細い沈線が２条入る。刺突にはやわらかい植物の茎のような中空のものを工具として用いている。沈線にも同一の工具を使用しているため、沈線の幅は一定ではない。17は深鉢の底部であり、外面には網代痕が残る。晩期の所産と考える。

B　石　　器

尖頭器（図版18・56－18・19）

18は、ガラス質安山岩製の有舌尖頭器である。7E3グリッド、Ⅲ層からの出土であり、長さ5.6cm、幅1.35cm、厚さ0.6cm、重さ3.64gを測る。素材となったガラス質安山岩は、遺跡の西方2kmを流れる関川で採取可能な石材である。これは、魚沼層群由来と考えられる。舌部を欠損しているが、ほぼ全体像を把握することができ、有茎鏃とするには長身で薄手である。表裏面には精緻な二次加工が施されており、一部は器軸に対して斜方向の平行剥離が認められる。肩部はややなだらかであるが、舌部との明瞭な境界となっている。19は、ガラス質安山岩製の尖頭器である。4I20グリッド、Ⅲ層からの出土であり、長さ3.3cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、重さ2.16g（現存部分）を測る。薄手で精緻な二次加工が両面を覆っており、先端部には衝撃剥離痕［御堂島1991］が観察される。基部を大きく新規欠損しており全体像を把握できないが、18より大ぶりな尖頭器であったものと考えられる。18・19は、形態的特徴、加工のあり方、風化の度合いを勘案すれば、縄文時代草創期の所産と考えられる。縄文時代草創期の石器は、この２点のみであり、狩猟の場からの単独出土の可能性がある。

高田平野周辺における縄文時代草創期の遺跡は、山屋敷Ⅰ遺跡［立木2003］、黒田古墳群［尾崎2002］、蛇谷遺跡［土橋2005］、貝喰遺跡［岡本ほか2003］がある。これらはいずれも丘陵上の遺跡であり、平野部における発見は本遺跡が初例となる。石器表面が磨耗していないこと、複数出土したことから、二次堆積物に偶発的に混入したものとは考えられない。したがって、当地が縄文時代草創期に離水していた可能性を指摘でき、狐宮遺跡が立地する高田面の形成年代を考える上で極めて重要な資料といえる。

打製石斧（図版18・56－20）

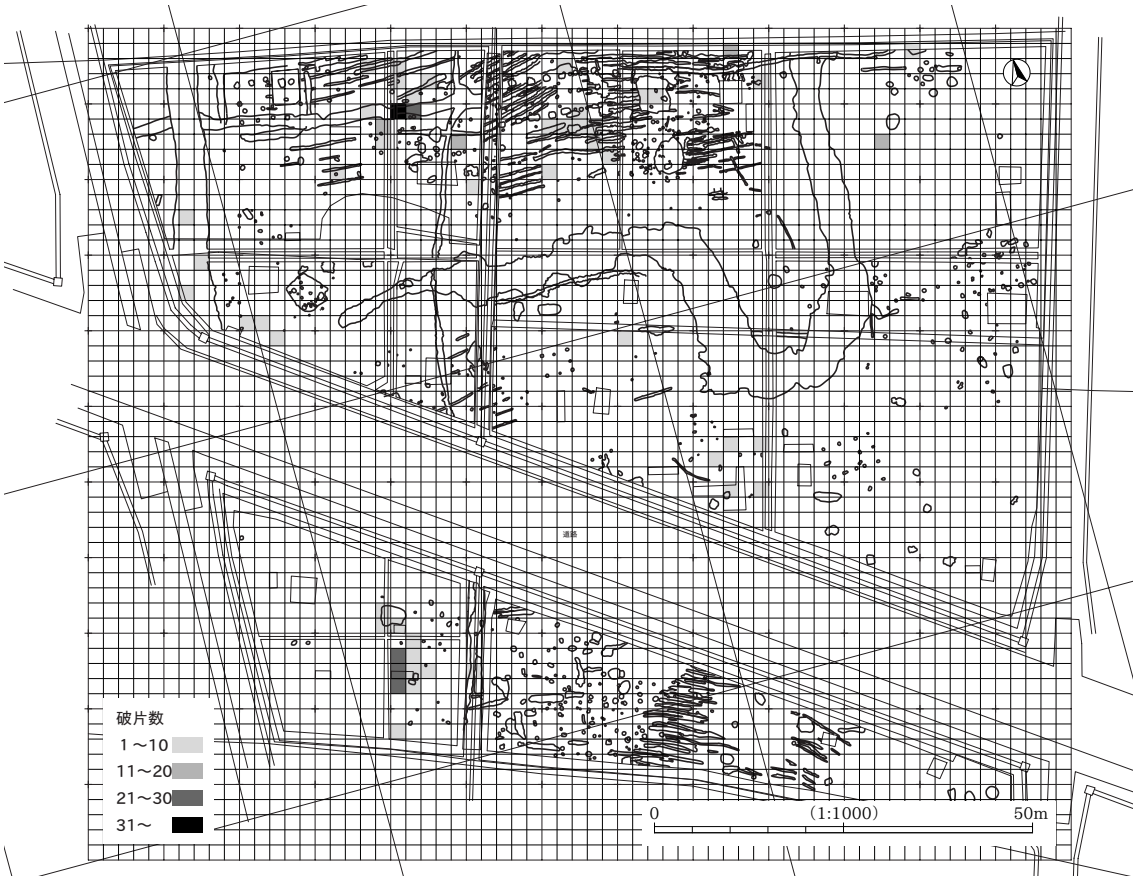
20は、安山岩製の打製石斧である。形態的には分銅型で、側縁に細かな二次加工が施されている。刃部は細かな二次加工は施されず片刃で、角が丸まりかなり摩耗している。時期は、周辺の出土した土器から縄文時代後～晩期の所産と考えられる。

3　古代の遺物

A　土　　器

1）記述の方法

土器は遺構出土のものから記述し、その後に包含層出土のものを続ける。出土位置や法量、色調などの情報は観察表に記載した。時期区分および年代観については春日真実による編年（以下、春日編年とする）



第６図　縄文土器分布図（破片数）　S＝1/1,000

［春日1999］を参考にした。調整技法については以下のように表現を統一した。

「ロクロナデ」はロクロ回転を利用したナデ、その他のものは「ナデ」とした。

「ロクロケズリ」はロクロ回転を利用した削り、ロクロ回転を利用しない削りを「ヘラケズリ」とした。

「カキメ」と「ハケ」の原体は基本的に同じであるが、「カキメ」はロクロ回転を利用した調整であり、「ハケ」はこれを利用しない調整である。

底部の切り離しには回転ヘラ切りと回転糸切りがある。記述の際には「回転」を省略した。

須恵器甕などの外面に施される「叩き」を「タタキ」、内面に残る当て具痕を「当て具」とした。

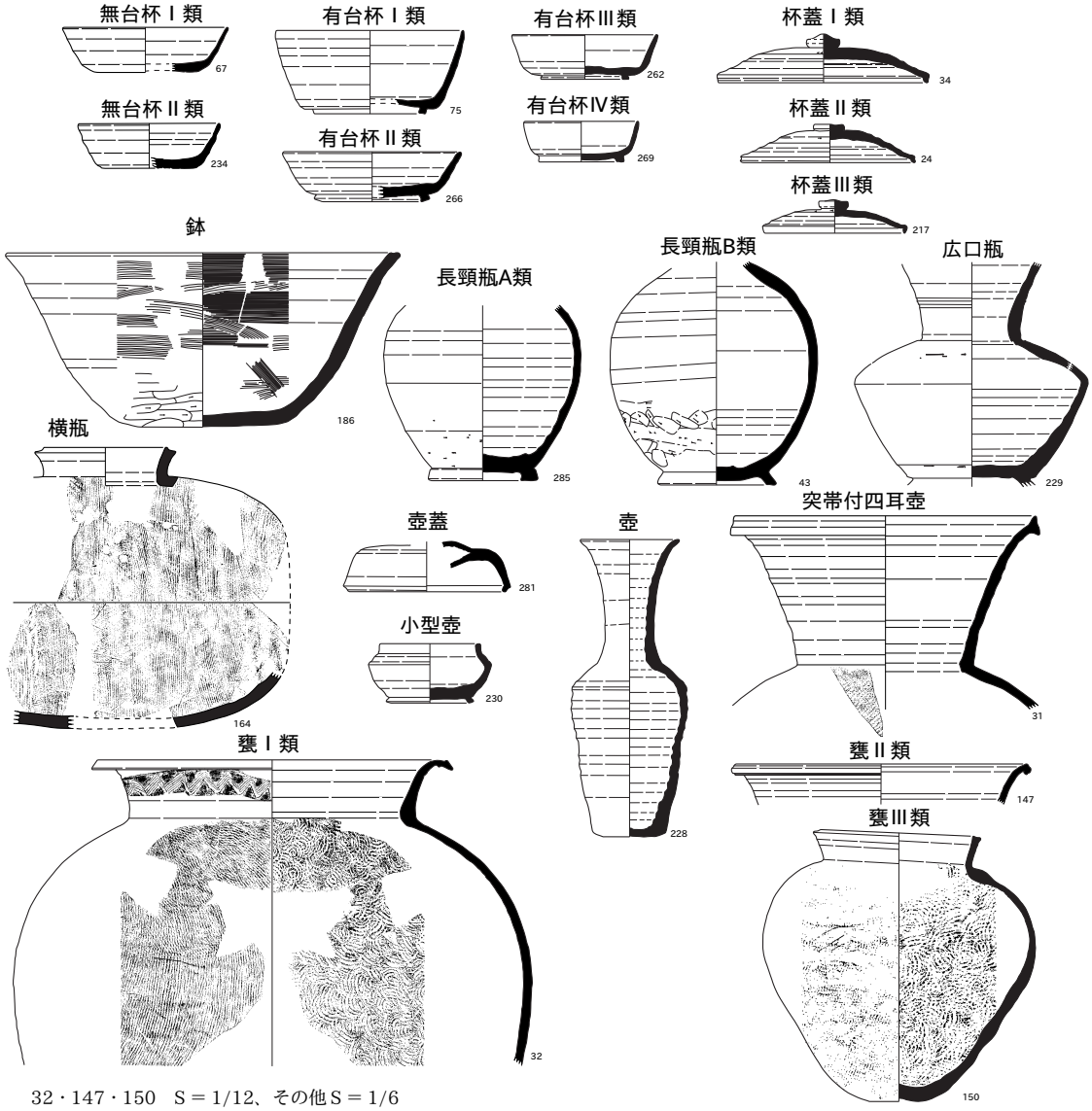
2）分　　類

a）須　恵　器

食膳具と貯蔵具に大別できる。食膳具には無台杯・有台杯・杯（口縁部のみで無台杯か有台杯か判断できないもの）・杯蓋・鉢があり、貯蔵具には長頸瓶・広口瓶・横瓶・壺・壺蓋・小型壺・突帯付四耳壺・甕がある（第７図）。

無台杯　　杯のうち高台が付かないもの。口径13cm以上のものをⅠ類、口径11～13cmのものをⅡ類とした。

有台杯　　杯のうち高台が付くもの。口径13～15cm前後・器高６～7cm前後のものをⅠ類、口径13～15cm・器高３～5cmのものをⅡ類、口径11～13cm・器高３～5cmのものをⅢ類、口径11cm未満・器高３～4cmのものをⅣ類とした。



32・147・150　S＝1/12、その他S＝1/6

第７図　古代の土器　須恵器器種分類図

杯　蓋　有台杯に伴う蓋。口径17cm以上のものをⅠ類、口径14～16cmのものをⅡ類、口径11～14cmのものをⅢ類とした。

鉢　体部上半はカキメ、下半はヘラケズリが施される。１点のみ出土した。

長頸瓶　全形が残る資料はなく、体部の形状から分類した。体部上半に最大径があり、肩が張るものをＡ類、ナデ肩の体部のものをＢ類とした。体部上半に環状の把手が付くものもある。

広口瓶　広口の頸部に肩の張る体部がつづき、高台が付く。

横　瓶　俵形の体部に「く」の字状に外反する口縁部が付く。台付横瓶が１点ある。

壺　細長い口頸部に長胴の体部がつづく。１点のみ出土した。奈良県平城宮で壺Ｇとされているものである［小笠原・西・吉田1976］。県内では上越市今池遺跡［坂井ほか1984］SK102・SK120などに出土例がある。

壺　蓋　短頸壺に伴う蓋である。数は少ない。

小型壺　小型の壺を一括した。

突帯付四耳壺　広口で長い口頸部をもつ。体部の形状が分かる資料は出土していない。肩部に突帯がめぐり、底部は平底である。

甕　口径50cm以上のものをⅠ類（特大甕）、口径35～50cmのものをⅡ類（大甕）、口径20～35cmのものをⅢ類（中甕）とした。Ⅰ類の特大甕とⅡ類の大甕は各1点の出土であり、Ⅲ類の中甕が最も数が多い。

b）土　師　器

食膳具と煮炊具に大別できる。食膳具には杯・無台杯・無台椀・有台鉢があり、煮炊具には長甕・小甕・鍋・甑・羽釜がある。長甕・小甕・鍋には非ロクロ成形のものとロクロ成形のものがある（第8図）。

杯　非ロクロ成形のものを杯とした。

無台杯　須恵器の無台杯と同一の器形であるが、胎土が須恵器とは異なり粗砂粒が多量に入る。

無台椀　口径20cm以上のものをⅠ類、口径14～17cmのものをⅡ類、口径12～14cmのものをⅢ類、口径11～12cmのものをⅣ類とした。

有台鉢　皿状の身に高台が付く。1点のみ出土した。

長　甕　非ロクロ成形のものをA類、ロクロ成形のものをB類、武蔵型甕［荒井ほか1999］をC類とした。全形を知りうる資料がないため、A・Bの各類を口縁部の形態により細分した。

長甕A1類：非ロクロ成形で口縁端部に面をもつもの。

長甕A2類：非ロクロ成形で口縁端部が丸いもの。

長甕B1類：ロクロ成形で口縁部が「く」の字に外反し、端部に面をもつもの。

長甕B2類：ロクロ成形で口縁端部が丸いもの。

長甕B3類：ロクロ成形で口縁端部が肥厚し、断面が三角形のもの。

長甕B4類：ロクロ成形で口縁端部をつまみ上げるもの。

長甕B5類：ロクロ成形で口縁部が受け口状のもの。

長甕C類：武蔵型甕である。口縁部は緩く「く」の字状に外反し、体部は長胴で肩がやや張る。体部外面にはヘラケズリが施される。

小　甕　分類の規準は長甕と同様である。非ロクロ成形の小甕の数は多くない。

小甕A1類：非ロクロ成形で口縁端部が丸いもの。

小甕B1類：ロクロ成形で口縁端部に面をもつもの。

小甕B2類：ロクロ成形で口縁端部が丸いもの。

小甕B3類：ロクロ成形で口縁端部が肥厚し、断面が三角形のもの。

小甕B4類：ロクロ成形で口縁部が受け口状のもの。

小甕C類：武蔵型甕である。頸部が直立し、口縁部は外反する。体部は球胴形を呈し、底部には台が付く。体部外面にはヘラケズリが施される。

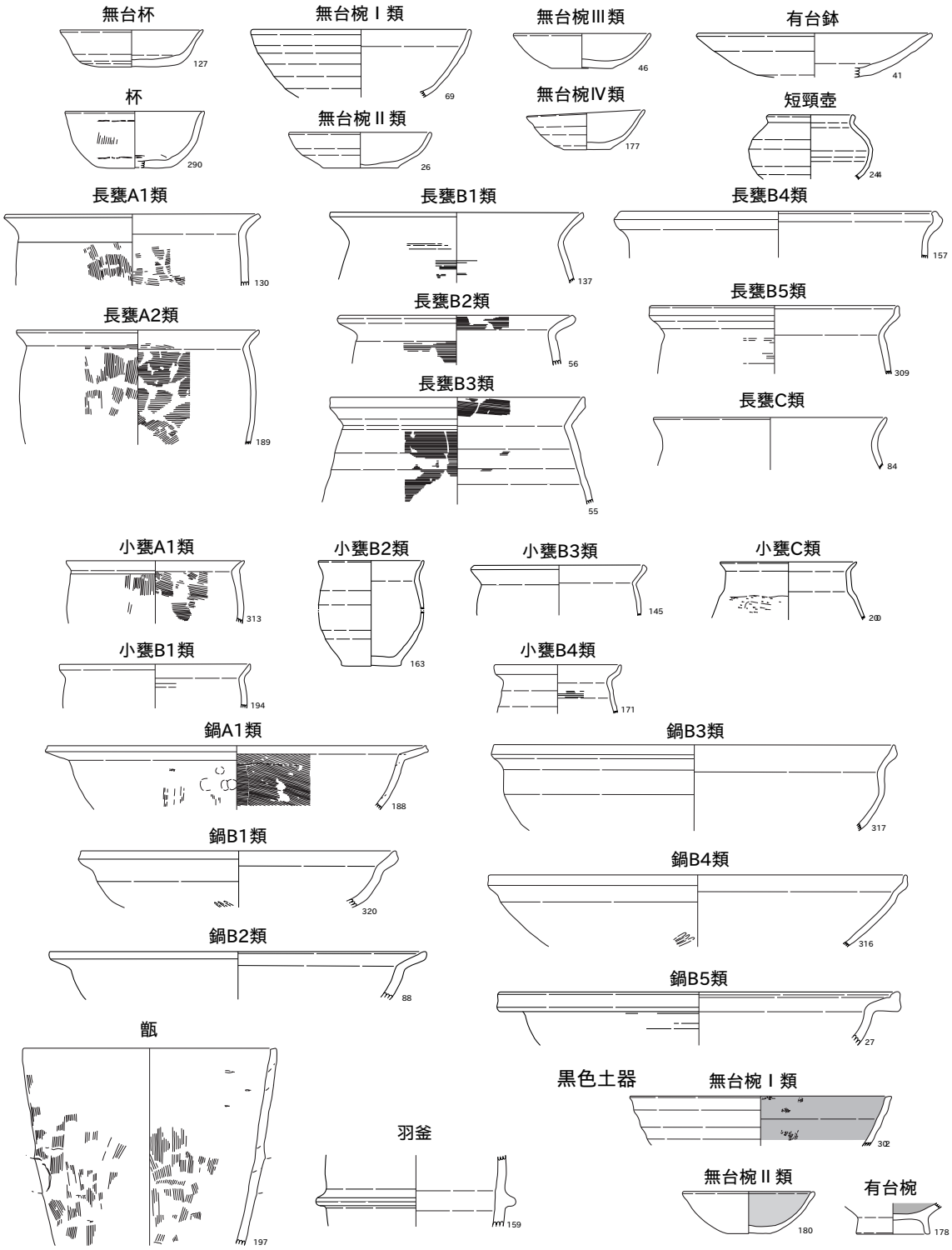
鍋　分類の規準は長甕と同様である。

鍋A1類：非ロクロ成形で口縁端部に面をもつもの。

鍋B1類：ロクロ成形で口縁端部に面をもつもの。

鍋B2類：ロクロ成形で口縁端部が丸いもの。

鍋B3類：ロクロ成形で口縁端部が肥厚し、断面が三角形のもの。



第８図　古代の土器　土師器器種分類図　　S＝1/6

鍋B4類：ロクロ成形で口縁端部をつまみ上げるもの。

鍋B5類：ロクロ成形で口縁部が受け口状となるもの。

甑　長胴の体部に把手が付く。数は少ない。

羽　釜　長胴の体部に鍔状の突帯がめぐる。3点出土した。県内では南魚沼市金屋遺跡［山本ほか1985］・上越市蛇谷遺跡［土橋2005］に出土例がある。

c）黒 色 土 器

無台椀と有台椀がある。

無台椀　口径20cm以上のものをⅠ類、口径11～14cmのものをⅡ類とした。

有台椀　全形が分かる資料はない。数が少ないため分類は行わない。

3）各　説

SB1

SD1（図版19－21～32・56－21～31・57－32）

須恵器無台杯・有台杯（21・22）・杯・杯蓋（23・24）、土師器無台椀（25・26）・鍋（27）・長甕（28）・小甕、須恵器長頸瓶（29）・横瓶（30）・突帯付四耳壺（31）・甕（32）がある。21・22は有台杯Ⅲ類である。23は杯蓋Ⅲ類、24はⅡ類で天井部に墨書文字が記されている。25は無台椀Ⅱ類、26はⅢ類である。26は内外面とも煤が付着し、底部外面は「×」とヘラ書きされる。27は鍋B5類、28は長甕B3類である。29は肩部が張る長頸瓶A類と推測する。30は底部に高台が剥落した痕跡があり、台付横瓶と考えられる。県内の台付横瓶については永井いずみが集成・研究を行っている［永井2005］。これによれば新潟県において台付横瓶は14遺跡18点が確認され、分布の中心は阿賀北地域（阿賀野川以北）にあり、蒲原地域および頸城地域においては少量確認できるとのことである。頸城地域では上越市今池遺跡［坂井ほか1984］で1点の出土例があり、30の台付横瓶は頸城地域における2例目の出土例となる。31は突帯付四耳壺の口縁部である。32は須恵器甕Ⅲ類の特大甕である。口縁部外面には櫛歯状工具による波状文が施文される。

SD172（図版20・57－33・34）

須恵器無台杯Ⅱ類（33）・杯・杯蓋Ⅰ類（34）、土師器無台椀・長甕がある。33は佐渡小泊窯産である。

SD189（図版20・57－35・36）

須恵器無台杯（35）・杯・杯蓋、土師器無台椀・長甕・小甕、須恵器長頸瓶（36）・甕がある。35の無台杯は佐渡小泊窯産である。36の長頸瓶の体部外面にはヘラケズリが施される。

SB1には佐渡小泊窯産の須恵器食膳具（33・35）や口径・底径の大きい土師器無台椀（25・26）があることなどから、春日編年のⅤ1期に比定できる。

SB2

P324（図版20・57－37・38）

須恵器杯蓋Ⅱ類（37）、土師器長甕B5類（38）がある。37は端部が外反する。

SK40（図版20・57－39）

須恵器杯蓋、土師器無台椀Ⅱ類（39）・長甕がある。

SK52（図版20・57－40）

須恵器杯蓋Ⅱ類（40）、土師器長甕がある。40は佐渡小泊窯産である。

SK67（図版20・57－41～43）

土師器無台椀・有台鉢（41）・長甕A1類（42）、須恵器長頸瓶（43）がある。有台鉢（41）は荒川町鴨侍遺跡［吉井2002］に出土例があり、足高の高台が付くと推測される。43は長頸瓶Ｂ類で体部下半の外面にはヘラケズリが施される。

SK684（図版20・57－44）

土師器長甕B3類（44）がある。

SK327（図版20・57－45～47）

須恵器無台杯・有台杯（45）・杯、土師器無台椀Ⅲ類（46）・長甕B3類（47）・小甕がある。

SD61（図版20・57－48～50）

須恵器杯、土師器無台椀（48・49）・長甕B3類（50）・小甕、須恵器瓶・甕がある。

SB2には佐渡小泊窯産の須恵器食膳具（40）や口径・底径の大きい土師器無台椀（39）があることなどから、春日編年のⅤ１期に比定できる。

SB7

P730（図版20・57－51）

土師器無台椀・長甕、須恵器長頸瓶（51）・甕がある。51は長頸瓶の肩部で環状の把手が付く。

SB8

P888（図版20・57－52）

土師器無台椀Ⅲ類（52）・長甕がある。

SD476（図版20・57－53）

須恵器杯蓋Ⅱ類（53）、土師器無台椀・長甕、須恵器瓶・甕がある。

SD747（図版20・57－54）

土師器無台椀・長甕B3類（54）、須恵器壺・瓶類がある。

SD800（図版20・57－55～58）

須恵器杯、土師器無台椀・長甕（55～57）・小甕（58）がある。55は長甕B3類、56はB2類、57はB5類である。

SB9・10

P775・P776（図版21・57－59）

須恵器無台杯（59）がある。59は無台杯Ⅰ類で佐渡小泊窯産である。

SD475（図版21・57－60・61）

須恵器無台杯、土師器無台椀Ⅲ類（60）、黒色土器無台椀Ⅱ類（61）、土師器長甕・小甕、須恵器甕がある。

SB9

P781（図版21・57－62）

土師器無台椀・長甕・小甕、須恵器広口瓶（62）がある。62の外面には浅い沈線がめぐる。

P782（図版22・60－63）

土師器長甕B3類（63）がある。

SB10

P771（図版21・57－64）

土師器無台椀、黒色土器無台椀・有台椀（64）、土師器長甕・小甕がある。64の高台は欠損している。

P794（図版21・57－65）

土師器無台椀（65）、黒色土器無台椀、土師器長甕・小甕がある。

P795（図版21・57－66）

土師器長甕（66）がある。66は長甕B3類である。

SB9およびSB10には佐渡小泊窯産の須恵器食膳具（59）や黒色土器の食膳具（61・64）があることなどから、春日編年のⅥ期に比定できる。

SB11

P538（図版21・57－67）

須恵器無台杯（67）・杯、土師器長甕がある。67は無台杯Ⅰ類で佐渡小泊窯産である。

P533（図版21・57－68）

須恵器無台杯（68）は佐渡小泊窯産である。

SB13

P714（図版21・57－69・70）

土師器無台椀Ⅰ類（69）・長甕・小甕B2類（70）がある。

SD514（図版21・57－71）

土師器長甕・須恵器瓶（71）がある。

SI31（図版21・58－72～88）

須恵器無台杯（72・73）・杯（74）・有台杯（75～77）・杯蓋（78～81）、土師器無台椀（82）、黒色土器無台椀、土師器長甕（83・84）・小甕（85・86）・鍋（87・88）、須恵器瓶・甕がある。72は無台杯Ⅱ類で底部は厚い。75は有台杯Ⅰ類で佐渡小泊窯産、76・77は有台杯Ⅲ類である。78・79は杯蓋Ⅱ類、80・81はⅢ類である。82は無台椀Ⅲ類、83は長甕B5類である。84はC類の武蔵型甕で器壁は薄く、胎土に細砂粒を多量に含む。85は小甕B2類である。87は鍋B1類、88はB2類である。

SI31からは佐渡小泊窯産の須恵器食膳具や土師器無台椀が出土していることから、春日編年のⅤ1期に比定できる。

SI394（図版22・58－89～106）

須恵器杯（89・94）・無台杯（90～93）・有台杯（95）・杯蓋（96）、土師器無台椀（97・98）・長甕

（99～102）・小甕（103・104）、須恵器長頸瓶（105）・甕（106）がある。90・91・93は無台杯Ⅱ類で佐渡小泊窯産である。95の底部外面には墨が付着する。96は杯蓋Ⅱ類、97は無台椀Ⅲ類である。99は長甕B5類で口縁部の下端がふくらむ。100は長甕B2類、101・102はB3類である。103は小甕B3類、104はB2類で口縁部がやや内湾する。105は長頸瓶の口縁部で端部が上方に短く屈曲する。106の須恵器甕の外面にはタタキ、内面には同心円状の当て具痕が残る。

SI394からは佐渡小泊窯産の須恵器食膳具や口径・底径がやや小さい土師器無台椀が出土していることから、春日編年のⅤ２期に比定できる。

SE116（図版22・58－107～113）

須恵器杯（107）・無台杯（108・109）・杯蓋（110・111）、土師器無台椀（112）・長甕（113）、須恵器瓶・甕がある。108は無台杯Ⅱ類で佐渡小泊窯産である。110は杯蓋Ⅲ類、112は無台椀Ⅲ類である。113は長甕の底部で丸底である。

SE378（図版22・58－114～117）

須恵器有台杯（114）・土師器無台椀（115・116）・長甕、須恵器甕（117）がある。114は有台杯Ⅲ類である。115・116は無台椀Ⅱ類であり、116は内外面とも丁寧なミガキが施され、外面には墨書文字がある。117の須恵器甕は口縁部を欠損するが、Ⅲ類の中甕と推測する。

SE554（図版22・58－118～120）

土師器無台椀・長甕B3類（118）・小甕（119）、須恵器長頸瓶（120）・甕がある。

SE757（図版23・58－121～123）

土師器無台椀（121～123）、黒色土器無台椀、土師器長甕・小甕がある。121は土師器無台椀Ⅱ類、122はⅢ類である。

SE784（図版23・58－124・125）

須恵器杯、土師器無台椀Ⅲ類（124・125）、黒色土器無台椀、土師器長甕・小甕、須恵器甕がある。125の内面には煤が付着する。

SK298（図版23・58－126）

土師器長甕・小甕（126）、須恵器甕がある。

SK74（図版23・58－127～132）

土師器無台杯（127）・長甕（128～130）・小甕（131）・鍋（132）がある。127の器形は須恵器無台杯と同一であるが、胎土が須恵器とは明瞭に異なり軟質で粗砂粒を多量に含む。128は長甕B3類、129・130はA1類である。130の体部はあまり張らない。131は小甕B1類、132は鍋B1類である。131・132とも摩耗が著しく、調整痕は不明瞭である。

SK74からは須恵器が出土していないが、土師器の中には非ロクロ成形のものが多数あり、本遺跡出土資料中では古相を呈する。春日編年のⅣ１期に相当する。

SK358（図版23－133～139、図版58－133～138、図版59－139）

須恵器無台杯（133）・有台杯（134・135）・杯・杯蓋Ⅱ類（136）、土師器無台椀・長甕（137）・鍋（138・139）がある。134は有台杯Ⅲ類である。137は長甕B1類で口縁部がゆるく「く」の字状に外反する。138は鍋B1類で口縁端面にはごく浅い沈線が１条めぐる。139は鍋の底部であるが、長甕Ａ類の底部である可能性もある。

SK358の須恵器食膳具は法量が大きく器壁が厚めであり、土師器には非ロクロ成形のものがある。こ

れらのことから春日編年のⅣ２期に比定できる。

SK458（図版23・59－140）

須恵器無台杯（140）、土師器長甕がある。140は無台杯Ⅱ類で佐渡小泊窯産である。

SK459（図版23・59－141）

土師器無台椀Ⅱ類（141）・長甕がある。

SK472（図版23・59－142～147）

須恵器無台杯・有台杯（142）・土師器無台椀（143・144）、黒色土器無台椀、土師器小甕（145）、須恵器長頸瓶（146）・甕（147）がある。142は身が深い有台杯Ⅰ類と推測する。143・144は無台椀Ⅳ類、145は小甕B3類である。146の長頸瓶は体部外面をロクロケズリされる。147は須恵器甕Ⅱ類の大甕である。

SK472からは須恵器食膳具の良好な資料が出土していないものの、口径・底径がやや小さい土師器無台椀があり、春日編年Ⅴ２期に比定できる。

SK526（図版24・59－148）

須恵器無台杯（148）、土師器長甕がある。148の無台杯は佐渡小泊窯産であり、底部外面には「山」の墨書文字がある。

SK593（図版24・59－149）

須恵器杯・杯蓋、土師器長甕A2類（149）、須恵器甕がある。

SK696（図版24・59－150）

土師器長甕、須恵器甕（150）がある。150は須恵器甕Ⅲ類の中甕である。口縁端部は屈曲せず面をもつ。

SK722（図版24・59－151～159）

須恵器杯、土師器無台椀（151～153）、黒色土器無台椀（154）・有台椀（155）、土師器長甕（157・158）、羽釜（159）がある。これらの遺物は２層の炭層中からまとまって出土した。151は無台椀Ⅲ類で内面にはミガキが施される。155の底部内面には暗文が施される。156は環状の把手であり、土師器の甕類に付くものである。157・158は長甕B4類である。159の羽釜は長胴の体部に鍔状の突帯がめぐる。

SK722からは口径の小さい土師器無台椀（151）、黒色土器無台椀（154）・有台椀（155）があることから、春日編年のⅥ期に比定できる。

SK725（図版24・59－160）

黒色土器無台椀Ⅱ類（160）、土師器長甕がある。

SK815（図版24・59－161）

須恵器無台杯（161）、土師器長甕がある。161は無台杯Ⅱ類で佐渡小泊窯産である。

SK779（図版24・59－162～164）

黒色土器無台椀（162）、土師器無台椀・長甕・小甕B2類（163）、須恵器横瓶（164）がある。164の横瓶は体部内外面ともカキメがめぐる。

SK822（図版24・59－165～168）

土師器長甕（165・166）・小甕（167・168）がある。165は長甕A2類、166はB3類である。167は小甕B2類である。

SX660（図版24・59－169～171）

須恵器杯、土師器無台椀（169）・長甕Ａ類（170）・小甕B4類（171）がある。

P73（図版24・59－172）

須恵器無台杯（172）、土師器長甕がある。172は無台杯Ⅱ類で佐渡小泊窯産である。

P758（図版24・59－173）

土師器無台椀・長甕・小甕、須恵器長頸瓶（173）がある。173の長頸瓶の底部内面には自然釉がかかる。

P329（図版24・59－174・175）

須恵器有台杯、土師器無台椀・杯（174）・小甕・鍋A1類（175）がある。174の土師器杯は短く外反する口縁部に丸みをもつ体部がつづく。摩耗が激しく調整痕は不明瞭である。

P325（図版24・59－176）

土師器長甕B3類（176）がある。

P919（図版24・59－177）

土師器無台椀Ⅳ類（177）がある。

P1055（図版24・59－178）

黒色土器有台椀（178）がある。

SD480（図版25・59－179～180）

須恵器無台杯・土師器無台椀Ⅱ類（179）、黒色土器無台椀（180）、土師器長甕・小甕、須恵器突帯付四耳壺（181）・甕がある。

SD11（図版25・59－182）

須恵器杯、土師器無台椀・長甕A2類（182）・小甕、須恵器甕がある。

SD15（図版25・59－183）

須恵器無台杯、土師器長甕・小甕A1類（183）、須恵器甕がある。

SD47（図版25・59－184・185）

須恵器無台杯Ⅰ類（184）・有台杯（185）・杯、土師器無台椀・長甕がある。185の底部外面には墨が付着する。

SD18・SD46（図版25・60－186）

須恵器杯・鉢（186）、土師器長甕・小甕、須恵器甕がある。186の体部上半は内外面ともカキメがめぐり、下半の外面にはヘラケズリが施される。

SD37（図版25・59－187・188）

須恵器有台杯・杯蓋・長頸瓶（187）、土師器無台椀・杯・長甕・小甕・鍋（188）がある。188は鍋A1類であり、体部外面には指オサエの痕跡がある。

SD38（図版25・60－189）

須恵器杯、土師器無台椀・長甕A2類（189）、須恵器甕がある。

SD235（図版25・60－190）

須恵器無台杯・杯、土師器無台椀（190）がある。

SD279（図版25・60－191～197）

須恵器無台杯・有台杯（191）・杯（192・193）・杯蓋、土師器杯・長甕・小甕（194）・鍋（195・196）・甑（197）がある。191は有台杯Ⅱ類、194は小甕B1類である。195は鍋A1類、196はB1類で

ある。

191の須恵器有台杯は法量が大きく体部は外傾し、太い高台が底部の外側に付く。上越市今池遺跡［坂井ほか1984］SK391B出土資料（報告番号481）およびA地区出土資料（報告番号597）に類似する。土師器は非ロクロ成形のものが多数あり、197の甑のように古墳時代後期からの伝統的な器種が残存している。以上のことからSD279は本遺跡の遺構出土資料中では最も古く、春日編年のⅢ２期に比定できる。

SD477（図版25・60－198・199）

須恵器杯、土師器無台椀、黒色土器無台椀、土師器長甕・小甕B2類（198）・鍋B1類（199）、須恵器瓶・甕がある。

SD742（図版26・60－200・201）

須恵器杯、土師器無台椀・長甕・小甕（200・201）がある。200は武蔵型甕である。頸部は直立し口縁部は外反する。体部外面には横方向のヘラケズリが施され、頸部と体部の境にはゆるい段が形成される。器壁は薄い。胎土は他の土師器と異なり細砂粒を多量に含む。

SD746（図版26・60－202・203）

須恵器無台杯・有台杯・杯・杯蓋、土師器無台椀Ⅲ類（202）・長甕・小甕B3類（203）、須恵器甕がある。

SD772（図版26・60－204～206）

須恵器有台杯（204・205）、土師器無台椀、黒色土器無台椀Ⅱ類（206）、土師器長甕がある。204は有台杯Ⅲ類、205も高台を欠損するがⅢ類と推測する。

SD1044（図版26・60－207）

土師器小甕・鍋B3類（207）、須恵器瓶がある。

SD84（図版26－208～227・27－228～232、図版60－208～231、図版61－232）

須恵器無台杯（208・209）・有台杯（210～214）・杯・杯蓋（215～218）、土師器無台椀（219）、黒色土器無台椀、土師器長甕（220～222）・小甕、須恵器長頸瓶（223～227）・壺（228）・広口瓶（229）・小型壺（230）・甕（231・232）がある。208は無台杯Ⅰ類、209は無台杯Ⅱ類で佐渡小泊窯産である。210は有台杯Ⅱ類、211～213は有台杯Ⅲ類である。214の底部外面には墨書文字がある。215は杯蓋Ⅱ類、216・217は杯蓋Ⅲ類である。220・222は長甕B3類、221は長甕B2類である。223・224は長頸瓶の口縁部である。223の口縁端部は内傾し、224は上方を向く。225・227は長頸瓶A類であり、227の体部外面には「真浄」の墨書文字がある。228の壺は細長いラッパ状の口頸部に長胴の体部がつづく。底部は糸切りである。この形態の壺は奈良県平城京で壺Gと分類されているもので、770～780年頃の年代が想定されている［小笠原・西1976］。229の広口瓶は頸部外面に２条の浅い沈線がめぐり、体部外面はロクロケズリされる。230は小型壺で底部には高台が付く。231は須恵器甕Ⅲ類の中甕であり、口縁部は強く外反する。232は中甕と推測する。

SD178（図版27・61－233）

須恵器有台杯Ⅱ類（233）・杯、土師器無台椀・長甕・小甕、須恵器甕がある。

SD240（図版27・61－234～243）

須恵器無台杯（234・235）・有台杯（236・237）・杯・杯蓋（238・239）、土師器無台椀、黒色土器無台椀、土師器長甕・小甕・鍋、須恵器長頸瓶・広口瓶・横瓶（240）・壺蓋・短頸壺・突帯付四耳壺（241）・壺（242）・甕（243）がある。234は無台杯Ⅱ類である。235の底部外面には墨書文字がある。

234・235は佐渡小泊窯産である。236は口縁部を欠損するが深身の有台杯Ⅰ類と推測する。237の底部外面には墨書文字がある。238は杯蓋Ⅰ類である。240の横瓶は外面がタタキとカキメ、内面はロクロナデである。241は突帯付四耳壺の口縁部である。242は壺の底部であり、外面はヘラケズリされる。243の須恵器甕は小破片のため口径を測定できなかったが、Ⅰ類の特大甕と推測する。外面には櫛歯状工具による波状文が施文される。

SD104（図版27・61－244）

須恵器無台杯・有台杯・杯・杯蓋、土師器短頸壺（244）・長甕・小甕、須恵器瓶・甕がある。244は外面に煤・コゲが付着する。

SD360（図版27・61－245・246）

須恵器無台杯・有台杯（245）・杯蓋、土師器無台椀・長甕、須恵器横瓶（246）・甕がある。245は有台杯Ⅲ類である。246の横瓶は外面にタタキとカキメ、内面には当て具痕が残る。

SD745（図版27・61－247・248）

須恵器無台杯・有台杯・杯・杯蓋・広口瓶（248）・甕、灰釉陶器瓶（247）がある。248は頸部に1条の浅い沈線がめぐる。

包含層（図版28－249～284・図版29－285～305・図版30－306～325・図版61－249～280・図版62－281～321・図版63－332～325）

須恵器　249～259は無台杯であり、249～252・254～259はⅡ類である。250～252・254～259は佐渡小泊窯産である。253の内面には漆が付着する。257～259の底部外面には墨書文字があり、258・259は「山」である。260～274は有台杯である。260はⅠ類、265・266・270～272はⅡ類、261～263・267はⅢ類、264・268・269はⅣ類である。274の底部外面には墨書文字「山」がある。275～280は杯蓋である。275・276はⅠ類、277・278はⅡ類、279・280はⅢ類である。280の天井部には墨書文字「田後」がある。281は壺蓋であり、天井部は「×」とヘラ書きされる。282は小型壺の口縁部で浅い沈線が1条めぐる。283は把手付長頸瓶の環状把手である。284は突帯付四耳壺の突帯であり、粘土塊の貼り付けによる耳が付く。285・286は長頸瓶A類であり、286には高台が付かない。287は突帯付四耳壺の底部である。平底で体部内面の当て具痕は磨り消される。288・289は甕Ⅲ類の中甕である。

土師器　290・291は杯である。290は外面に粘土紐の接合痕が残り、やや粗雑なつくりである。291の杯は古墳時代後期のものである可能性もある。292～299は無台椀である。294・295・297・298はⅢ類、296・299はⅣ類である。292の底部外面には「林」の墨書文字がある。305は高杯の脚部である。300～304は黒色土器の椀で、300・301はⅡ類、302はⅠ類である。303・304は有台である。306～312は長甕である。306・311はA1類、307・312はA2類、308～310はB5類である。313～315は小甕である。313はA1類、314・315はB2類である。316～321は鍋である。316はB4類、317・318はB3類、319・320はB1類である。316は摩耗が著しいが、外面にタタキメがわずかに残る。321の口縁端面にはごく浅い沈線が1条めぐる。322は甑などに付く把手である。323・324は羽釜である。325は甑の底部である。

B　瓦（図版31・63－326～329）

瓦は丸瓦９点、平瓦11点で、合計20点出土した。出土状況は纏まっての出土はなく、川跡（SD84）、包含層などから単発で出土した。検出した建物の中に瓦葺のものが存在したとは考えられず、これらの瓦は外部から自然流入したか、廃材となっていた瓦を再利用する目的で持ち込まれた可能性が高い。

326は丸瓦で、焼き上がりは良好で、酸化焼成して赤褐色を呈している。凸面は丁寧なナデ調整が施され、凹面は網状の布目痕が残る。分割面の面取りは丸く仕上げている。327～329は平瓦である。327・326の焼きあがりは良好で、よく還元焼成されている。329は二次焼成を受けたのか淡橙色を呈し脆くなっている。平瓦の凹面は縄目叩きが施され、327の凹面は布目痕が残り、328の凹面は粘土塊から素材の粘土板を切り離した際に付いたコビキ痕が見られる。

C　土　製　品（図版31・63－330・331）

土製品は、土器片円盤が２点出土した。２点とも竪穴建物SI31から出土したもので、須恵器の甕の体部片の側縁の部分を打ち欠き加工している。形状は、330が四角形で、331が円形で、２点とも外面が摩耗している。土器片円盤の用途は、祭祀具、研削具、玩具説など諸説ある。

D　石製品・石器（図版31・63－332～334）

古代の石製品・石器は、石製腰帯具２点と砥石１点が出土した。

石製腰帯具は、２点とも丸鞆である。332は、掘立柱建物SB2付近の包含層から出土したもので、縦2.4cm、横3.67cm、厚さ0.65cm、重さ11.1gである。石材は粘板岩で、裏面には帯に固定するための潜り穴が横幅方向の中心の両隅に２対設けられている。表裏面、側面ともよく研摩され、色調は黒色を呈する。333は、SB9付近で出土した。縦2.24cm、横3.4cm、厚さ0.64cm、重さ9.1gである。色調は黒色を呈する。裏面に３つの潜り穴が裏面に３対上部と両隅に設けられている。

砥石は所属時期を判断することは難しいが、334はSD84から出土したことから古代の所産と考えた。石材は細粒の凝灰岩で、仕上げ砥石である。

E　部材・木製品

古代の木製品は遺構から柱根や礎板などが16点と井戸側部材23点、包含層から箸状木製品１点、曲物底板２点、用途不明品が１点出土した。

SB7（図版32・63－335・336）

柱根である。P729とP892に残存し、いずれも丸木材を円形に加工している。端部の形態は335がV字状、336が平坦である。

SB8（図版32・63－337）

柱根である。P888に残存し、分割材を使用する。端部の形態はV字状、断面は長方形を呈する。

SB9（図版32・63－338）

礎板である。P781に残存し、端部は欠損する。断面は長方形を呈する。

SB11（図版32・63－339）

柱根である。P555に残存し、分割材を使用する。端部の形態は平坦で、断面は長方形を呈する。

SB12（図版32・63－340）

礎板である。P711に残存し、端部はV字状に切断されている。

SB13（図版32・63－341～344）

341～343は礎板である。P974から3点重なるように出土した。344は庇の柱根である。P983から出土した。分割材を使用し、端部は平坦である。

各ピット出土（図版32・63－345～350）

346は杭、350は板材で、ほかは柱根である。

SE116（図版32・63－351・図版33・64－352～363）

351は井戸底部に敷かれていたもので、長さ66.7cm、幅43.5cmを測る大型の曲物底板の転用品である。5か所に綴じ紐、2か所に木釘が認められる。側縁を1段低く切り欠くもので、切り欠きのある面が井戸内部を向いていた。その上に井戸側が設置されたため、直上の板の圧痕が明瞭に残っている。また、地面に接していた面には刃物傷が多数認められる。352～363は井戸側部材で、溝状の切込みを片方、あるいは両方に入れたもの、相欠き状に加工するものが認められる。352や353のように、断面が半円形で厚みの均一でないものは、組み合わせ部分である溝状の切れ込み周辺のみ薄く加工する。また、組み合わせ材の圧痕が明瞭に残るものが多い。曲物の転用品も2点認められ、353には木釘穴が2か所、358には綴じ紐が残る。

包含層出土（図版33・64－364～367）

箸状木製品（364）、曲物底板（365・366）、用途不明品（367）がある。367は側面に細かな加工が認められる。また、中央には貫通しない孔が有り、その内部は炭化している。

4　古墳時代の遺物

A　土　　器（図版34・64－368～371）

古墳時代土器の出土量は非常に少なく、図化できたものは4点にすぎない。368は川跡（SD84）、369～371は包含層中から出土した。遺構からは出土していない。

368～370は甕の口縁部である。「く」の字状に外反する口縁部に球胴状の体部がつづく器形である。368・370の口縁端部は丸く、369はやや幅広の面をもつ。371は脚部であり、鉢または甕に付くものである。368・369は古墳時代前～中期、370・371は古墳時代前期の所産と考える。

B　木　　杭（図版34・64－372～375）

陥し穴が3基検出され、その底部から杭（372～375）が計4点出土した。372～374は丸木材で、直径5.4～6.9cm、375は半割材で幅5.5cmを測る。いずれも先端部のみを加工し、尖らせている。

5　中・近世の遺物

A　土　　器（図版34・64－376～381）

近世の土器は、肥前系陶磁器・越中瀬戸などがあり、諏訪社が祀られていた高まりから出土したものについて記述する。

376は中世の土器で、珠洲の短頸小壺である。包含層から出土し、球胴型の胴部に櫛目波状文がめぐるもので、吉岡康暢の分類［吉岡1994］の壺Ｒ種Ｅ類である。時期は、図示しなかった甕の口縁部片がⅢ～Ⅳ期に比定できることから、該期の所産であろうか。

377～379は肥前系陶磁器である。377は皿で、見込みに砂目積みの痕跡が認められる。大橋康二による編年［大橋1989］のⅡ期の所産である。378は碗で、白化粧土の刷毛目文様が認められ、379は口径8cmの小碗である。ともにⅢ期の所産である。380・381は越中瀬戸の皿・壺である。380は見込みに菊の印花が認められ、釉止めの段が設けられている。17世紀第１四半期の所産である。

B　石　　器（図版34・64－382～385）

石器は砥石、磨石類などが10点出土し、中世あるいは近世のもの、所属時期の判断ができないものをここで取り上げた。382・383は砥石である。２点とも近世に掘削された溝から出土した。382は表裏面がよく使用され厚さが薄くなっている。383も表裏面、側面がよく使用され厚さが薄くなっている。２点とも鎌などの研ぎに用いられた手持ちの仕上げ砥石である。384と385は凹石（384）と敲き石（385）である。

C　銭　　貨（図版34・64－386～391）

銭貨は全部で13枚出土した。そのうち、６枚はSK120から纏まって出土した。この６枚（386～391）について図示する。内訳は、開元通寶（386）・紹聖元寶（387・388）・治平元寶（389）・天禧通寶（390）と判読不能のものが１枚（391・熙寧元寶か）である。初鋳年の最も古いものは開元通寶の621年で、最も新しいものは紹聖元寶の1094年である。そのほかの７枚は、不明なもの１枚を除きすべて寛永通寶である。

D　木　製　品（図版34・64－392・393）

近世の用水路であるSD240から漆椀（392）と曲物底板（393）が出土した。392は赤漆塗りで、木取りは横木取りである。

第Ⅵ章　自然科学分析

1　年 代 測 定

A　陥し穴出土杭の年代測定

小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani
（株式会社パレオ・ラボ　パレオ・ラボAMS年代測定グループ）

1）はじめに

狐宮遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2）試料と方法

測定試料の情報、調整データは第２表のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

3）結　　果

第３表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行った^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を、第９図に暦年較正結果をそれぞれ示す。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示

してある。

4）考　　察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

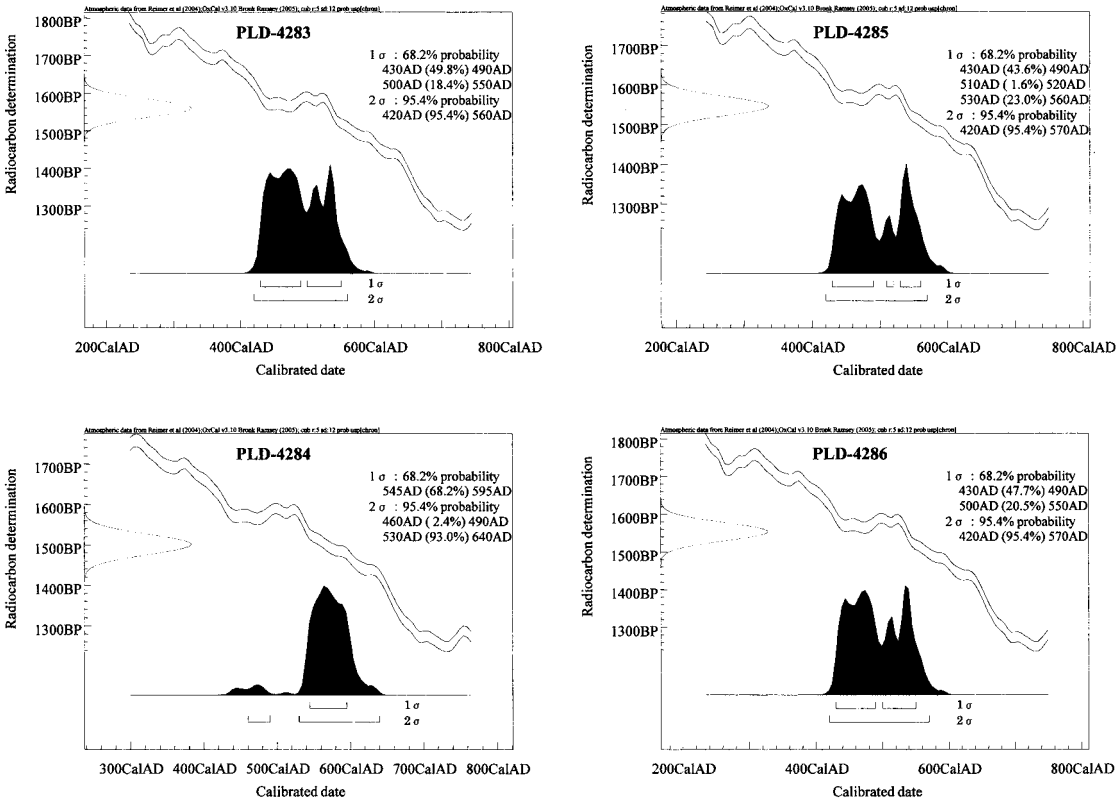
参考文献

Bronk Ramsey C.　1995　Radiocarbon Calibration and Analysis of　Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37（2）, 425－430.

Bronk Ramsey C.　2001　Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43（2A）, 355－363.

中村俊夫　2000　「放射性炭素年代測定法の基礎」日本先史時代の ^{14}C 年代, 3－20.

Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer.（2004）Radiocarbon 46, 1029－1058.



第９図　暦年較正結果

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD－4283	位置：SK258 その他：杭1	試料の種類：生試料・材 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N，水酸化ナトリウム1N，塩酸1.2N）	PaleoLabo：NEC製 コンパクトAMS・ 1.5SDH
PLD－4284	位置：SK258 その他：杭2	試料の種類：生試料・材 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N，水酸化ナトリウム1N，塩酸1.2N）	PaleoLabo：NEC製 コンパクトAMS・ 1.5SDH
PLD－4285	位置：SK303 その他：杭	試料の種類：生試料・材 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N，水酸化ナトリウム1N，塩酸1.2N）	PaleoLabo：NEC製 コンパクトAMS・ 1.5SDH
PLD－4286	位置：SK341 その他：杭	試料の種類：生試料・材 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N，水酸化ナトリウム1N，塩酸1.2N）	PaleoLabo：NEC製 コンパクトAMS・ 1.5SDH

第２表　測定試料及び処理

測定番号	δ^{13}C（‰）	^{14}C年代 （yrBP±1σ）	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲		暦年較正用年代 （yrBP±1σ）
			1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	
PLD－4283	－29.46±0.15	1560±25	430AD（49.8％）490AD 500AD（18.4％）550AD	420AD（95.4％）560AD	1560±24
PLD－4284	－31.37±0.24	1500±25	545AD（68.2％）595AD	460AD（2.4％）490AD 530AD（93.0％）640AD	1501±25
PLD－4285	－28.16±0.17	1545±25	430AD（43.6％）490AD 510AD（1.6％）520AD 530AD（23.0％）560AD	420AD（95.4％）570AD	1547±24
PLD－4286	－31.35±0.12	1555±25	430AD（47.7％）490AD 500AD（20.5％）550AD	420AD（95.4％）570AD	1554±24

第３表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

B　Ⅴ層の年代測定

株式会社　加速器分析研究所

1）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用する。

2）BP年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表す。

3）付記した誤差は、次のように算出する。

複数回（通常は4回）の測定値についてχ^2検定を行い、通常報告する誤差は測定値の統計誤差から求めた値を用い、測定値が1つの母集団とみなせない場合には標準誤差を用いる。

4）δ^{13}Cの値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定されるδ^{13}Cの値を用いることもある。

δ^{13}C補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表したものである。

$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - ^{14}A_R)/^{14}A_R] \times 1000$ ……（1）

$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - ^{13}A_{PDB})/^{13}A_{PDB}] \times 1000$ ……（2）

ここで、　$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C濃度：（$^{14}C/^{12}C$）$_S$または（$^{14}C/^{13}C$）$_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C濃度：（$^{14}C/^{12}C$）$_R$または（$^{14}C/^{13}C$）$_R$

δ^{13}Cは、質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}A_S = ^{13}C/^{12}C$）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算する。

但し、IAAでは加速器により測定中に同時に$^{13}C/^{12}C$も測定しているため、標準試料の測定値との比

較から算出した$\delta^{13}C$を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記した。

また、$\Delta^{14}C$は、試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの^{14}C濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。（1）式の^{14}C濃度を、$\delta^{13}C$の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975/(1+\delta^{13}C/1000))^2$$（$^{14}A_S$として$^{14}C/^{12}C$を使用するとき）

または

$$= {}^{14}AS \times (0.975/(1+\delta^{13}C/1000))$$（$^{14}A_S$として$^{14}C/^{13}C$を使用するとき）

$$\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - {}^{14}A_R)/{}^{14}A_R] \times 1000$$（‰）

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行なった年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない$\delta^{14}C$に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC（percent Modern Carbon）がよく使われており、$\Delta^{14}C$との関係は次のとおりである。

$$\Delta^{14}C = (pMC/100 - 1) \times 1000$$（‰）

$$pMC = \Delta^{14}C/10 + 100$$（%）

国際的な取り決めにより、この$\Delta^{14}C$あるいはpMCにより、放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age；yrBP）が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln[(\Delta^{14}C/1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln(pMC/100)$$

IAACode №.	試　料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA－52355	試料採取場所　：新潟県上越市大字門田新田　147番地 試料形態　：土壌 試料名（番号）：Ｖa1	LibbyAge（yrBP）　：3,310±30 $\delta^{13}C$（‰）、（加速器）＝－10.73±0.76 $\Delta^{14}C$（‰）　＝－337.4±2.6 pMC（%）＝66.26±0.26
#1188－1	（参考）$\delta^{13}C$の補正無し	$\delta^{14}C$（‰）　＝－317.9±2.5 pMC（%）＝68.21±0.25 Age（yrBP）　：3,070±30
IAAA－52356	試料採取場所　：新潟県上越市大字門田新田　147番地 試料形態　：土壌 試料名（番号）：Ｖb3－1	LibbyAge（yrBP）　：3,590±40 $\delta^{13}C$（‰）、（加速器）＝－11.02±0.95 $\Delta^{14}C$（‰）　＝－360.7±2.7 pMC（%）＝63.93±0.27
#1188－2	（参考）$\delta^{13}C$の補正無し	$\delta^{14}C$（‰）　＝－342.2±2.5 pMC（%）＝65.78±0.25 Age（yrBP）　：3,370±30
IAAA－52357	試料採取場所　：新潟県上越市大字門田新田　147番地 試料形態　：土壌 試料名（番号）：Ｖb3－2	LibbyAge（yrBP）　：3,370±30 $\delta^{13}C$（‰）、（加速器）＝－12.83±0.89 $\Delta^{14}C$（‰）　＝－342.6±2.6 pMC（%）＝65.74±0.26
#1188－3	（参考）$\delta^{13}C$の補正無し	$\delta^{14}C$（‰）　＝－326.0±2.4 pMC（%）＝67.40±0.24 Age（yrBP）　：3,170±30

第４表　年代測定結果

2　樹種同定

A　試　　料

試料は上越市狐宮遺跡から出土した容器４点、食事具１点、建築部材16、部材４点、杭材４点、用途不明品１点の合計30点である。

B　観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

C　結　　果

樹種同定結果（針葉樹３種、広葉樹９種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1）マツ科モミ属（*Abies* sp.）　（遺物№.364）（写真　第10図№.1）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅は狭い。柾目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は厚く、数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ゛型で１分野に１～４個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ、モミ、シラベがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

2）スギ科スギ属スギ（*Cryptomeria japonica* D.Don）

（遺物№.337～344，350，351，359）（写真　第10図№.2）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で１分野に１～３個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

3）ヒノキ科アスナロ属（*Thujopsis* sp.）　（遺物№.354，358，365～367，393）（写真　第10図№.3）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で１分野に２～４個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

4）ブナ科ブナ属（*Fagus* sp.）　（遺物№.392）（写真　第10図№.4）

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～110 μm）がほぼ平等に散在する。年輪の内側から外側に向かって大きさおよび数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、２～３列のもの、非常

に列数の広いものがある。柾目では道管は単穿孔と階段穿孔を持ち、内部には充填物（チロース）が見られる。放射組織は大体平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、２～３列、広放射組織の３種類がある。広放射組織は肉眼でも１～3mmの高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはっきりと見られる。ブナ属はブナ、イヌブナがあり、北海道（南部）、本州、四国、九州に分布する。

5）ブナ科クリ属クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　（遺物№.347）（写真　第10図№.5）

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管（～500 μm）が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは２～３個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

6）ブナ科シイ属（*Castanopsis* sp.）　（遺物№.335）（写真　第10図№.6）

環孔性放射孔材である。木口では孔圏部の道管（～300 μm）は単独でかつ大きいが接線方向には連続していない。孔圏外に移るにしたがって大きさを減じ、放射方向に火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型で柵状の壁孔がある。板目では多数の単列放射組織が見られる。シイ属にはツブラジイとスダジイがあるが、ツブラジイに見られる集合～複合放射組織の出現頻度が低い為区別は難しい。シイ属は本州（福島、佐渡以南）、四国、九州、琉球に分布する。

7）クスノキ科タブノキ属（*Persea* sp.）　（遺物№.372）（写真　第10図№.7）

散孔材である。木口では中庸で厚壁の道管（～130 μm）が単独または２ないし数個が放射方向あるいは斜方向に連続して年輪内に平等に分布する。軸方向柔細胞は道管の周囲を厚く鞘状に囲んでいる。柾目では道管は単穿孔とまれに階段穿孔、側壁に交互壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管と放射組織間壁孔は円形、レンズ状、篩状の壁孔が並んでいる。板目では放射組織は１～３細胞列、高さ～600 μmからなる。放射組織の直立細胞や軸方向柔細胞が油細胞（樟脳油貯蔵細胞）となったものが見られる。タブノキ属はタブノキ、ホソバタブがあり、本州（日本海側は青森、太平洋側は岩手中部以南）、四国、九州、琉球に分布する。

8）クスノキ科シロダモ属（*Neolitsea* sp.）　（遺物№.373，375）（写真　第10図№.8）

散孔材である。木口では中庸の道管（～100 μm）が単独または2，３個が放射方向に複合してやや疎に分布している。軸方向柔細胞は道管の周囲を囲んでいる。柾目では道管は単穿孔とまれに階段穿孔、側壁に交互壁孔を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は長楕円状、篩状ないし階段状の壁孔が並んでいる。板目では放射組織は１～２・３細胞列、高さ～700 μmからなる。油細胞はほとんどみられない。シロダモ属はシロダモ、イヌガシがあり、本州（宮城、山形以南）、四国、九州、琉球に分布する。

9）ミカン科キハダ属キハダ（*Phellodendron amurense* Ruprecht）　（遺物№.336，348）（写真　第10図№.9）

環孔材である。木口では大道管（～300 μm）が多列で孔圏部を形成している。孔圏外では小道管が散在、集団、波状に存在する。柾目では道管は単穿孔を持ち、着色物質、チロースが顕著である。小道管はさらに螺旋肥厚も有する。道管放射組織間壁孔は小型ないし中型である。放射組織は全て平伏細胞からなり同性である。板目では放射組織は１～５細胞列、高さ～500 μmからなる。キハダは北海道、本州、四国、九州に分布する。

10）カエデ科カエデ属（*Acer* sp.）　（遺物№.345，349）（写真　第10図№.10）

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～100 μm）が単独ないし数個複合して分布する。軸方向柔細胞は年輪界で顕著である。木繊維の壁に厚薄があり木口面で濃淡模様が出る。柾目では道管は単穿孔、螺旋肥厚を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。板目では放射組織は１～６細胞列、高さ～1mmからなる。カエデ属はウリカエデ、イタヤカエデ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

11）ツバキ科ヒサカキ属（*Eurya* sp.）　（遺物№.374）（写真　第10図№.11）

散孔材である。木口では極めて小さい道管（～50 μm）が単独ないし２～４個複合して平等に分布する。柾目では道管は階段穿孔と側壁に対列ないし階段壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏、方形、直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状壁孔が存在する。板目では放射組織は１～４細胞列で、高さ～5mmからなる。木繊維の壁には有縁壁孔が一列に多数並んでいるのが全体で見られる。ヒサカキ属はヒサカキ、ハマヒサカキがあり、本州（岩手、秋田以南）、四国、九州、琉球に分布する。

12）モクセイ科トネリコ属（*Fraxinus* sp.）　（遺物№.346）（写真　第10図№.12）

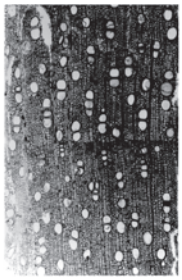
環孔材である。木口では大道管（～400 μm）が単～数列で孔圏部を形成している。孔圏外では厚壁の小道管が単独ないし２～４個放射方向に複合して散在している。軸方向柔細胞は顕著で周囲状、翼状、連続翼状に配列している。柾目では導道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織は平状細胞からなり同性である。板目では放射組織は１～４細胞列、高さ～400 μmからなる。トネリコ属はシオジ、ヤチダモ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

参考文献

島地謙・伊東隆夫　1988　「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版
島地謙・伊東隆夫　1982　「図説木材組織」地球社
伊東隆夫　1999　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所
北村四郎・村田源　1979　「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社
深澤和三　1997　「樹体の解剖」海青社
奈良国立文化財研究所　1985　「奈良国立文化財研究所史料第27冊木器集成図録近畿古代篇」
奈良国立文化財研究所　1993　「奈良国立文化財研究所史料第36冊木器集成図録近畿原始篇」

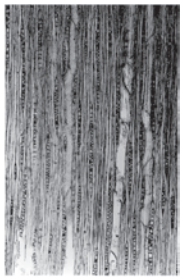
柾目×100

No.1　マツ科モミ属



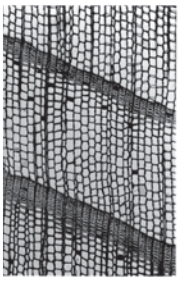
木口×40

柾目×40

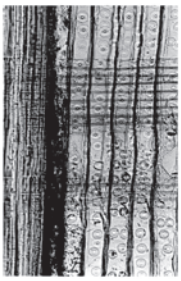


板目×40

No.7　クスノキ科タブノキ属



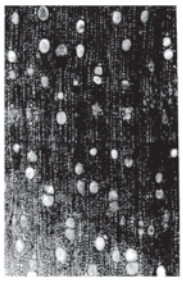
木口×40



柾目×100

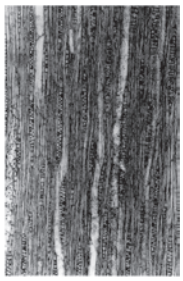
板目×40

No.2　スギ科スギ属スギ



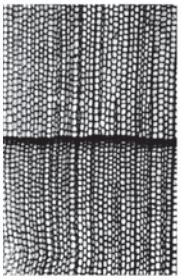
木口×40

柾目×40

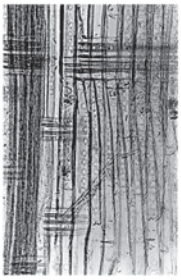


板目×40

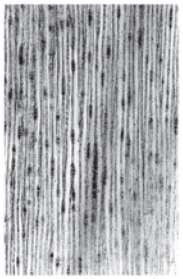
No.8　クスノキ科シロダモ属



木口×40



柾目×100



板目×40

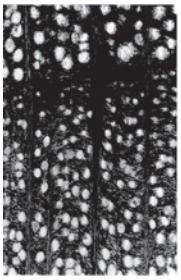
No.3　ヒノキ科アスナロ属

木口×40

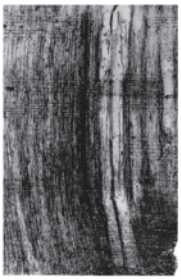
柾目×40

板目×40

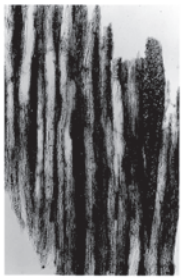
No.9　ミカン科キハダ属キハダ



木口×40

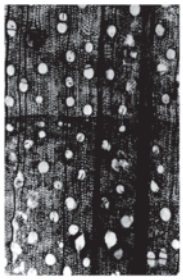


柾目×40

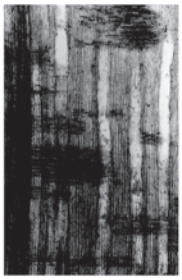


板目×40

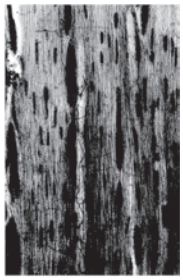
No.4　ブナ科ブナ属



木口×40

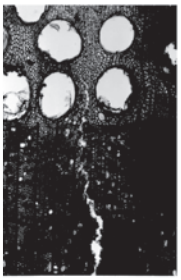


柾目×40



板目×40

No.10　カエデ科カエデ属

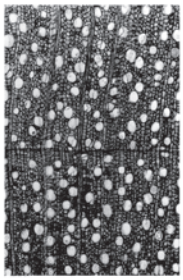


木口×40

柾目×100

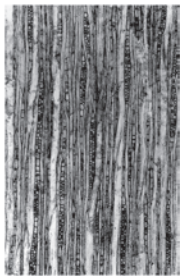
板目×40

No.5　ブナ科クリ属クリ



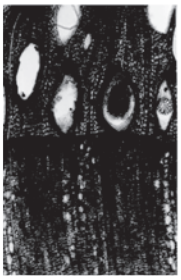
木口×40

柾目×40



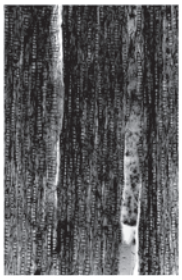
板目×40

No.11　ツバキ科ヒサカキ属



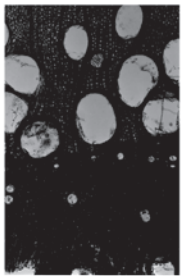
木口×40

柾目×100



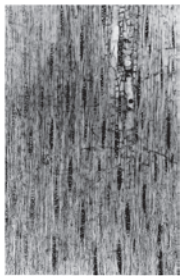
板目×40

No.6　ブナ科シイ属



木口×40

柾目×40



板目×40

No.12　モクセイ科トリネコ属

第10図　木製品の切片顕微鏡写真

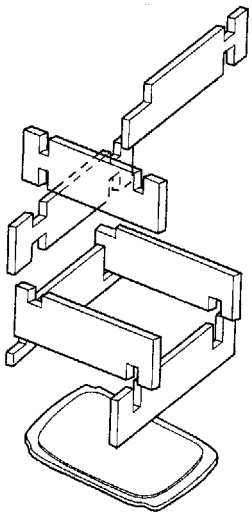
第Ⅶ章　ま　と　め

1　遺構について

A　SE116について

SE116は4Dに位置し、本遺跡で検出された５基の井戸のうち唯一井戸側をもつ。井戸側は宇野隆夫の分類［宇野1982］によれば、横板井籠組井戸である。上越市の古代の木組井戸では、縦板組横桟どめ、縦板組隅柱横桟どめ井戸が多数を占める。横板井籠組井戸には、新潟市小丸山遺跡［小池・本間1995］SE9があり、内法は約70cmを測る。

本遺構では井戸底部に長さ66.7cm、幅43.5cmを測る隅丸長方形の曲物底板が据えられていたことが特徴として挙げられる。井戸側は内法約50cmの方形に組まれ、底板からの遺存高は約95cmである。四辺は方位と対応し、底板の長軸は南北を向く。底板と井戸側の間にはわずかに隙間があり、調査時にも湧水量は豊富であった。井戸内部から須恵器の無台杯、杯蓋、土師器の無台椀、長甕が出土しており９世紀前葉から中葉に位置付けられる。井戸側の組み合わせ方は、溝状の切れ込みを入れたものや、相欠状に加工したものを積み上げるもので、１段目は南北辺に板を据え、東西辺の板で固定し、２段目以降は反時計回りに積み上げていた（第11図）。このような構造は、縦板組井戸のように隅柱や横桟、土圧を利用しなくとも構築が可能である。また、底板の接地面に付着した土には、長軸方向に最低３本、短軸方向に最低２本の直交する縄の圧痕が認められた。



第11図　井戸側模式図

次に井戸側の設置方法について検討したい。SE116は、掘方の断面形状や覆土から壁面の崩落が推測され、井戸側は再度の崩落を防ぐため設置されたものと考えられる。また、側面では観察できなかったものの、井戸底部の土に縄の圧痕が認められたことから、地上で組まれたものを縄で結束し設置した可能性がある。井戸側が横板組みであり、やや小型であること、底板の上に設置されていることは、地上で組んだものを移動して設置するという目的を反映した可能性が考えられよう。

B　陥し穴について

本遺跡には陥し穴と考えた土坑が３基存在し、時期は残存する杭の放射性炭素年代測定から古墳時代中期に相当する結果が得られた。本遺跡は高田平野のほぼ中央に位置し、現況は水田が広がる地域である。古代以前には遺跡の中央を東西に蛇行する川が存在し、SK341、SK258、SK303の３基は、この川の左岸沖積微高地上に25m前後の間隔を置いて位置する。

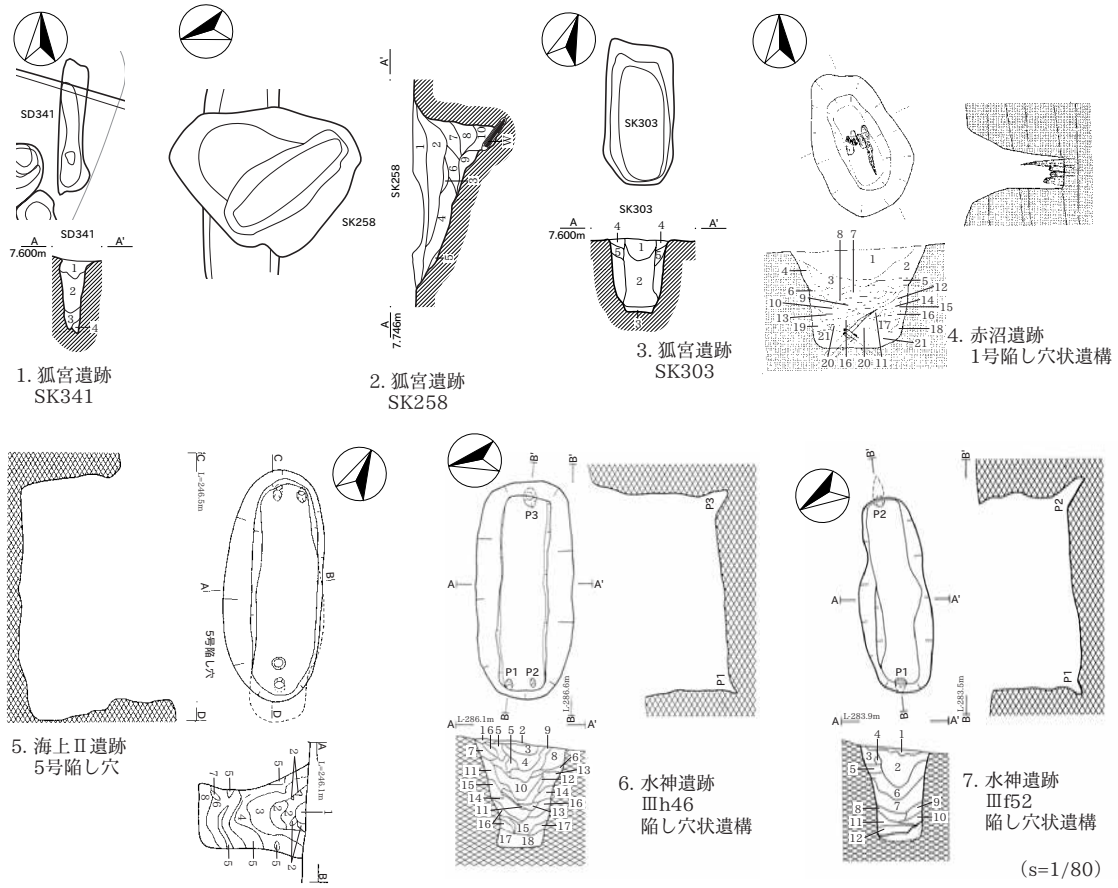
SK258は底部長軸上の両端に斜位に打たれた杭が残存し、上端は腐蝕しているものの互いがハの字に向かい合うか、または交差していたものと考えられる[1)]。また、SK341、SK303でも底部長軸上端部の

1）陥し穴については佐藤宏之氏に御教示いただいた。

片方には杭が残存し、他方でも杭と思われる木片が確認されていることから同様の遺構と考えられる。

古墳時代における同様の構造をもつ陥し穴の全国的な分布等は検討できなかったが、ここでは類似すると考えられる４例を挙げ（第12図）、比較してみたい。５は岩手県二戸郡浄法寺町海上Ⅱ遺跡［田村1985］５号陥し穴で、構築時期は10世紀以前とされる。６は岩手県二戸郡安代町水神遺跡［高橋1986］Ⅲh46陥し穴状遺構、７も同遺跡Ⅲf52陥し穴状遺構で、構築時期はともに縄文時代である。岩手県北部の海上Ⅱ遺跡や水神遺跡では5、6のような底部長軸の両端に２個と１個の小ピットが対になるものが多い。小ピットの径は８～20cm、深さ10～20cm程度で、「この小穴に棒状のものを差し込むと、それが陥し穴状遺構の中央で交錯する」［田村1987］と考えられている。４は福島県郡山市赤沼遺跡［鈴木1987］１号陥し穴状遺構である。構築時期は９世紀以前とされ、４本の上端を尖らせた杭が45度の角度で交互に「×字」状に打ち込まれている。この施設は「先端を尖らせることで致傷機能を増大させているが、串を長軸方向に傾かせているため遺構中央での殺傷は不可能である」［鈴木前掲］ことが指摘され、これに対し、この杭が「対象獣の脚を底面に達せさせないことにより脱出を防ぐタイプの逆茂木」であるという考えがある［佐藤2000］。

本遺構では杭の下端を尖らせ、底部に強く打ち込んで設置していた。そうした状況から打ち込まれた杭の上端が尖っていることは考えにくい。よって、前述の陥し穴に落ちた動物の脱出を防ぐような施設が推測される。また、３基は遺跡中央を流れる川の流路に並行して存在し、いずれも長軸は流路とほぼ直行する。赤沼遺跡では、陥し穴は単独で存在し、その長軸が西10mに位置する湧水池の方向を向くことから



第12図　陥し穴の類例

水場に集まる動物を狙った罠が想定されている。本遺跡でも長軸が動物の進入方向とすれば、川に向かう動物を対象とした罠猟が考えられる。

2　遺物について

A　縄文時代の遺物について

本遺跡からは縄文時代草創期の石器および後～晩期の土器が出土した。旧上越市内において縄文時代の遺跡分布は関川左岸の台地上や砂丘に80％以上が集中し、関川右岸地域では縄文時代の遺跡は周知されていないという極端な偏りを示している［寺崎2003］。本遺跡からわずかではあるが縄文時代の遺物が出土したことにより、関川右岸地域に縄文時代の遺跡が存在することが明らかとなった。

上越地方における縄文時代晩期の土器様相については、東北系土器は客体的であり、北陸系・信州系土器の影響が強いといわれている［渡邊朋1999・渡邊裕2004］。本遺跡で今回出土した晩期の土器には、東北系の亀ヶ岡式（11・15）、信州系の佐野式（6・7・9・10・13）、北陸系の中屋式（12）があるが、図化しなかった土器を加味しても、上述の上越地方の土器様相と同様で信州系・北陸系が主体的な位置を占め、東北系は客体的な存在である。

B　古代の土器について

本遺跡の主体となる古代の土器は、春日編年［春日1999］Ⅲ期～Ⅵ期（8世紀前半～9世紀後半）のものである。Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ期の土器は数量的に多くなく、主体となるのはⅤ期である。ここでは本遺跡の土器様相とその編年的位置付けについて検討する。

1）機能別構成比率・食膳具構成比率

土器の計測には口縁部残存率計測法［宇野1992］を用いた。小破片の土器が数多くあるため、同心円は36分割のものを使用した。口縁部残存率計測法では口縁部のみを計測対象とするため、底部片や体部片などは計測結果に反映されない。このため底部残存率と破片数も併せて計測した（第5・6表）。

本遺跡からは167.3個体（6024/36）、22489片の土器が出土した。機能別にみると、食膳具72.6％・貯蔵具7.4％・煮炊具20.0％である。遺構別にみると、SI31は遺跡全体の比率とほぼ同じである。SB1は貯蔵具の比率がやや高い。SI394は煮炊具が3割強であり、SK722には貯蔵具がほとんどみられない。

食膳具構成比率をみると、本遺跡全体では須恵器65.1％・土師器31.2％・黒色土器3.8％で須恵器

狐宮遺跡全体　器種構成比率

種別	器種	口縁部残存率	底部残存率	破片数	比率（口縁残存率）	比率（底部残存率）	比率（破片数）
土師器	無台椀	1275	7033	2868	21.2%	44.4%	12.8%
	無台杯	7	36	8	0.1%	0.2%	0.0%
	杯	56	125	26	0.9%	0.8%	0.1%
	鉢	17	0	7	0.3%	0.0%	0.0%
	その他	8	0	6	0.1%	0.0%	0.0%
須恵器	無台杯	451	2716	582	7.5%	17.1%	2.6%
	有台杯	359	2168	339	6.0%	13.7%	1.5%
	杯	1194	0	879	19.8%	0.0%	3.9%
	杯蓋	840	0	456	13.9%	0.0%	2.0%
	鉢	2	31	21	0.0%	0.2%	0.1%
黒色土器	無台椀	166	664	364	2.8%	4.2%	1.6%
	有台椀	0	169	35	0.0%	1.1%	0.2%
食膳具計		4375	12942	5591	72.6%	81.6%	24.9%
須恵器	長頸瓶	126	175	171	2.1%	1.1%	0.8%
	広口瓶	0	0	52	0.0%	0.0%	0.2%
	横瓶	27	0	79	0.4%	0.0%	0.4%
	瓶	23	16	152	0.4%	0.1%	0.7%
	壺蓋	5	0	4	0.1%	0.0%	0.0%
	突帯付四耳壺	24	18	25	0.4%	0.1%	0.1%
	短頸壺	19	0	6	0.3%	0.0%	0.0%
	壺	18	187	214	0.3%	1.2%	1.0%
	小型壺	25	36	4	0.4%	0.2%	0.0%
	壺・瓶	0	9	17	0.0%	0.1%	0.1%
	甕	178	100	1632	3.0%	0.6%	7.3%
貯蔵具計		445	541	2356	7.4%	3.4%	10.5%
土師器	長甕	750	462	12394	12.5%	2.9%	55.1%
	小甕	375	1887	1611	6.2%	11.9%	7.2%
	鍋	76	16	488	1.3%	0.1%	2.2%
	甑	3	5	41	0.0%	0.0%	0.2%
	羽釜	0	0	8	0.0%	0.0%	0.0%
煮炊具計		1204	2370	14542	20.0%	14.9%	64.7%
総計		6024	15853	22489	100.0%	100.0%	100.0%

第5表　器種構成比率－1

SB1　器種構成比率

種別	器種	口縁部残存率	底部残存率	破片数	比率（口縁部残存率）	比率（底部残存率）	比率（破片数）
土師器	無台椀	37	164	27	22.7%	42.5%	9.6%
	無台杯	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	杯	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	鉢	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	その他	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
須恵器	無台杯	19	44	10	11.7%	11.4%	3.6%
	有台杯	9	39	5	5.5%	10.1%	1.8%
	杯	14	0	13	8.6%	0.0%	4.6%
	杯蓋	27	0	10	16.6%	0.0%	3.6%
	鉢	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
黒色土器	無台椀	10	0	7	6.1%	0.0%	2.5%
	有台椀	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
食膳具計		116	247	72	71.2%	64.0%	25.6%
須恵器	長頸瓶	0	39	16	0.0%	10.1%	5.7%
	広口瓶	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	横瓶	0	0	5	0.0%	0.0%	1.8%
	瓶	0	0	1	0.0%	0.0%	0.4%
	壺蓋	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	突帯付四耳壺	18	0	15	11.0%	0.0%	5.3%
	短頸壺	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	壺	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	小型壺	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	壺・瓶	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	甕	10	0	75	6.1%	0.0%	26.7%
貯蔵具計		28	39	112	17.2%	10.1%	39.9%
土師器	長甕	12	0	82	7.4%	0.0%	29.2%
	小甕	3	100	13	1.8%	25.9%	4.6%
	鍋	4	0	2	2.5%	0.0%	0.7%
	甑	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	羽釜	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
煮炊具計		19	100	97	11.7%	25.9%	34.5%
総計		163	386	281	100.0%	100.0%	100.0%

S131　器種構成比率

種別	器種	口縁部残存率	底部残存率	破片数	比率（口縁残存率）	比率（底部残存率）	比率（破片数）
土師器	無台椀	13	23	36	8.0%	7.5%	14.1%
	無台杯	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	杯	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	鉢	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	その他	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
須恵器	無台杯	17	40	8	10.4%	13.0%	3.1%
	有台杯	15	57	13	9.2%	18.5%	5.1%
	杯	38	0	17	23.3%	0.0%	6.6%
	杯蓋	39	0	17	23.9%	0.0%	6.6%
	鉢	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
黒色土器	無台椀	0	0	1	0.0%	0.0%	0.4%
	有台椀	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
食膳具計		122	120	92	74.8%	39.0%	35.9%
須恵器	長頸瓶	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	広口瓶	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	横瓶	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	瓶	10	0	1	6.1%	0.0%	0.4%
	壺蓋	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	突帯付四耳壺	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	短頸壺	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	壺	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	小型壺	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	壺・瓶	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	甕	0	0	1	0.0%	0.0%	0.4%
貯蔵具計		10	0	2	6.1%	0.0%	0.8%
土師器	長甕	19	0	121	11.7%	0.0%	47.3%
	小甕	7	188	31	4.3%	61.0%	12.1%
	鍋	5	0	10	3.1%	0.0%	3.9%
	甑	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	羽釜	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
煮炊具計		31	188	162	19.0%	61.0%	63.3%
総計		163	308	256	100.0%	100.0%	100.0%

SI394　器種構成比率

種別	器種	口縁部残存率	底部残存率	破片数	比率（口縁残存率）	比率（底部残存率）	比率（破片数）
土師器	無台椀	33	110	54	19.3%	38.3%	14.5%
	無台杯	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	杯	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	鉢	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	その他	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
須恵器	無台杯	53	99	9	31.0%	34.5%	2.4%
	有台杯	0	36	9	0.0%	12.5%	2.4%
	杯	19	0	9	11.1%	0.0%	2.4%
	杯蓋	2	0	4	1.2%	0.0%	1.1%
	鉢	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
黒色土器	無台椀	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	有台椀	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
食膳具計		107	245	85	62.6%	85.4%	22.8%
須恵器	長頸瓶	3	0	1	1.8%	0.0%	0.3%
	広口瓶	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	横瓶	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	瓶	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	壺蓋	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	突帯付四耳壺	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	短頸壺	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	壺	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	小型壺	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	壺・瓶	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	甕	0	0	5	0.0%	0.0%	1.3%
貯蔵具計		3	0	6	1.8%	0.0%	1.6%
土師器	長甕	37	36	178	21.6%	12.5%	47.7%
	小甕	24	6	74	14.0%	2.1%	19.8%
	鍋	0	0	30	0.0%	0.0%	8.0%
	甑	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	羽釜	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
煮炊具計		61	42	282	35.7%	14.6%	75.6%
総計		171	287	373	100.0%	100.0%	100.0%

SK722　器種構成比率

種別	器種	口縁部残存率	底部残存率	破片数	比率（口縁残存率）	比率（底部残存率）	比率（破片数）
土師器	無台椀	25	52	17	56.8%	68.4%	19.1%
	無台杯	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	杯	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	鉢	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	その他	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
須恵器	無台杯	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	有台杯	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	杯	3	0	1	6.8%	0.0%	1.1%
	杯蓋	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	鉢	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
黒色土器	無台椀	6	0	3	13.6%	0.0%	3.4%
	有台椀	0	24	1	0.0%	31.6%	1.1%
食膳具計		34	76	22	77.3%	100.0%	24.7%
須恵器	長頸瓶	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	広口瓶	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	横瓶	0	0	1	0.0%	0.0%	1.1%
	瓶	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	壺蓋	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	突帯付四耳壺	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	短頸壺	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	壺	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	小型壺	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	壺・瓶	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	甕	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
貯蔵具計		0	0	1	0.0%	0.0%	1.1%
土師器	長甕	10	0	62	22.7%	0.0%	69.7%
	小甕	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	鍋	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	甑	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	羽釜	0	0	4	0.0%	0.0%	4.5%
煮炊具計		10	0	66	22.7%	0.0%	74.2%
総計		44	76	89	100.0%	100.0%	100.0%

第５表　器種構成比率－２

狐宮遺跡全体　食膳具構成比率

種別	器種	口縁部残存率	底部残存率	破片数	比率（口縁残存率）	比率（底部残存率）	比率（破片数）
土師器	無台椀	1275	7033	2868	29.1%	54.3%	51.3%
	無台杯	7	36	8	0.2%	0.3%	0.1%
	杯	56	125	26	1.3%	1.0%	0.5%
	鉢	17	0	7	0.4%	0.0%	0.1%
	その他	8	0	6	0.2%	0.0%	0.1%
土師器計		1363	7194	2915	31.2%	55.6%	52.1%
須恵器	無台杯	451	2716	582	10.3%	21.0%	10.4%
	有台杯	359	2168	339	8.2%	16.8%	6.1%
	杯	1194	0	879	27.3%	0.0%	15.7%
	杯蓋	840	0	456	19.2%	0.0%	8.2%
	鉢	2	31	21	0.0%	0.2%	0.4%
須恵器計		2846	4915	2277	65.1%	38.0%	40.7%
黒色土器	無台椀	166	664	364	3.8%	5.1%	6.5%
	有台椀	0	169	35	0.0%	1.3%	0.6%
黒色土器計		166	833	399	3.8%	6.4%	7.1%
総計		4375	12942	5591	100.0%	100.0%	100.0%

SB1　食膳具構成比率

種別	器種	口縁部残存率	底部残存率	破片数	比率（口縁残存率）	比率（底部残存率）	比率（破片数）
土師器	無台椀	37	164	27	31.9%	66.4%	37.5%
	無台杯	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	杯	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	鉢	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	その他	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
土師器計		37	164	27	31.9%	66.4%	37.5%
須恵器	無台杯	19	44	10	16.4%	17.8%	13.9%
	有台杯	9	39	5	7.8%	15.8%	6.9%
	杯	14	0	13	12.1%	0.0%	18.1%
	杯蓋	27	0	10	23.3%	0.0%	13.9%
	鉢	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
須恵器計		69	83	38	59.5%	33.6%	52.8%
黒色土器	無台椀	10	0	7	8.6%	0.0%	9.7%
	有台椀	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
黒色土器計		10	0	7	8.6%	0.0%	9.7%
食膳具計		116	247	72	100.0%	100.0%	100.0%

SI31　食膳具構成比率

種別	器種	口縁部残存率	底部残存率	破片数	比率（口縁残存率）	比率（底部残存率）	比率（破片数）
土師器	無台椀	13	23	36	10.7%	19.2%	39.1%
	無台杯	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	杯	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	鉢	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	その他	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
土師器計		13	23	36	10.7%	19.2%	39.1%
須恵器	無台杯	17	40	8	13.9%	33.3%	8.7%
	有台杯	15	57	13	12.3%	47.5%	14.1%
	杯	38	0	17	31.1%	0.0%	18.5%
	杯蓋	39	0	17	32.0%	0.0%	18.5%
	鉢	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
須恵器計		109	97	55	89.3%	80.8%	59.8%
黒色土器	無台椀	0	0	1	0.0%	0.0%	1.1%
	有台椀	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
黒色土器計		0	0	1	0.0%	0.0%	1.1%
総計		122	120	92	100.0%	100.0%	100.0%

SI394　食膳具構成比率

種別	器種	口縁部残存率	底部残存率	破片数	比率（口縁残存率）	比率（底部残存率）	比率（破片数）
土師器	無台椀	33	110	54	30.8%	44.9%	63.5%
	無台杯	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	杯	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	鉢	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	その他	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
土師器計		33	110	54	30.8%	44.9%	63.5%
須恵器	無台杯	53	99	9	49.5%	40.4%	10.6%
	有台杯	0	36	9	0.0%	14.7%	10.6%
	杯	19	0	9	17.8%	0.0%	10.6%
	杯蓋	2	0	4	1.9%	0.0%	4.7%
	鉢	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
須恵器計		74	135	31	69.2%	55.1%	36.5%
黒色土器	無台椀	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	有台椀	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
黒色土器計		0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
総計		107	245	85	100.0%	100.0%	100.0%

が土師器よりも多く、土師器の約２倍である。遺構別にみると、SI31は須恵器が89.3％と圧倒的に多く、土師器は10.7％とわずかであり、黒色土器は体部片が１片出土しているにすぎない。SB1・SI394も土師器よりも須恵器の方が多い。一方、SK722では須恵器が8.8％とわずかであり、土師器の比率が73.5％と高い。また黒色土器の比率も他より若干高い。

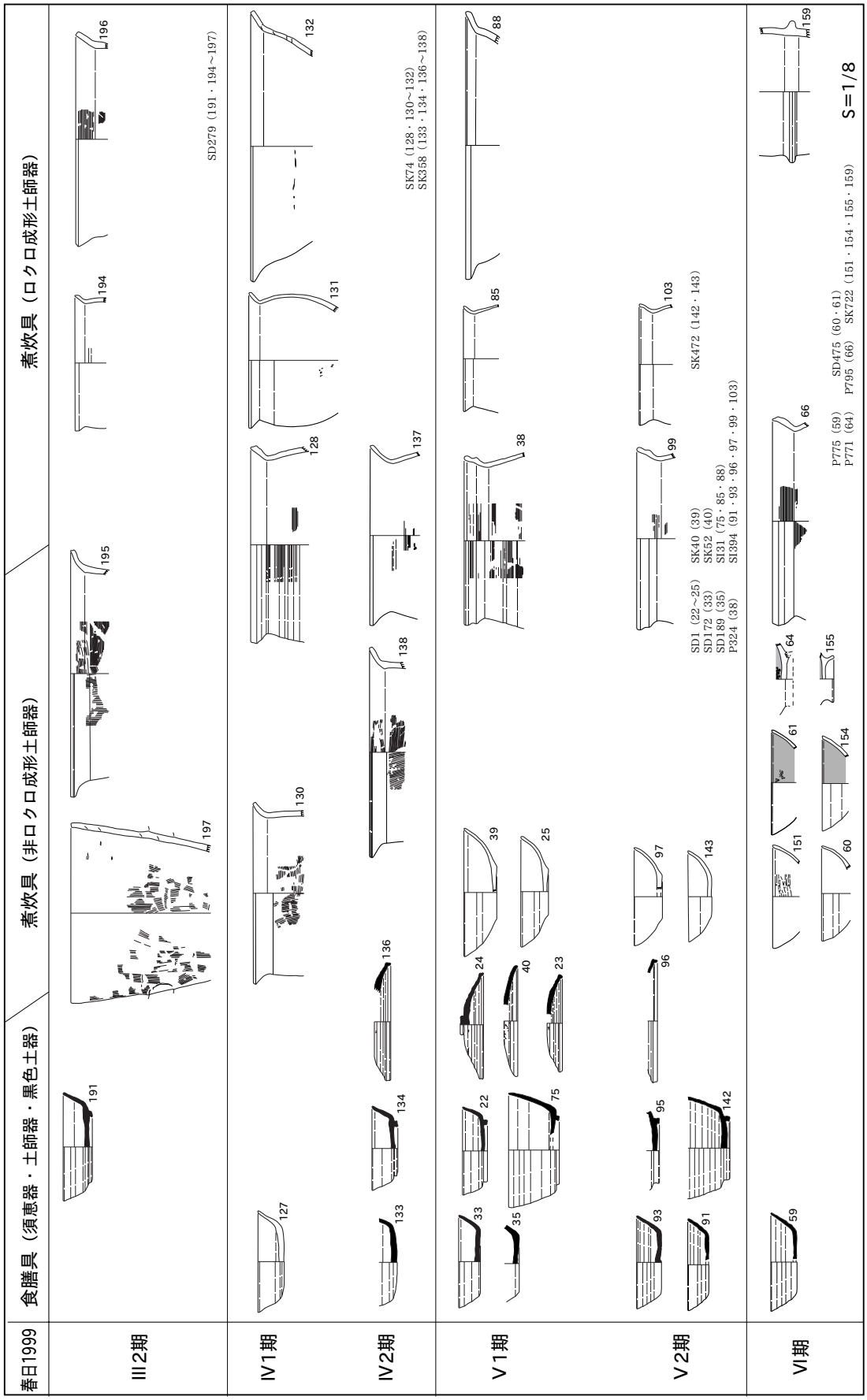
越後においては８世紀前半の段階で食膳具・貯蔵具が須恵器、煮炊具が土師器というあり方が明瞭であるが、９世紀後半には食膳具における須恵器と土師器の比率は逆転する［坂井1988］という流れがある。

SK722　食膳具構成比率

種別	器種	口縁部残存率	底部残存率	破片数	比率（口縁残存率）	比率（底部残存率）	比率（破片数）
土師器	無台椀	25	52	17	73.5%	68.4%	77.3%
	無台杯	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	杯	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	鉢	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	その他	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
土師器計		25	52	17	73.5%	68.4%	77.3%
須恵器	無台杯	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	有台杯	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	杯	3	0	1	8.8%	0.0%	4.5%
	杯蓋	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
	鉢	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
須恵器計		3	0	1	8.8%	0.0%	4.5%
黒色土器	無台椀	6	0	3	17.6%	0.0%	13.6%
	有台椀	0	24	1	0.0%	31.6%	4.5%
黒色土器計		6	24	4	17.6%	31.6%	18.2%
総計		34	76	22	100.0%	100.0%	100.0%

第６表　食膳具構成比率

SI31・SB1・SI394はⅤ期を中心とする時期（９世紀前半）の遺構であり、食膳具の構成比率は土師器よりも須恵器が多い。SK722はⅥ期（９世紀後半）の遺構であり、食膳具に占める土師器の比率は７割と大きく増加し、須恵器を凌駕する。



第13図　狐宮遺跡土器変遷図

2）編年的位置付け

ここでは本遺跡出土土器の編年的位置付けについて食膳具と煮炊具を中心に概観する（第13図）。

古代の土器で最も古相を呈するのは、SD279から出土した土器である。その中の須恵器有台杯（191）は口径14.4cm、体部が外傾し高台が外側に踏ん張るタイプで、８世紀前葉に位置付ける上越市今池遺跡Ⅰ期SK391の資料に類似する。煮炊具では長甕、甑、鍋がある。長甕はロクロ成形のものも見られるが、非ロクロ成形のものが主体を占める。また、甑（197）は古墳時代からの伝統的な器種である。したがって、SD279は８世紀前葉に位置づけられ、春日編年Ⅲ２期に相当すると考えられる。当期は包含層資料中の須恵器有台杯（265・266）等もあるが量的には少ない。

続くSK74は須恵器食膳具を出土していないが、口径13.6cmの土師器杯（127）が出土している。煮炊具では非ロクロ成形のものが残るが、ロクロ成形のものがⅢ期よりも増加する。土師器杯の形態、煮炊具の状況から春日編年Ⅳ１期（8世紀中から後葉）に位置付けた。

SK358は在地で生産された須恵器食膳具が定量存在し、煮炊具は依然として非ロクロ成形の煮炊具が存在することから春日編年Ⅳ２期（9世紀初頭）に相当すると考えられる。Ⅳ期の土器も量的には少ない。

続くⅤ～Ⅵ期は遺物量が最も多く、本遺跡の主体時期である。

Ⅴ１期（9世紀前葉）は、SB1・SB2の柱穴や溝・SI31から出土した土器が相当する。食膳具は在地産の須恵器が主体を占めるが、佐渡小泊産のもの（33・35）が流入している。形態的には、須恵器杯蓋はⅡ類・Ⅲ類が多くなり、23・24・81のように端部の屈曲が短いものや、40・78のように屈曲が特に短く端部は丸いものなど、新しい要素をもつものが確認できる。Ⅳ期に比べて須恵器食膳具は小型化が進み、器壁が薄いものが多くなる（21・22・76・77など）。また、土師器椀（25・39）が組成に含まれるようになる。煮炊具は非ロクロ成形のものが姿を消し、ロクロ成形のものが主体となる。

Ⅴ２期（9世紀中葉）に比定されるのはSI394・SK472から出土した土器である。須恵器食膳具は佐渡小泊窯産のものが定量存在し、在地産のものは減少する傾向にある。土師器無台椀はⅤ１期に比べて縮小し深身になっている（97・143）。

Ⅵ期（9世紀後葉）はSB9・SB10の柱穴や溝・SK722から出土した土器が挙げられる。食膳具は須恵器が減少し、土師器椀が主体を占め、黒色土器も定量存在する。須恵器食膳具は在地産が見られなくなり、佐渡小泊窯産（59）のみとなる。

次のⅦ期（10世紀）は遺物が出土していない。古代では、Ⅲ２期（8世紀前葉）からⅥ期（9世紀後葉）まで継続して営まれ、Ⅶ期（10世紀）に廃絶したと思われる。

3　総　　括

古代の遺構は、掘立柱建物12棟、竪穴建物２棟、井戸５基、畝状小溝群（畑跡）８か所、土坑、溝など多数検出し、沖積微高地上に営まれた古代の集落であることが明らかになった。時期は、出土土器から８世紀前葉から９世紀後葉で、主体は９世紀前葉から後葉である。以下では、掘立柱建物の主軸方向の違い、切り合い関係古代の遺構について整理していく。

遺構の分布は、SB1、SB2、SB5、SB8～10、SB11～13の建物周辺の５か所に集中する。各建物周辺では、SB1、SB2のような大型の掘立柱建物とそれに付随するSB5、SB7などの小型の掘立柱建物あ

るいはSI31、SI394の竪穴建物の構成で建物群を形成し、その周辺に畑跡が広がっている。次にSB1とSB2周辺の建物群の様相を細かく見ていく。

調査区北西端で検出したSB1周辺は、周囲を溝で囲っているSB1が主要な建物で、その東側に広がる畝状小溝１群が建物の主軸方向に近いことから畑跡と思われる。その畑跡の南側に建物構造を把握できなかったが柱穴が見られたので付属する小型の掘立柱建物が存在すると思われる。SB1から南にやや離れた位置にSI31と井戸側が検出した井戸SE116があるが、SB1との間にある空間が広場とも捉えられるが、SB1とSI31の主軸方向に異なるので別の建物群であろう。

次にSB2周辺を見ていくと、SB2は柱穴の大きさ、面積など今回検出した建物の中で最も大規模で、石製腰帯具の丸鞆が出土したことからもこの周辺の主要な建物である。これに付属する建物は、竪穴建物SI394である。これ以外に小規模な柱穴があることから小型の掘立柱建物も存在すると思われる。SB2の南側に広がる畝状小溝３群が建物と方向が近いので畑跡と考えられる。SB2は畝状小溝４群が重なっているが、切り合いから畝状小溝の方が新しいので建物廃絶後に周辺は畑跡に土地利用されている。

他の３か所でも上述したように大小の建物群、畑跡が見られる。今回調査した範囲の遺構の変遷は、前述の第Ⅶ章2Bですでに触れているが、９世紀前葉から中葉までは川跡SD84より北側にあるSB1、SB2周辺が活動域で、９世紀後葉は川跡より南側にあるSB8～10周辺に活動域が移っている。土地利用が川跡を間に北から南へ展開、移動していることが窺える。

建物群（住居）、畑跡（生産）のまとまりで検出される遺構の特色は、東方のやや離れた所に位置する三角田遺跡の上層の古代の遺構と同様で、この近辺の当該期の一般集落の姿といえる。また、狐宮、三角田遺跡は同一沿線上にあるが遺跡は連続しておらず、当時の村の単位を示している可能性がある。

要　　約

1 狐宮遺跡は、新潟県上越市大字門田新田字江向147番地ほかに所在する。調査区は戸野目川右岸の自然堤防上に立地し、現況は水田であった。標高は7.8m～8.0mである。

2 発掘調査は上越三和道路の建設に伴い、平成17年4月11日～11月18日にかけて実施した。調査面積は、11,200m^{2}である。

3 調査の結果、縄文時代、古墳時代、古代、中世、近世の遺構・遺物が検出した。

4 縄文時代は、少量であるが後～晩期の土器が出土し、在地系のほかに信州系、北陸系、東北系など多方面の型式が確認された。また、石器では草創期の所産と考えられる尖頭器が出土し、遺跡が立地する高田面の形成年代を考える上で貴重な資料となった。

5 古墳時代は、底面に木杭を据えた遺構が3基検出し、陥し穴と考えた。時期は遺物が出土しなかったので詳細な決定はできなかったが、木杭を^{14}C年代測定にかけたところ古墳時代中期という結果を得た。

6 古代はこの遺跡の主体となる時期で、掘立柱建物12棟、竪穴建物2棟、井戸5基、土坑・ピット487基、畝状小溝8群、溝132条を検出した。時期は8世紀前葉～9世紀後葉までで、主体は9世紀前葉～9世紀後葉である。掘立柱建物は東西棟が多いが、その中でSB2は規模も大きく、周辺で石製腰帯具の丸鞆が出土したことから中心的建物と考えた。井戸SE116は曲物の底板の上に横板を方形に組んだ井戸側が据えられていた。

7 中・近世は珠洲・肥前系陶磁器、越中瀬戸などが出土した。中国の渡来銭を6枚出土した土坑（SK120）を1基検出した。地鎮をおこなったかもしくは墓の可能性が高い。

引 用 文 献

荒井健治ほか 1999　『府中市埋蔵文化財調査報告書 第16集 武蔵国府関連遺跡調査報告16』　府中市教育委員会・府中市遺跡調査会

荒川隆史・加藤　学　1999　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 和泉A遺跡』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

池田嘉一　1967　「第Ⅱ章 中江用水の開発」『中江用水史』　中江土地改良区

宇野隆夫　1982　「井戸考」『史林』第65巻第5号　史学研究会

宇野隆夫　1992　「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集　国立歴史民俗博物館

江口友子・寺崎裕助　2002　「八反田遺跡」『新潟県埋蔵文化財報告書第110集 八反田遺跡・高畑遺跡』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

大島通夫　2006　「第Ⅱ章 2 歴史的環境」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第154集 三角田遺跡』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

大橋康二　1989　『肥前陶磁』　考古学ライブラリ55　ニューサイエンス社

小笠原好彦・西　弘海・吉田恵二　1976　「第Ⅳ章 遺物 3 土器」『奈良国立文化財研究所学報第26冊 平城宮発掘調査報告Ⅶ』　奈良国立文化財研究所

小笠原好彦・西　弘海　1976　「第Ⅴ章 考察 2 土器」『奈良国立文化財研究所学報第26冊 平城宮発掘調査報告Ⅶ』　奈良国立文化財研究所

岡本郁栄　1999　「新潟県の地形外観」『新潟県の考古学』　新潟県考古学会編　高志書院

岡本郁栄ほか 2003　「第二編通史　原始・古代　縄文時代の遺跡・遺物」『板倉町史　資料編』　新潟県板倉町

尾崎高宏　2002　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第111集 上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅷ 黒田古墳群』

新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
春日真実　1999　「第４章 古代 第２節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会編 高志書院
小池邦明・本間桂吉　1995　「第４章 検出した遺構 第１節 平安時代 第４項 井戸」『新潟市小丸山遺跡 直り山団地建設事業用地内発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
小島幸雄・中村美恵子　1984　『新潟県上越市本長者原廃寺確認調査概要』 新潟県上越市
小島幸雄　1990　『中島廻り遺跡』　新潟県上越市教育委員会
坂井秀弥ほか 1984　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 上新バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ 今池・下新町・子安遺跡』新潟県教育委員会
坂井秀弥　1986　「第Ⅲ章 遺跡３遺構各説Ａ平安時代」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第40集 北陸自動車道上越市春日木田地区発掘調査報告書Ⅱ　一之口遺跡西地区』新潟県教育委員会
坂井秀弥　1988　「越後・佐渡における古代土器の生産と流通」『北陸の古代土器研究の現状と課題　報告編』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
笹澤正史ほか 1997　『保坂遺跡』新潟県上越市教育委員会
笹澤正史・小島幸雄　1999　『津倉田遺跡』新潟県上越市教育委員会
笹澤正史　2003　「第５章 古代 第２節 遺跡と遺物10越前遺跡」『上越市史 資料編２　考古』新潟県上越市
「第５章古代 第２節 遺跡と遺物13子安遺跡」『上越市史 資料編２　考古』新潟県上越市
佐藤宏之　2000　『北方狩猟民の民族考古学』北海道出版企画センター
沢田　敦ほか 2006　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第154集 三角田遺跡』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
鈴木俊成・寺崎裕助・肥田野弘之　1985　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第38集 北陸自動車道上越市春日・木田地区発掘報告書Ⅰ　57年度発掘調査・池田遺跡』 新潟県教育委員会
鈴木雄三　1987　『郡山東部ニュータウン関連発掘調査報告書１ 赤沼遺跡』福島県郡山市教育委員会
高田平原団体研究グループ　1962　「高田平原の沖積層について―高田平原の団体研究・そのＶ―」『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』第７号　新潟大学教育学部高田分校
高田平原団体研究グループ　1981　「高田平野の第四系と形成史―新潟県の第四系・そのＸＸⅣ―」『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』第25号　新潟大学教育学部高田分校
高野武男　2002　「第１章地形・地質　第２節上越市周辺地域の地形１沖積平野の地形」『上越市史　資料編１自然』新潟県上越市
高橋与右エ門　1986　「Ⅳ縄文時代の遺構」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第96集　水神遺跡発掘調査報告書』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
田中圭一・六本木健志　2001　『上越市史　別編３　寺社資料一』新潟県上越市
田村壮一　1985　「海上Ⅱ遺跡」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第90集 海上Ⅰ・海上Ⅱ・大久保Ⅰ遺跡発掘調査報告書』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
田村壮一　1987　「陥し穴状遺構の形態と時期について」『紀要Ⅶ』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
立木宏明　2003　「山屋敷Ⅰ遺跡　縄文時代草創期の石器」『上越市史 資料編２考古』新潟県上越市
寺崎裕助　2003　「第２章縄文時代第１節　時代概説」『上越市史資料編２考古』新潟県上越市
戸根与八郎ほか　1992　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第28集　木崎山遺跡』 新潟県教育委員会
土橋由里子　2005　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第151集　上信越自動車道関係発掘調査報告書ⅩⅣ　蛇谷遺跡・炭山遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
永井いずみ　2005　「新潟県内出土の台付横瓶」『新潟考古学談話会会報』第30号　新潟考古学談話会
秦　繁治　1998　「Ｖ東部地区の遺構と遺物１遺構３）井戸」『榎井Ａ遺跡』新潟県頸城村教育委員会
御堂島正　1991　「石鏃と有舌尖頭器の衝撃剥離」『古代』92　早稲田大学考古学研究会
山崎忠良ほか 2003　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第134集　下割遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
吉井雅勇　2002　『荒川町埋蔵文化財発掘調査報告　第８集　鴨侍遺跡』新潟県荒川町教育委員会
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』吉川弘文館
渡邊朋和　1999　「第２章 縄文時代 第２節 縄文土器 第６項 晩期 ２編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編　高志書院
渡邊裕之　2004　「新潟県における縄文晩期中葉の様相」『第17回縄文セミナー　晩期中葉の再検討』縄文セミナーの会

遺構計測表（1）

掘立柱建物

SB1

位置	2A	桁行（m）		6		梁間（m）	4.8	床面積（㎡）	28.8
年代	V期			構造	側柱、3間×2間			方位	N-7°-E
柱穴	形状	長さ（cm）	幅（cm）	深さ（cm）	柱根・痕	柱穴	柱穴間隔（m）	柱穴	柱穴間隔（m）
P161	楕円形	84	72	57.6	痕	P161-P163	1.92		
P163	方形	72	64	37.5	痕	P163-P516	2.14		
P516	楕円形	40	32	28.5	痕	P516-P523	1.72		
P523	楕円形	116	84	33.4	痕	P523-P522	2.4		
P522	楕円形	52	40	15.4	痕	P522-P521	2.26		
P521	方形	56	52	28.6	痕	P521-P520	1.76		
P520	方形	48	44	20	痕	P520-P519	2.06		
P519	楕円形	44	40	17.9	痕	P519-P518	2.16	備考	
P518	楕円形	54	44	22.9	痕	P518-P517	2.48	SD1　SD172	
P517	方形	60	50	39.8	痕	P517-P161	2.34	SD189	

SB2

位置	6A	桁行（m）		13		梁間（m）	4.9	床面積（㎡）	63.7
年代	V期	構造	側柱、5間×2間、間仕切り（2間×1間）					方位	N-4°-E
柱穴	形状	長さ（cm）	幅（cm）	深さ（cm）	柱根・痕	柱穴	柱穴間隔（m）	柱穴	柱穴間隔（m）
SK683	隅丸方形	74	65	50.3	痕	SK683-SK36	2.3	SK59-SK60	2.54
SK36	隅丸方形	94	92	62.2	痕	SK36-SK35	2.34		
SK35	隅丸方形	100	98	61.5	痕	SK35-SK34	2.24		
SK34	隅丸方形	93	90	57.7	痕	SK34-SK55	2.34		
SK55	隅丸方形	88	80	54.8	痕	SK55-SK40	1.94		
SK40	円形	64	60	59.3	痕	SK40-P330	2.62		
P330	楕円形	90	64	63.7	痕	P330-P323	2.52		
P323	隅丸方形	80	74	40.7	痕	P323-P324	2.35		
P324	隅丸方形	62	60	53.1	痕	P324-SK60	2.68		
SK60	円形	52	50	53.3	痕	SK60-SK66	1.88		
SK66	隅丸方形	130	80	50.4	痕	SK66-SK52	1.92		
SK52	隅丸方形	93	84	48.4	痕	SK52-SK67	2.34		
SK67	隅丸方形	154	80	67.1	痕	SK67-SK33	2.2		
SK33	隅丸方形	81	62	69	痕	SK33-SK58	2.3		
SK58	隅丸方形	91	72	70	痕	SK58-SK684	2.48	備考	
SK684	隅丸方形	67	68	73.2	痕	SK684-SK683	2.44	SK327　SD61	
SK59	円形	50	43	37.9	痕	SK59-SK40	2.46	畝状小溝4群＞	

SB4

位置	6A	桁行（m）		4.03		梁間（m）	2.76	床面積（㎡）	11.12
年代				構造	側柱、1間×2間			方位	N-1°-E
柱穴	形状	長さ（cm）	幅（cm）	深さ（cm）	柱根・痕	柱穴	柱穴間隔（m）	柱穴	柱穴間隔（m）
P328	円形	36	33	21.4	無	P329-P39	4.03		
P39	円形	41	28	41.6	痕	P39-P49	1.39		
P49	楕円形	47	33	39.3	痕	P49-P51	1.18		
P51	円形	32	29	28.5	痕	P51-P20	3.98	備考	
P20	円形	35	30	43.4	痕	P20-P321	1.44	畝状小溝4群＞	
P321	楕円形	38	33	49.6	痕	P321-P328	1.32		

SB5

位置	6E	桁行（m）		3.5		梁間（m）	2.8	床面積（㎡）	9.8
年代				構造	側柱、2間×2間			方位	N-0°-W
柱穴	形状	長さ（cm）	幅（cm）	深さ（cm）	柱根・根	柱穴	柱穴間隔（m）	柱穴	柱穴間隔（m）
P407	方形	40	37	25.5	痕	P407-P414	1.66		
P414	楕円形	32	29	16	痕	P413-P412	1.6		
P413	楕円形	44	37	20.2	痕	P412-P411	1.22		
P412	方形	32	27	32.6	痕	P411-P410	1.68		
P411	楕円形	44	40	20.4	痕	P414-P413	1.9	備考	
P410	円形	26	25	20.1	痕	P410-P408	176		
P408	円形	40	40	20.7	痕	P408-P407	2.8		

SB6

位置	7F	桁行（m）				梁間（m）		床面積（㎡）	
年代				構造	側柱、1間×2間以上			方位	
柱穴	形状	長さ（cm）	幅（cm）	深さ（cm）	柱根・痕	柱穴	柱穴間隔（m）	柱穴	柱穴間隔（m）
P421	円形	36	32	23.2	痕	P421-P422	1.16		
P422	円形	36	32	33.9	痕	P422-P423	1.64	備考	
P423	円形	38	30	37.4	痕	P423-P429	3.28		
P429	楕円形	76	44	47.8	痕				

SB7

位置	7H	桁行（m）				梁間（m）		床面積（㎡）	
年代	V～VI期			構造	側柱、1間×2間以上			方位	
柱穴	形状	長さ（cm）	幅（cm）	深さ（cm）	柱根・痕	柱穴	柱穴間隔（m）	柱穴	柱穴間隔（m）
P728	楕円形	58	46	75.5	痕	P728-P729	2.32		
P729	楕円形	60	44	72.8	根	P729-P730	2.08	備考	
P730	楕円形	92	64	88.9	痕	P730-P737	2.72		
P737	方形	120	110	91.3	痕				

SB8

位置	6J	桁行（m）		3.74		梁間（m）	3.74	床面積（㎡）	13.99
年代	V～VI期			構造	側柱、2間×2間			方位	N-11°-E
柱穴	形状	長さ（cm）	幅（cm）	深さ（cm）	柱根・痕	柱穴	柱穴間隔（m）	柱穴	柱穴間隔（m）
P888	円形	34	34	51.6	根	P888-P889	1.76		
P889	楕円形	36	28	29.2	痕	P889-P788	2		
P788	円形	46	42	56.7	痕	P788-P890	3.74		
P890	方形	56	40	29.1	痕	P890-P891	3.74	備考	
P891	円形	46	44	69	痕	P891-P892	2.2	SD476　SD747	
P892	円形	32	30	76.5	根	P892-P888	1.5	SD800	

SB9

位置	7I	桁行（m）		6.42		梁間（m）	4.8	床面積（㎡）	30.81
年代	VI			構造	側柱、3間×2間			方位	N-9°-E
柱穴	形状	長さ（cm）	幅（cm）	深さ（cm）	柱根・痕	柱穴	柱穴間隔（m）	柱穴	柱穴間隔（m）
P782	楕円形	46	36	27.4	痕	P782-P781	1.84		
P781	楕円形	64	44	41.6	根	P781-P780	2.5		
P780	楕円形	64	58	76.8	痕	P780-P775	2.44		
P775	楕円形	54	48	43.8	痕	P775-P793	4.8		
P793	楕円形	50	42	29.5	痕	P793-P792	2.43		
P792	円形	48	46	20.4	痕	P792-P790	4	備考	
P790	楕円形	42	35	39.6	痕	P790-P783	2.42	SD475　SD743	
P783	楕円形	30	26	21	痕	P783-P782	2.26		

SB10

位置	7I	桁行（m）		7		梁間（m）	4.84	床面積（㎡）	33.88
年代	VI			構造	側柱、3間×1間			方位	N-8°-E
柱穴	形状	長さ（cm）	幅（cm）	深さ（cm）	柱根・痕	柱穴	柱穴間隔（m）	柱穴	柱穴間隔（m）
P770	方形	56	50	18.4	無	P770-P798	2.54		
P798	不整形	54	42	28.7	痕	P798-P796	2.05		
P796	円形	52	48	64.9	痕	P796-P776	2.08		
P776	円形	63	60	43.4	痕	P776-P795	4.84		
P795	円形	56	54	14.1	痕	P795-P794	2.3		
P794	円形	62	58	41.1	痕	P794-P771	2.26	備考	
P771	楕円形	70	61	37.2	痕	P771-P791	2.49	SD475　SD743	
P791	方形	72	69	47.3	痕	P791-P770	4.84		

SB11

位置	10F	桁行（m）		6.2		梁間（m）	3.9	床面積（㎡）	24.18
年代	VI期	構造	側柱、3間×2間、間仕切り2間×1間					方位	N-5°-W
柱穴	形状	長さ（cm）	幅（cm）	深さ（cm）	柱根・痕	柱穴	柱穴間隔（m）	柱穴	柱穴間隔（m）
P528	円形	38	34	43.8	痕	P528-P531	2.14	P535-P534	1.9
P531	円形	43	36	45.8	痕	P531-P533	2.34		
P533	円形	42	36	34.7	痕	P533-P556	1.76		
P556	楕円形	26	17	37	痕	P556-P555	1.9		
P555	方形	32	23	56.6	痕	P555-P538	2		
P538	楕円形	40	32	27.7	痕	P538-P534	1.88		
P534	円形	37	37	42.4	痕	P534-P819	1.18		
P819	方形	40	36	41.2	痕	P819-P532	1.64		
P532	楕円形	66	35	40	痕	P532-P530	1.5		
P530	円形	46	38	44.5	痕	P530-P529	2	備考	
P529	楕円形	88	42	53.1	痕	P529-P528	1.9		
P535	楕円形	44	37	55.1	痕	P535-P533	1.9		

遺構計測表（2）

SB12

位置	13C	桁行（m）		4.9		梁間（m）	3.55	床面積（㎡）	17.4
年代	V期？			構造	総柱、2間以上×2間			方位	N-0°-W
柱穴	形状	長さ（cm）	幅（cm）	深さ（cm）	柱根・痕	柱穴	柱穴間隔（m）	柱穴	柱穴間隔（m）
P984	不整形		52	56.5	痕	P984-P996	1.7	P715-P708	2.46
P996	不整形	79	72		痕	P996-SK515	1.77		
SK515	楕円形	62	53	34.2	痕	SK515-P706	2.46		
P706	楕円形	44	36	45.3	痕	P706-P707	2.44		
P707	方形	68	68	59.1	痕	P707-P708	1.7		
P708	円形	66	62	54.3	痕	P708-P711	1.86	備考	
P711	不整形	68	60	51.4	痕	P711-P984	4.9	SD512　SD513	
P715	方形	40	30	14.9	痕	P715-P996	2.4	SB13＞	

SB13

位置	12D	桁行（m）		5.9		梁間（m）	4.04	床面積（㎡）	23.84
年代	V2～Ⅵ	構造	片面庇付側柱、3間×2間、間仕切り2間×1間					方位	N-3°-E
柱穴	形状	長さ（cm）	幅（cm）	深さ（cm）	柱根・痕	柱穴	柱穴間隔（m）	柱穴	柱穴間隔（m）
P974	円形	47		53.6	痕	P974-P963	1.82	P988-P981	2
P963	楕円形	41	38	36.5	痕	P963-P1092	1.94		
P1092	楕円形	55		18.6	無	P1092-P982	2.14		
P982	方形	33	30	32.2	痕	P982-P716	1.97		
P716	楕円形	34	26	50.6	痕	P716-P714	2.06		
P714	楕円形	56	36	34.6	痕	P714-P717	1.82		
P717	楕円形	46	26	30.6	痕	P717-P962	1.99		
P962	方形	30	28	31.4	痕	P962-P968	1.68		
P968	不整形	54	44	23.2	無	P968-P971	1.88		
P971	円形	30	27	20.8	無	P971-P974	1.96		
P720	不整形	53	22	32.5	痕	P720-P963	1.86		
P983	楕円形	64		37.8	根	P720-P962	1.75	備考	
P988	方形	42	40	36.4	痕	P982-P983	0.8	SD514　SD980	
P981	楕円形	40		20.2	痕	P982-P988	1.8	SB12＜	

竪穴建物（SI）

遺構名	グリッド	平面形	断面形	長軸（m）	短軸（m）	深さ（cm）	時期	切り合い関係
31	3D・4D	隅丸方形	弧状	3.1	2.7	26	古代	―
394	8A・8B	方形	台形状	4.66	3.84	28	古代	畝状小溝5群＜

土坑（SK）

遺構名	グリッド	平面形	断面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	時期	切り合い関係
449	4H20･25　5H21･26	方形状	台形状	324	265	66	縄文	―
458	5I17	長方形	台形状	90	56	12	縄文	―
459	5I12・17	長方形	U字状	104	64	41	縄文	―
74	7B3	楕円	台形状	174	76	15	古代	―
106	6E6・7	楕円	弧状	344	184	34	古代	―
298	5B23・5C3	長楕円	弧状	170	68	26	古代	―
472	8I16	楕円	弧状	184	128	12	古代	―
526	10D6	円	弧状	173	176	50	古代	―
593	9C2・7	長楕円	弧状	78	53	6.5	古代	SD604･SD605＞
721	8I11	円	弧状	108	88	12	古代	SK722＜
722	7I15	円	台形状	138	140	28	古代	SK721＞
779	8J16	方形？	弧状	116	92	20	古代	―
972	12D18・19	長楕円	弧状	106	68	8	古代	―
120	5E21	方形？	弧状	295	―	76	中世	―

井戸（SE）

遺構名	グリッド	平面形	断面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	形態	時期	切り合い関係
116	4D1・2	不整方形	袋状	188	168	172	木組み	古代	―
378	8B12	楕円	U字状	92	78	124	素堀り	古代	―
554	11F25	円	U字状	84	84	122	素堀り	古代	―
757	9J17・18	楕円	漏斗状	170	124	112	素堀り	古代	―
784	7J19・24	楕円	漏斗状	78	66	110	素堀り	古代	―

溝（SD）

遺構名	グリッド	長さ（m）	幅（cm）	深さ（cm）	断面形	方　位	切り合い関係	備考
480	6H18・19・20	2.8以上	51	21	弧状	N-87°W	―	
732	6H17・18・19・20	2.8以上	49	10	弧状	N-87°W	―	

畝状小溝（SD）

群	遺　構　名	グリッド	長さ（m）	幅（cm）	深さ（cm）	断面形	方　位	切り合い関係
1	226・227・229・230・232・233・838	3A・4A	6.52～8.76	28～60	8～13	弧状	N-84°E	SD172＞
2	223・224・225・228・295	3B・4B・4C	2.36～8.76	28～60	8～13	弧状	N-89°E	
3	2・3・4・5・6・336・338	6B・6C	0.68～6.08	16～36	4～6	弧状	N-87°E	
4	7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17・18・19・357・637	6A・6B	1.4～11.2	14～68	4～8	弧状	N-70°E	SB4＜
5	42・43・44・46・47・53・54・64・69・76・355・356・399・400	7A・8A	2.24～22.13	22～90	5～12	弧状	N-86°W	SI394＞
6	570・594・607・608・609・612・613・614・615・616・617・618・619・620・621・644	9B	1～8.66	8～63	4～13	弧状	N-87°E	SX660＜
7	752・762・763・764・765・766・767・768・769・882・883・884・885・886・952・953・954・959・1049・1050・1057・1062	8I・9I	2.76～10.16	10～84	3～24	弧状	N-74°W	―
8	1075・1076・1077・1078・1079・1080・1081・1082・1085・1086・1087・1088	10J	1.52～5.66	20～44	3～11	弧状	N-50°W	SD1082＜SX760

性格不明（SX）

遺構名	グリッド	平面形	断面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	時期	切り合い関係
660	8B18	楕円	台形状	312	270	24	古代	畝状小溝第6群＞
438	9G7	隅丸方形	弧状	116	104	9		―

川跡（SD）

遺構名	グリッド	長さ（m）	幅（m）	深さ（cm）	方　位	備　考
84	―	119.2以上	1.46～6.71	7～58	N-83°E～N-16°W～N-2°W	SD104＞

近世の遺構（溝：SD）

遺構名	グリッド	長さ（m）	幅（cm）	深さ（cm）	断面形	方　位	切り合い関係	備　考
240	2A～2E	34.8以上	408	42	不定形	N-5°E	―	
178	1B～5B	46.5以上	202	24	弧状	N-87°W	SB1＜	SD104と直交
360	7A～11A	37.5以上	62	12	弧状	N-85°W	―	
104	5A～5G	49.5以上	76	10	弧状	N-17°E	SD84＜	
745	6H～6J	19.25以上	69	8以上	弧状	N-15°E	―	

陥し穴（SK）

遺構名	グリッド	平面形	断面形	上端長軸（cm）	下端長軸（cm）	上端短軸（cm）	下端短軸（cm）	深さ（cm）	時期	備　考
341	7A14	隅丸長方形	U字状	135	110	32	21	76	古墳	長軸南端に杭残存
258	5B13・14	楕円	漏斗状	202	138	157	36	88	古墳	遺構上半攪乱、長軸両端に杭残存
303	3C11	隅丸長方形	U字状	148	120	76	48	78	古墳	長軸北端に杭残存

縄文土器観察表

No.	出土地点			種別	器種	法量（cm）			色調	焼成	胎土	文様・調整			備考
	位置	遺構No.	層位			口径	底径	器高				外面	内面	底部	
1	5B2・7	P267	1	縄文土器	深鉢				明褐灰	堅緻	粗雑	沈線，縄文			
2	4B10		Ⅲ	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙	堅緻	粗雑	円形刺突	ナデ		
3	5B2		Ⅲ	縄文土器	深鉢				橙	軟質	粗雑	円形刺突	ナデ		
4	5A16		Ⅲ	縄文土器	深鉢				灰白	堅緻	緻密	円形刺突			
5	5A22	SD178	1	縄文土器	深鉢	29.4			橙	堅緻	緻密	ミガキ	沈線，刺突，ミガキ		
6	4H25	SK449	17	縄文土器	深鉢				にぶい褐	軟質	緻密	磨消縄文			
7	5I11		Ⅲ	縄文土器	深鉢				明褐灰	堅緻	緻密	磨消縄文，刺突			
8	7A12	SD41	1	縄文土器	深鉢				褐	堅緻	緻密	ミガキ	ミガキ		
9	4H20	SK449	17	縄文土器	深鉢				明褐灰	軟質	粗雑	磨消縄文，刺突			10と同一
10	5H21		Ⅲ	縄文土器	深鉢				明褐灰	軟質	粗雑	刺突			9と同一
11	8A22	SI394	2	縄文土器	浅鉢				褐灰	堅緻	緻密	雲形文			
12	5I6		Ⅲ	縄文土器	深鉢				にぶい褐	堅緻	緻密	縄文			
13	5I11		Ⅲ	縄文土器	深鉢	11.3			にぶい褐	堅緻	粗雑	沈線	ナデ		
14	5I17	SK458	3	縄文土器	深鉢				灰褐	軟質	緻密	磨消縄文			
15	4A14，5A11		Ⅲ	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙	軟質	粗雑	円形刺突，沈線			16と同一
16	5B2		Ⅲ	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙	軟質	粗雑	円形刺突，沈線			15と同一
17	5I12，5J16		Ⅲ	縄文土器	深鉢		10.4		灰白	堅緻	緻密	ナデ	ナデ	網代痕	

石器観察表

No.	出土地点			器種	法量（cm）			重さ（g）	石材
	位置	遺構	層		長さ	幅	厚さ		
18	7E3		Ⅲ	有舌尖頭器	5.6	1.35	0.6	3.64	ガラス質安山岩
19	4I20		Ⅳ	尖頭器	(3.3)	0.4	0.4	(2.16)	ガラス質安山岩
20	18F6		Ⅵ	打製石斧	15.2	7.7	2.7	250.5	安山岩
334	4D19	SD84	1	砥石	8.2	3.5	4.07	96.8	凝灰岩
382	6H17	SD745	1	砥石	13.4	1.6	1.62	68.4	凝灰岩
383	2C7	SD240	1	砥石	11.5	10.8	1.1	99.7	凝灰岩
384	4C15		盛土	凹石	11.1	4.9	5.8	563.4	花崗岩
385	4C13		盛土	敲き石	8.2	8.6	5.1	302.1	花崗岩

瓦観察表

No.	出土地点			器種	法量（cm）			焼成	色調（外・内）	胎土	調整
	位置	遺構	層		長さ	幅	厚さ				
326	4C22			丸瓦			1.8	良	にぶい橙・黒褐		凸面ナデ，凹面布目，分割面取
327	4D10		Ⅲ	平瓦			3.0	良	灰・灰	白	凸面縄目叩き，凹面布目，側面面取り
328	8C17		Ⅲ	平瓦			3.55	良	灰・オリーブ灰	白	凸面縄目叩き，凹面ユビキ痕
329	10B3		Ⅲ	平瓦			3.5	普通	浅黄・浅黄	白	凸面縄目叩き，凹面？，側面面取

土製品観察表

No.	出土地点			器種	法量（cm）			平面形	調整
	位置	遺構	層		長さ	幅	厚さ		
330	5D6	SI31	1	土器片円盤	2.65	2.3	1.68	四角形	須恵器甕体部片側縁剥離
331	5D6	SI31	1	土器片円盤	2.38	2.32	1.3	円形	須恵器甕体部片側縁剥離

石製品観察表

No.	出土地点			器種	法量（cm）			重さ（g）	石材	色調	調整
	位置	遺構	層		縦幅	横幅	厚さ				
332	7B7		Ⅲ	石鈎丸鞆	2.4	3.67	0.65	11.10	粘板岩	黒	研磨，潜り穴
333	7I18		Ⅲ	石鈎丸鞆	2.24	3.4	0.6	9.1	粘板岩	黒	研磨，潜り穴

木製品観察表

No.	出土地点			種類	法量（cm）			樹種	木取り	備考
	位置	遺構No.	層位		長	幅	厚			
335	7I2	SB7-P729		柱根	52.1	11.8	11.5	シイ属	丸木	直径12.0cm
336	6J5	SB7-P892		柱根	37.0	9.0	8.3	キハダ	丸木	直径8.8cm
337	6J5	SB8-P888		柱根	47.1	16.0	5.5	スギ	分割材	断面長方形
338	7I25	SB9-P781		礎板	7.0	9.0	3.1	スギ	柾目	
339	11F12	SB11-P555		柱根	26.8	21.6	7.1	スギ	分割材	断面長方形
340	13D11	SB12-P711		礎板	26.2	11.0	2.8	スギ	板目	
341	12D3	SB13-P974		礎板	20.8	7.5	2.2	スギ	板目	
342	12D3	SB13-P974		礎板	16.3	8.7	5.5	スギ	柾目	
343	12D3	SB13-P974		礎板	16.7	6.9	5.3	スギ	柾目	
344	13C21	SB13-P983		柱根	45.2	18.9	15.6	スギ	分割材	
345	5B18	P244		柱根	34.2	10.9	5.1	カエデ属	半割材	
346	5A20	P294		杭	21.6	6.3	5.0	トネリコ属	分割材	
347	3C11	P305		柱根	27.4	13.2	11.9	クリ	丸木	直径12.6cm
348	7J7	P789		柱根	39.8	6.3	5.1	キハダ	分割材	
349	7I17	P926		柱根	19.7	5.3	3.5	カエデ属	分割材	
350	13C21	P987		板材	28.1	4.6	1.5	スギ	板目	礎板か
351	4D1	SE116		井戸部材	66.7	43.5	2.2	スギ	板目	曲物底板の転用
352	4D1	SE116		井戸側	64.2	14.2	2.8		板目	南側1段目
353	4D1	SE116		井戸側	64.7	12.0	3.1		板目	西側1段目
354	4D1	SE116		井戸側	54.2	12.9	2.7	アスナロ属	柾目	北側1段目。曲物底板の転用
355	4D1	SE116		井戸側	65.4	18.8	2.6		板目	北側2段目
356	4D1	SE116		井戸側	65.0	17.5	3.5		板目	北側3段目
357	4D1	SE116		井戸側	66.7	22.1	2.8		板目	北側4段目
358	4D1	SE116		井戸側	41.4	12.0	1.3	アスナロ属	柾目	北側5段目。曲物の転用
359	4D1	SE116		井戸側	69.0	19.0	2.3	スギ	板目	東側1段目
360	4D1	SE116		井戸側	67.0	19.0	1.6		板目	東側2段目
361	4D1	SE116		井戸側	67.4	19.5	3.0		板目	東側3段目
362	4D1	SE116		井戸側	66.3	21.4	2.6		板目	東側4段目
363	4D1	SE116		井戸側	66.1	7.0	1.5		板目	東側5段目
364	5F5		Ⅲ	笹状木製品	20.8	0.7	0.5	モミ属	板目	
365	9A9		Ⅳ	曲物底板	9.8	4.8	0.7	アスナロ属	板目	直径12.0cm。一部炭化
366	9A14		Ⅳ	曲物底板	8.9	2.3	0.5	アスナロ属	柾目	直径9.2cm
367	5E6		Ⅲ	用途不明品	2.1	4.1	0.7	アスナロ属	柾目	中央の穴は炭化
372	7A14	SK341		杭	50.3	9.5	7.6	タブノキ属	丸木	陥し穴の杭。直径6.9cm
373	5B8	SK258		杭	56.3	11.6	9.8	シロダモ属	丸木	陥し穴の南端杭。直径10.9cm
374	5B8	SK258		杭	53.0	6.1	5.6	ヒサカキ属	丸木	陥し穴の北端杭。直径5.4cm
375	3C11	SK303		杭	19.2	5.5	3.4	シロダモ属	半割材	陥し穴の杭
392	2C7	SD240	1	漆椀				ブナ属	横木・板目	赤漆。高台剥落
393	5D24	SD104	1	曲物底板	9.1	2.9	0.7	アスナロ属	柾目	直径10.4cm

古墳時代土器観察表

No.	出土地点			種別	器種	法量（cm）			色調	焼成	胎土	調整	
	位置	遺構	層位			口径	底径	器高				内面	外面
368	10A18	SD84	1	土師器	甕	16.0			にぶい黄橙	普通	やや粗	ナデ	ナデ
369	6I22		Ⅲ	土師器	甕	22.3			にぶい黄橙	普通	やや粗	ナデ,ハケ	ナデ,ハケ
370	9A10		Ⅳ	土師器	甕	19.0			赤褐	普通	やや粗	ナデ	ナデ
371	12B11		Ⅴ	土師器	鉢		6.4		にぶい黄橙	普通	やや粗	ケズリ	ナデ

中近世土器観察表

No.	出土地点			種別	器種	法量（cm）			色調		備考
	位置	遺構	層位			口径	底径	器高	内面	外面	
376	9C10		Ⅲ	珠洲	短頸小壺	4.4			灰白	灰	壺R種E類
377	5C17		2	肥前系陶器	皿		4.8		浅黄	にぶい黄	唐津
378	5C18			肥前系陶器	碗		4.9		黒褐	黒褐	唐津
379	4C15			肥前系磁器	小碗	8.0			灰白	灰白	伊万里
380	5C18			越中瀬戸	皿		5.6		にぶい黄橙	にぶい赤褐	
381	5C12			越中瀬戸	壺	10.4			灰赤	にぶい赤褐	

古代土器観察表（1）

No.	出土地点			種別	器種	法量（cm）			色調	焼成	胎土	調整			回転方向	備考
	位置	遺構No.	層			口径	底径	器高				外面	内面	底部		
21	2A7，3B8	SB1-SD1，SD240	1	須恵	有台杯	13.0	7.6	3.6	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
22		SB1-SD1		須恵	有台杯	11.6	8.2	3.4	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
23	3B8	SB1-SD1	1	須恵	杯蓋	12.6			灰	良	緻密	ロクロナデ，ロクロケズリ	ロクロナデ		右	
24	3A11	SB1-SD1		須恵	杯蓋	14.3		3.1	灰	良	緻密	ロクロナデ，ロクロケズリ	ロクロナデ			天井部墨書
25	3B8	SB1-SD1	1	土師	無台椀	14.6	6.0	3.7	浅黄橙	良	やや粗	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切		
26		SB1-SD1		土師	無台椀	13.4	7.2	3.4	灰黄褐	普通	緻密	ロクロナデ	ミガキ	糸切	右	底面ヘラ書，内外面煤
27	3A11	SB1-SD1		土師	鍋	38.0			にぶい橙	良	緻密	ロクロナデ，カキメ	ロクロナデ			
28	3A11	SB1-SD1		土師	長甕	28.0			浅黄橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ，カキメ			
29	3B8	SB1-SD1，SD189	3	須恵	長頸瓶		12.8		暗青灰	良	緻密	ロクロナデ，ロクロケズリ	ロクロナデ	ヘラ切		外面自然釉
30	2B16，2C7	SB1-SD1，SD240	1	須恵	横瓶				灰	良	やや粗	カキメ，タタキ	当て具			
31	3A11	SB1-SD1		須恵	突帯付四耳壺	24.7			灰	良	緻密	ロクロナデ，タタキ	ロクロナデ			
32	2A22・24	SD1，SD240	1	須恵	甕	57.4			灰	良	緻密	ロクロナデ，タタキ	ロクロナデ，当て具			外面波状文
33	3A20	SB1-SD172	1	須恵	無台杯	12.4	8.6	2.9	灰	不良	密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
34	3A20	SB1-SD172	1	須恵	杯蓋	17.0		4.0	にぶい橙	普通	緻密	ロクロナデ，ロクロケズリ	ロクロナデ		右	
35	3B13	SB1-SD189		須恵	無台杯		7.7		灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	左	
36	3B13	SB1-SD189	1	須恵	長頸瓶		11.8		灰	良	緻密	ロクロナデ，ヘラケズリ	ロクロナデ	ヘラ切		
37		SB2-P324	1	須恵	杯蓋	14.0			灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
38		SB2-P324	1	土師	長甕	22.0			にぶい黄橙	良	緻密	ロクロナデ，カキメ	ロクロナデ，カキメ			内面煤
39		SB2-SK40	1	土師	無台椀	17.0	7.0	4.4	にぶい黄橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切		
40		SB2-SK52	1	須恵	杯蓋	14.8			灰	良	緻密	ロクロナデ，ロクロケズリ	ロクロナデ		左	
41		SB2-SK67	1	土師	有台鉢	22.0			浅黄橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
42		SB2-SK67	1	土師	長甕	36.0			にぶい黄褐	良	やや粗	ハケ，ナデ	ナデ			外面煤・コゲ
43	6B10	SB2-SK67	1	須恵	長頸瓶		9.4		灰	良	緻密	ロクロナデ，ヘラケズリ	ロクロナデ		左	
44		SB2-SK684	2	土師	長甕	23.8			にぶい黄橙	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			外面煤
45	7B8	SB2-SK327	1	須恵	有台杯		9.8		灰白	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
46	7B7	SB2-SK327	1	土師	無台椀	13.0	5.8	3.3	浅黄橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
47	7B8	SB2-SK327	1	土師	長甕	20.0			浅黄橙	良	緻密	ロクロナデ，カキメ	ロクロナデ，カキメ			
48	7B6	SB2-SD61	1	土師	無台椀		8.0		にぶい橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
49	6B10	SB2-SD61	1	土師	無台椀		6.0		にぶい橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
50	6B10	SB2-SD61	1	土師	長甕	32.0			浅黄橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ，カキメ			
51	7I3	SB7-P730	1	須恵	長頸瓶				灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			外面自然釉
52	6J5	SB8-P888	1	土師	無台椀	13.8			にぶい黄橙	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
53	7I21	SB8-SD476	1	須恵	杯蓋	16.0			青灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
54	6J15	SB8-SD747	1	土師	長甕	20.0			にぶい黄橙	普通	緻密	ロクロナデ，カキメ	ロクロナデ，カキメ			
55	6J9	SB8-SD800	1	土師	長甕	24.0			にぶい橙	良	緻密	ロクロナデ，カキメ	ロクロナデ，カキメ			外面煤
56	6J4	SB8-SD800	1	土師	長甕	22.0			浅黄橙	良	やや粗	ロクロナデ，カキメ	ロクロナデ，カキメ			
57	6J4	SB8-SD800	1	土師	長甕	24.0			明褐灰	良	緻密	ロクロナデ，カキメ	ロクロナデ，カキメ			
58	6J9	SB8-SD800	1	土師	小甕		8.0		褐	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切		内外面煤
59	7I17，8I23	SB9・10-P775・776	1	須恵	無台杯	13.2	8.0	3.5	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
60	7I18	SB9・10-SD475	2	土師	無台椀	12.6			にぶい橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
61	7I23	SB9・10-SD475	2	黒色	無台椀	14.0			灰白	普通	緻密		ミガキ			
62	7I25	SB9-P781	1	須恵	広口瓶				青灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
63	7I24	SB9-P782	1	土師	長甕	22.0			灰褐	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			外面煤
64	8J11	SB10-P771	1	黒色	有台椀		(7.4)		にぶい橙	普通	やや粗	ロクロナデ	ミガキ			
65	8J7	SB10-P794	1	土師	無台椀		5.6		浅黄橙	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切		
66	8J8	SB10-P795	2	土師	長甕	27.2			にぶい黄橙	普通	緻密	ロクロナデ，カキメ	ロクロナデ，カキメ			内外面煤
67	11F18	SB11-P538	1	須恵	無台杯	13.4	8.4	3.6	灰	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
68	11F11	SB11-P533	1	須恵	無台杯		7.8		灰	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
69	13D11	SB13-P714	1	土師	無台椀	20.6			にぶい赤褐	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
70	13D11	SB13-P714	1	土師	小甕	14.2			灰褐	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			内外面煤・コゲ
71	12C24・25	SB13-SD514	1	須恵	瓶				褐灰	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
72	3D10	SI31	1	須恵	無台杯	12.0	8.8	3.2	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
73	3D15	SI31	1	須恵	無台杯		7.8		灰白	不良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
74	3D19	SI31	1	須恵	杯	16.2			橙	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
75	3D20	SI31	1	須恵	有台杯	15.1	9.0	6.8	灰	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
76	3D14	SI31	3	須恵	有台杯	12.4	9.0	3.7	浅黄橙	不良	密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切	左	
77	3D20	SI31	1	須恵	有台杯	11.4	8.8	4.0	にぶい褐	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切，ケズリ		
78	3D19	SI31	1	須恵	杯蓋	15.8			灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
79	3D15	SI31	1	須恵	杯蓋	14.4			灰	良	緻密	ロクロナデ，ロクロケズリ	ロクロナデ		右	
80	3D15	SI31	4	須恵	杯蓋	13.2			黄灰	普通	緻密	ロクロナデ，ロクロケズリ	ロクロナデ		右	
81	3D15	SI31	1	須恵	杯蓋	12.8			灰	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
82	3D15	SI31	4	土師	無台椀	13.0			にぶい橙	普通	やや粗	ロクロナデ	ロクロナデ			
83	3D19	SI31	1	土師	長甕	24.0			にぶい黄橙	良	緻密	ロクロナデ，カキメ	ロクロナデ，カキメ			
84	3D14	SI31	3	土師	長甕	22.0			にぶい橙	普通	やや粗					
85	3D19	SI31	1	土師	小甕	14.0			灰黄褐	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			内外面煤・コゲ
86	3D20	SI31	1	土師	小甕		5.8		にぶい橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切		
87	3D20	SI31	1	土師	鍋	36.0			浅黄橙	良	緻密	ロクロナデ，カキメ	ロクロナデ			
88	3D15	SI31	1	土師	鍋	36.0			にぶい橙	普通	緻密					
89	8A23	SI394	1	須恵	杯	13.6			灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
90	8A18	SI394	1	須恵	無台杯	12.4	8.2	2.7	灰	普通	密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
91	8A18・23	SI394	1	須恵	無台杯	12.2	8.0	2.8	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
92	8A18	SI394	1	須恵	無台杯		7.8		灰白	不良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	右	
93	8A18・22	SI394	2	須恵	無台杯	12.4	8.5	3.3	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	左	
94	8A23	SI394	1	須恵	杯	14.0			灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			

古代土器観察表（2）

No.	出土地点			種別	器種	法量（cm）			色調	焼成	胎土	調整			回転方向	備考
	位置	遺構No.	層			口径	底径	器高				外面	内面	底部		
95	8A18	SI394	1	須恵	有台杯		8.5		灰白	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切	右	底面墨
96	8A18	SI394	1	須恵	杯蓋	16.0			灰	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
97	8A23	SI394	1	土師	無台椀	13.0	5.8	3.8	にぶい橙	良	密	ロクロナデ	ロクロナデ			
98	8A18	SI394	1	土師	無台椀		4.8		浅黄橙	良	やや粗	ロクロナデ	ロクロナデ			
99	8A18	SI394	1	土師	長甕	24.0			にぶい黄橙	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ，カキメ			
100	8A18	SI394	1	土師	長甕	24.0			浅黄橙	普通	緻密	ロクロナデ，カキメ	ロクロナデ，カキメ			
101	8A17	SI394	1	土師	長甕	23.0			灰褐	普通	緻密	ロクロナデ，カキメ	ロクロナデ，カキメ			
102	8A23	SI394	1	土師	長甕	22.0			橙	良	緻密	ロクロナデ，カキメ	ロクロナデ，カキメ			
103	8A22	SI394	2	土師	小甕	16.0			にぶい黄橙	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			内面煤・コゲ
104	8A22	SI394	1	土師	小甕	15.0			灰褐	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			内外面煤・コゲ
105	8A17	SI394	2	須恵	長頸瓶	13.0			灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
106	8A18	SI394	1	須恵	甕				灰	良	緻密	タタキ	当て具			外面自然釉
107		SE116	9	須恵	杯	12.2			灰白	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
108	4D2	SE116	2	須恵	無台杯	11.4	8.2	3.3	灰白	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
109		SE116	9	須恵	無台杯		8.8		褐灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切		
110		SE116	2	須恵	杯蓋	13.1			灰	良	緻密	ロクロナデ，ロクロケズリ	ロクロナデ			
111	4D1	SE116	1	須恵	杯蓋				灰	良	緻密					
112		SE116	9	土師	無台椀	12.8			橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
113	4D2	SE116	2	土師	長甕		0.8		にぶい橙	良	緻密	タタキ	ハケ			外面煤・コゲ
114		SE378	1	須恵	有台杯	11.8	8.0	3.6	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
115		SE378	3	土師	無台椀	16.0			にぶい褐	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
116		SE378	3	土師	無台椀	14.8			にぶい黄橙	良	緻密	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ			外面墨書
117		SE378	2	須恵	甕				灰	良	緻密	ロクロナデ，タタキ	ロクロナデ，当て具			外面自然釉
118	11F25	SE554	1	土師	長甕	26.5			にぶい黄橙	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ，カキメ			内面煤
119	11F25	SE554	1	土師	小甕		5.3		にぶい黄橙	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切		内外面煤・コゲ
120	11F25	SE554	14	須恵	長頸瓶	8.6			暗灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
121		SE757	7	土師	無台椀	14.6			橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
122		SE757	7	土師	無台椀	12.8	5.8	3.3	浅黄橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切	右	
123		SE757	7	土師	無台椀		5.8		にぶい黄橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切		
124	7J13	SE784	2	土師	無台椀	13.6	6.2	3.2	にぶい黄橙	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
125	7J13	SE784	4	土師	無台椀	13.0			にぶい黄橙	普通	やや粗	ロクロナデ	ロクロナデ			内面煤
126	5B23	SK298	1	土師	小甕		6.1		明褐灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切		
127		SK74	1	土師	無台杯	13.6	9.4	3.5	浅黄橙	不良	やや粗	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
128		SK74	1	土師	長甕	26.0			灰褐	良	緻密	ロクロナデ，カキメ	ロクロナデ，カキメ			
129		SK74	1	土師	長甕	19.0			にぶい橙	良	やや粗		ハケ，ナデ			
130		SK74	1	土師	長甕	24.0			浅黄橙	普通	密	ナデ，ハケ	ナデ，ハケ			
131		SK74	1	土師	小甕	18.0			浅黄橙	良	やや粗	ロクロナデ，ケズリ				
132		SK74	1	土師	鍋	36.0			にぶい橙	良	やや粗					
133	8B1	SK358	1	須恵	無台杯		9.7		橙	不良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
134	8B1	SK358	1	須恵	有台杯	11.3	7.4	3.5	灰	良	密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
135	8B1	SK358	1	須恵	有台杯		9.4		灰白	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
136	8B1	SK358	1	須恵	杯蓋	15.6			灰	良	緻密	ロクロナデ，ロクロケズリ	ロクロナデ		左	
137	8B1	SK358	1	土師	長甕	24.0			浅黄橙	良	やや粗	ロクロナデ，カキメ	ロクロナデ，カキメ			
138	8B1	SK358	1	土師	鍋	28.0			浅黄橙	良	緻密	ナデ，ハケ	ナデ，ハケ			外面煤
139	8B1	SK358	1	土師	鍋		7.4		灰白	良	緻密					
140	5I17	SK458	1	須恵	無台杯	12.3	8.0	2.7	青灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
141	5I12・13	SK459	3	土師	無台椀	16.8	5.6	(5.5)	浅黄橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
142	8I16	SK472	1	須恵	有台杯		8.4		灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切，ケズリ	右	底面墨痕
143	8I16	SK472	1	土師	無台椀	12.1	5.4	3.2	浅黄橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
144	8I16	SK472	1	土師	無台椀	11.9	4.3	4.0	浅黄橙	良	やや粗	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切	右	
145	8I16	SK472	1	土師	小甕	16.0			褐灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			外面煤・コゲ
146	8I16	SK472	1	須恵	長頸瓶		10.8		灰	良	緻密	ロクロナデ，ロクロケズリ	ロクロナデ	ヘラ切		
147	8I16	SK472	1	須恵	甕	48.0			灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
148	10D6	SK526	2	須恵	無台杯		8.0		灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	左	底面墨書
149	7C7	SK593	1	土師	長甕	20.0			浅黄橙	良	やや粗	ナデ，ハケ	ナデ，ハケ			
150	6B22	SK696	1	須恵	甕	26.0	7.6	41.9	灰	良	緻密	ロクロナデ，タタキ，カキメ	ロクロナデ，当て具			外面自然釉
151	7I15	SK722	2	土師	無台椀	13.6			浅黄橙	良	緻密	ロクロナデ	ミガキ			
152	7I15	SK722	2	土師	無台椀		8.0		にぶい橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切		
153	7I15	SK722	2	土師	無台椀		6.1		灰黄	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切	右	
154	7I15	SK722	2	黒色	無台椀	12.8			浅黄橙	良	緻密	ロクロナデ				
155	7I15	SK722	2	黒色	有台椀		6.2		にぶい黄橙	良	緻密		ミガキ			内面暗文
156	7I15	SK722	2	土師					灰白	普通	緻密					
157	7I15	SK722	2	土師	長甕	30.0			にぶい橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
158	7I15	SK722	2	土師	長甕	28.0			にぶい褐	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
159	7I15	SK722	2	土師	羽釜				浅黄橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
160	6I4	SK725	1	黒色	無台椀	13.8			灰白	良	緻密	ロクロナデ	ミガキ			
161	11F21	SK815	1	須恵	無台杯	12.8			灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			外面墨
162	8J16	SK779	2	黒色	無台椀		8.0		灰白	良	緻密	ロクロナデ	ミガキ			
163	8J16	SK779	1	土師	小甕	10.0	5.9	(10.0)	灰黄褐	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切		内外面煤・コゲ
164	8J16	SK779		須恵	横瓶	10.0		23.1	灰	良	緻密	ロクロナデ，タタキ，カキメ	ロクロナデ,当て具,カキメ			
165		SK822	1	土師	長甕	26.0			浅黄橙	普通	やや粗	ナデ	ナデ，ハケ			外面煤
166		SK822	1	土師	長甕	22.0			浅黄橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ，カキメ			
167		SK822	1	土師	小甕	11.0			灰褐	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			内外面煤・コゲ
168		SK822	1	土師	小甕		6.2		灰褐	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切	右	
169	8B19	SX660	1	土師	無台椀		6.0		浅黄橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切		
170	8B14	SX660	1	土師	長甕		6.9		にぶい橙	良	やや粗	ハケ	ナデ			
171	8B24	SX660	1	土師	小甕	12.0			にぶい橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ，カキメ			内外面煤・コゲ
172		P73	1	須恵	無台杯	12.4	7.8	3.2	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
173	9J24	P758	1	須恵	長頸瓶		7.2		灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		底部内面自然釉
174		P329，SD37		土師	杯	10.2	3.8	5.3	橙	良	やや粗					
175		P329		土師	鍋	31.0			にぶい黄橙	普通	密	ロクロナデ，カキメ	ハケ			
176		P325	1	土師	長甕	25.0			灰褐	普通	緻密	ロクロナデ，カキメ	ロクロナデ，カキメ			内外面煤・コゲ
177	8J12	P919	1	土師	無台椀	11.1	4.4	3.8	浅黄橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
178	8J10	P1055	1	黒色	有台椀		7.0		にぶい黄橙	普通	緻密	ロクロナデ	ミガキ			
179	6H19	SD480	1	土師	無台椀		7.0		にぶい橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切		
180	6H19	SD480	1	黒色	無台椀	12.4	4.2	4.0	灰黄褐	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
181	6H19	SD480	2	須恵	突帯付四耳壺				灰	良	緻密	タタキ	当て具			
182	6A23	SD11	1	土師	長甕	30.0			浅黄橙	良	やや粗	ナデ，ハケ	ナデ，ハケ			
183	6A15	SD15	1	土師	小甕	16.0			にぶい黄橙	良	緻密	ナデ	ハケ			外面煤
184	8B1	SD47	1	須恵	無台杯	14.4	9.0	3.5	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切		

古代土器観察表（3）

No.	出土地点			種別	器種	法量（cm）			色調	焼成	胎土	調整			回転方向	備考
	位置	遺構No.	層			口径	底径	器高				外面	内面	底部		
185	7A11，8B1	SD41，SD47	1	須恵	有台杯		7.3		灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		底面墨
186	6A11，8B1	SD18，SD46		須恵	鉢	32.0	13.6	14.2	灰	良	緻密	ロクロナデ，カキメ，ヘラケズリ	ロクロナデ，カキメ	ヘラ切		
187	7A15	SD37	1	須恵	長頸瓶		9.2		灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切		
188	7A19	SD37	1	土師	鍋	36.0			灰黄褐	普通	緻密	ハケ，ナデ，指オサエ	ハケ，ナデ			
189	7A19	SD38	1	土師	長甕	23.0			にぶい橙	良	緻密	ナデ，ハケ	ナデ，ハケ			
190	5A11	SD235	1	土師	無台椀		5.6		浅黄橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切		
191	5A18・19	SD279	1	須恵	有台杯	14.4	9.5	3.9	灰白	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	右	
192	5A20	SD279	1	須恵	杯	14.6			灰	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
193	5A18	SD279	1	須恵	杯	11.8			灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
194	5A22	SD279	1	土師	小甕	18.0			灰褐	普通	やや粗	ロクロナデ	ロクロナデ，カキメ			内外面煤
195	5A18・22	SD279	1	土師	鍋	33.0			明褐灰	良	やや粗	ハケ，ナデ	ハケ，ナデ			
196	5A22	SD279	1	土師	鍋	28.0			にぶい橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ，カキメ			
197	5A22	SD279	1	土師	甑	24.0			にぶい黄橙	良	やや粗	ナデ，ハケ	ナデ，ハケ			
198	7I18	SD477	2	土師	小甕	12.0			橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			外面煤
199	7I13	SD477	1	土師	鍋	28.0			浅黄橙	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
200	7I10	SD742	1	土師	小甕	13.0			褐	普通	緻密	ナデ，ヘラケズリ	ナデ			内外面煤・コゲ
201	7I10	SD742	1	土師	小甕	14.0			灰褐	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			内外面煤・コゲ
202	6I6	SD746	2	土師	無台椀	13.0	4.7	3.9	浅黄橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
203	6I16	SD746	3	土師	小甕	12.0			明褐灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			外面煤・コゲ
204	6I22	SD772	1	須恵	有台杯	12.0	7.5	4.3	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
205	6I23	SD772	1	須恵	有台杯	11.8			灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		黒漆付着
206	6I22	SD772	1	黒色	無台椀	12.9	5.8	3.8	にぶい黄橙	普通	緻密	ロクロナデ	ミガキ			
207	8I24	SD1044	1	土師	鍋	34.0			にぶい橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
208	10A18・19	SD84	1	須恵	無台杯	14.7	8.0	4.6	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切		
209	9E2	SD84	1	須恵	無台杯	12.2	8.4	2.8	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
210	10C10・15	SD84	1	須恵	有台杯	14.0	9.6	4.0	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
211	10A17	SD84	1	須恵	有台杯	12.8	10.2	3.8	灰	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切，ケズリ		
212	10B14・24	SD84	1	須恵	有台杯	11.6	7.5	3.7	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
213	7C24	SD84	1	須恵	有台杯	11.4	6.8	4.1	浅黄橙	不良	やや粗	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
214	8C23	SD84	1	須恵	有台杯		7.8		灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切，ケズリ		底面墨書
215	4D20	SD84	2	須恵	杯蓋	14.2			灰	良	緻密	ロクロナデ，ロクロケズリ	ロクロナデ		右	
216	10A12・13	SD84	1	須恵	杯蓋	13.0		3.2	灰	良	緻密	ロクロナデ，ロクロケズリ	ロクロナデ		右	
217	7D8・12	SD84	1	須恵	杯蓋	11.4		2.7	灰	良	緻密	ロクロナデ，ロクロケズリ	ロクロナデ		右	
218	9E12・15	SD84	1	須恵	杯蓋				灰	良	緻密	ロクロナデ，ロクロケズリ	ロクロナデ		右	
219	9E18	SD84	1	土師	無台椀		5.1		にぶい黄橙	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切	右	
220	10C20	SD84	1	土師	長甕	34.0			明褐灰	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ，カキメ			内面煤
221	10A18	SD84	1	土師	長甕	24.0			浅黄橙	普通	やや粗	ロクロナデ	ロクロナデ，カキメ			
222	9E13	SD84	1	土師	長甕	22.0			にぶい橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
223	10C15	SD84	1	須恵	長頸瓶	8.9			灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
224	10E8	SD84	2	須恵	長頸瓶	8.9			灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			外面自然釉
225	10C25	SD84	2	須恵	長頸瓶				灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			外面自然釉
226	6D12	SD84	1	須恵	長頸瓶				灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			内外面自然釉
227	10D25	SD84	2	須恵	長頸瓶				灰	良	緻密	ロクロナデ，ロクロケズリ	ロクロナデ	糸切	左	外面墨書
228	5D3・4	SD84	1	須恵	壺	8.0	5.8	24.3	青灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切		
229	5D，6D	SD84，SD104	1	須恵	広口瓶				灰白	良	緻密	ロクロナデ，ロクロケズリ	ロクロナデ		右	外面自然釉
230	8C25	SD84	1	須恵	小型壺	8.2	6.4	4.8	灰白	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ		右	外面自然釉
231	10A12・17	SD84	1	須恵	甕	21.6			灰	良	緻密	ロクロナデ，タタキ	ロクロナデ，当て具			
232	6D12	SD84	1	須恵	甕				青灰	良	緻密	タタキ	当て具			
233	6A22	SD178	1	須恵	有台杯	14.0	9.4	3.5	青灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
234	2A22	SD240	1	須恵	無台杯	11.4	7.8	3.8	青灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
235	2A7	SD240	1	須恵	無台杯		7.2		灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	左	底面墨書
236	2A16	SD240	1	須恵	有台杯		10.3		灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
237	2A22	SD240		須恵	有台杯		8.0		灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		底面墨書
238	2C7	SD240		須恵	杯蓋	17.2			灰白	良	緻密	ロクロナデ，ロクロケズリ	ロクロナデ		右	
239	2A12	SD240	1	須恵	杯蓋				黄灰	良	やや粗	ロクロナデ，糸切り	ロクロナデ		右	
240	2A7，2B13	SD240	1	須恵	横瓶				褐灰	普通	やや粗	ロクロナデ，タタキ	ロクロナデ			
241	2A21，2B1	SD240		須恵	突帯付四耳壺	23.0			灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			外面自然釉
242	2A16	SD240	1	須恵	壺		10.4		灰	良	緻密	ロクロナデ，タタキ，ヘラケズリ	ロクロナデ	ヘラケズリ		
243		SD240	1	須恵	甕				灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			外面波状文
244	5E4	SD104	1	土師	短頸壺	8.4			にぶい橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			外面煤・コゲ
245	9A12・13	SD360	1	須恵	有台杯	12.2	7.0	3.7	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
246	9A11，9C2	SD360，SD604	1	須恵	横瓶				灰	良	緻密	タタキ，カキメ	当て具			
247	6H16	SD745	1	灰釉	瓶		9.2		灰白	良	緻密	ロクロナデ，ロクロケズリ	ロクロナデ		右	
248	6I21	SD745	1	須恵	広口瓶				灰	良	緻密	ロクロナデ，ロクロケズリ	ロクロナデ			内外面自然釉
249	9D14		Ⅲ	須恵	無台杯	12.6	9.0	3.9	灰白	不良	やや粗	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
250	7A18		Ⅲ	須恵	無台杯	12.7	8.0	3.2	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	左	
251	3B11		Ⅲ	須恵	無台杯	12.4	8.0	2.8	灰白	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	左	
252	7E1		Ⅲ	須恵	無台杯	11.6	7.0	2.9	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	左	
253	4D15		Ⅲ	須恵	無台杯		7.8		灰白	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		内面漆
254	6J4		Ⅲ	須恵	無台杯	12.4	8.4	3.4	灰白	不良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	左	
255	南地区			須恵	無台杯	12.4	8.0	3.5	明青灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	左	
256	7B9		Ⅲ	須恵	無台杯	12.4	6.6	2.8	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	左	
257	8A17		Ⅲ	須恵	無台杯	12.2	7.2	3.2	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	左	底面墨書
258	5J17		Ⅲ	須恵	無台杯	12.2	8.0	3.1	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		底面墨書
259	7B7		Ⅲ	須恵	無台杯	11.8	8.0	3.1	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	左	底面墨書
260	5C18		Ⅲ	須恵	有台杯	13.4	9.0	7.1	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
261	7D5		Ⅲ	須恵	有台杯	12.0	8.0	4.0	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	右	
262	5D10		Ⅲ	須恵	有台杯	11.8	7.2	3.6	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
263	10A13		Ⅲ	須恵	有台杯	11.2	7.0	3.6	青灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	右	
264	5D9		Ⅲ	須恵	有台杯	10.5	6.9	3.1	灰白	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	右	
265	4B5		Ⅲ	須恵	有台杯	14.4	9.8	4.0	灰白	不良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
266	8B1		Ⅲ	須恵	有台杯	14.4	9.4	4.1	灰白	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
267	4B19		Ⅲ	須恵	有台杯	11.2	7.9	3.5	青灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
268	4C9		Ⅲ	須恵	有台杯	9.9	6.7	4.0	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切		
269	11B20		Ⅲ	須恵	有台杯	9.4	7.0	3.3	灰白	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
270	4B5		Ⅲ	須恵	有台杯	13.6	10.2	3.6	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
271	6C14		Ⅲ	須恵	有台杯	13.6	10.0	3.3	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
272	不明			須恵	有台杯	13.6	9.4	3.5	明青灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		
273	9C20		Ⅲ	須恵	有台杯		7.9		灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		内面自然釉

古代土器観察表（4）

No.	出土地点			種別	器種	法量（cm）			色調	焼成	胎土	調整			回転方向	備考
	位置	遺構No.	層			口径	底径	器高				外面	内面	底部		
274	5I18		Ⅲ	須恵	有台杯		5.7		灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切	右	底面墨書
275	7A19		Ⅲ	須恵	杯蓋	(18.0)		(4.1)	灰	良	緻密	ロクロナデ，ロクロケズリ	ロクロナデ		右	
276	5C12		Ⅲ	須恵	杯蓋	16.9		3.6	灰	良	緻密	ロクロナデ，ロクロケズリ	ロクロナデ		右	内面墨痕
277	南地区			須恵	杯蓋	15.4		3.0	青灰	良	緻密	ロクロナデ，ロクロケズリ	ロクロナデ		右	
278	5A18		Ⅲ	須恵	杯蓋	14.6		2.1	灰	良	緻密	ロクロナデ，ロクロケズリ	ロクロナデ			外面自然釉
279	9B10		Ⅰ	須恵	杯蓋	12.1		2.7	灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			外面自然釉
280	10A17		Ⅲ	須恵	杯蓋	13.4		2.6	灰白	良	緻密	ロクロナデ，ロクロケズリ	ロクロナデ		右	天井部墨書
281	4B5		Ⅲ	須恵	壺蓋	12.8			灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			天井部ヘラ書，外面自然釉
282	12G1		Ⅲ	須恵	小型壺	3.2			褐灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
283	3B14		Ⅲ	須恵	長頸瓶				灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			外面自然釉
284	7B15		Ⅲ	須恵	突帯付四耳壺				灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
285	9B15		Ⅰ	須恵	長頸瓶		8.9		灰	良	緻密	ロクロナデ，ケズリ	ロクロナデ	糸切	右	
286	10J16		Ⅲ	須恵	長頸瓶		9.6		灰	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
287	7B11		Ⅲ	須恵	突帯付四耳壺		14.3		灰	良	緻密	タタキ				
288	8D23		Ⅲ	須恵	甕	22.6			灰	良	緻密	ロクロナデ，タタキ	ロクロナデ，当て具			内外面自然釉
289	4B5		Ⅲ	須恵	甕	23.5		47.5	灰	普通	緻密	ロクロナデ，タタキ	ロクロナデ，当て具			
290	4B5		Ⅲ	土師	杯	13.2	7.0	5.5	にぶい橙	普通	やや粗	ナデ，ハケ	ナデ，ハケ			
291	4B5		Ⅲ	土師	杯	11.7		3.9	浅黄橙	良	緻密	ナデ，指オサエ	ハケ，ナデ			
292	7I8		Ⅲ	土師	無台椀		6.5		浅黄橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切	右	底面墨書
293	7B2		Ⅲ	土師	無台椀		5.6		にぶい黄橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切		
294	3B11		Ⅲ	土師	無台椀	13.0	6.2	4.1	浅黄橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切		
295	13C21		Ⅲ	土師	無台椀	13.1	6.4	3.6	にぶい褐	普通	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切		
296	12A6		Ⅳ	土師	無台椀	11.6	5.6	4.1	浅黄橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切		
297	11A10			土師	無台椀	12.8	5.7	4.1	浅黄橙	良	密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切		
298	3A14		Ⅲ	土師	無台椀	12.9	5.2	4.2	橙	良	密	ロクロナデ	ロクロナデ			
299	8J12		Ⅲ	土師	無台椀	11.8	5.4	3.8	浅黄橙	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			
300	10A24		Ⅳ	黒色	無台椀	13.2	7.8	4.0	にぶい橙	良	やや粗	ロクロナデ	ミガキ			
301	8D19		Ⅲ	黒色	無台椀	11.6	5.4	3.6	にぶい褐	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切		
302	12B10		Ⅳ	黒色	無台椀	25.0			にぶい橙	普通	緻密	ロクロナデ	ミガキ			
303	8I16		Ⅲ	黒色	有台椀		7.5		灰白	良	緻密	ロクロナデ				
304	8J12		Ⅲ	黒色	有台椀		7.2		灰白	良	緻密	ロクロナデ	ミガキ			
305	5D15		Ⅲ	土師	高杯				灰白	普通	緻密					
306	5D5		Ⅲ	土師	長甕	28.0			浅黄橙	普通	やや粗	ナデ，ハケ	ナデ，ハケ			
307	6J8		Ⅲ	土師	長甕	24.0			にぶい黄橙	普通	やや粗					
308	7B2		Ⅲ	土師	長甕	24.0			浅黄橙	良	緻密	ロクロナデ，カキメ	ロクロナデ，カキメ			
309	6B14		Ⅲ	土師	長甕	23.6			にぶい橙	良	緻密	ロクロナデ，カキメ	ロクロナデ			
310	7B7		Ⅲ	土師	長甕	21.8			にぶい橙	良	やや粗	ロクロナデ，カキメ	ロクロナデ			
311	7A19			土師	長甕	19.0			にぶい褐	普通	緻密	ナデ，ハケ	ナデ，ハケ			
312	5A17		Ⅲ	土師	長甕	18.0			灰褐	普通	緻密	ナデ，ハケ	ナデ，ハケ			外面煤・コゲ
313	4B5		Ⅲ	土師	小甕	17.0			橙	良	緻密	ナデ，ハケ	ナデ，ハケ			
314	7B2		Ⅲ	土師	小甕	14.0			にぶい褐	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			外面煤・コゲ
315	12A6		Ⅳ	土師	小甕	12.0			褐	良	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ			内外面煤・コゲ
316	13A17		Ⅲ	土師	鍋	39.6			にぶい黄橙	普通	やや粗	タタキ				
317	5J17		Ⅲ	土師	鍋	38.0			にぶい橙	普通	やや粗					
318	11A7		Ⅲ	土師	鍋	38.0			灰黄褐	普通	緻密	ロクロナデ，カキメ	ロクロナデ			
319	5I6		Ⅲ	土師	鍋	38.0			にぶい橙	普通	やや粗					内面煤付着
320	7J14		Ⅲ	土師	鍋	30.0			浅黄橙	普通	緻密					
321	4B5		Ⅲ	土師	鍋	28.0			浅黄橙	普通	やや粗	ナデ，ハケ	ナデ，ハケ			
322	6D17		Ⅲ	土師					灰白	普通	緻密		ナデ			
323	8J17		Ⅲ	土師	羽釜				灰白	普通	緻密					
324	7I2		Ⅲ	土師	羽釜				灰白	普通	緻密					
325	13E11		Ⅲ	土師	甑		20.0		にぶい黄橙	良	やや粗	ハケ	ナデ			

図　　版

遺構全体配置図

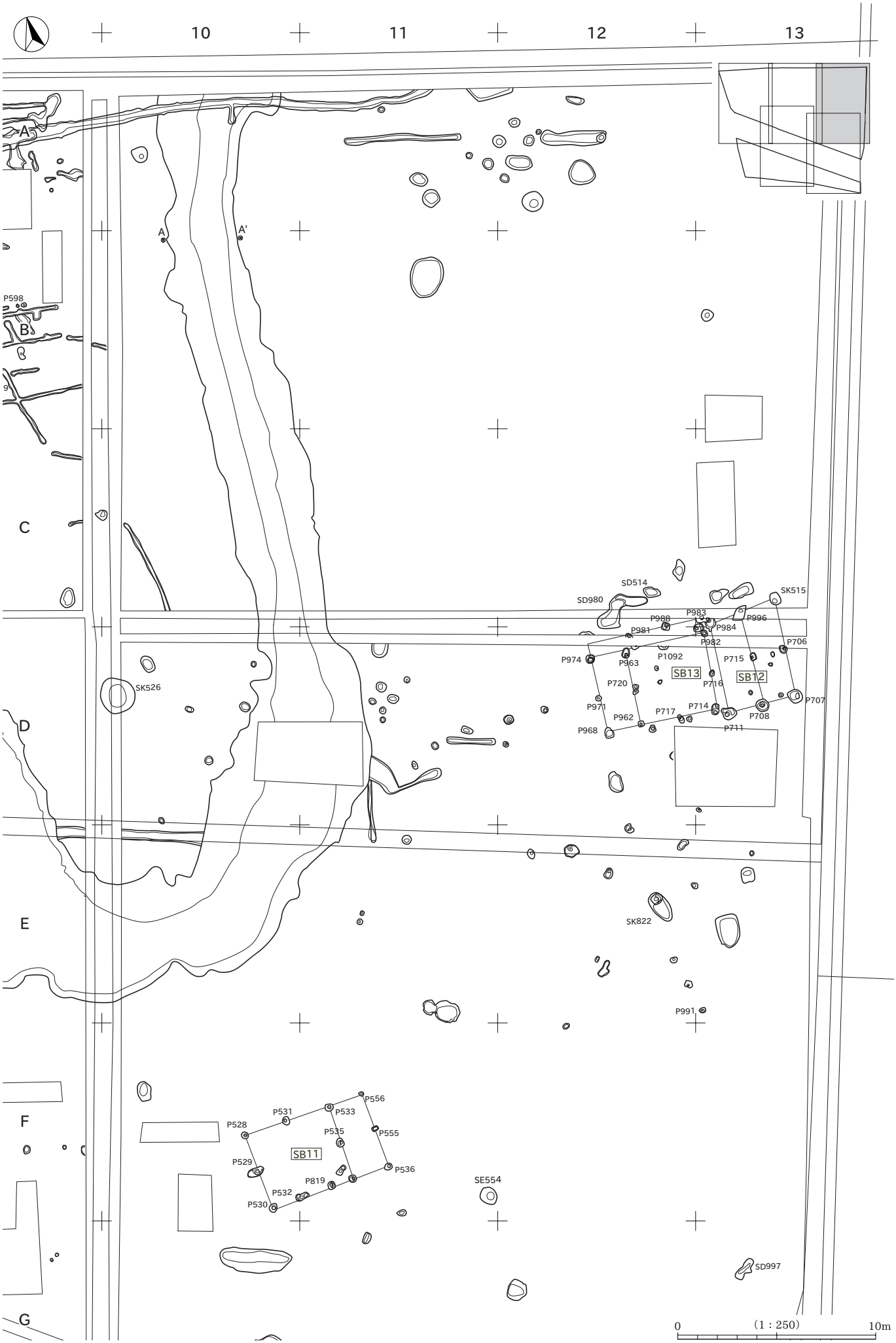
図 版 1

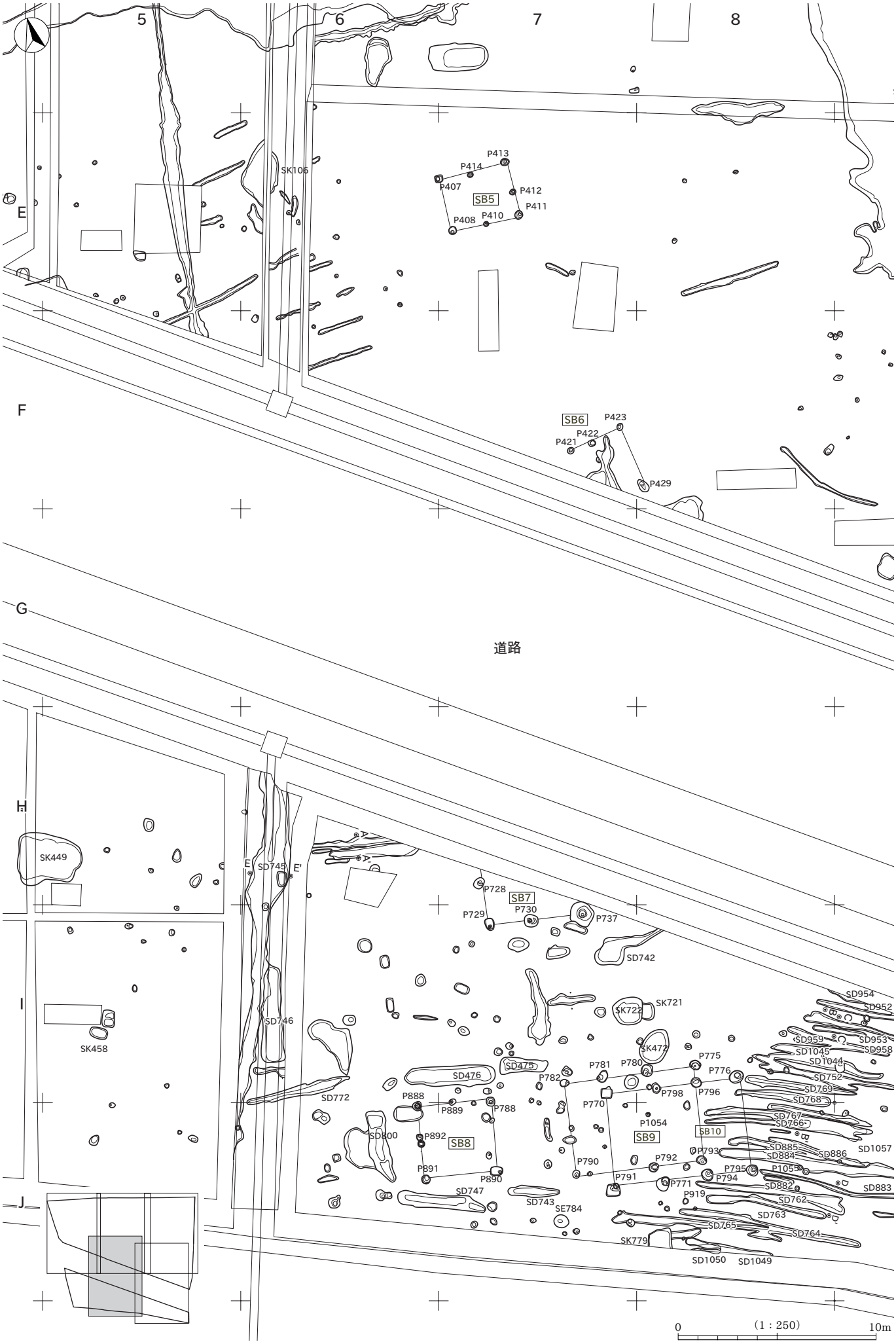
遺構分割図（1）

2
3
4
5
A
B
C
D
E
F
SD838
SD233
SD222
SD220
SD230
P191
SD232
SD227
SD172
SD229
SD235
SD279
P163
P516
P523
SD166
P161
SB1
SD229
SD226
P522
SD1
P517
SD240
SD178
P518
P519
P520
P521
P267
SK258
P221
SD189
SD223
SK243
SD225
P244
SD224
SD228
SD295
SK298
C
C'
P305
SK303
SD104
SD240
2D
SE116
SI31
P111
P87
SK121
P120

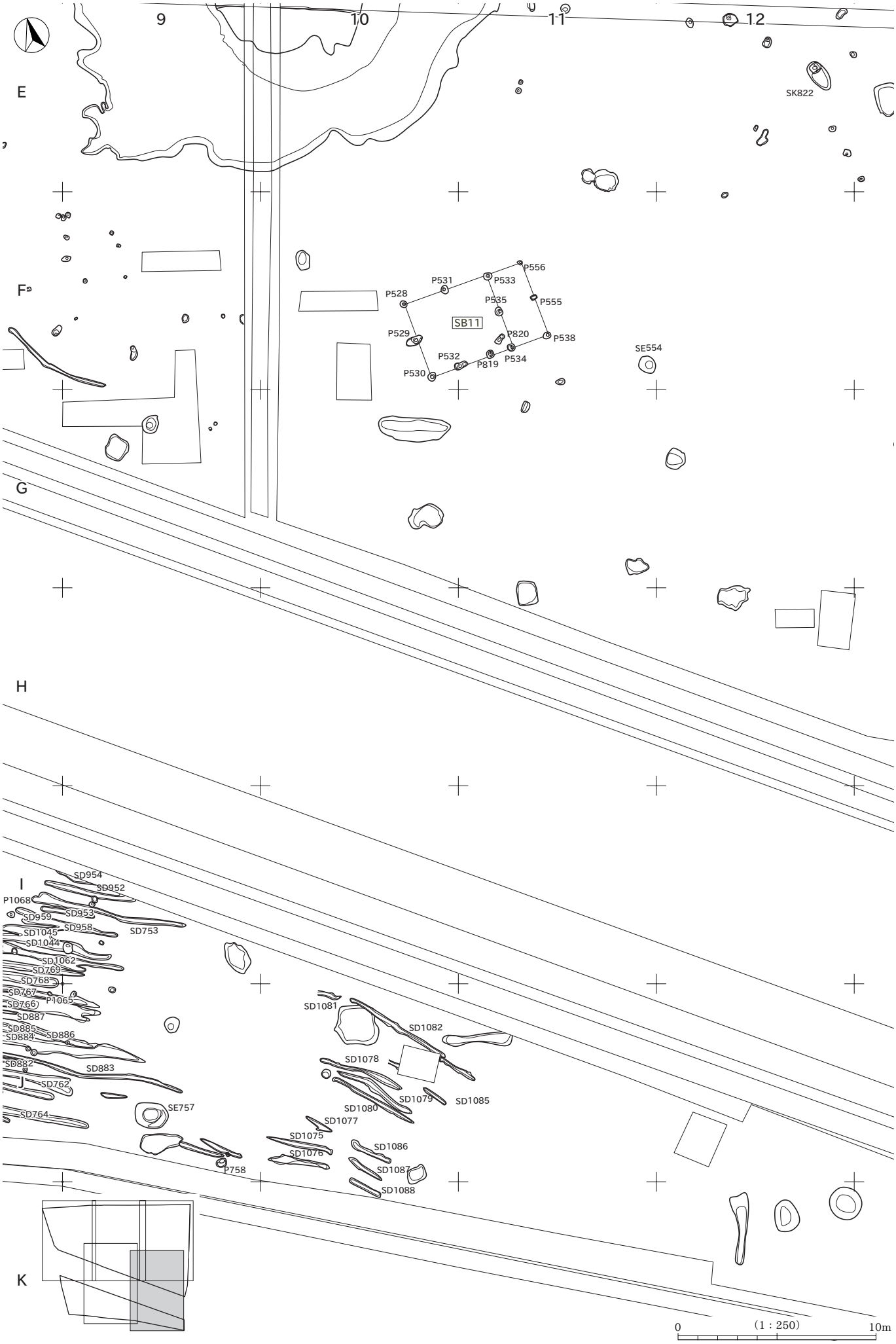
6
7
8
9
A
B
C
D
E
F
G
SD18
SD17
SD16
SD15
SD41
P325
SK341
P330
SD356
SD400
SD42
SD14
SK55
SK34
SK35
SK40
P329
SD360
SD12
SK36
SD19
SB2
SK683
SD
P39
P48
SK59
P323
SD399
SD11
SD7
SB4
SD43
SI394
SD10
P328
P49
SD9
SK68
P51
SK66
P324
SD44
SD46
P327
P20
SK60
SD570
SK67
SK74
SK358
SD76
SK258
SK58
SK33
SD47
SK327
SD61
SD53
SD594
SD54
SD607
SD609
SD608
SD355
SK378
SD612
SD614
SD613
SD6
SD69
P332
SD615
SD620
SD336
SX660
SD616,617
SD619
SD644
SD338
SD5
SD618
SD4
SD621
SK696
SD3
SK298
SD2
SK593
SD84
P413
P414
SK106
P407
SB5
P412
P411
P408
P410
SB6
P423
P422
P421
P429
SX438
0
(1：250)
10m

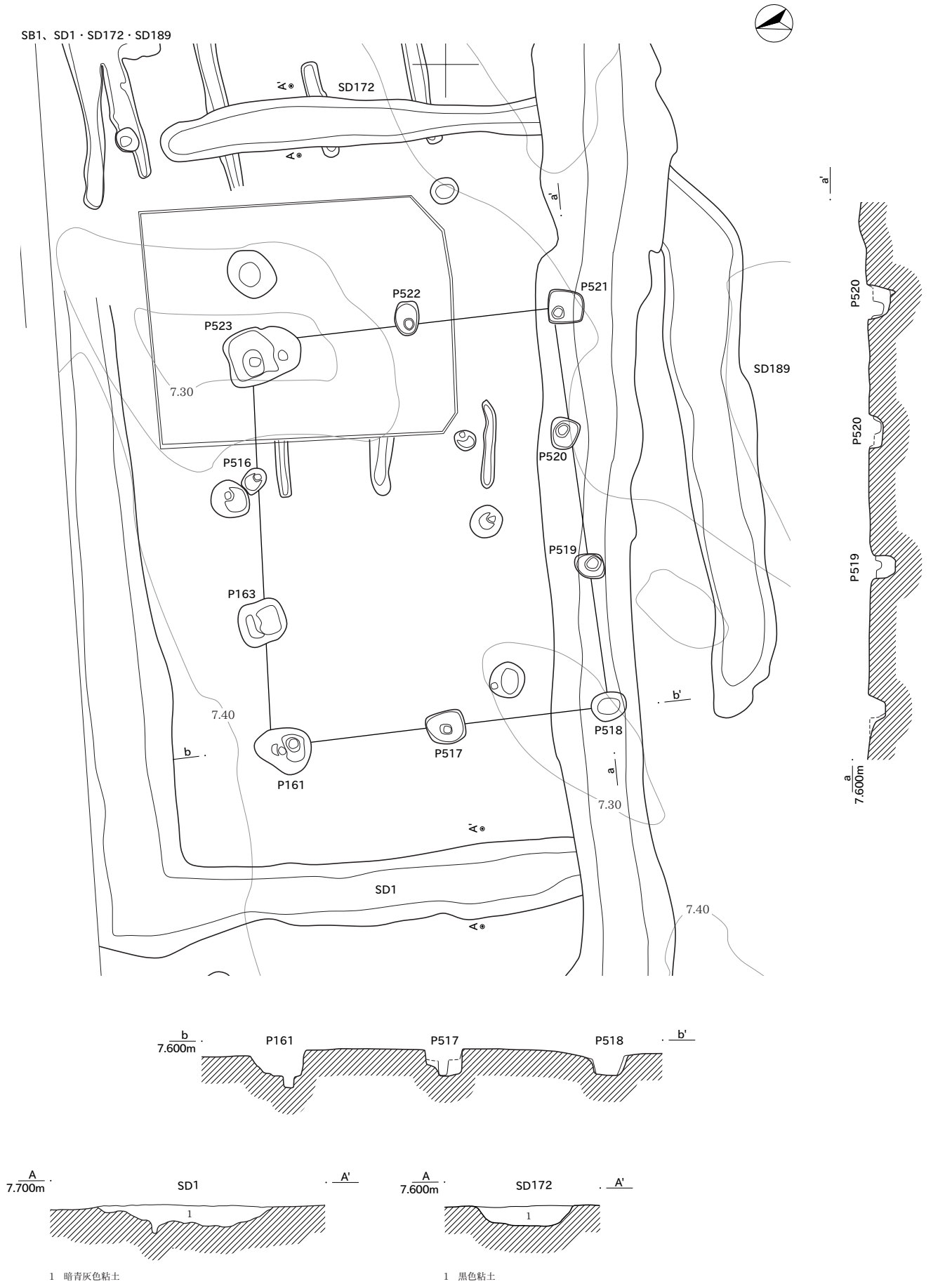
遺構分割図（3）


10
11
12
13
A
A'
B
C
D
E
F
G
P598
SD514
SD980
SK515
P988
P983
P996
P981
P984
P982
P706
P974
P963
P1092
P715
SB13
SB12
P720
P716
P707
P971
P714
P708
P962
P717
P711
P968
SK526
SK822
P991
P531
P533
P556
P528
P535
P555
SB11
P529
P536
P819
P532
P530
SE554
SD997
0
(1：250)
10m

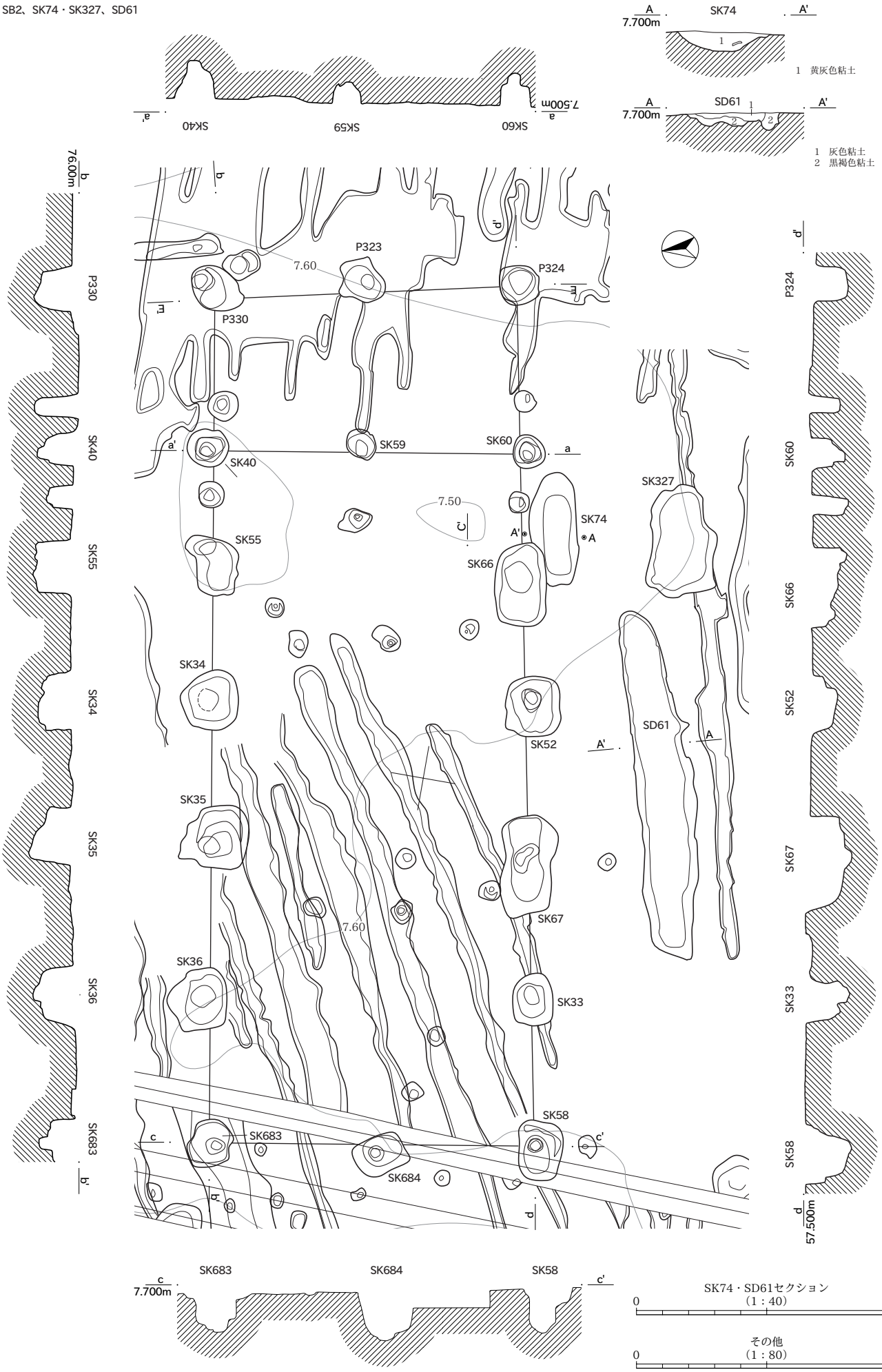

5
6
7
8
E
F
G
H
I
J
SK106
P413
P414
P407
SB5
P412
P411
P408
P410
SB6
P423
P422
P421
P429
道路
SK449
SD745
E'
SD746
SK458
P728
SB7
P729
P730
P737
SD742
SK721
SK722
SD954
SD952
SD959
SD953
SD1045
SD958
SD1044
SK472
P775
P781
P780
P776
SD752
SD475
SD476
P782
SD769
P798
P796
SD768
SD772
P888
P889
P788
P770
SD767
SD766
P1054
SD800
P892
SB8
SB9
SB10
SD1057
SD885
SD884
SD886
P793
P792
P790
P795
P1055
P891
P890
P791
P794
SD882
SD883
P771
P919
SD747
SD743
SE784
SD762
SD763
SD765
SD764
SK779
SD1050
SD1049
0
(1：250)
10m

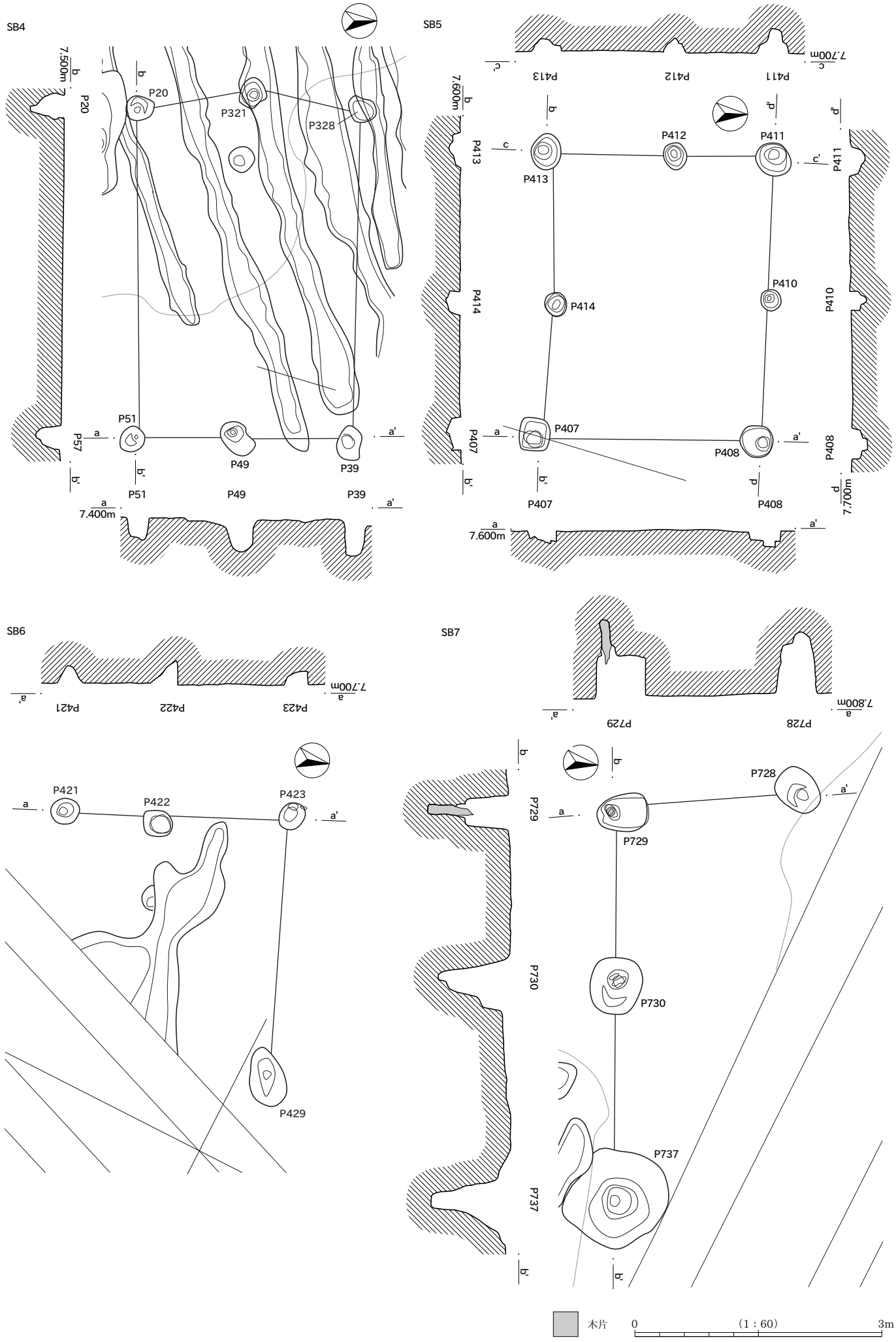
遺構分割図（5）


9
10
11
12
E
F
G
H
I
J
K
SK822
SB11
P528
P529
P530
P531
P532
P533
P534
P535
P538
P555
P556
P819
P820
SE554
SD954
SD952
P1068
SD959
SD953
SD958
SD753
SD1045
SD1044
SD1062
SD769
SD768
SD767
P1065
SD766
SD887
SD885
SD884
SD886
SD882
SD883
SD762
SD764
SE757
P758
SD1081
SD1082
SD1078
SD1079
SD1085
SD1080
SD1077
SD1075
SD1076
SD1086
SD1087
SD1088
0
(1 : 250)
10m

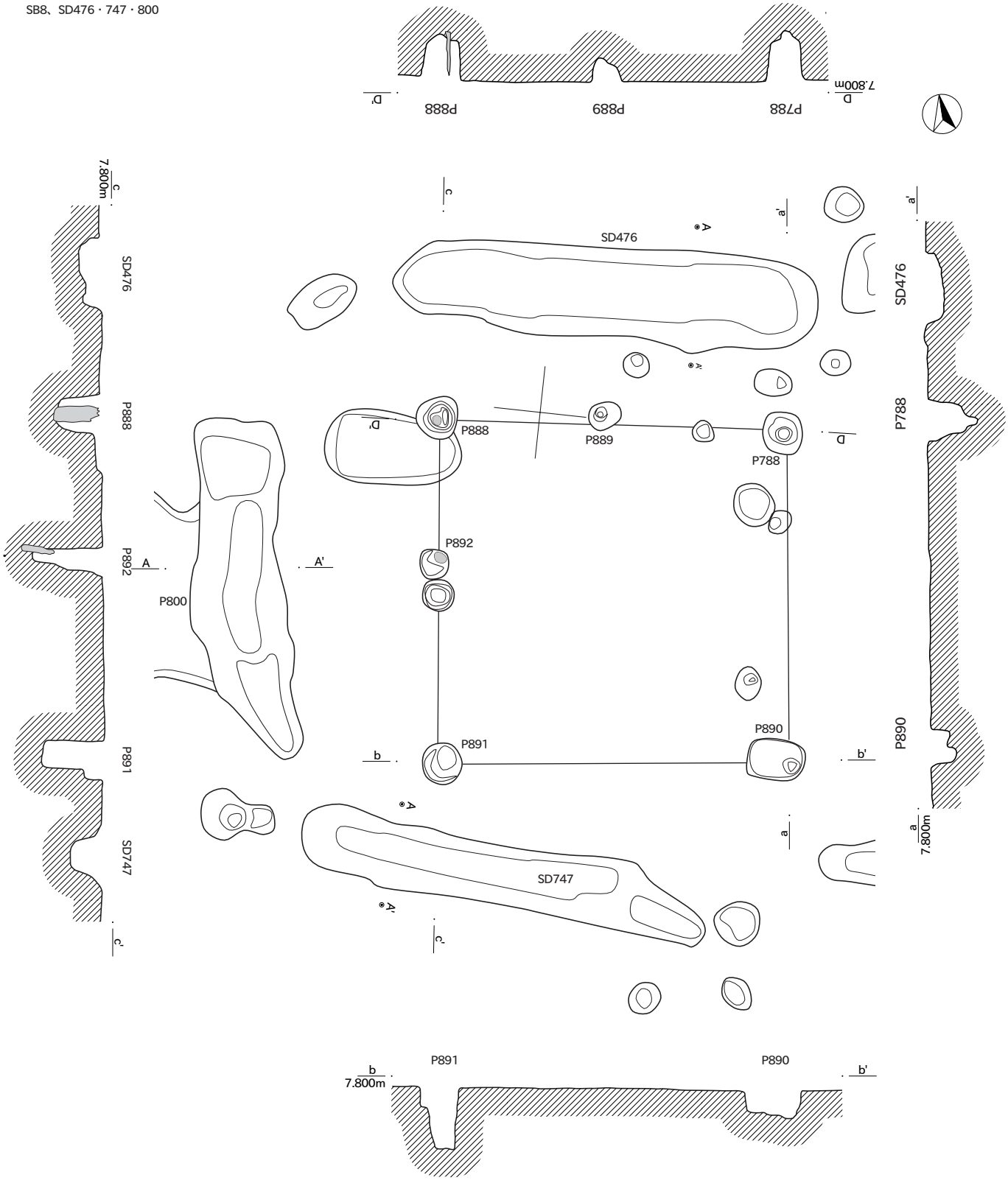

SB1、SD1・SD172・SD189
SD172
SD189
SD1
P161
P163
P516
P517
P518
P519
P520
P521
P522
P523
7.30
7.40
7.600m
7.700m
1 暗青灰色粘土
1 黒色粘土
SD1・SD172セクション
（1：40）
その他
（1：80）
0
2m
4m

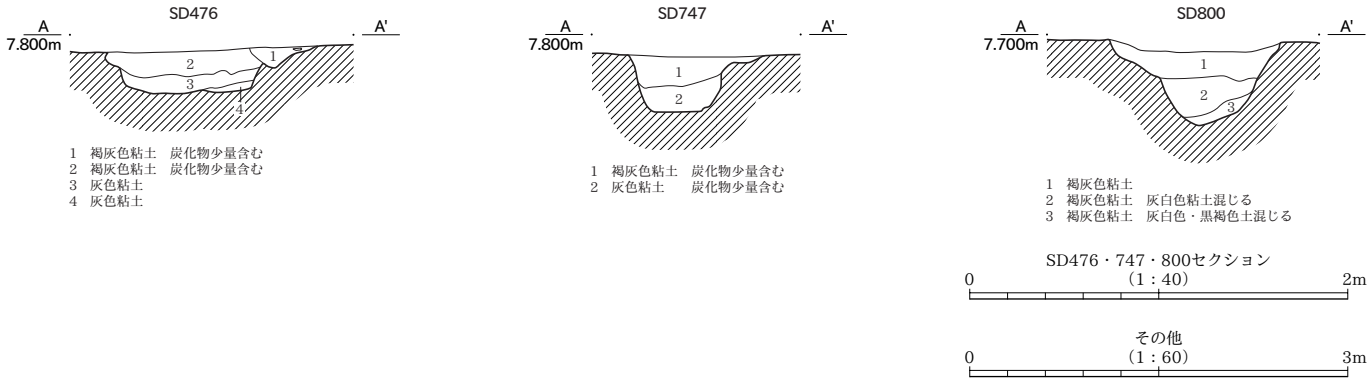
SB2、SK74・SK327、SD61




SB4
SB5
SB6
SB7
P20
P321
P328
P51
P49
P39
P57
7.500m
7.400m
P411
P412
P413
P410
P414
P407
P408
7.600m
7.700m
P421
P422
P423
P429
P728
P729
P730
P737
7.800m
木片
0
(1：60)
3m

SB8、SD476・747・800





1　褐灰色粘土　炭化物少量含む
2　褐灰色粘土　炭化物少量含む
3　灰色粘土
4　灰色粘土

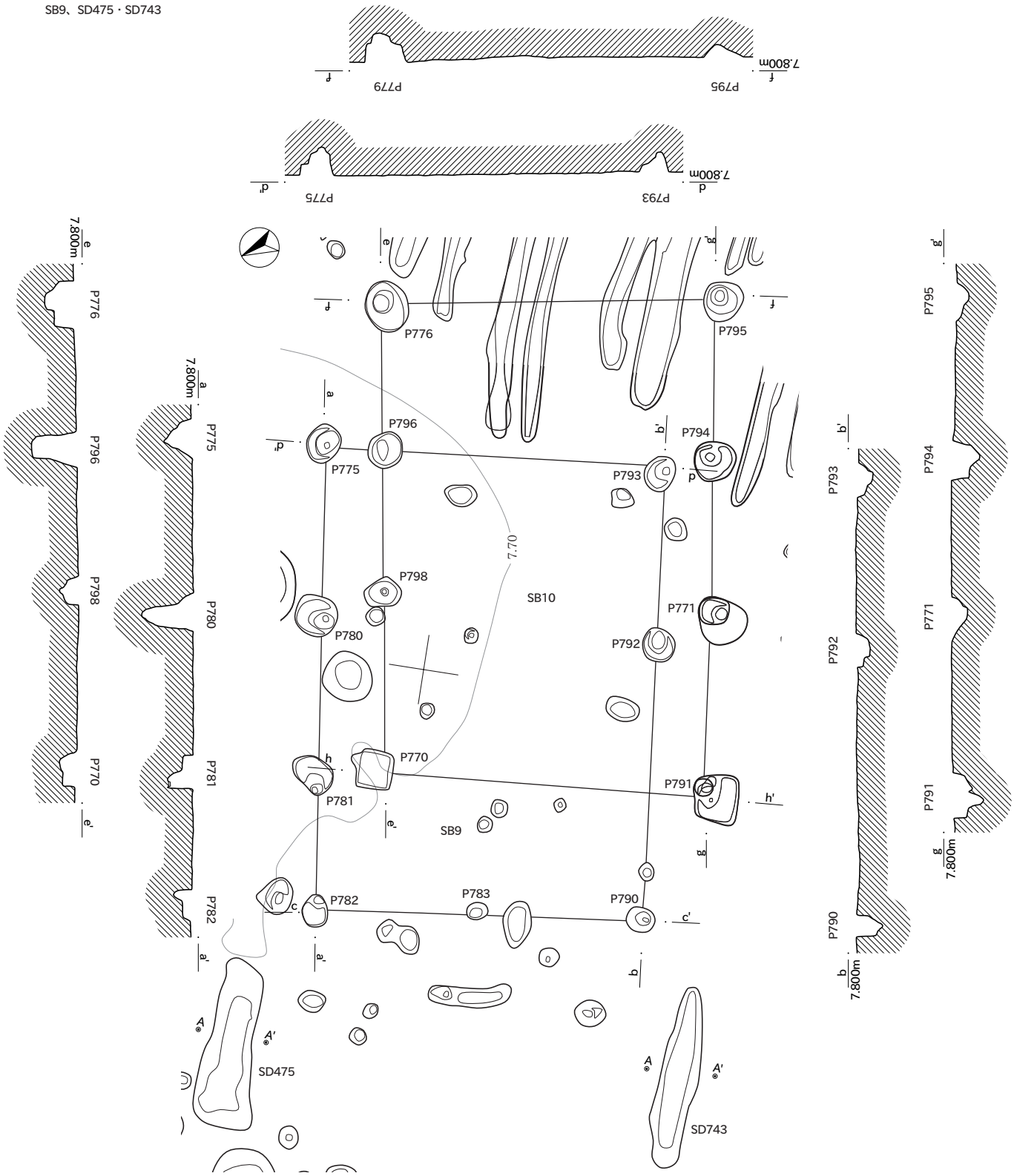
1　褐灰色粘土　炭化物少量含む
2　灰色粘土　　炭化物少量含む

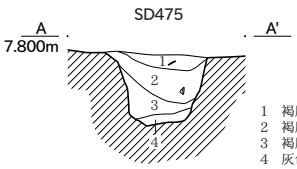
1　褐灰色粘土
2　褐灰色粘土　灰白色粘土混じる
3　褐灰色粘土　灰白色・黒褐色土混じる

SD476・747・800セクション
0　（1：40）　2m

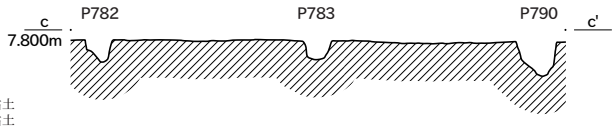
その他
0　（1：60）　3m

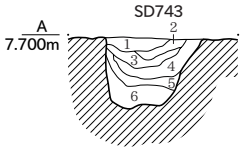
SB9、SD475・SD743



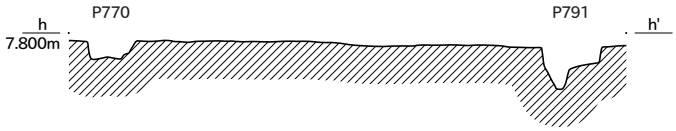


1　褐灰色粘土
2　褐灰色粘土
3　褐灰色粘土
4　灰色粘土





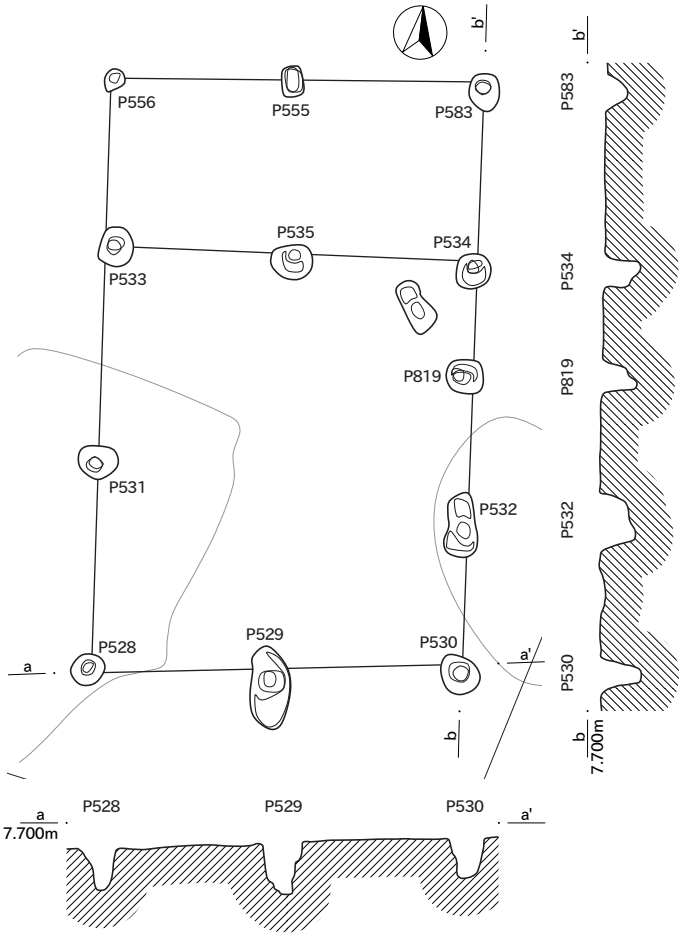
1　褐灰色粘土
2　黒褐色粘土
3　黒色粘土
4　褐灰色粘土
5　黒色粘土
6　灰色粘土



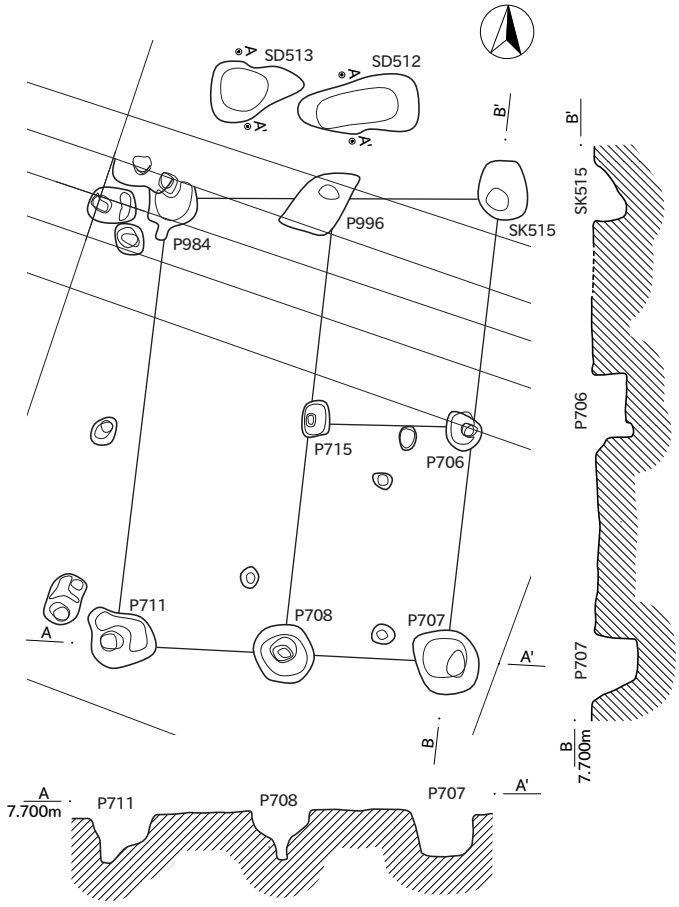
SD475・743セクション
（1：40）
0　2m

その他
（1：80）
0　4m

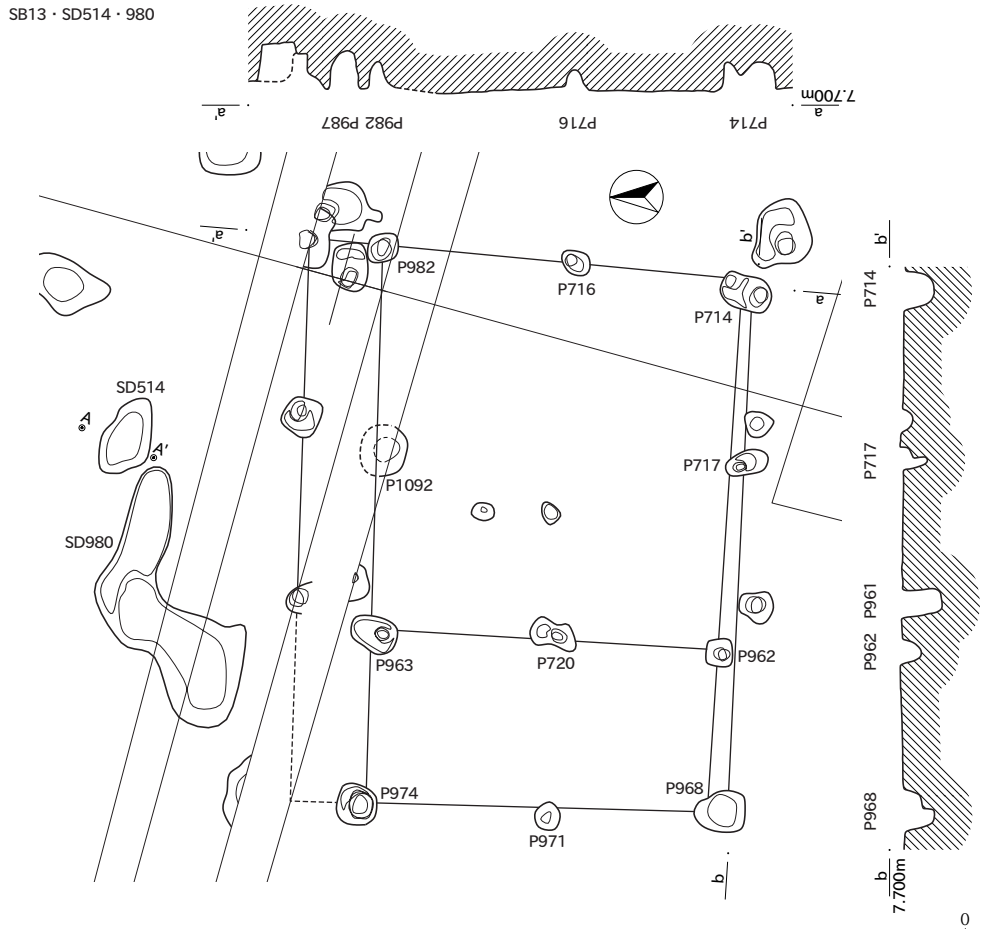
SB11



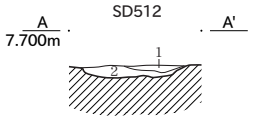
SB12・SD512・513



SB13・SD514・980

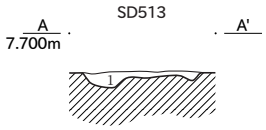


SD512



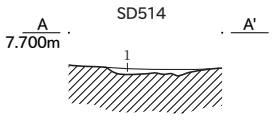
1　暗褐色粘土　炭化物多く含む
2　褐色粘土

SD513



1　褐色粘土

SD514

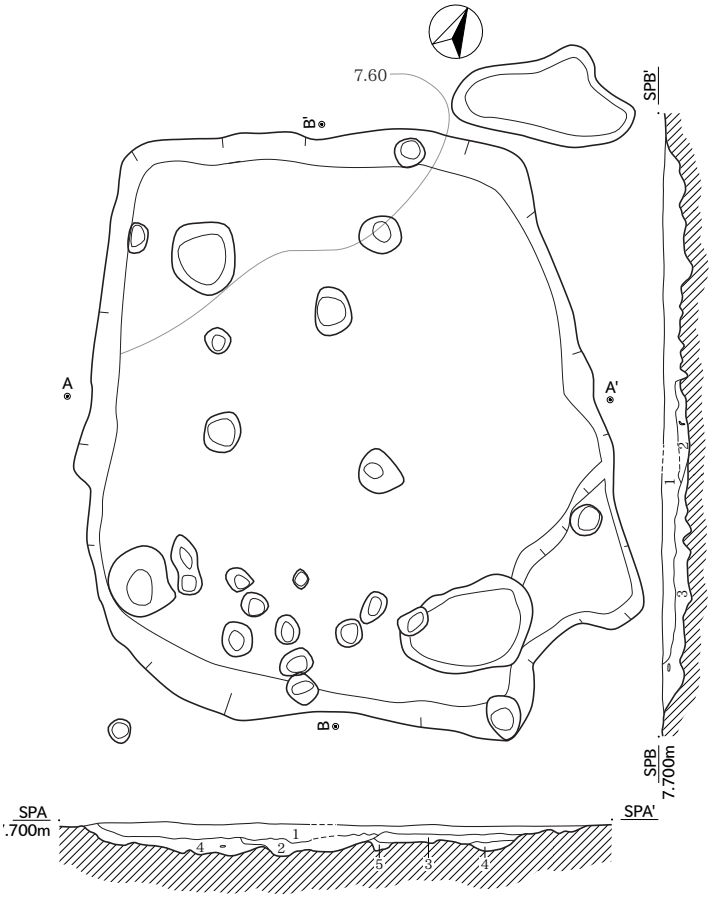


1　黄褐色粘土　炭化物多く含む

SD512・513・514セクション
（1：40）
0　2m

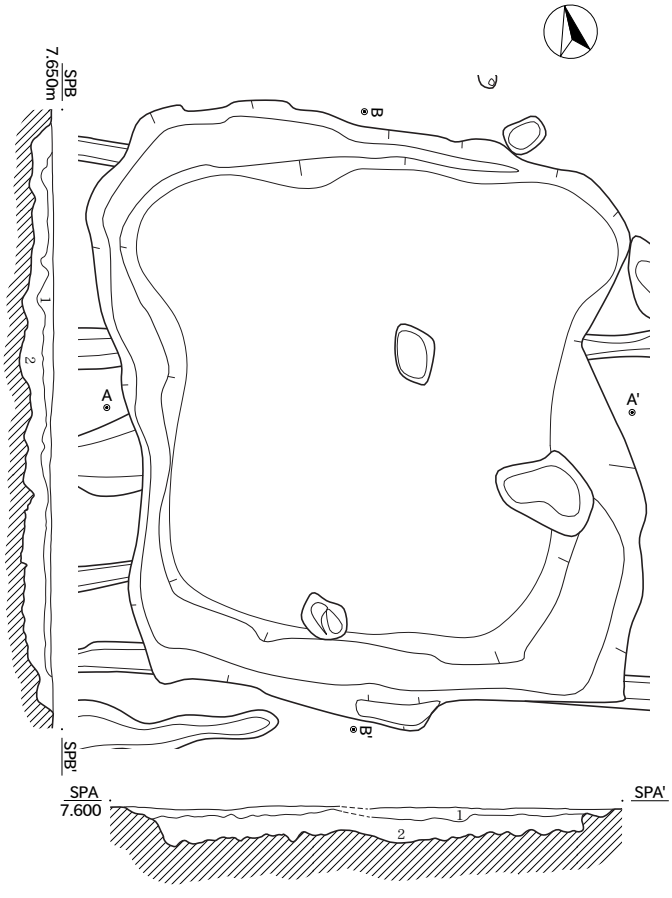
その他
（1：80）
0　4m

SI31



1　褐灰色粘土　炭化物多く含む
2　褐灰色粘土
3　黄灰色粘土
4　黒褐色粘土
5　黒褐色粘土

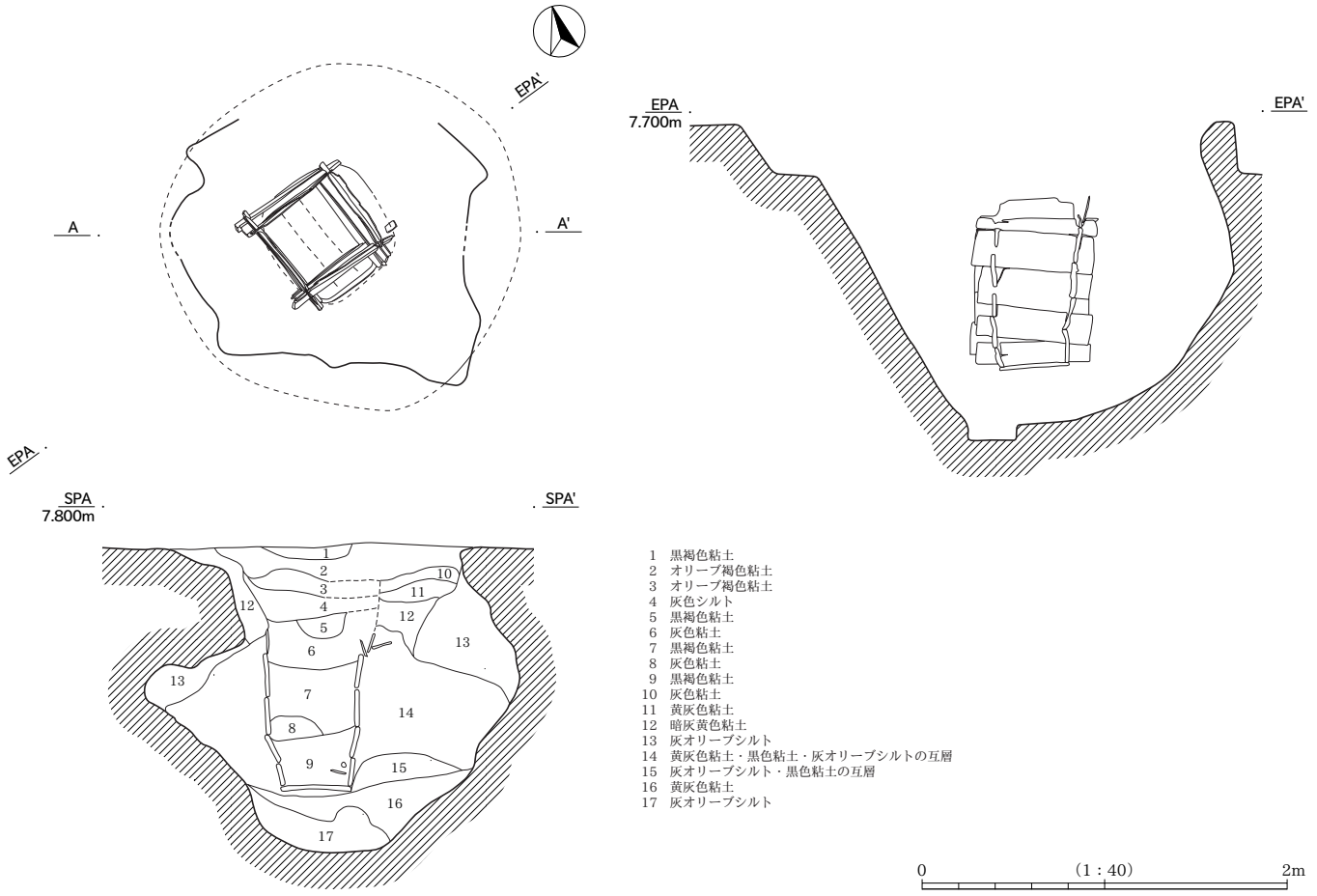
SI394



1　褐灰色粘土　炭化物多く含む
2　褐灰色粘土

0　(1：60)　3m

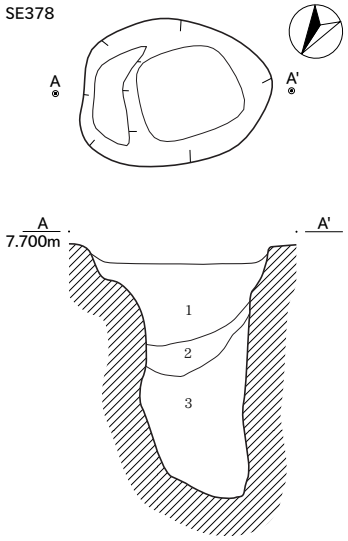
SE116



1　黒褐色粘土
2　オリーブ褐色粘土
3　オリーブ褐色粘土
4　灰色シルト
5　黒褐色粘土
6　灰色粘土
7　黒褐色粘土
8　灰色粘土
9　黒褐色粘土
10　灰色粘土
11　黄灰色粘土
12　暗灰黄色粘土
13　灰オリーブシルト
14　黄灰色粘土・黒色粘土・灰オリーブシルトの互層
15　灰オリーブシルト・黒色粘土の互層
16　黄灰色粘土
17　灰オリーブシルト

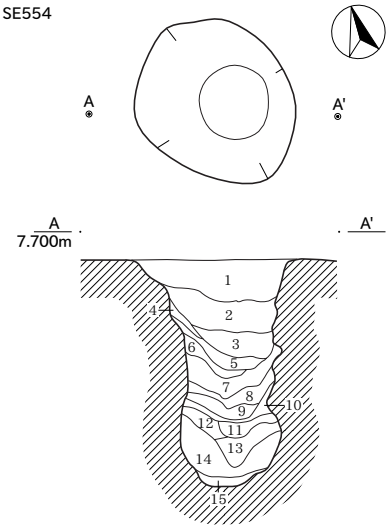
0　(1：40)　2m

SE378



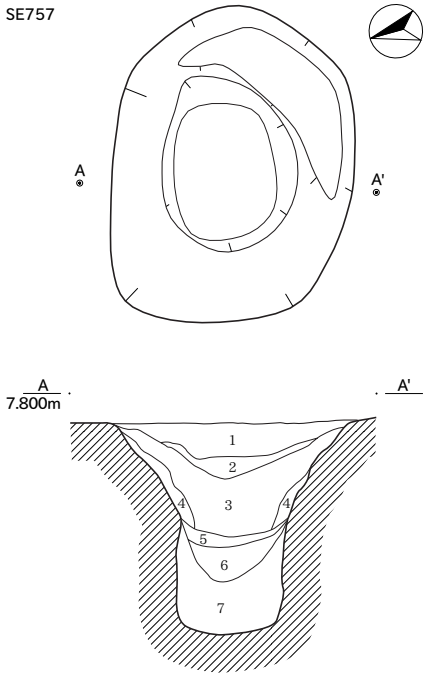
1　黒褐色粘土
2　黒褐色粘土
3　黄灰色粘土

SE554



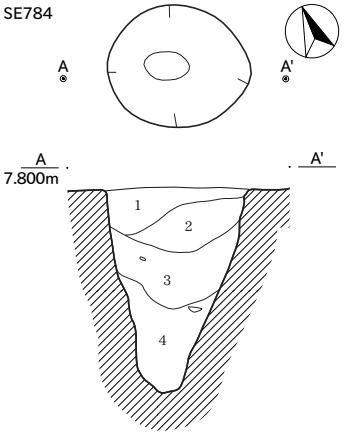
1　黄灰色粘土
2　黄灰色粘土
3　黄灰色粘土　灰色シルトブロック含む
4　灰色粘土
5　灰色粘土
6　灰色粘土
7　灰色粘土
8　黄灰色粘土
9　灰色粘土
10　黄灰色粘土
11　黄色粘土
12　灰色粘土
13　暗灰黄色粘土
14　灰色粘土
15　灰色粘土

SE757



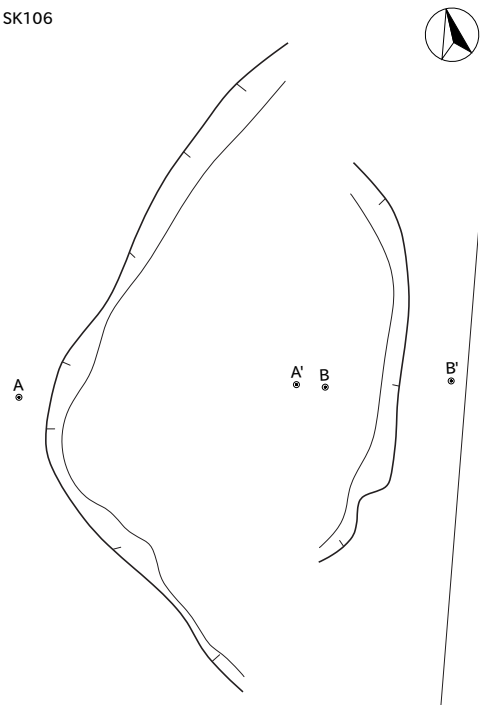
1　黒色粘土
2　暗灰色粘土
3　暗青灰色粘土
4　暗青灰色粘土
5　暗赤灰色粘土
6　赤黒色粘土
7　黄灰色粘土

SE784

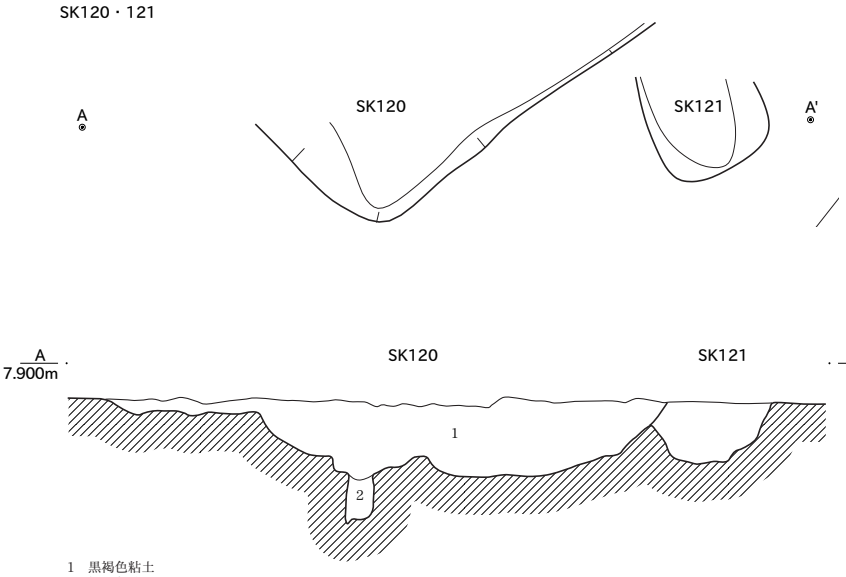


1　褐灰色粘土
2　灰黄褐色粘土　灰白色粘土ブロックを含む
3　黄灰色粘土

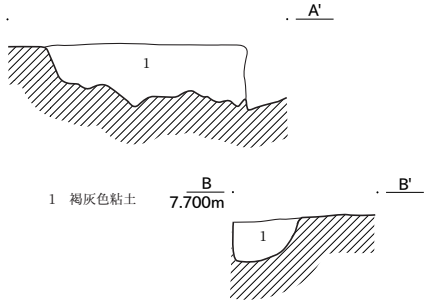
SK106



SK120・121



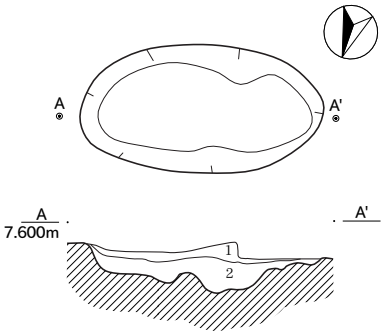
1　黒褐色粘土
2　褐灰色粘土



1　褐灰色粘土

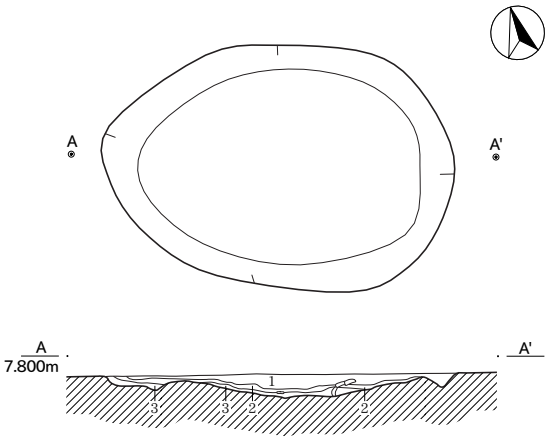
0　（1：40）　2m

SK298



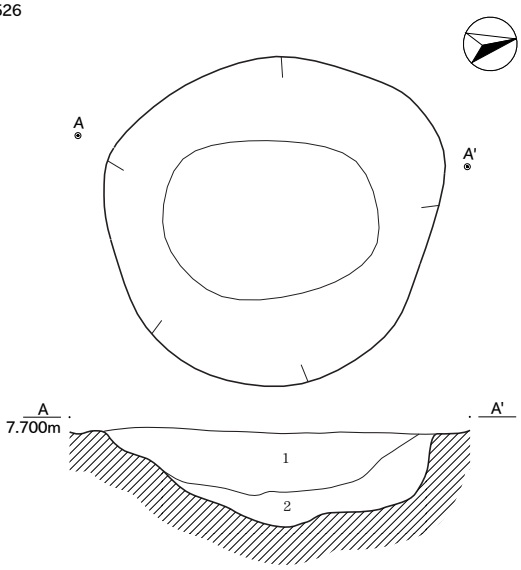
1　黄褐色粘土
2　黒褐色粘土

SK472

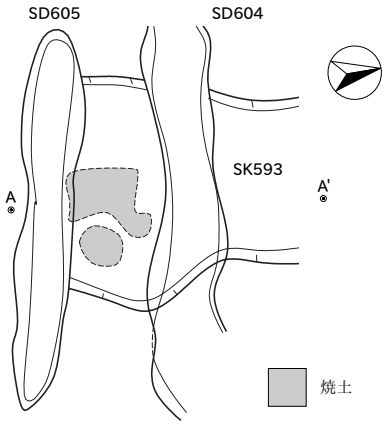


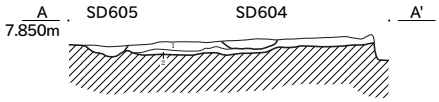
1　褐灰色粘土
2　黒色土　炭化層
3　灰色粘土

SK526



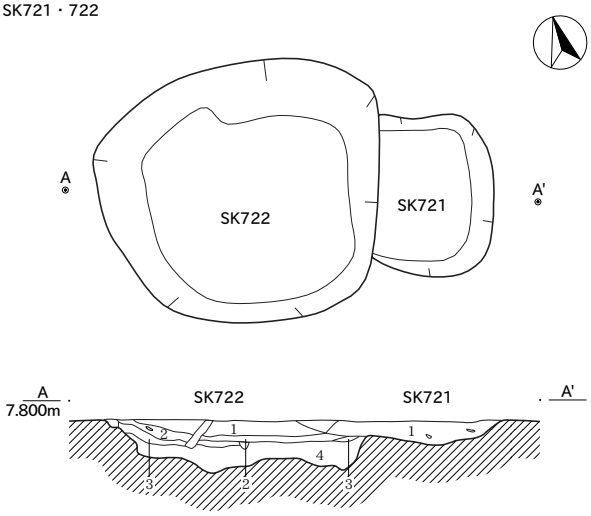
1　にぶい褐色粘土
2　暗褐色粘土





1　黒褐色粘土　焼土炭化物含む
2　褐灰色粘土

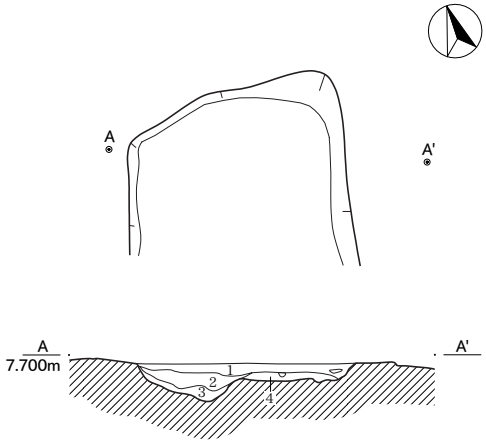
SK721・722



SK721
1　黒褐色粘土

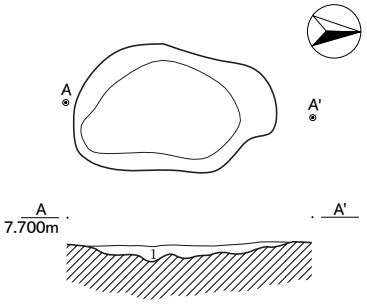
SK722
1　褐灰色粘土
2　黒色土　　炭化層、遺物多く含む
3　黒褐色粘土　炭化物多く含む
4　褐灰色粘土

SK779



1　褐灰色粘土　炭化物多く含む
2　褐灰色粘土
3　灰色シルト
4　灰色シルト

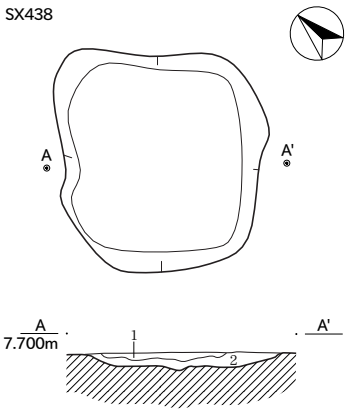
SK972



1　黒褐色粘土

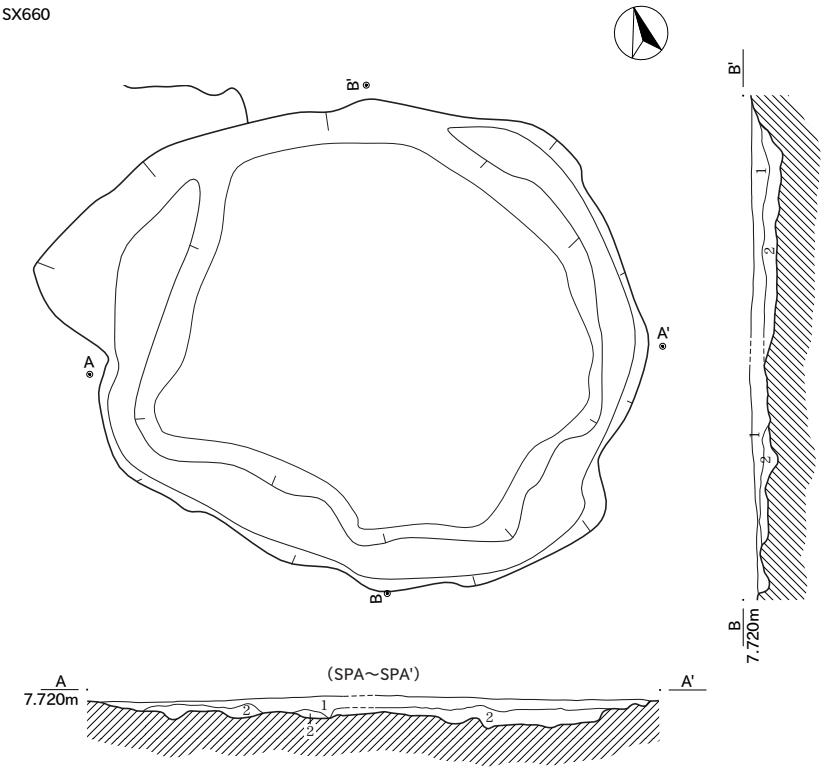
0　（1：40）　2m

SX438



1　灰黄褐色粘土
2　黒色土　炭化層

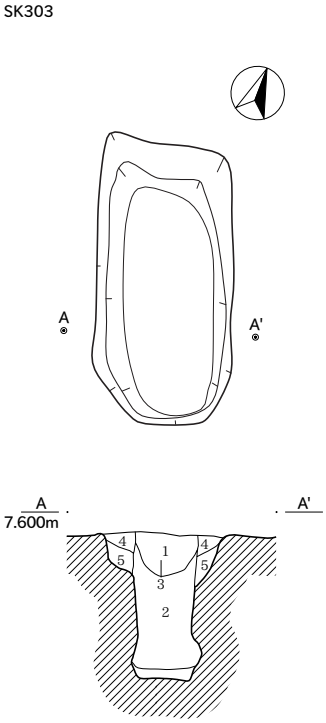
SX660



1　黒褐色粘土
2　黒褐色粘土

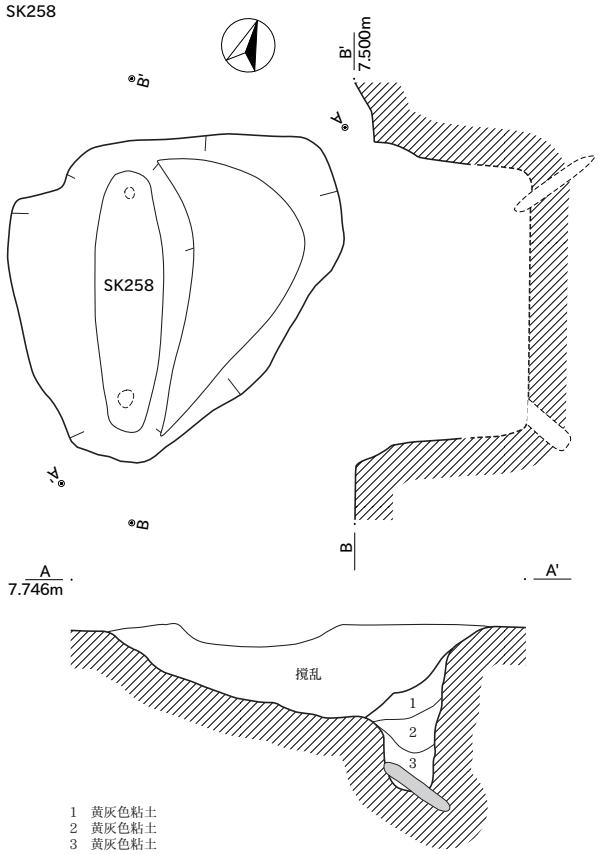
古墳時代の遺構

SK303



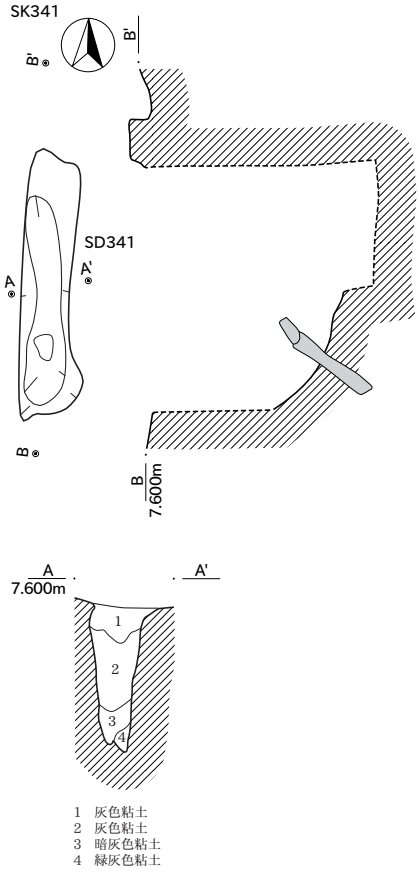
1　灰白色粘土
2　褐灰粘土
3　黒褐色粘土
4　黒褐色粘土
5　暗オリーブシルト

SK258



1　黄灰色粘土
2　黄灰色粘土
3　黄灰色粘土

SK341

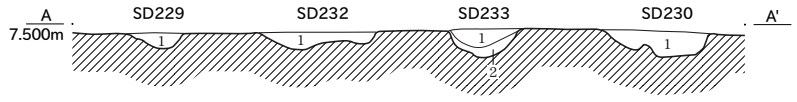


1　灰色粘土
2　灰色粘土
3　暗灰色粘土
4　緑灰色粘土

SX660
0　(1：60)　3m

その他
0　(1：40)　2m

畝状小溝1群（SD229・230・232・233）



SD229
1　黒色粘土

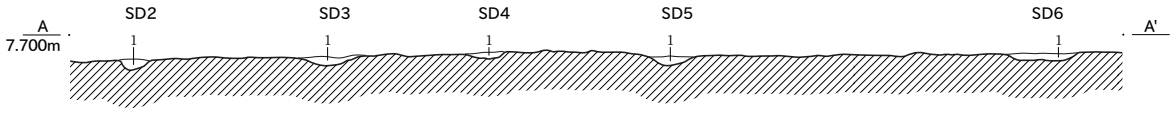
SD232
1　黄灰色粘土

SD233
1　黄灰色粘土
2　黒褐色粘土と灰色シルト混合土

SD230
1　褐灰色粘土

分割図1

畝状小溝3群（SD2～5）

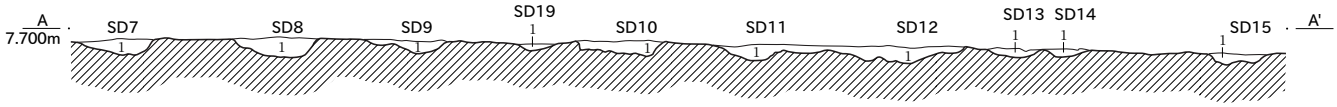


SD2
1　灰色粘土

SD3～5
1　黒褐色粘土

SD6
1　オリーブ黒色粘土

畝状小溝4群（SD7～15・19）

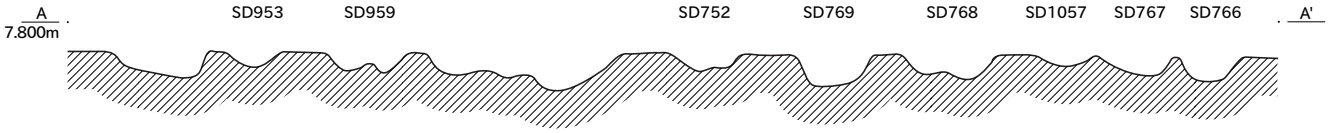


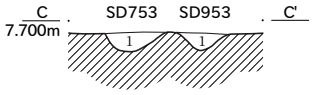
SD7・12～15
1　オリーブ灰色粘土

SD8～11
1　灰色粘土

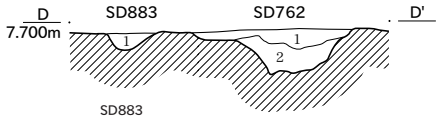
分割図2

畝状小溝7群（SD752・766～769・953・959・1057）





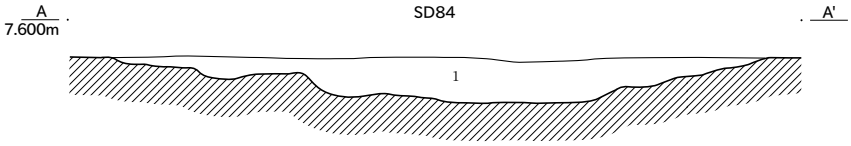
SD753・953
1　褐灰色粘土



SD883
1　褐灰色粘土

SD762
1　褐灰色粘土
2　灰色粘土

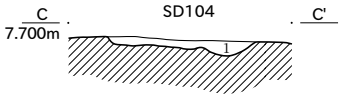
分割図4



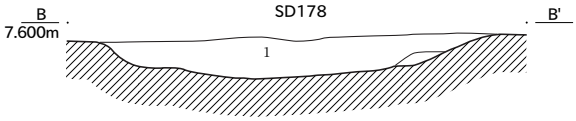
SD84
1　褐灰色粘土

分割図3

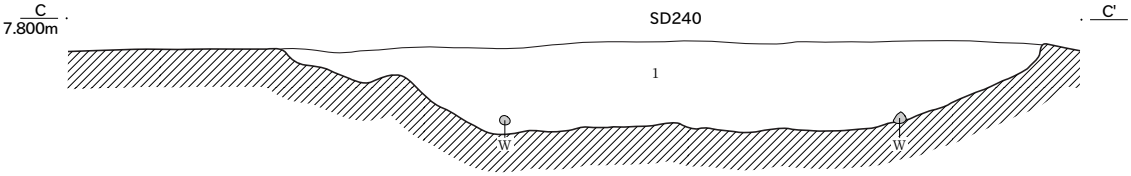
近世以降の遺構



SD104
1　暗灰褐色粘土

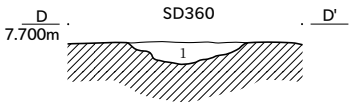


SD178
1　褐灰色粘土

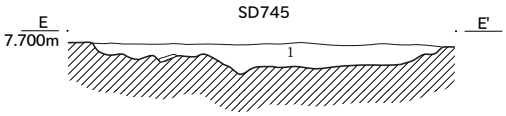


SD240
1　青灰色粘土

分割図1



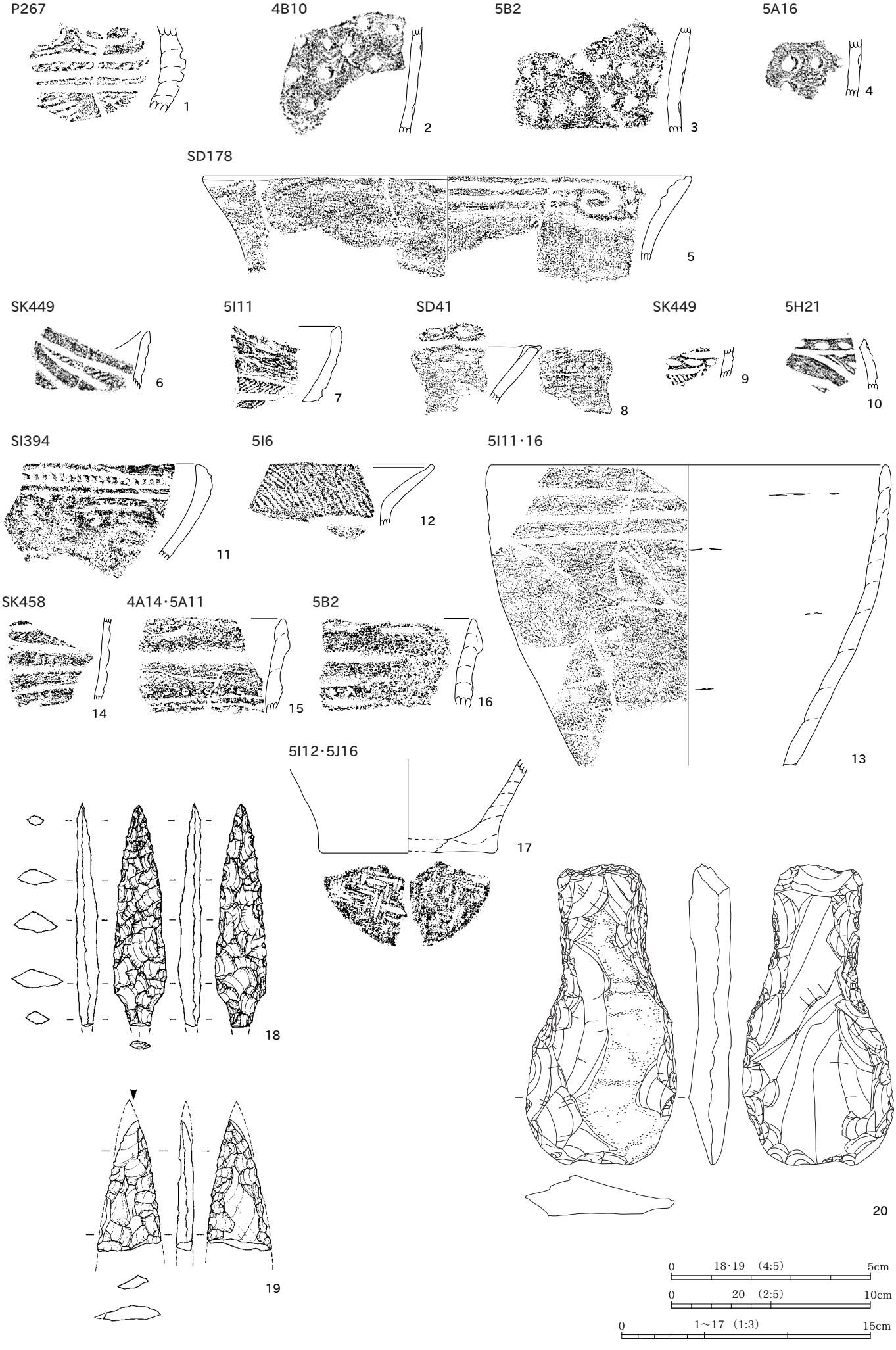
SD360
1　オリーブ灰色粘土



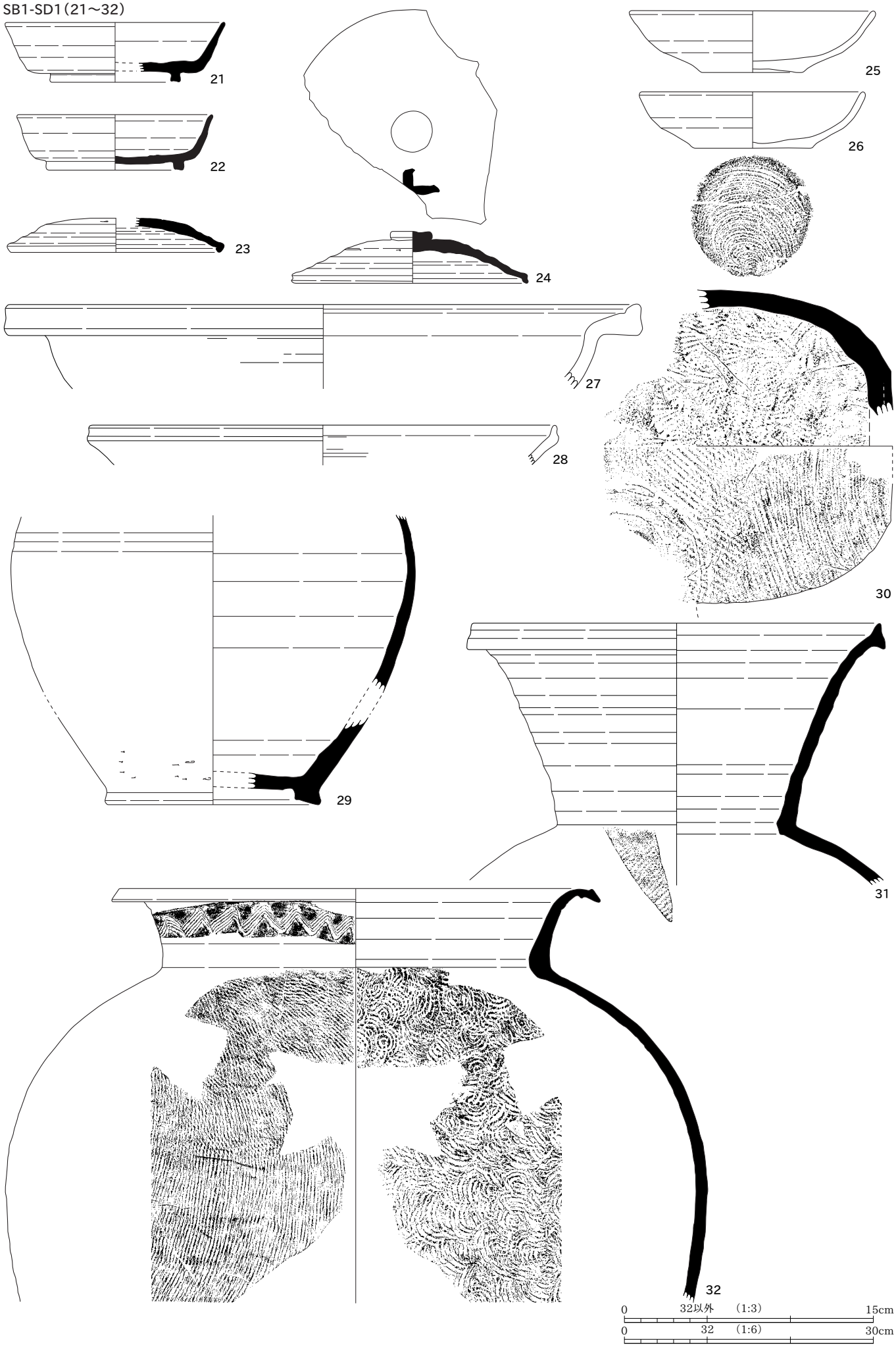
SD745
1　黄灰色粘土

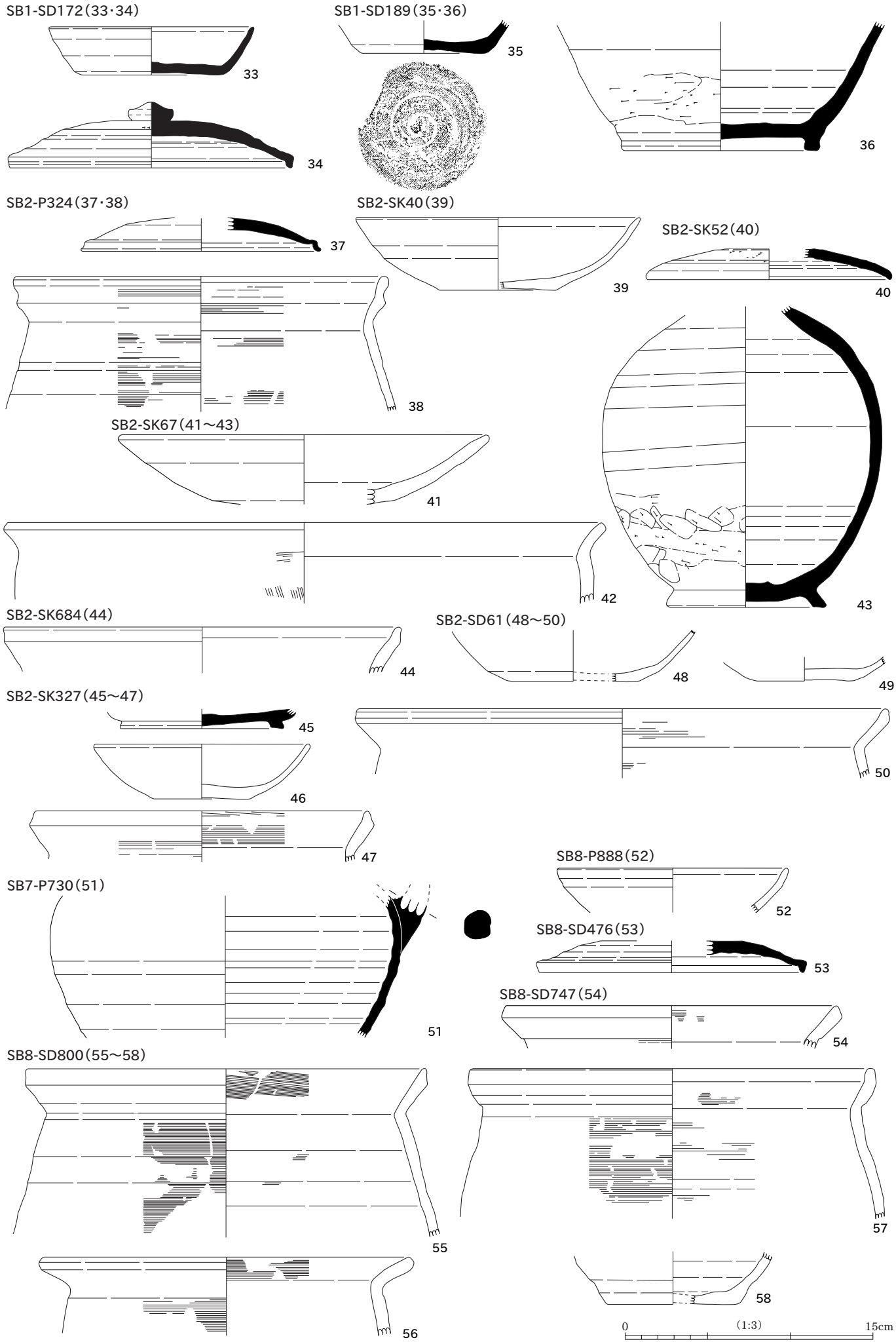
分割図4

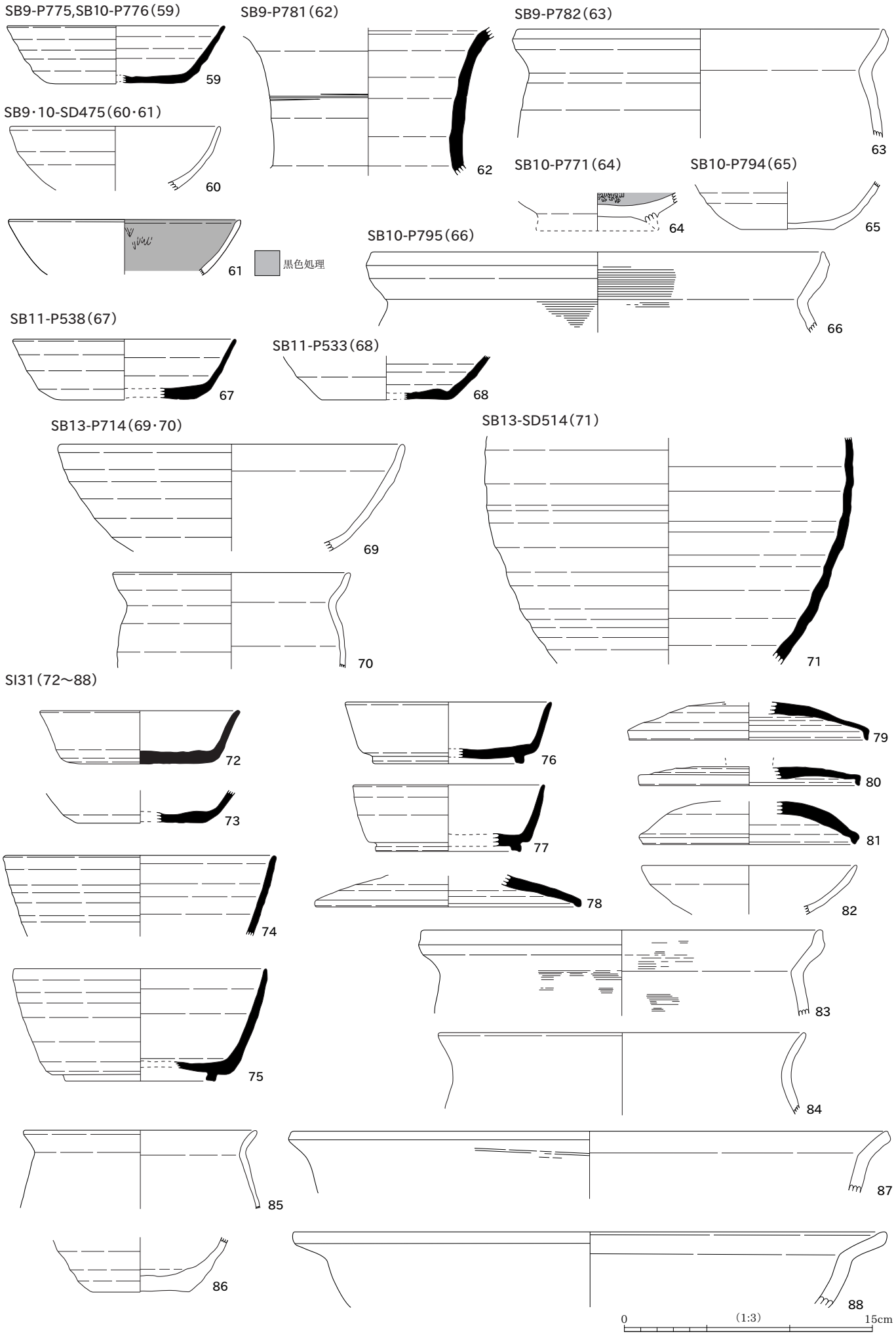
0　（1：40）　2m


P267
1
4B10
2
5B2
3
5A16
4
SD178
5
SK449
6
5I11
7
SD41
8
SK449
9
5H21
10
SI394
11
5I6
12
5I11・16
13
SK458
14
4A14・5A11
15
5B2
16
5I12・5J16
17
18
19
20
0 18・19 (4:5) 5cm
0 20 (2:5) 10cm
0 1～17 (1:3) 15cm

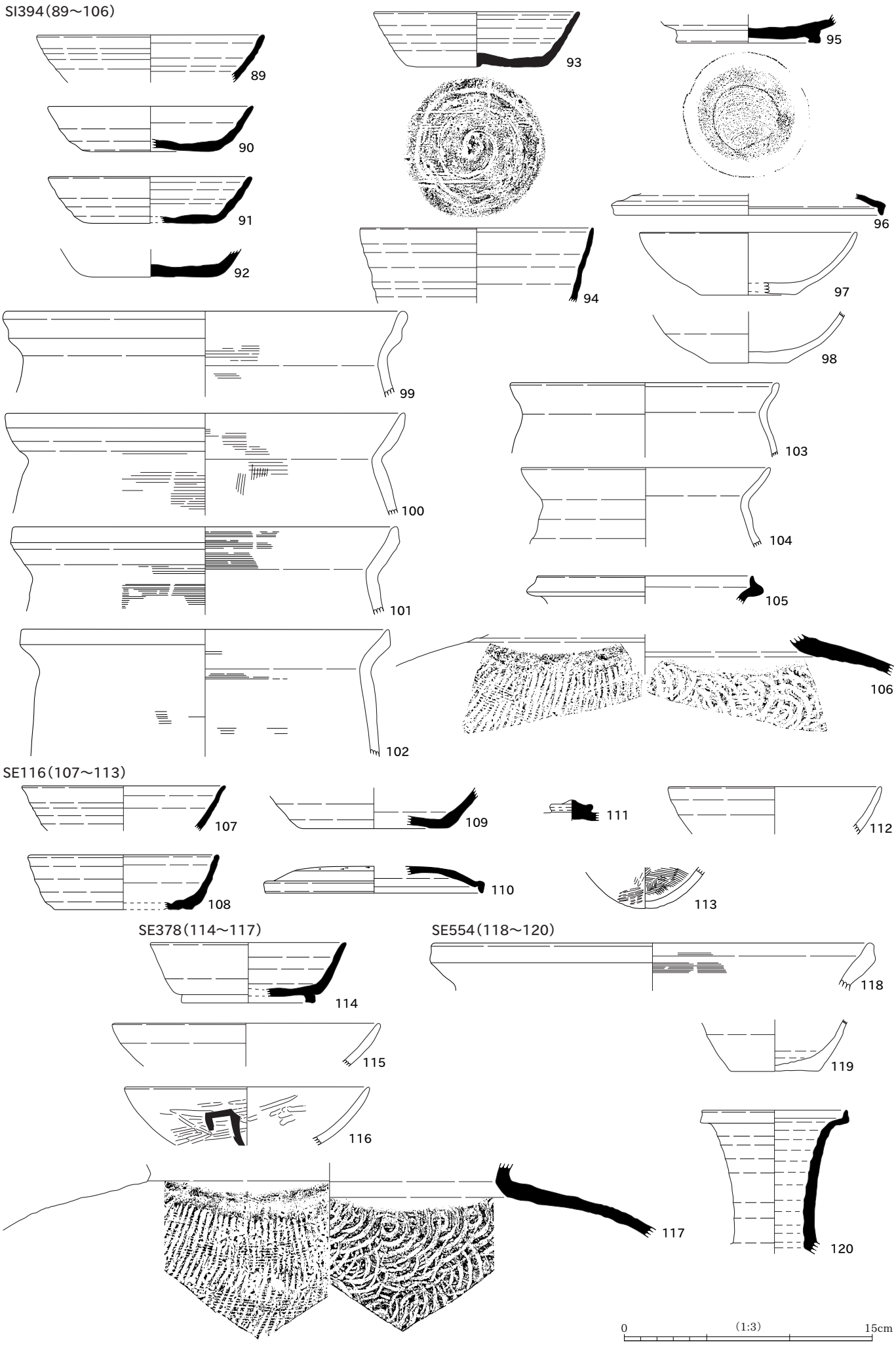
SB1-SD1（21～32）

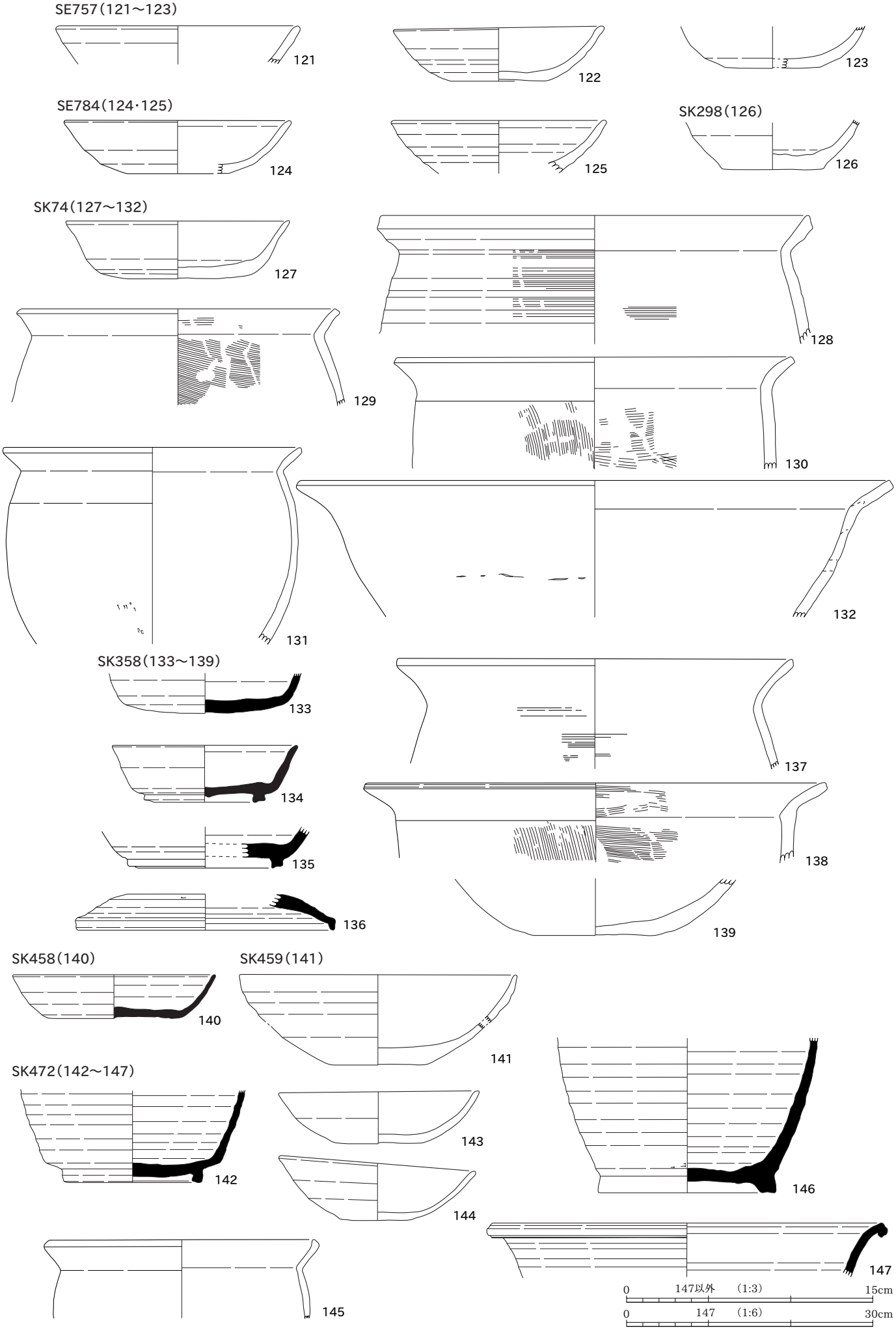


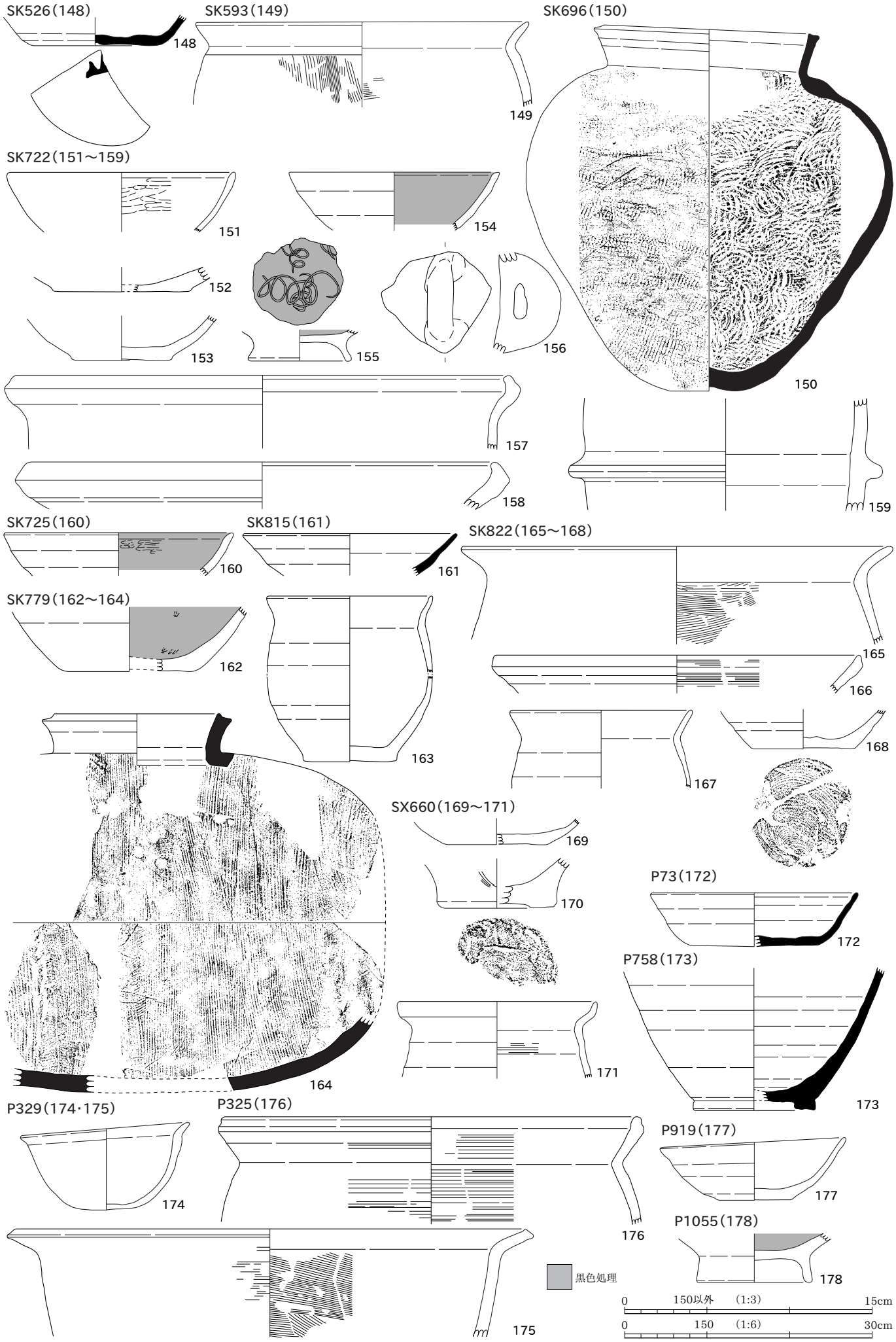

SB1-SD172(33・34)
33
34
SB1-SD189(35・36)
35
36
SB2-P324(37・38)
37
38
SB2-SK40(39)
39
SB2-SK52(40)
40
SB2-SK67(41～43)
41
42
43
SB2-SK684(44)
44
SB2-SD61(48～50)
48
49
SB2-SK327(45～47)
45
46
47
50
SB7-P730(51)
51
SB8-P888(52)
52
SB8-SD476(53)
53
SB8-SD747(54)
54
SB8-SD800(55～58)
55
56
57
58
0
(1:3)
15cm

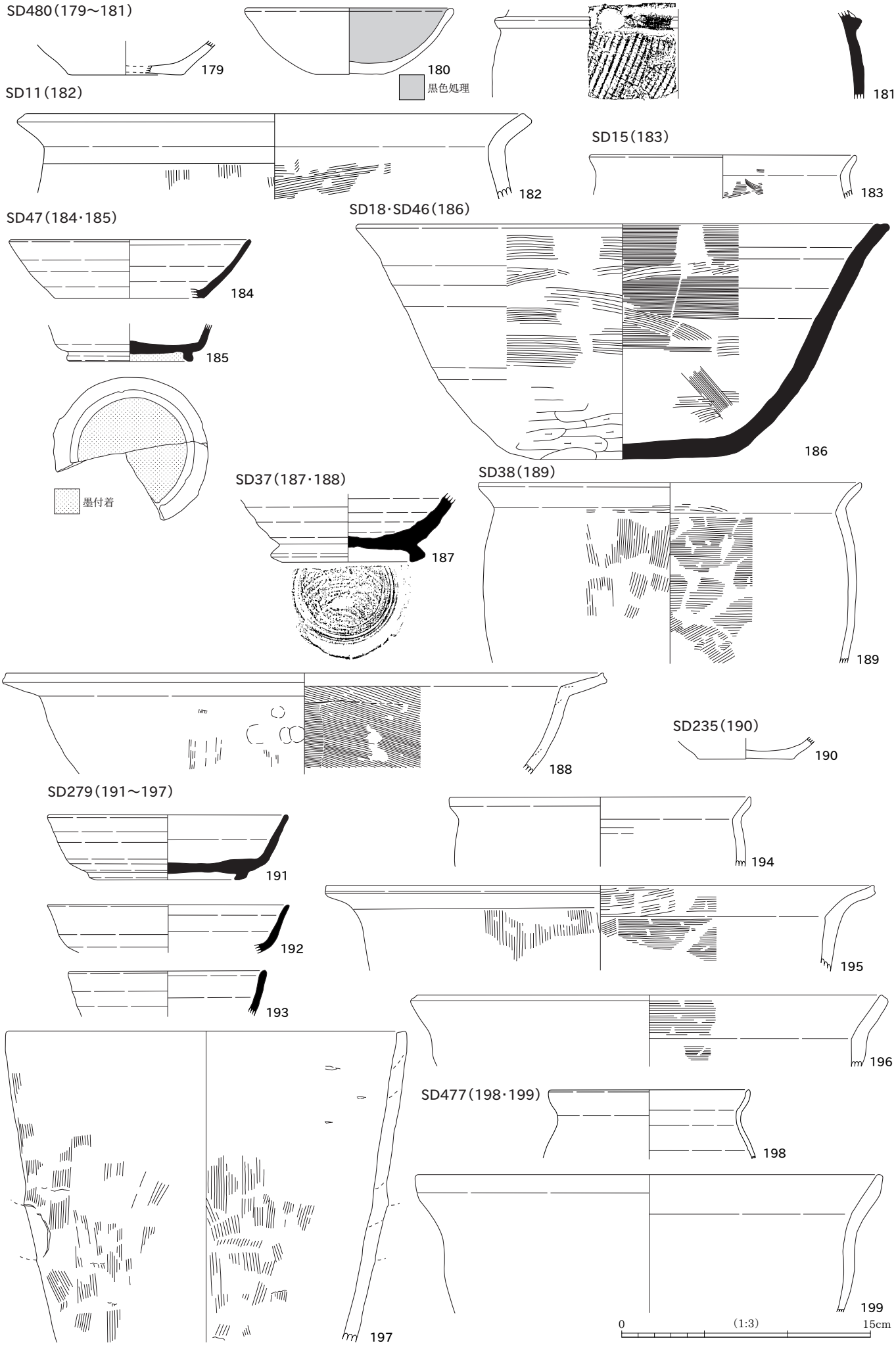

SB9-P775,SB10-P776（59）
59
SB9-P781（62）
62
SB9-P782（63）
63
SB9・10-SD475（60・61）
60
61
黒色処理
SB10-P771（64）
64
SB10-P794（65）
65
SB10-P795（66）
66
SB11-P538（67）
67
SB11-P533（68）
68
SB13-P714（69・70）
69
70
SB13-SD514（71）
71
SI31（72～88）
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
0
(1:3)
15cm

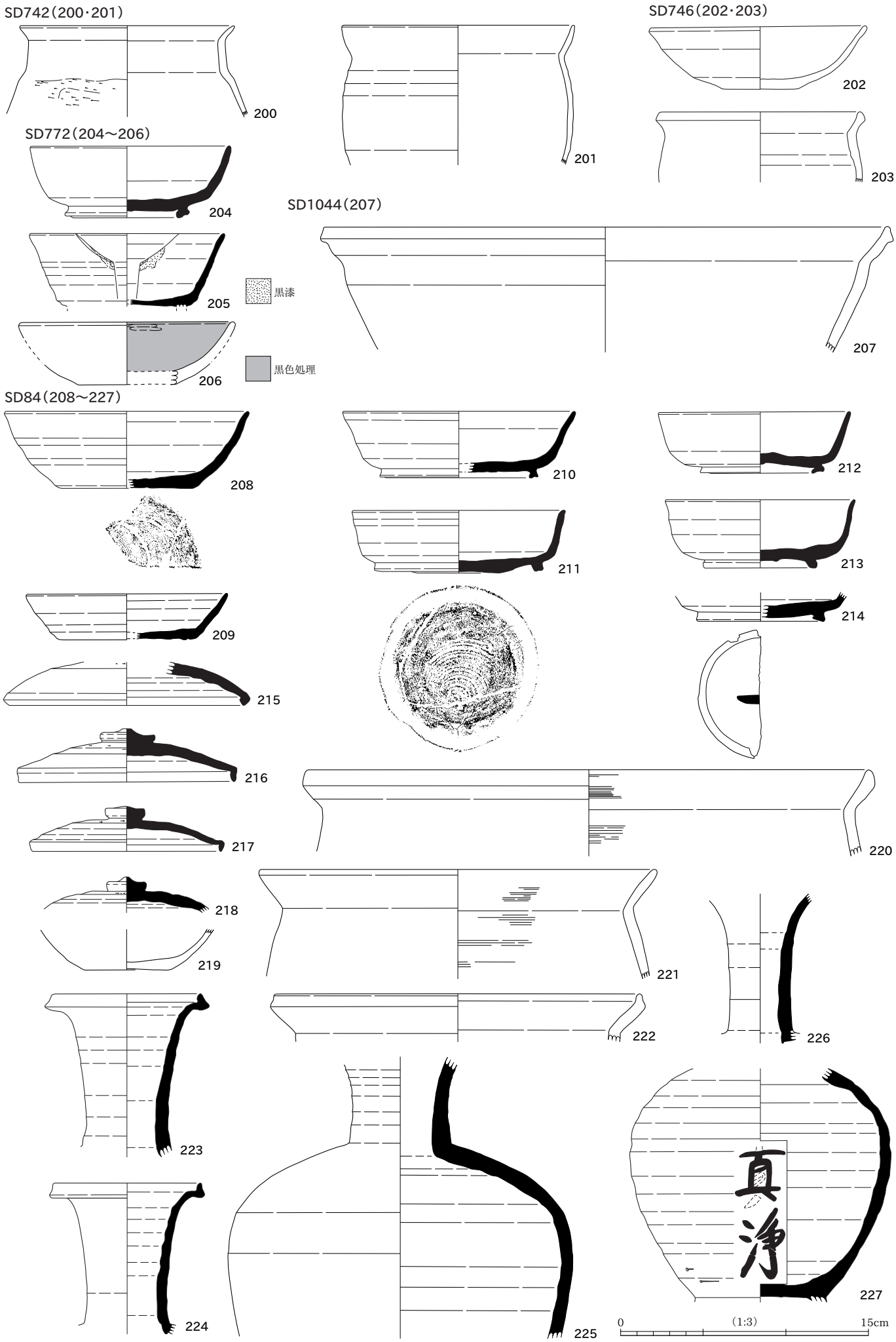
SI394（89～106）

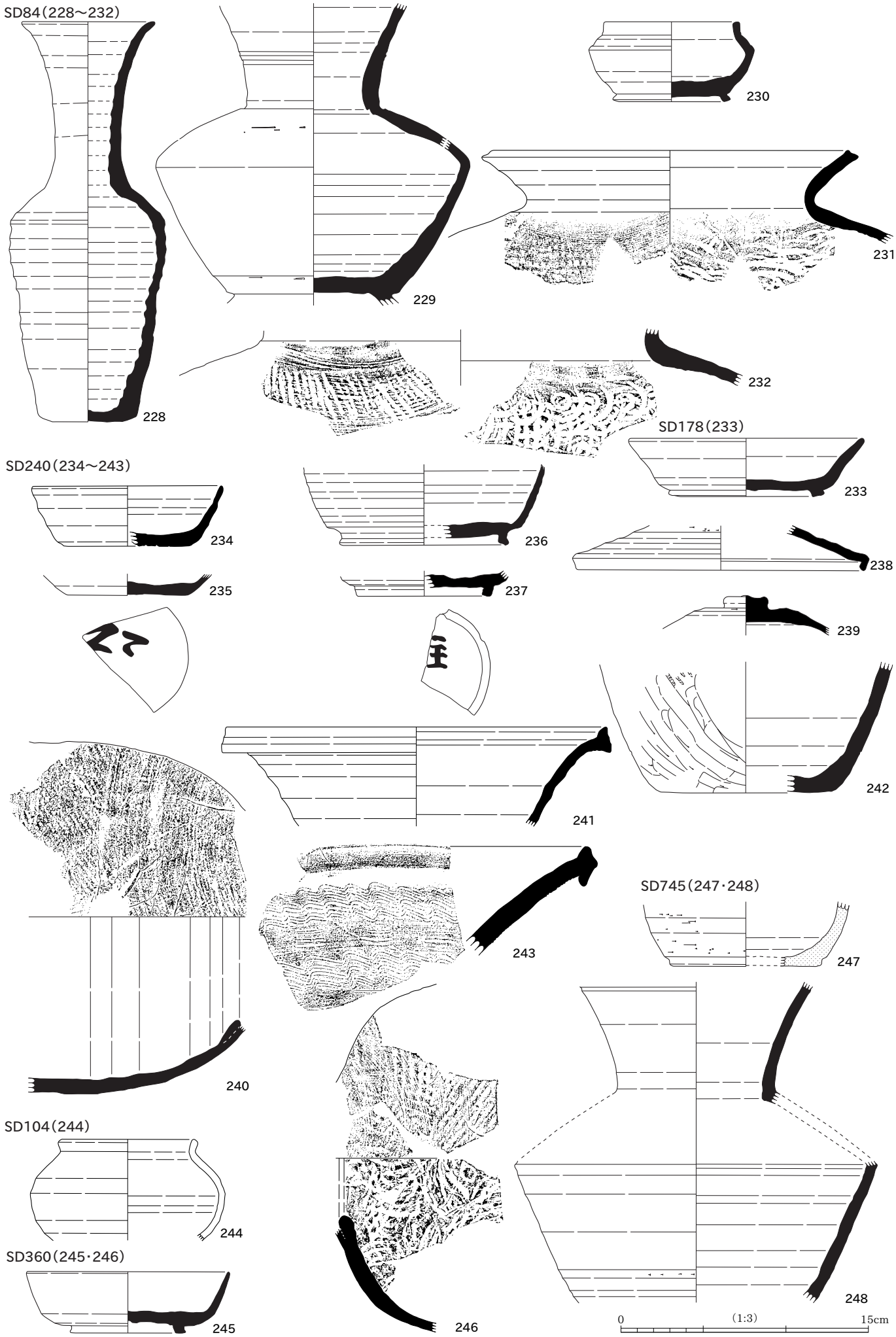

89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
SE116（107～113）
107
108
109
110
111
112
113
SE378（114～117）
114
115
116
117
SE554（118～120）
118
119
120
0
（1:3）
15cm


SE757（121～123）
121
122
123
SE784（124・125）
124
125
SK298（126）
126
SK74（127～132）
127
128
129
130
131
132
SK358（133～139）
133
134
135
136
137
138
139
SK458（140）
140
SK459（141）
141
SK472（142～147）
142
143
144
145
146
147
0　147以外　（1:3）　15cm
0　147　（1:6）　30cm

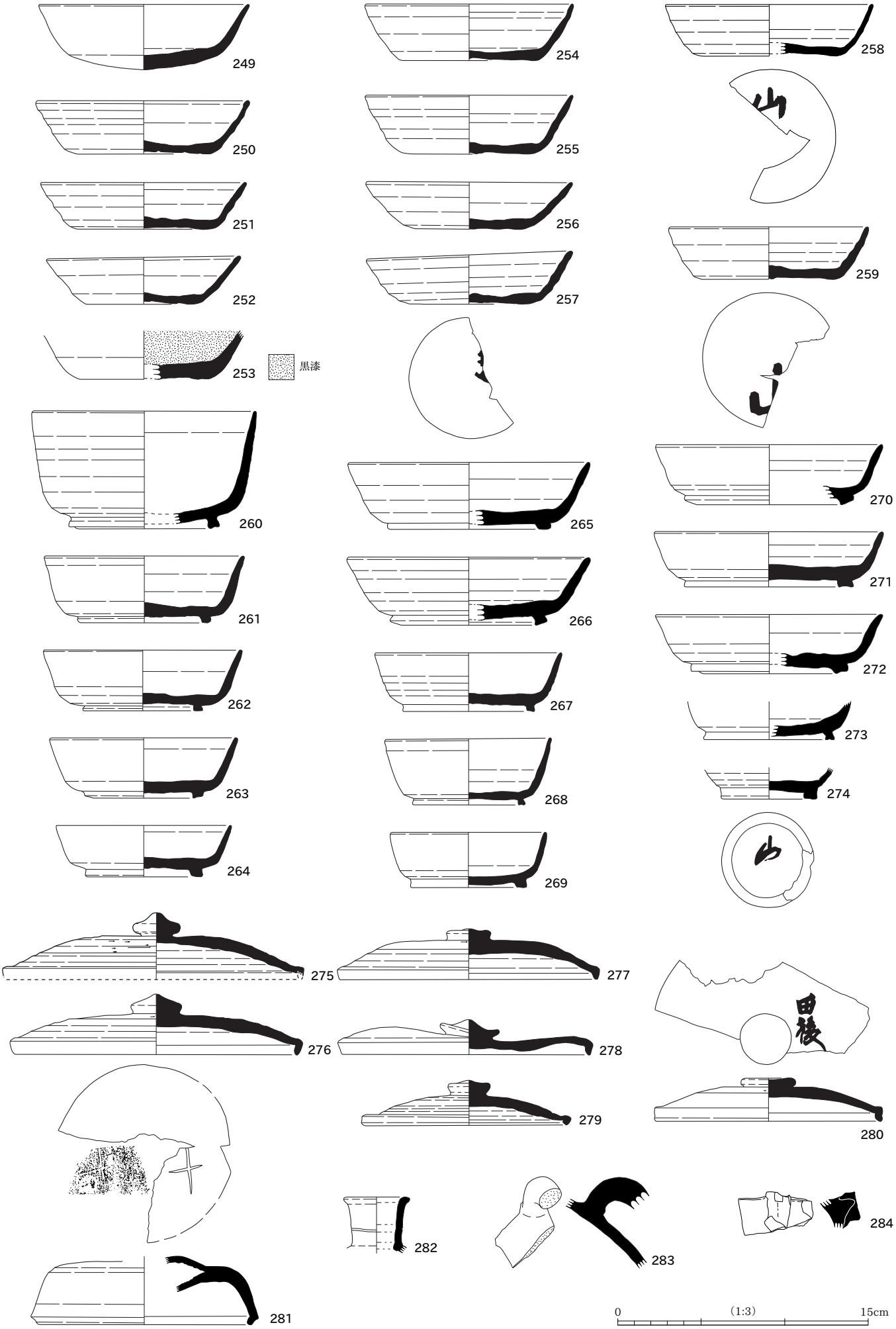

SK526(148)
148
SK593(149)
149
SK696(150)
150
SK722(151～159)
151
152
153
154
155
156
157
158
159
SK725(160)
160
SK815(161)
161
SK822(165～168)
165
166
167
168
SK779(162～164)
162
163
164
SX660(169～171)
169
170
171
P73(172)
172
P758(173)
173
P329(174･175)
174
175
P325(176)
176
P919(177)
177
P1055(178)
178
黒色処理
0　150以外　(1:3)　15cm
0　150　(1:6)　30cm


SD480（179～181）
179
180
黒色処理
181
SD11（182）
182
SD15（183）
183
SD47（184・185）
184
185
墨付着
SD18・SD46（186）
186
SD37（187・188）
187
SD38（189）
189
188
SD235（190）
190
SD279（191～197）
191
192
193
194
195
196
197
SD477（198・199）
198
199
0
(1:3)
15cm

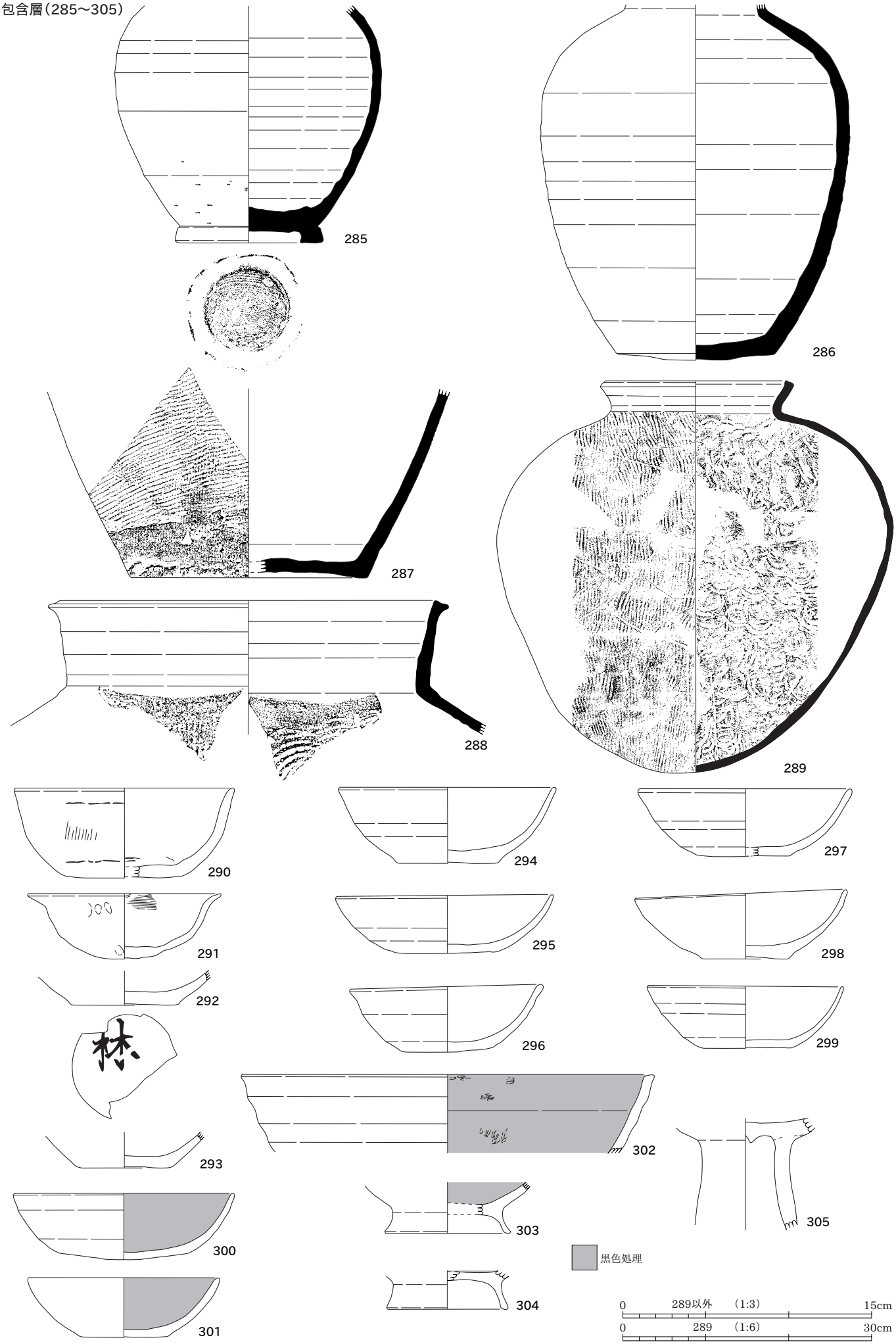

SD742（200・201）
200
201
SD746（202・203）
202
203
SD772（204～206）
204
205
206
黒漆
黒色処理
SD1044（207）
207
SD84（208～227）
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
真浄
0
（1:3）
15cm


SD84（228～232）
228
229
230
231
232
SD178（233）
233
SD240（234～243）
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
SD745（247・248）
247
248
SD104（244）
244
SD360（245・246）
245
246
0
(1:3)
15cm

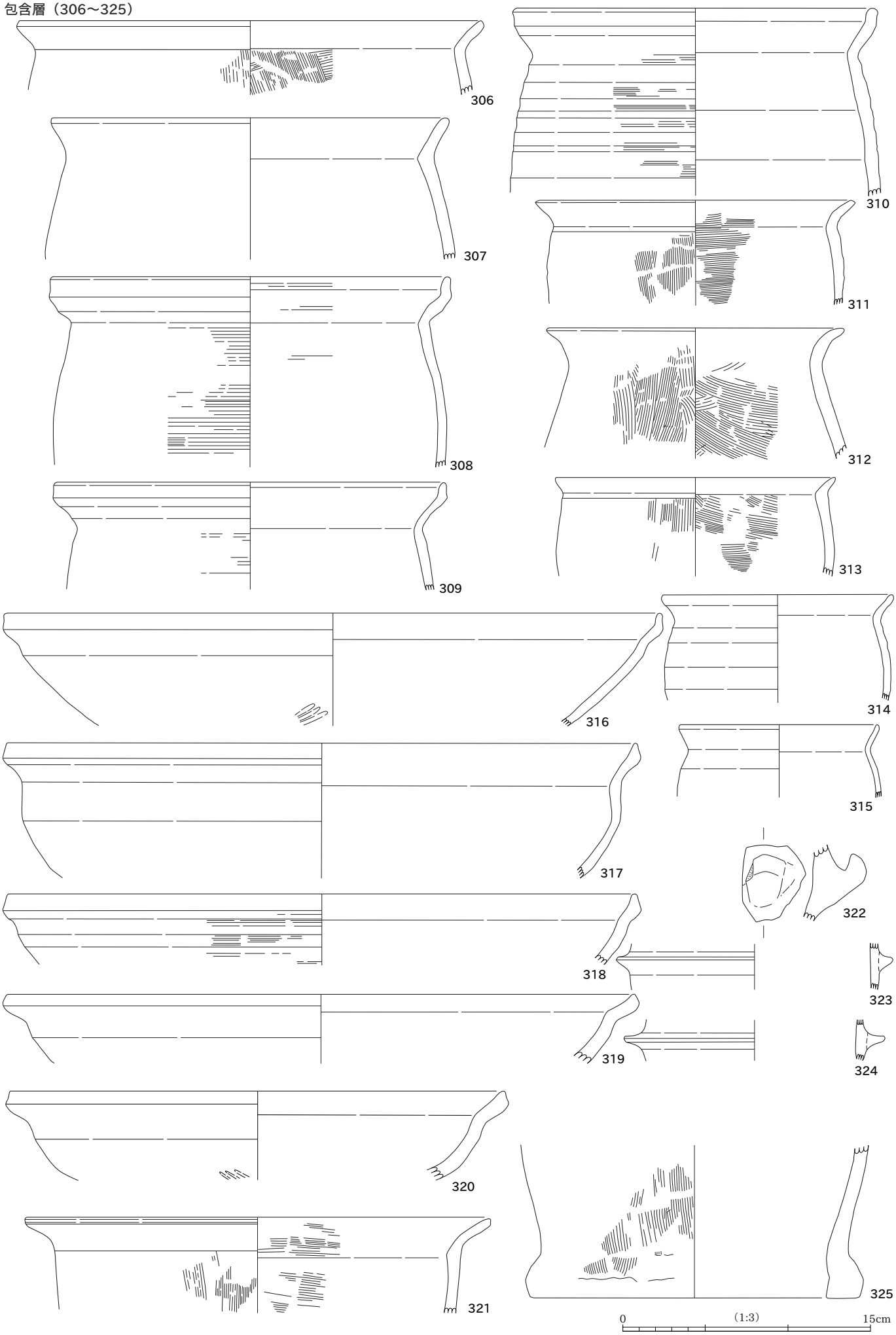
包含層（249～284）

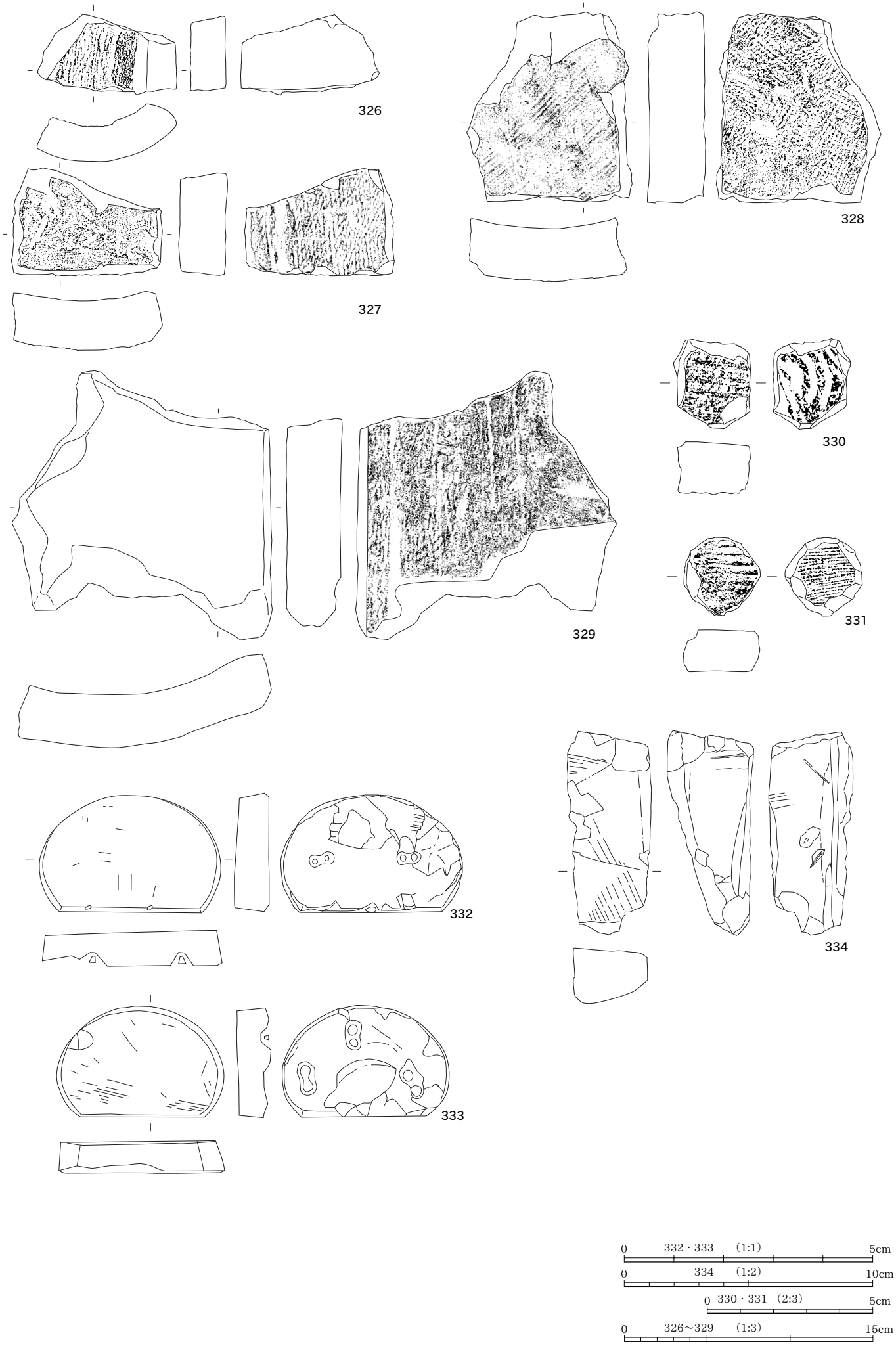

249
250
251
252
253
黒漆
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
0
(1:3)
15cm

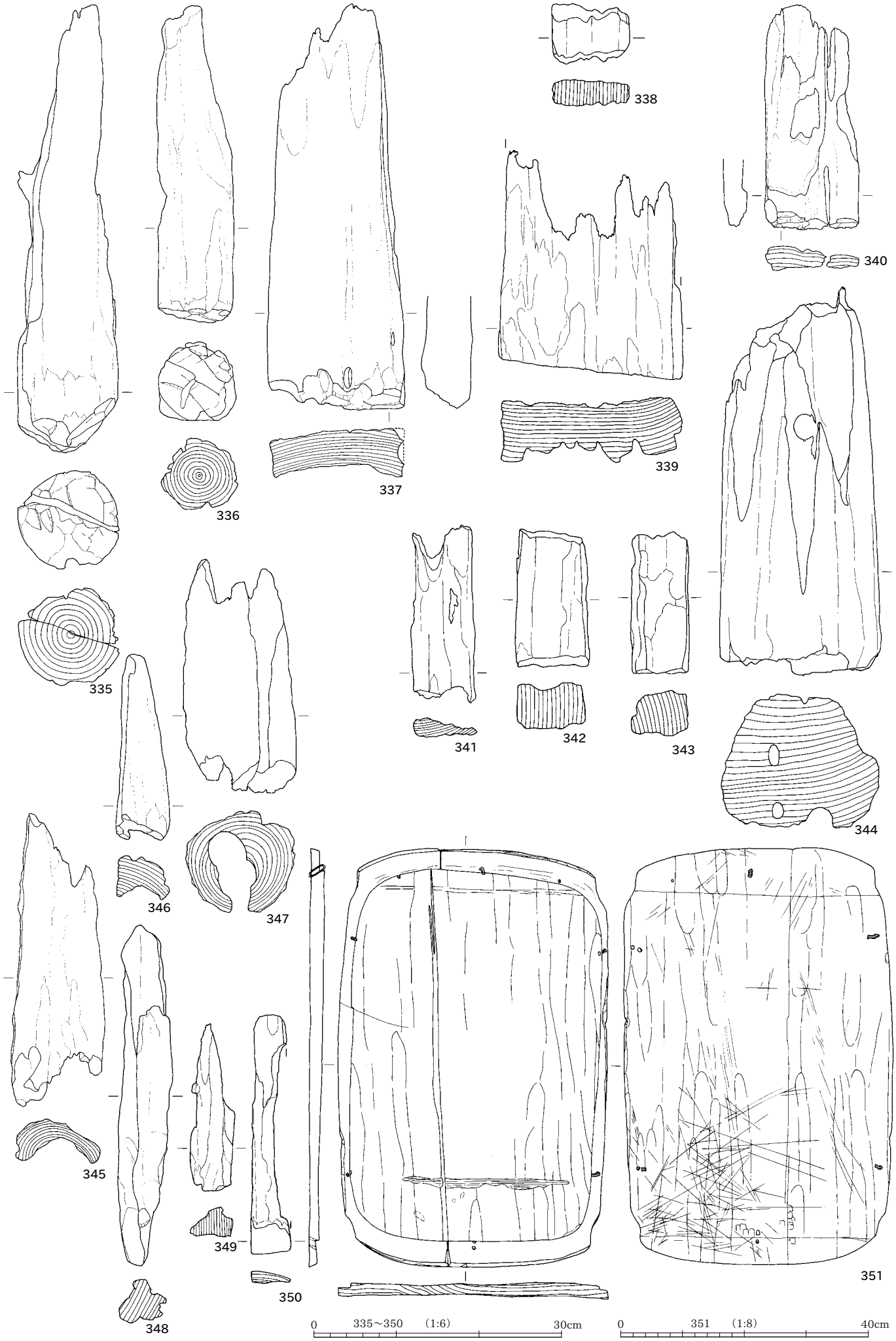
包含層（285～305）

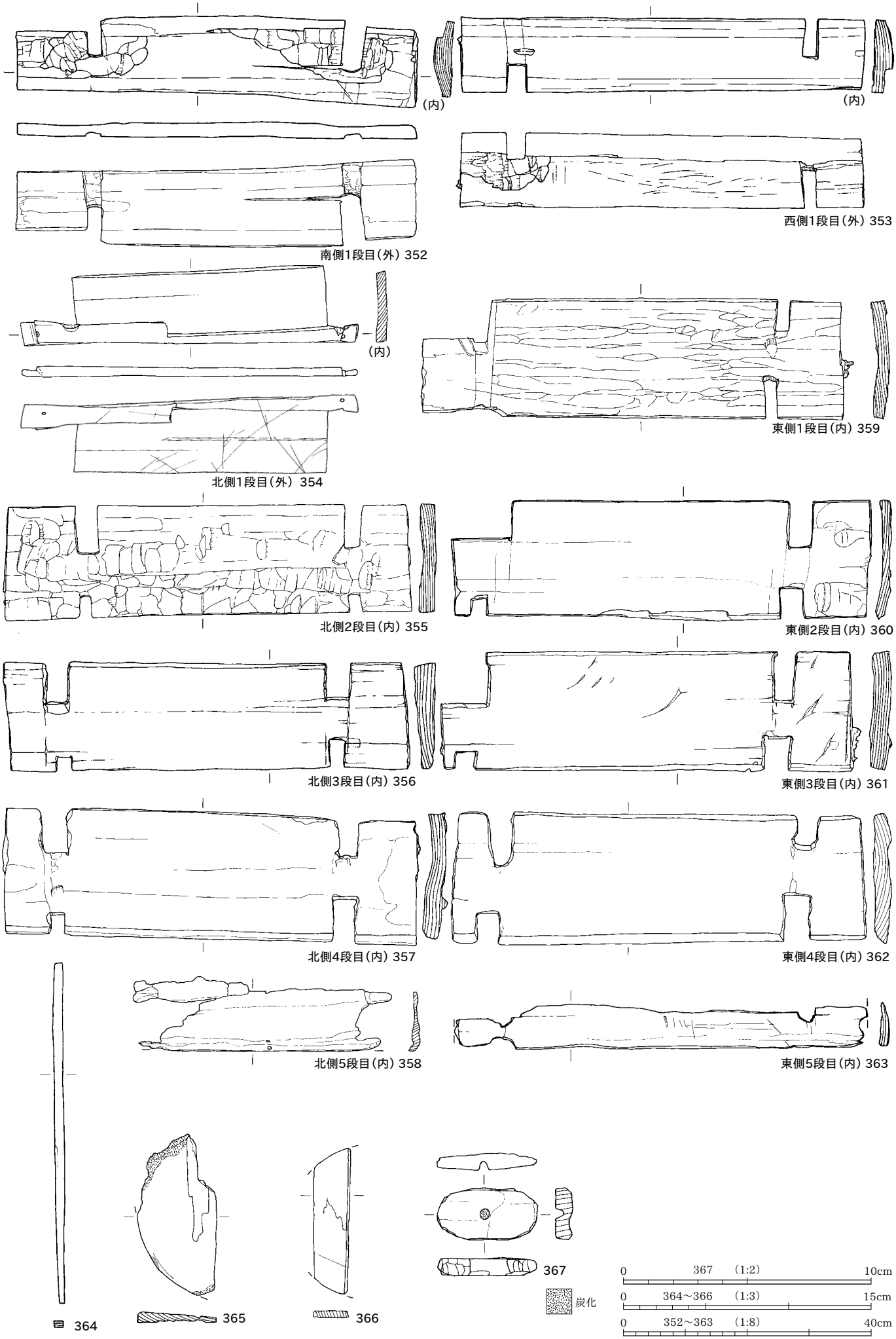

285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
黒色処理
0　289以外　(1:3)　15cm
0　289　(1:6)　30cm

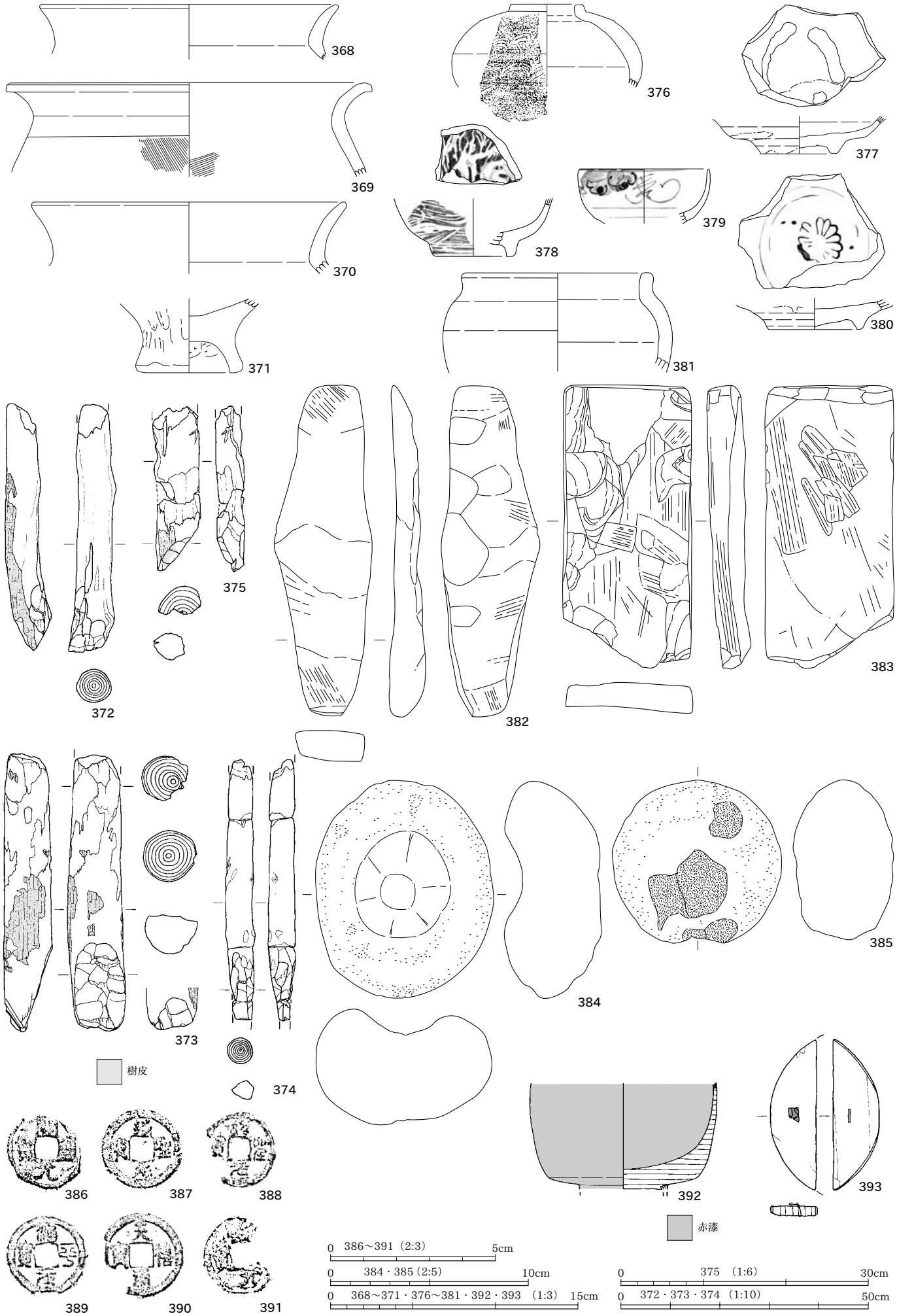
包含層（306～325）


306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
0
(1:3)
15cm


326
327
328
329
330
331
332
333
334
0　332・333　(1:1)　5cm
0　334　(1:2)　10cm
0　330・331　(2:3)　5cm
0　326～329　(1:3)　15cm


338
340
336
337
339
335
341
342
343
344
346
347
345
349
350
348
351
0 335～350 (1:6) 30cm
0 351 (1:8) 40cm

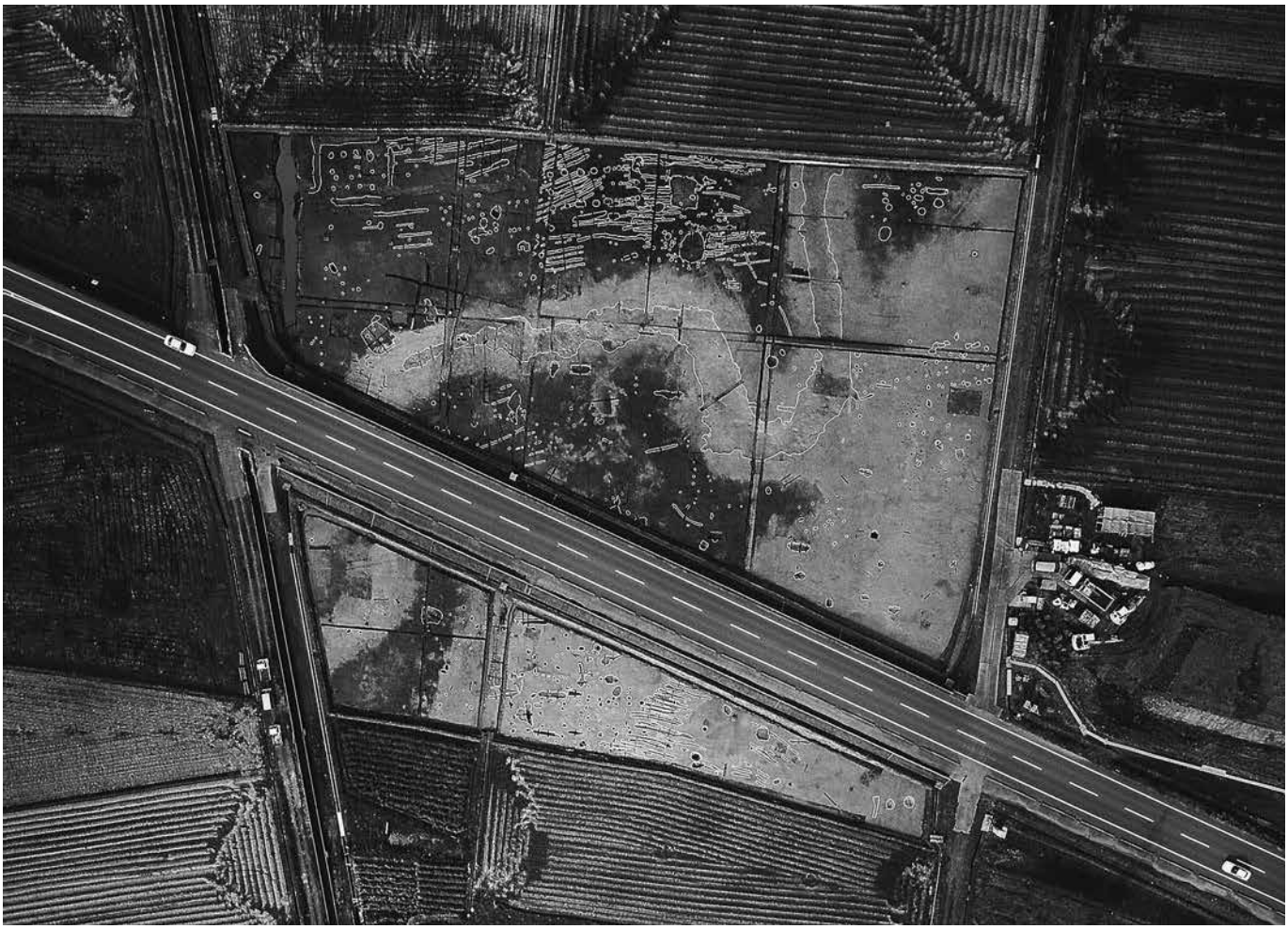

（内）
（内）
南側1段目（外）352
西側1段目（外）353
（内）
北側1段目（外）354
東側1段目（内）359
北側2段目（内）355
東側2段目（内）360
北側3段目（内）356
東側3段目（内）361
北側4段目（内）357
東側4段目（内）362
北側5段目（内）358
東側5段目（内）363
364
365
366
367
炭化
0　367　（1:2）　10cm
0　364～366　（1:3）　15cm
0　352～363　（1:8）　40cm


368
369
370
371
376
377
378
379
380
381
372
373
374
375
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
樹皮
赤漆
0 386～391（2:3） 5cm
0 384・385（2:5） 10cm
0 368～371・376～381・392・393 （1:3） 15cm
0 375 （1:6） 30cm
0 372・373・374 （1:10） 50cm

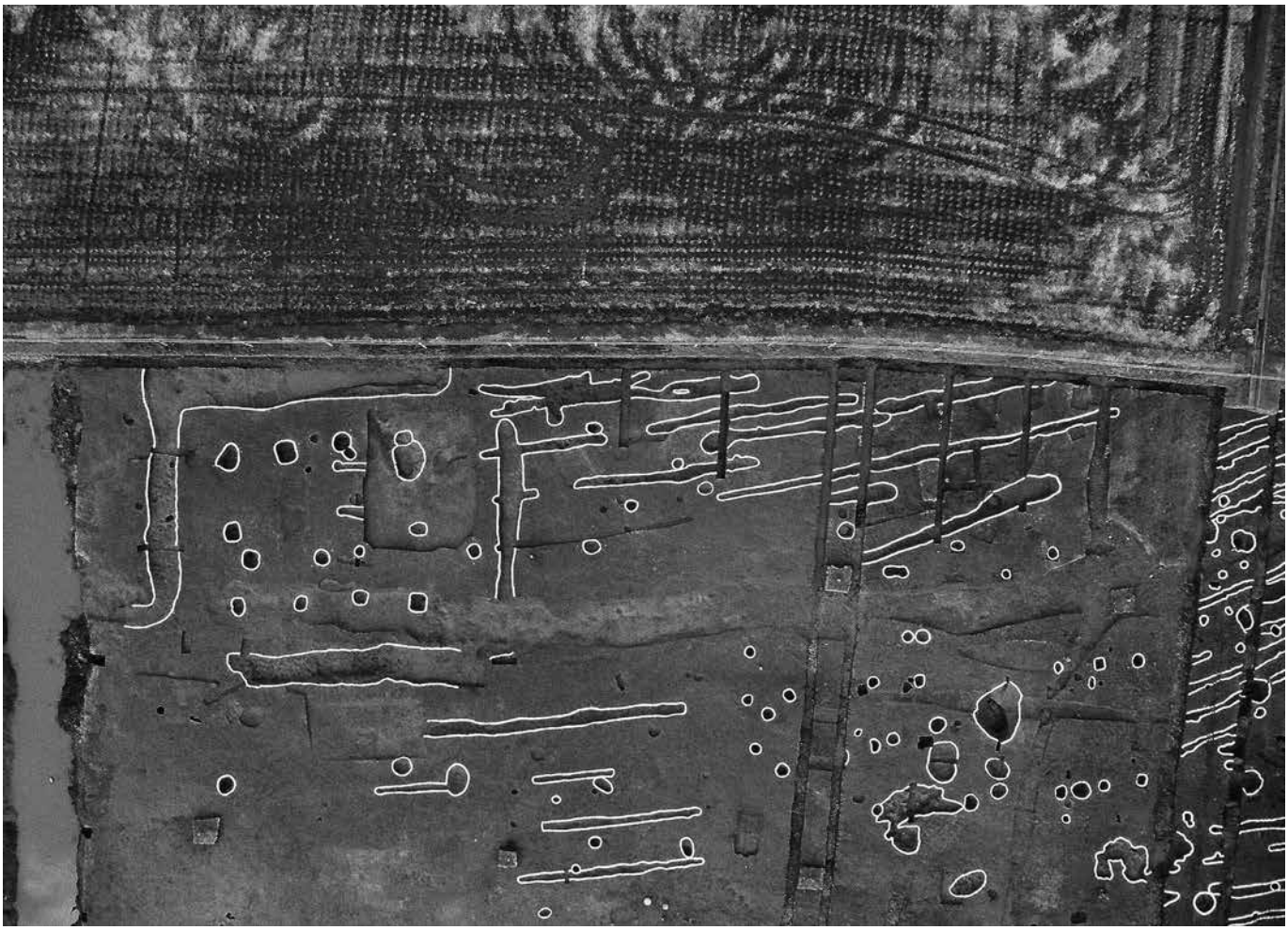
SE116（南から）

古墳時代の陥し穴SK258（西から）

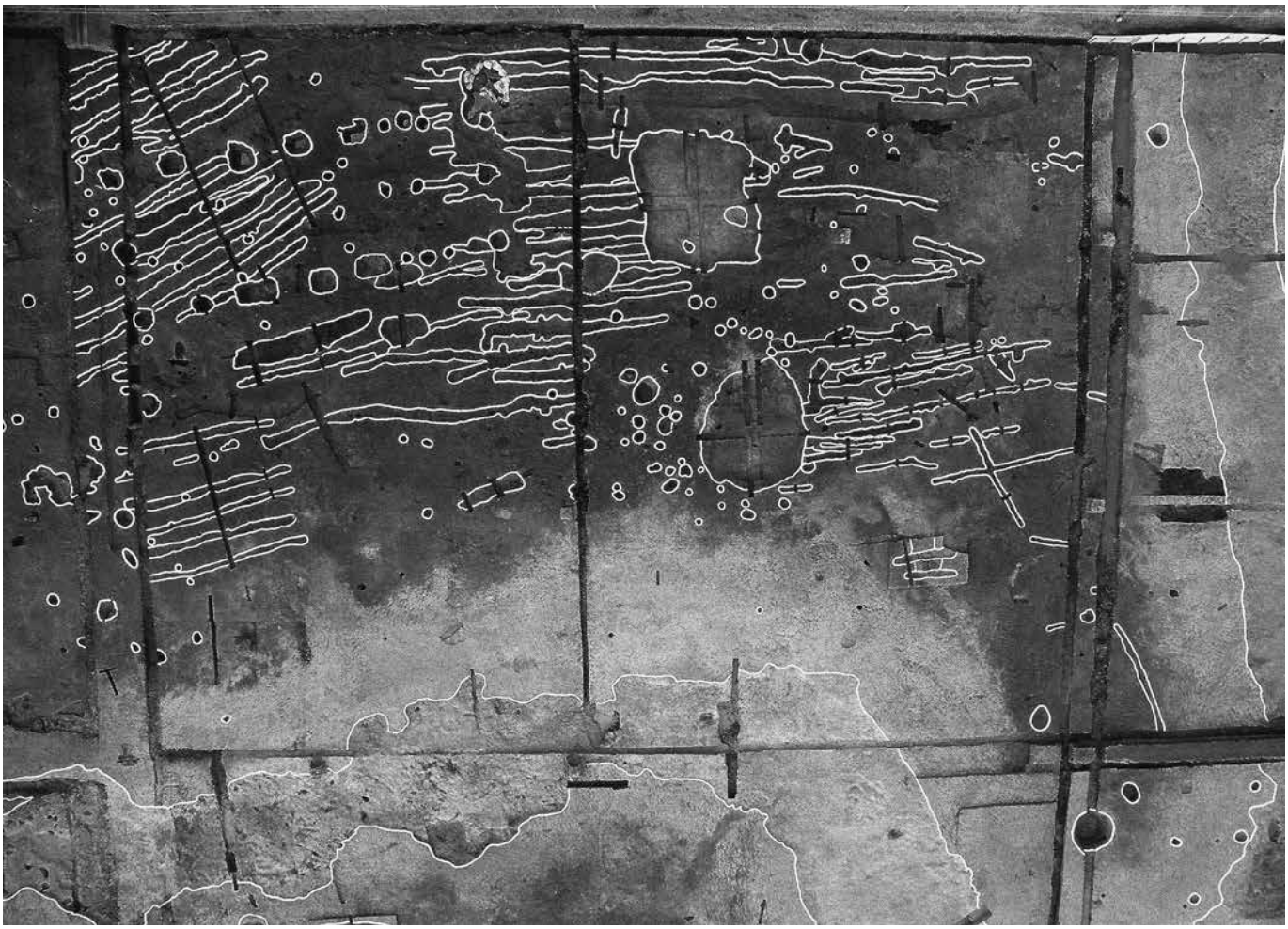
遺跡近景（東から高田市街を望む）



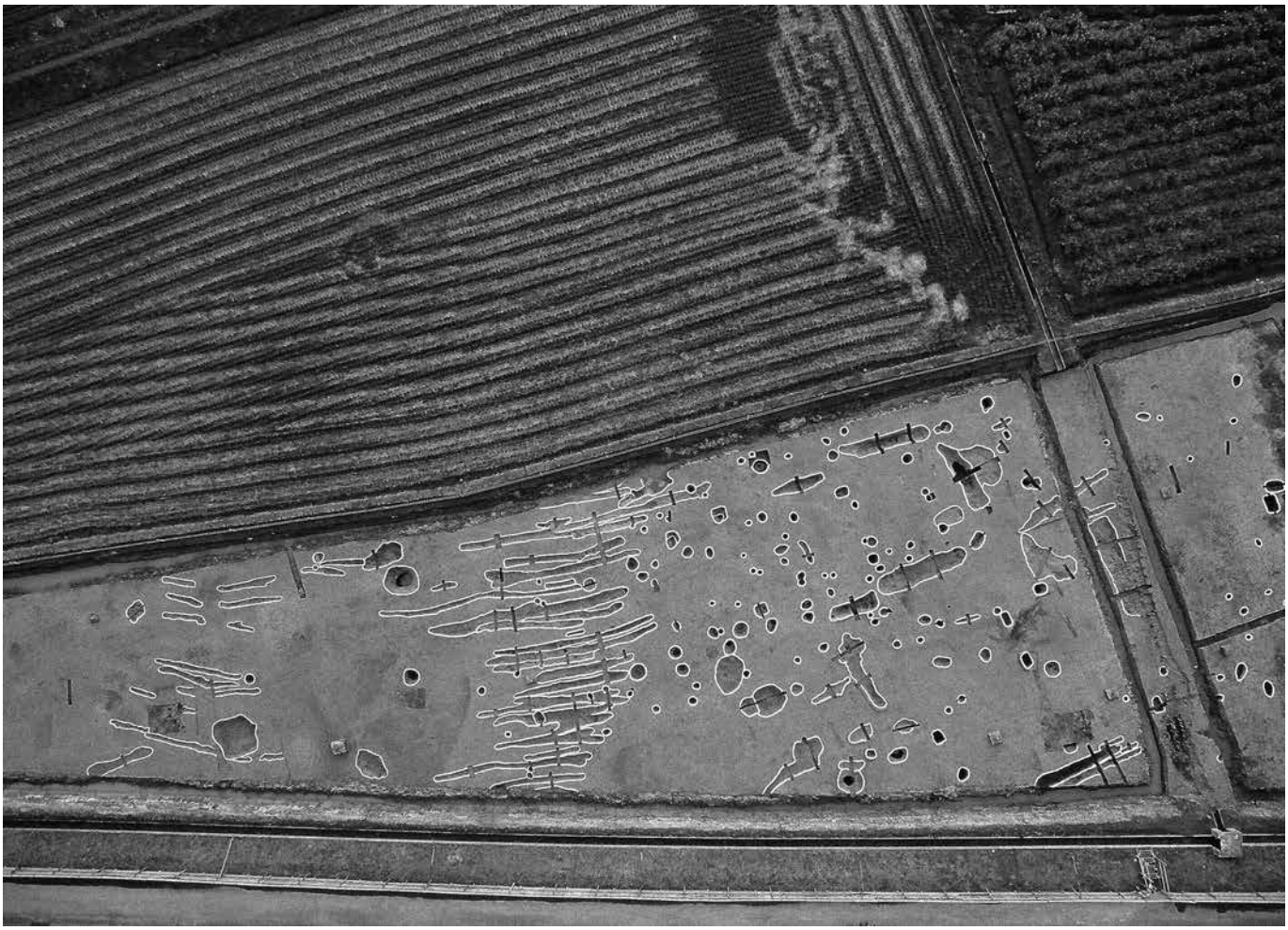
遺跡全景（上空から）



SB1 周辺（上空から）



SB2・SI394 周辺（上空から）

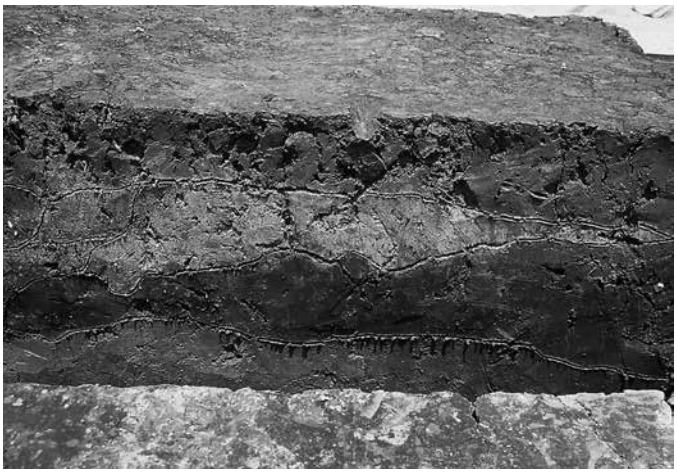


SB8～SB10周辺（上空）

SB12・SB13周辺（上空から）

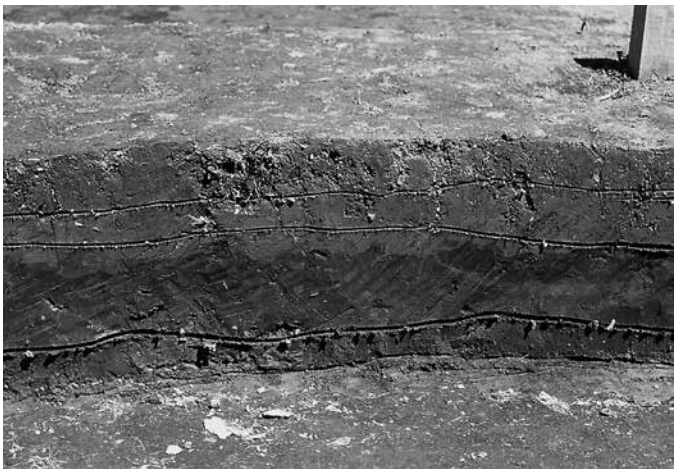
SI31（南東から）

SI394 周辺（南西から）



④4D5基本層序（南から）

⑧11D1基本層序（南から）

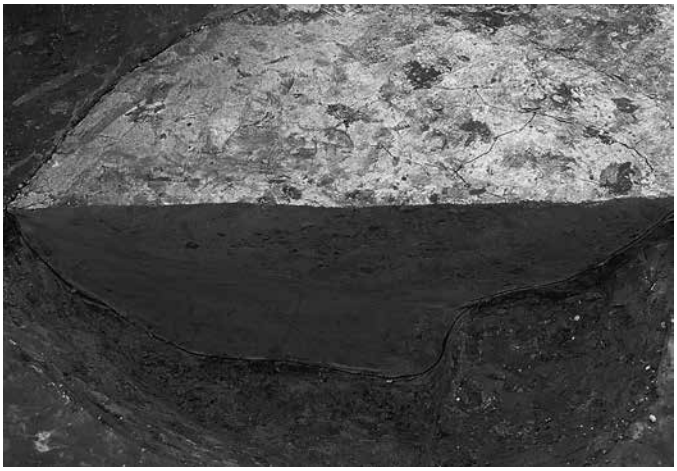


⑫4B25基本層序（西から）

⑱4I25基本層序（南から）

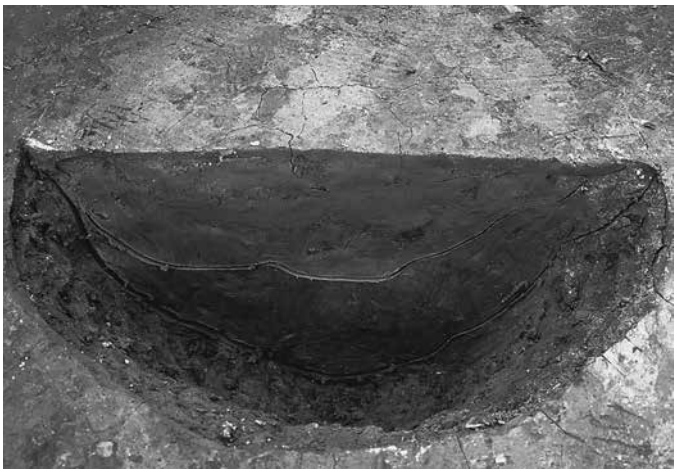
SB1・P161土層断面（南から）

SB1・P161完掘（南から）



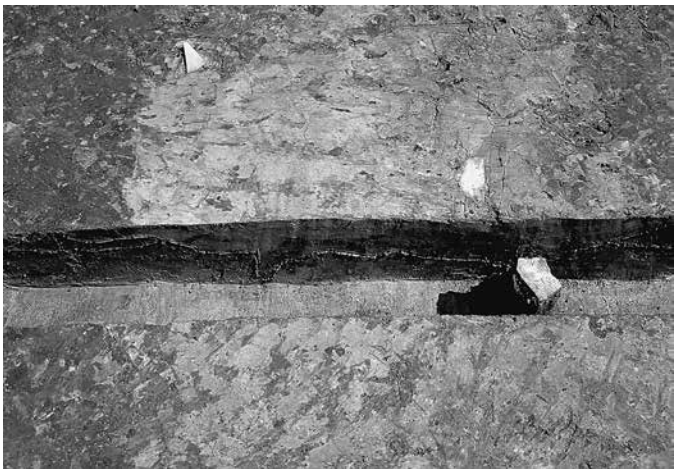
SB1・P163土層断面（南から）

SB1・P163完掘（南から）

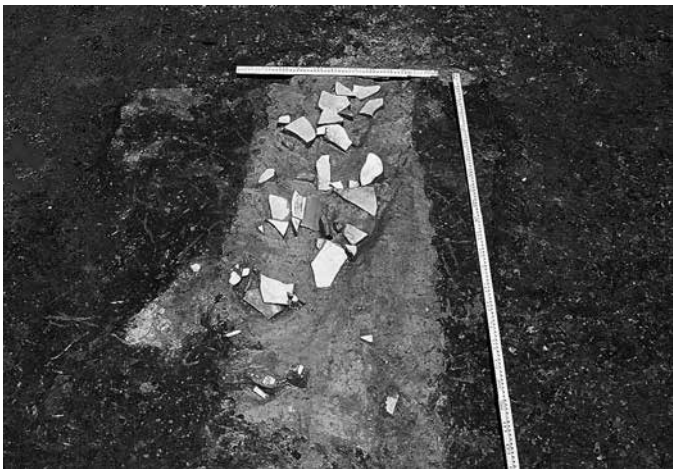


SB1 ・ P164土層断面（南から）

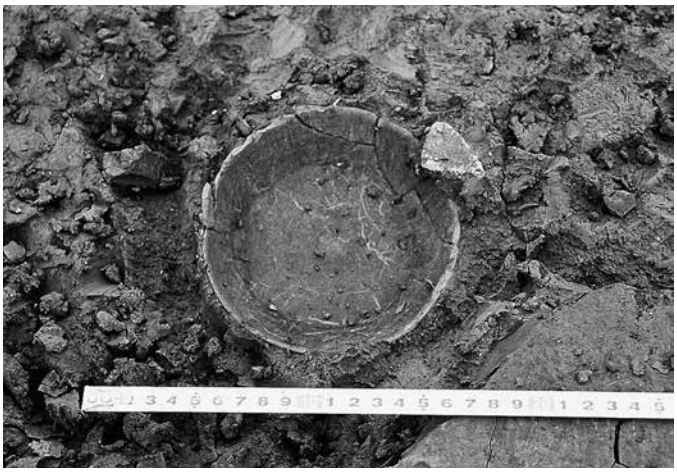
SB1 ・ P164完掘（南から）



SB1 ・ SD1土層断面（南から）



SB1 ・ SD1遺物出土状況（東から）



SB1 ・ SD172遺物出土状況（西から）

SB1 ・ SD172遺物出土状況（南から）

SB2 ・ SK33土層断面（東から）

SB2 ・ SK33完掘（東から）

SB2・SK36 土層断面（北から）

SB2・SK35 土層断面（北から）

SB2・SK67 土層断面（北から）

SB2・SK67 遺物出土状況（西から）

SB2・SK40 土層断面（東から）

SB2・P323 土層断面（東から）

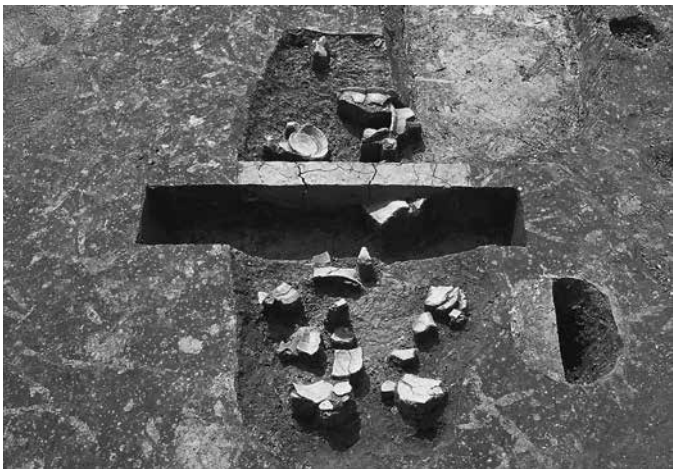
SB2・P324 土層断面（北から）

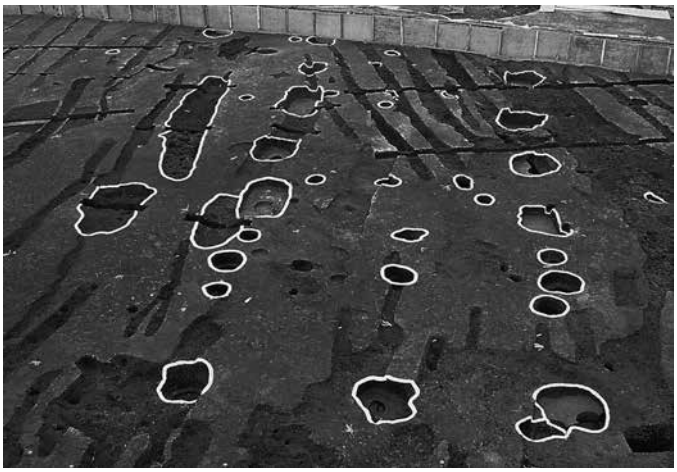
SB2・SK327 遺物出土状況（西から）

SB2 ・ SD61 土層断面（東から）

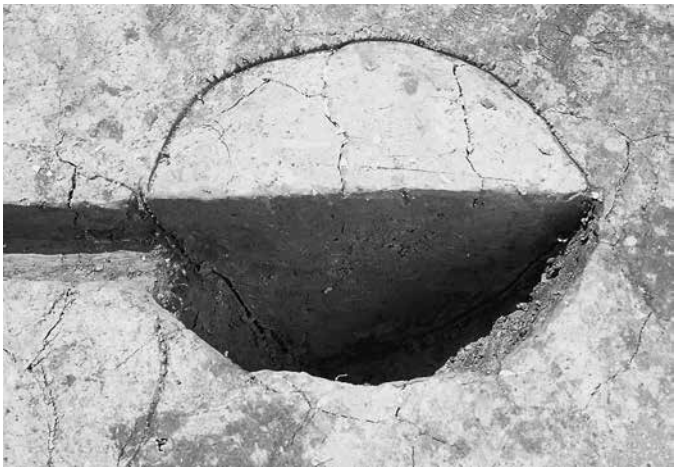
SB2 ・ SD61 遺物出土状況（西から）

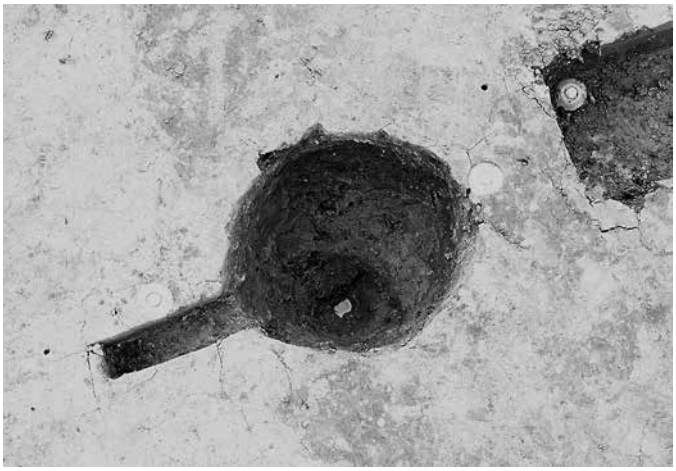
SK74 遺物断面（東から）

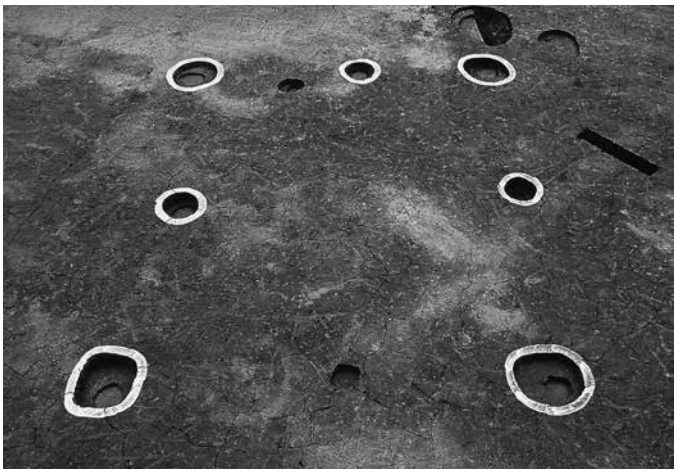

SK74 出土状況（東から）


SB2 ・ SB4（東から）

SB4 ・ P39 土層断面（東から）


SB4 ・ P20 土層断面（北西から）


SB4 ・ P20 完掘（東から）

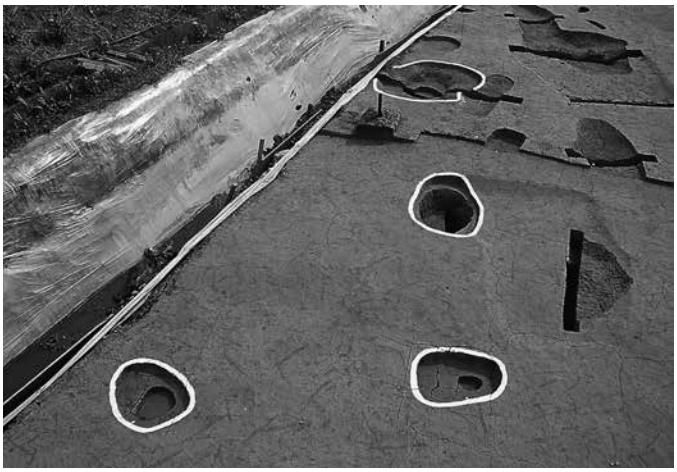


SB5（西から）

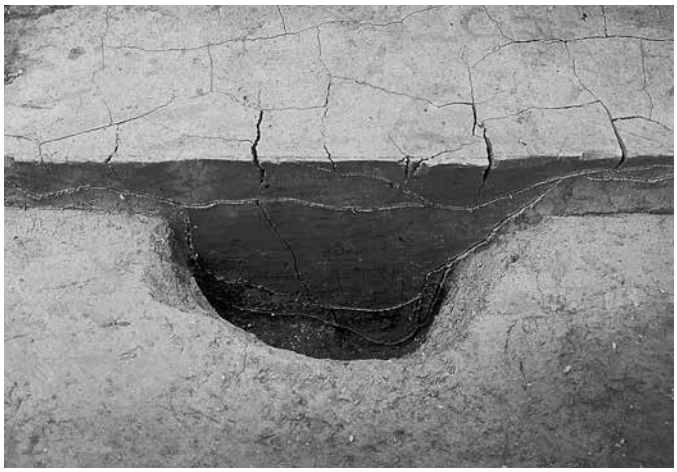
SB5・P407 土層断面（北から）

SB6（東から）

SB6・P422 土層断面（北から）

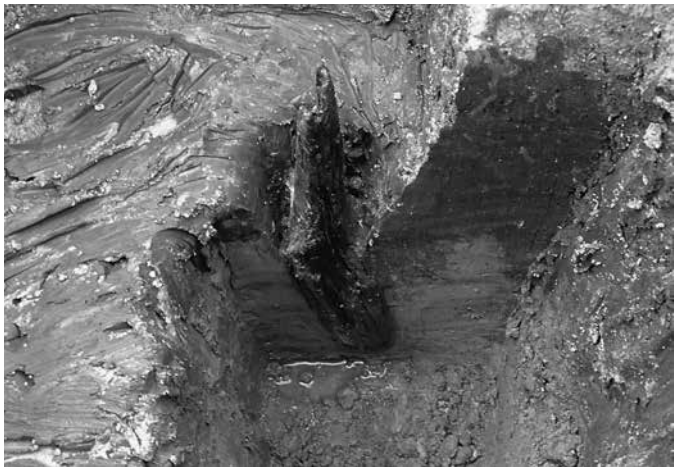


SB7（西から）

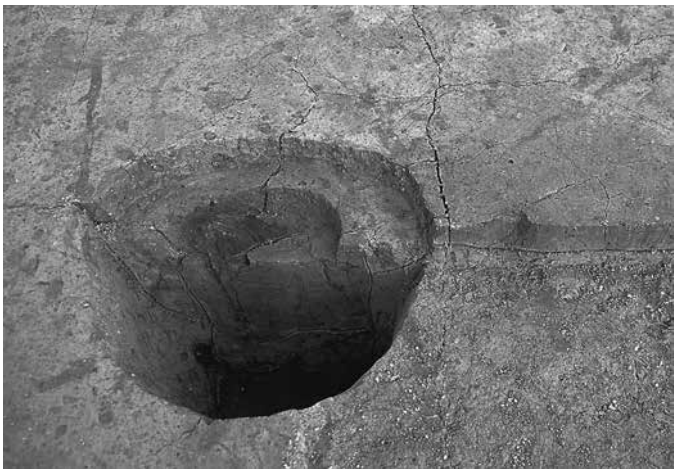


SB7・P737 土層断面（西から）

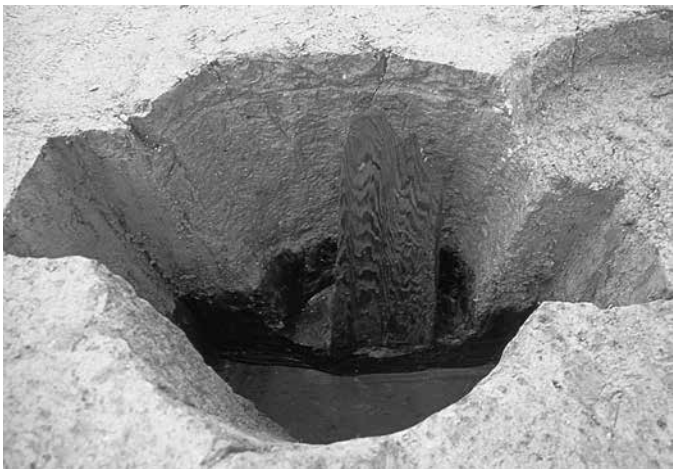
SB7・P729 土層断面（西から）



SB7・P729 柱根出土状況（西から）



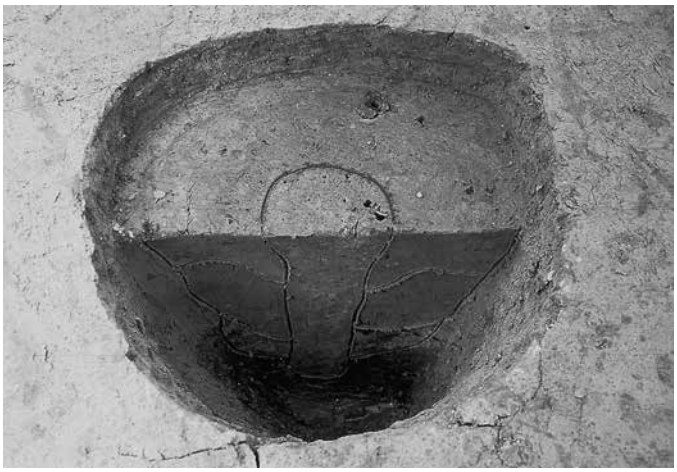
SB8 ・ P888 土層断面（西から）



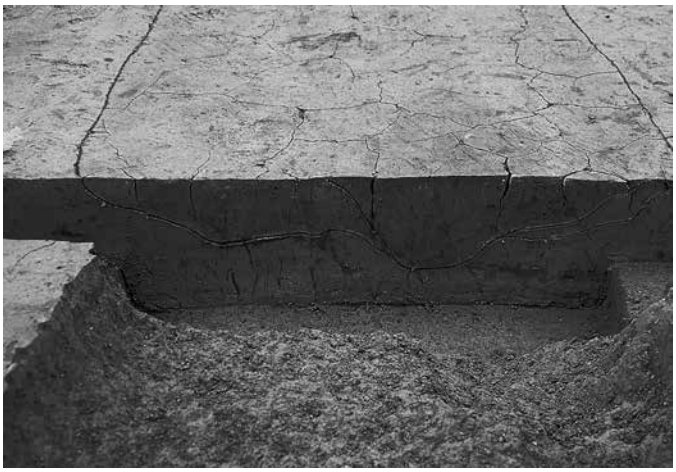
SB8 ・ P888 柱根（西から）

SB8 ・ P892 土層断面（西から）

SB8 ・ P892 柱根出土状況（西から）



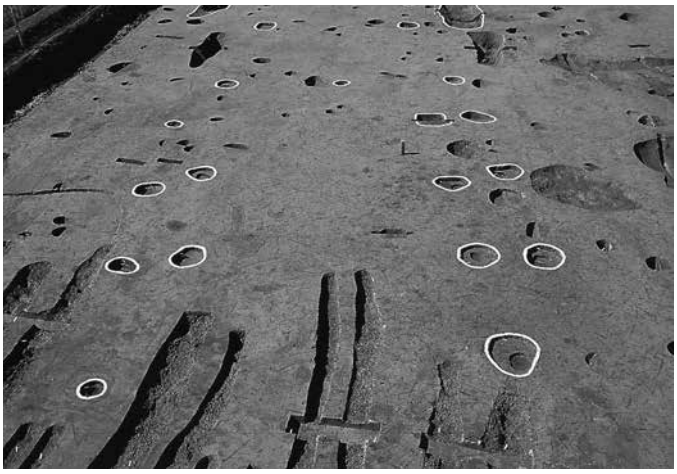
SB8 ・ P788 土層断面（北から）



SB8 ・ SD476 土層断面（西から）

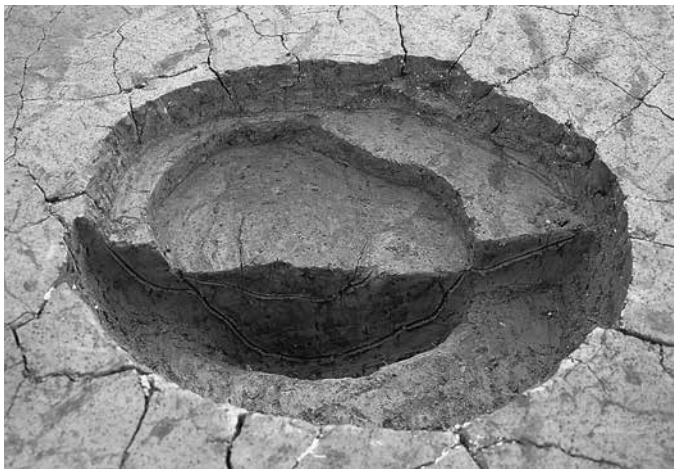
SB8 ・ SD74 土層断面（西から）

SB8 ・ SD800 土層断面（南から）

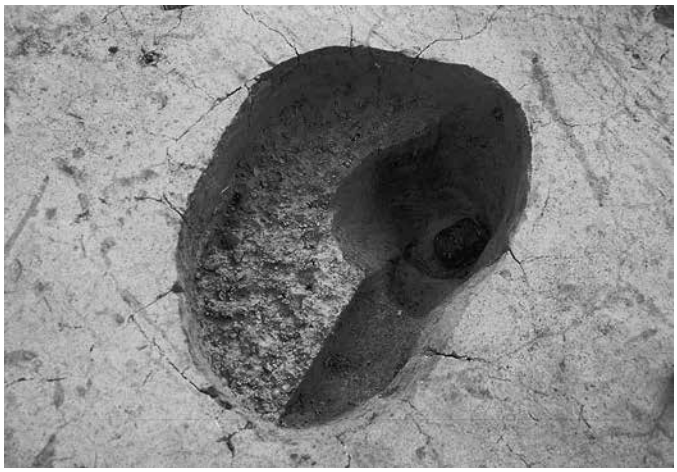

SB9・SB10（東から）

SB9・10、SD475土層断面（西から）

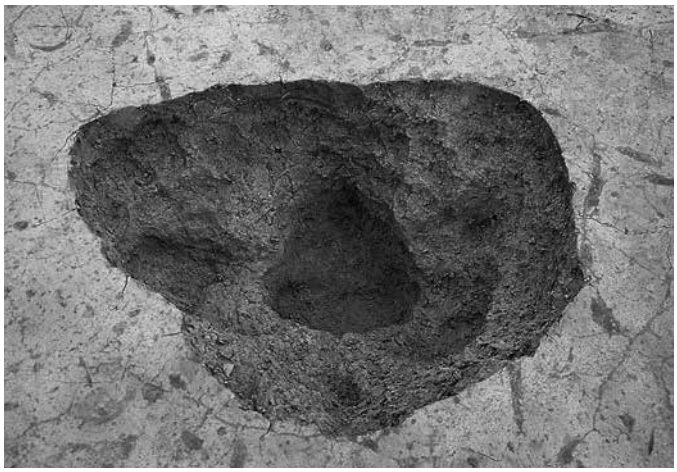
SB9・10、SD743土層断面（〇〇から）


SB9・P775土層断面（北から）

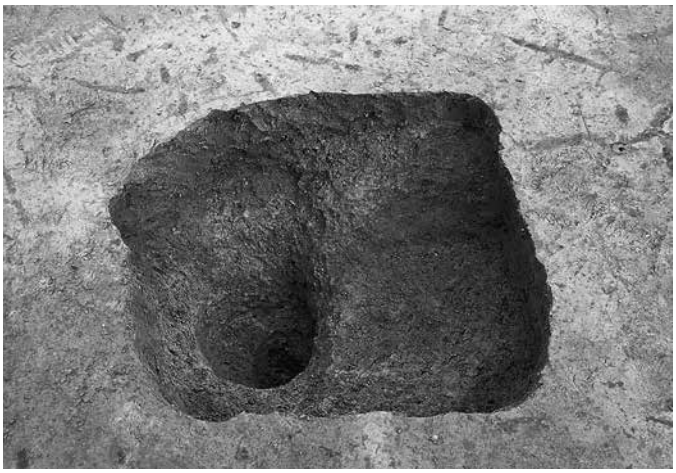
SB9・P781土層断面（西から）


SB9・P781礎板出土状況（北から）

SB10・P771土層断面（西から）

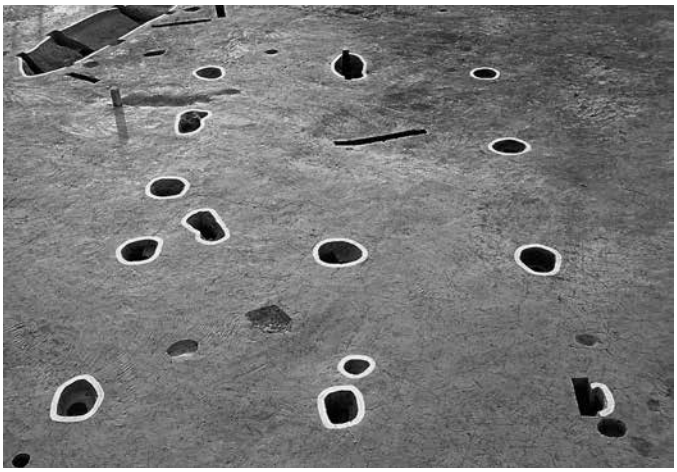

SB10・P771完掘（西から）

SB10・P791 土層断面（西から）

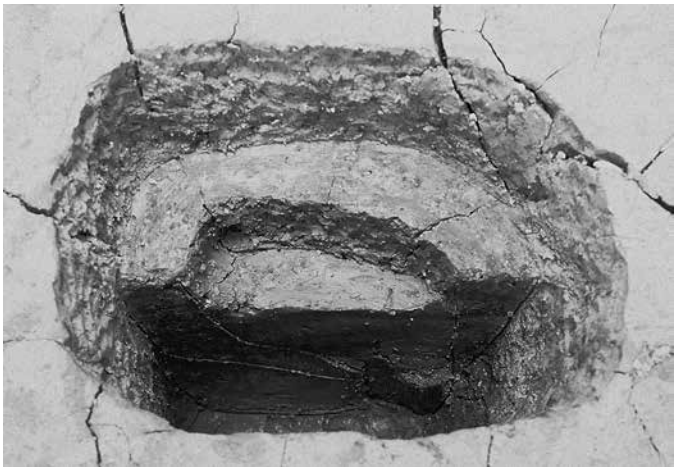

SB10・P791 完掘（西から）

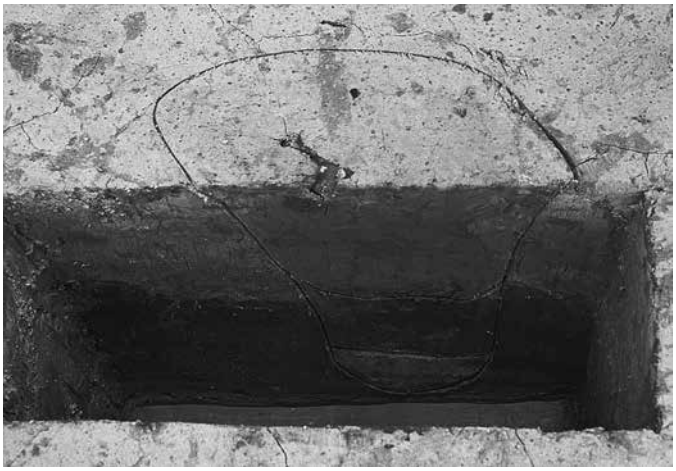
SB10・P770 土層断面（西から）

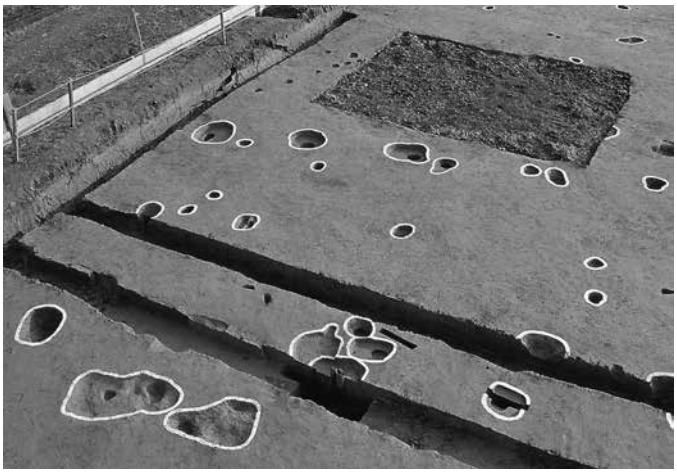
SB10・P776 土層断面（北から）


SB11（東から）

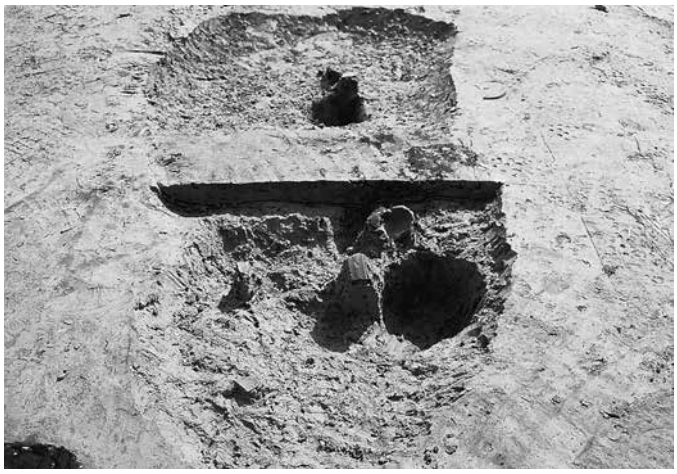
SB11・P529 土層断面（南から）


SB11・P555 土層断面（南から）


SB11・P556 土層断面（南から）



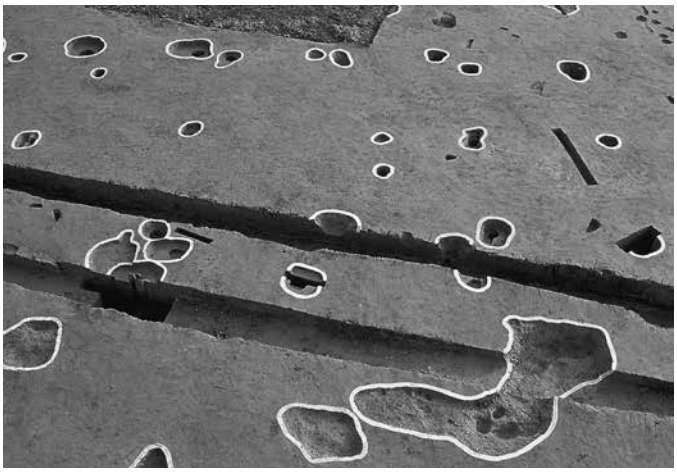
SB12（北から）



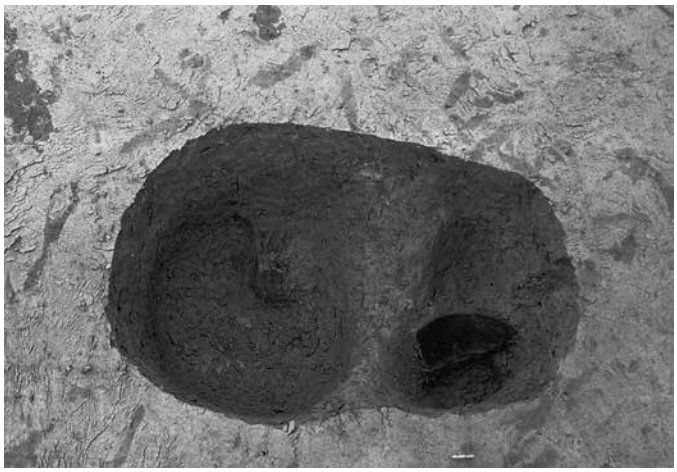
SB12・SD512遺物出土状況（南から）

SB12・SK515断面

SB12・13、P983・P984土層断面（北から）



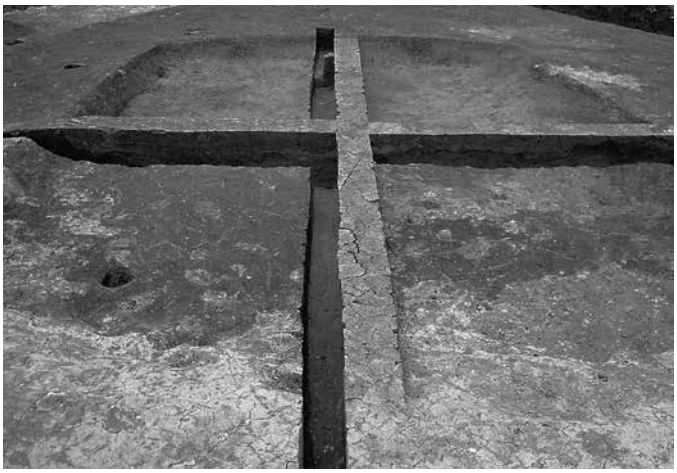
SB13（北から）



SB13・P714遺物出土状況（東から）

SB13・P974土層断面（東から）

SB13・P974完掘（東から）

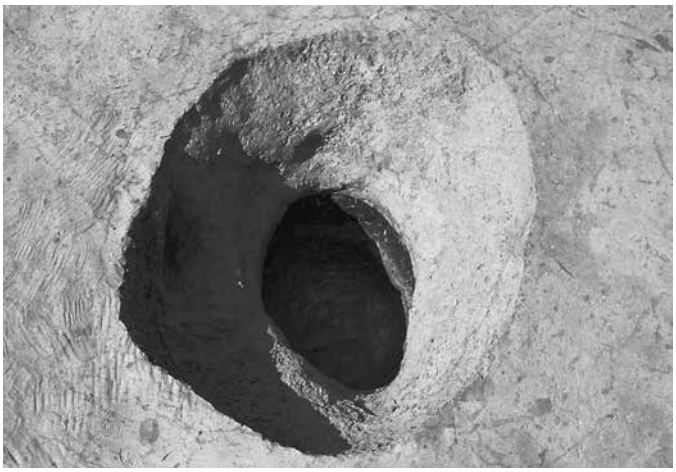

SI31 土層断面 A-A'（南東から）

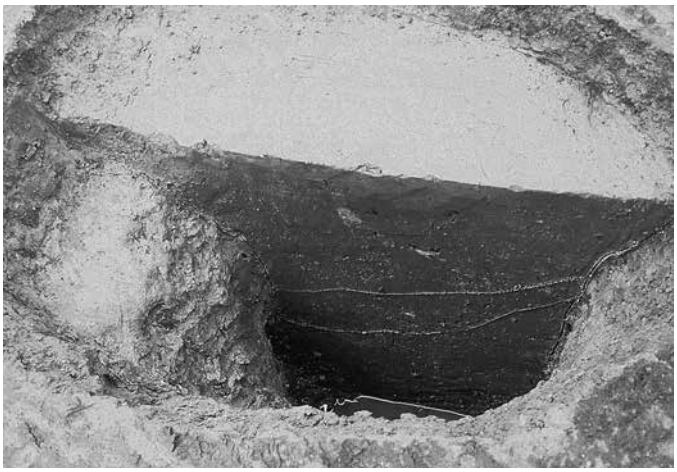
SI31 遺物出土状況（南から）

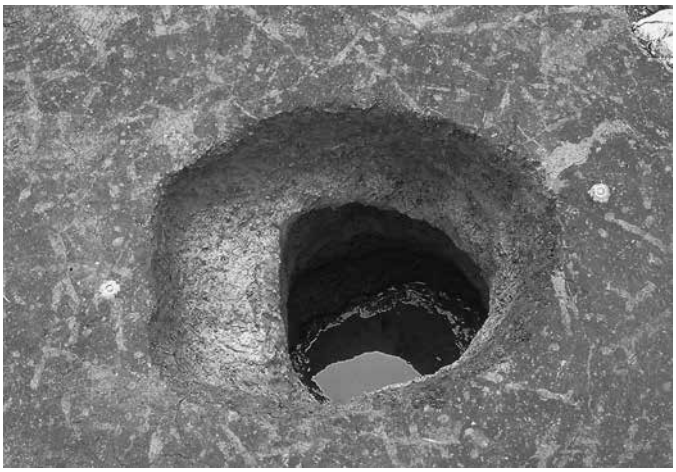
SI394 土層断面 B-B'（南西から）

SI394 完掘（南東から）

SE116 土層断面（南から）


SE757 完掘（東から）


SE378 土層断面（南西から）


SE378 完掘（北西から）

SE554 土層断面（南から）

SE554 遺物出土状況（南から）

SE784 土層断面（南から）

SE784 完掘（南から）

SK106 土層断面（南から）

SK120 ・ SK121 土層断面（北から）

SK298 土層断面（南から）

SK298 遺物出土状況（南から）

SK472 土層断面（西から）

SK472 遺物出土状況（西から）

SK526 土層断面（東から）

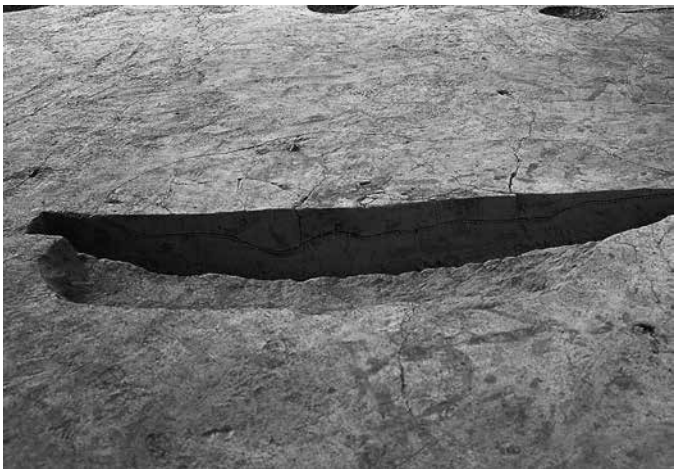
SK593 遺物出土状況（東から）

SK721 ・ SK722 土層断面（南から）

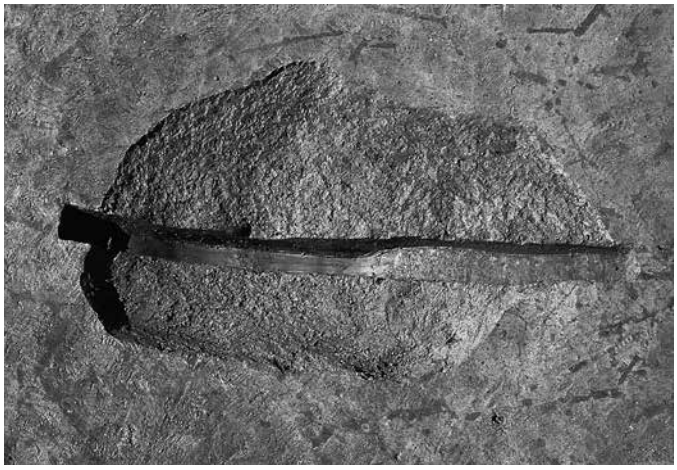
SK722 遺物出土状況（南から）

SK779 土層断面（南から）

SK779 完掘（南から）



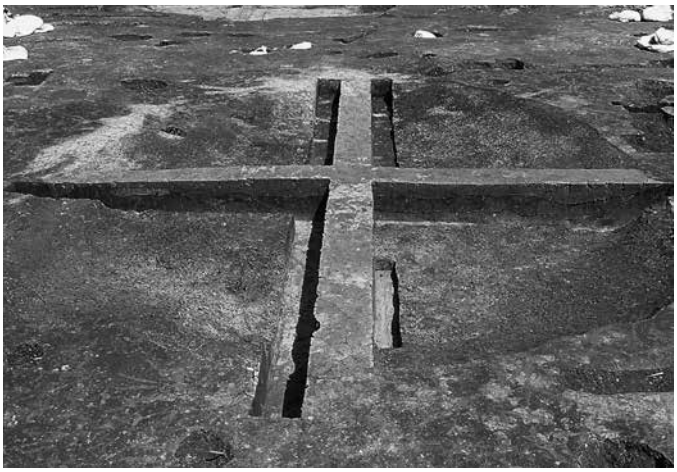
SK972 土層断面（北東から）



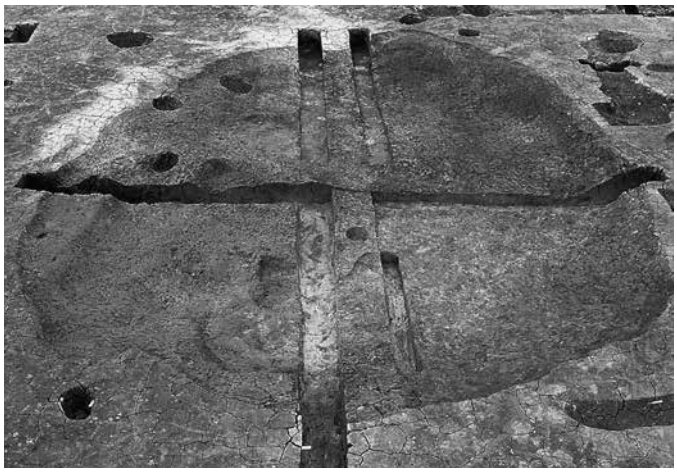
SK972 完掘（北東から）

SX438 土層断面（南から）

SX438 完掘（南から）



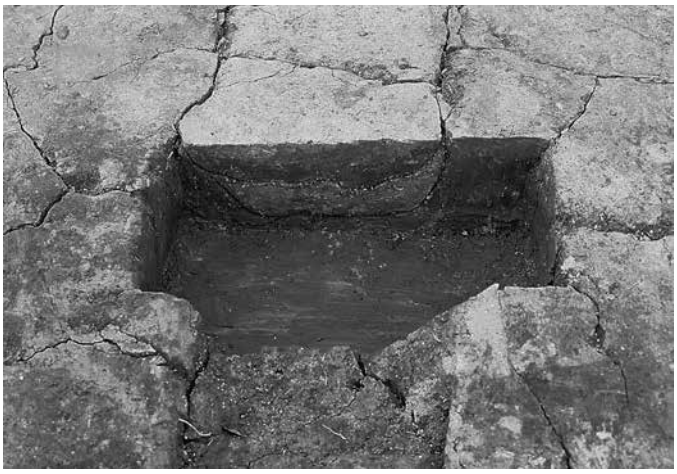
SX660 土層断面 B-B'（南から）



SX660 完掘（南から）

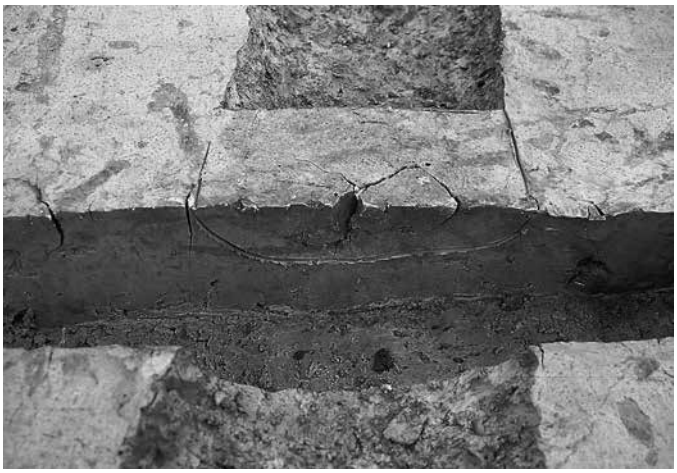
4 群 SD8 土層断面（東から）

5 群 SD47 土層断面（東から）



6群SD614土層断面（東から）

畝状小溝7群（東から）



7群SD952土層断面（西から）

7群SD884・886・P956断面（西から）

SD84近景（南から）

SD84壺（No.227）出土状況（南東から）

SD772遺物出土状況（西から）

P478遺物出土状況（南から）

縄文土器出土状況（南から）

縄文土器出土状況（東から）

SK303 完掘（西から）

SK341 土層断面（北から）

SD178 土層断面 D-D'（西から）

SD178 遺物出土状況（西から）

SD240 土層断面（南から）

SD240 完掘（南から）

SD104 土層断面（南から）

SD104 完掘（南から）

SD360 土層断面（東から）

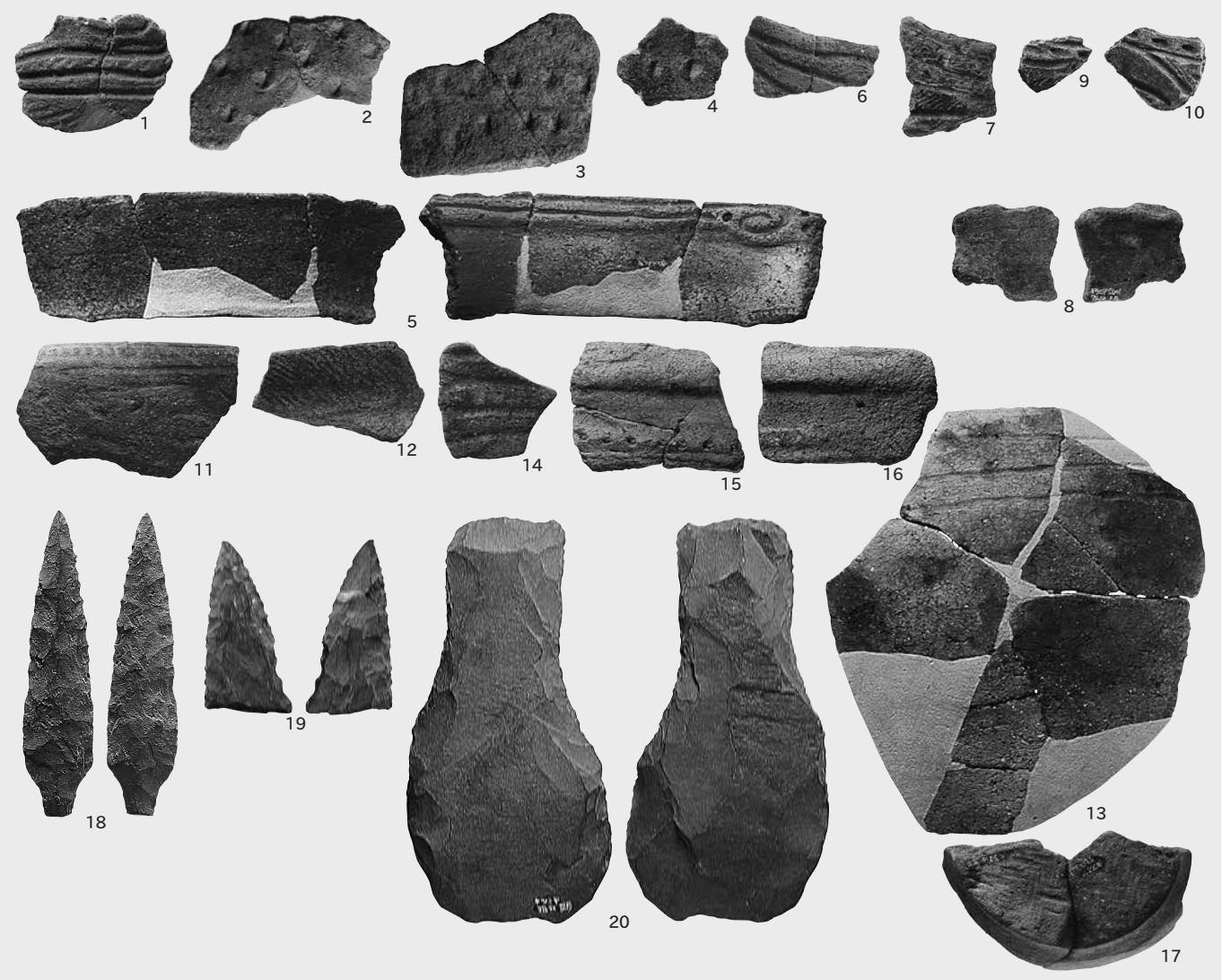
SD360 完掘（西から）

SD745 検出状況（南から）

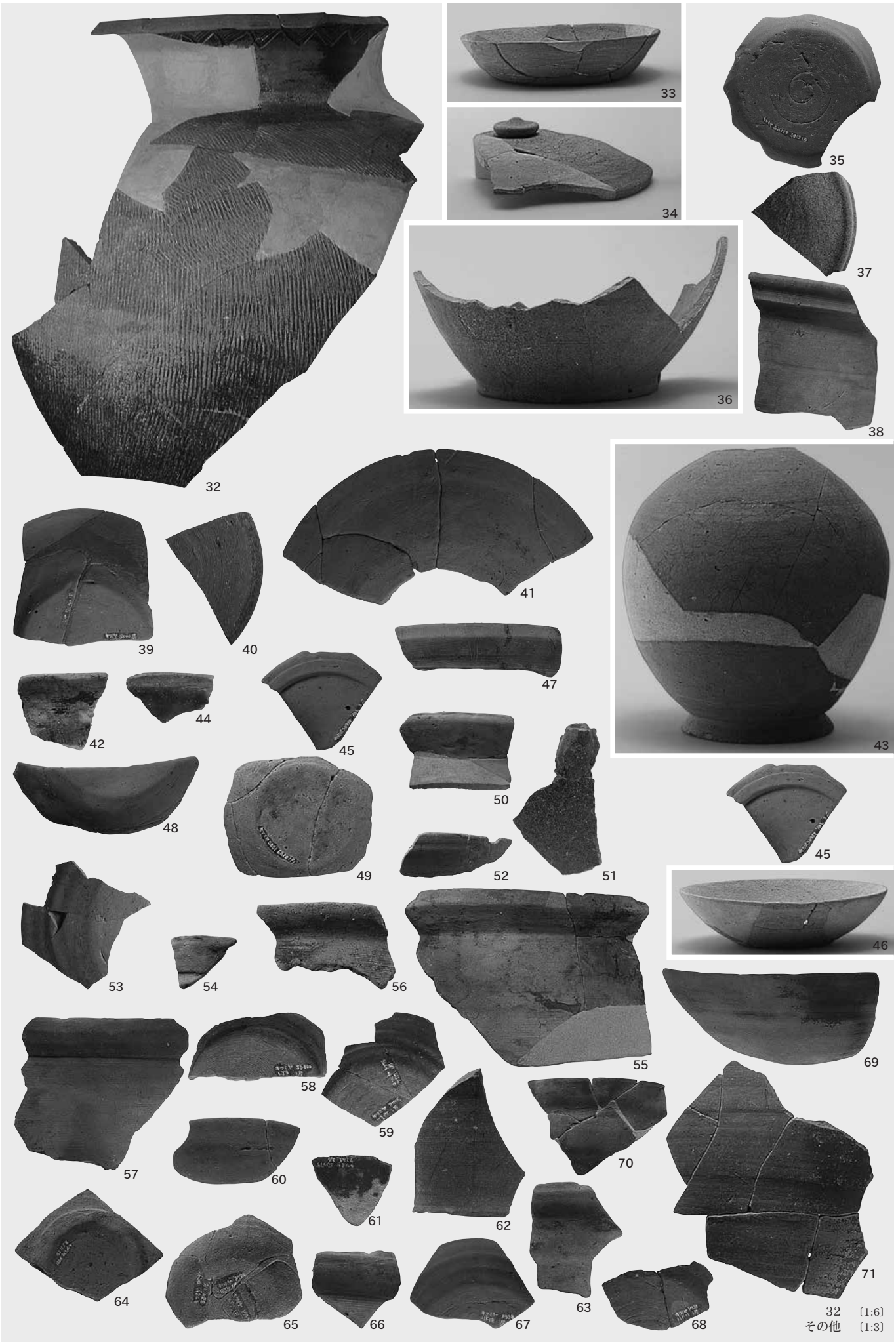
SD745 断面（南から）

SK358 遺物出土状況（西から）

SK696 遺物出土状況（東から）



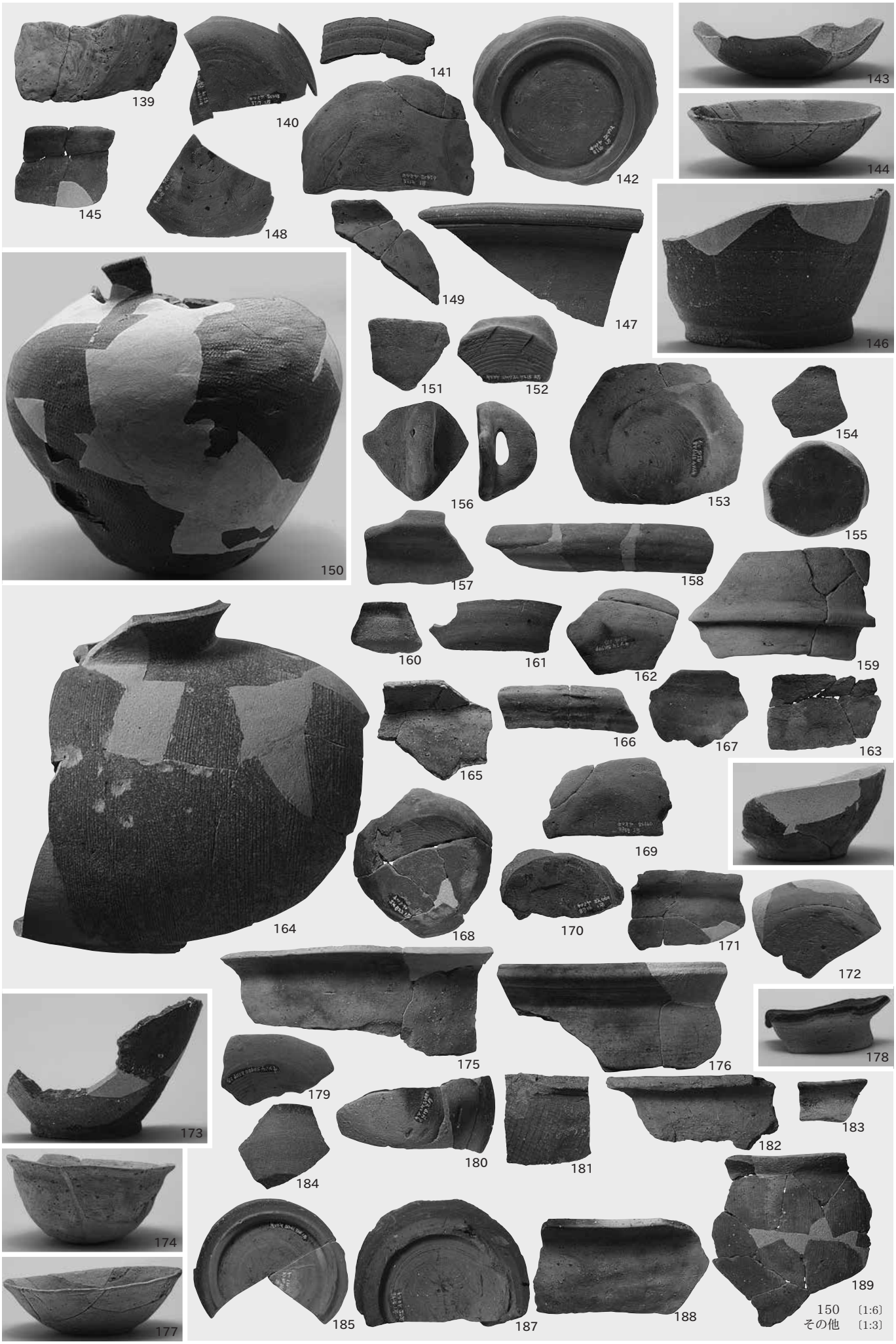
18・19　〔4:5〕
20　〔2:5〕
その他　〔1:3〕


32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71

32　〔1:6〕
その他　〔1:3〕

72
73
74
78
79
80
75
77
81
82
83
84
86
76
91
85
87
88
96
90
93
89
94
92
95
97
98
99
100
101
102
105
107
103
104
106
108
109
110
111
112
113
114
115
116
118
121
119
123
124
120
122
125
117
126
128
127
129
131
132
134
130
135
136
137
138
133

全て　〔1:3〕


139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
187
188
189

150 〔1:6〕
その他 〔1:3〕

186
190
192
193
194
196
195
198
191
202
199
200
201
205
197
203
206
204
208
209
214
215
222
207
210
218
219
220
221
226
211
216
212
217
213
224
225
223
227
229
230
228
231

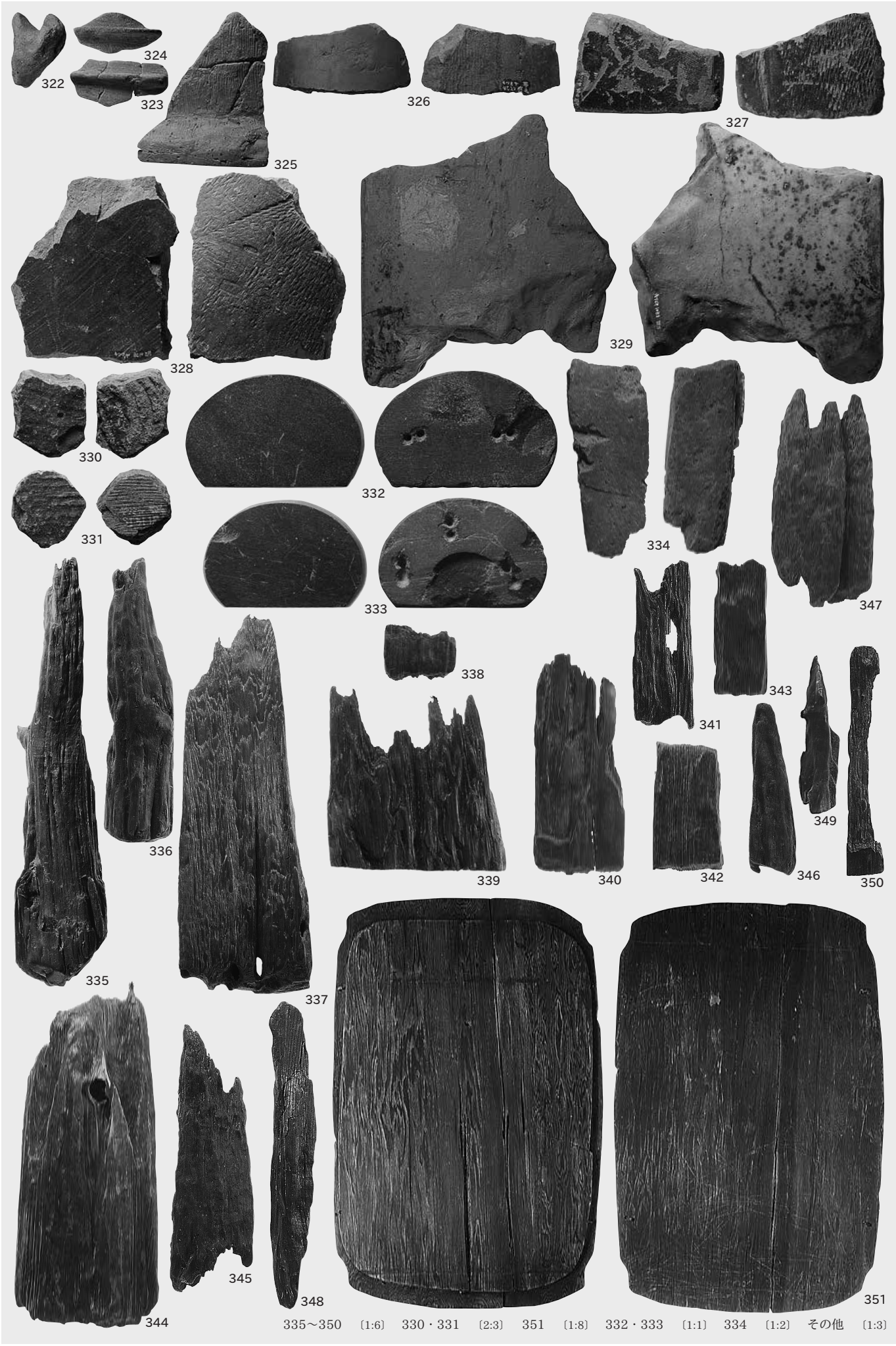
全て　〔1:3〕

232
234
235
237
238
233
236
239
240
241
243
244
242
249
250
251
252
254
245
247
253
248
260
246
261
255
257
258
259
256
262
263
264
265
266
263
269
270
271
267
272
275
276
273
277
274
280
278
279

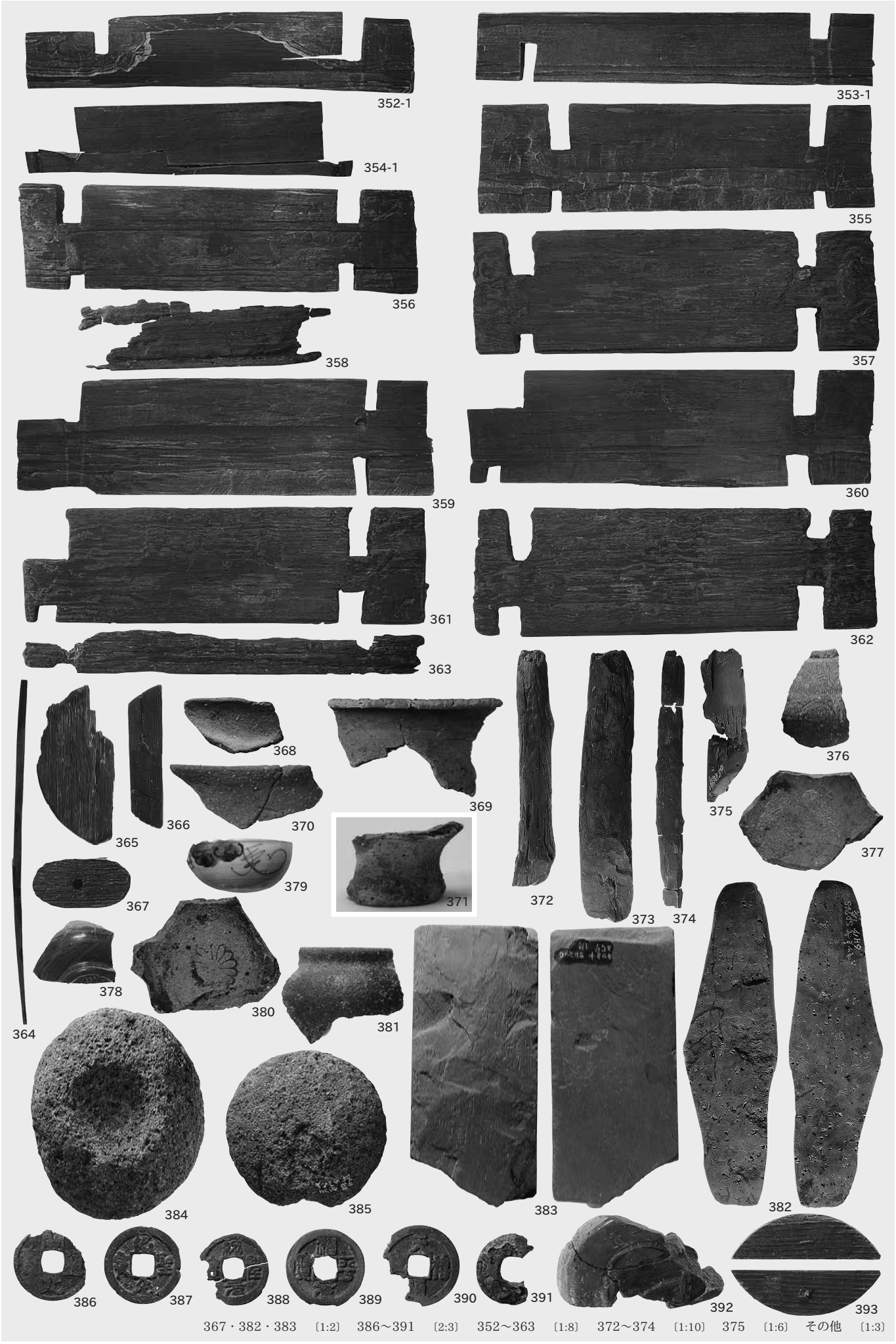
全て　〔1:3〕

281
282
283
284
288
285
290
293
292
302
286
289
305
306
308
287
291
294
295
296
307
297
298
299
309
300
301
303
304
311
312
313
314
315
310
316
317
318
319
320
321

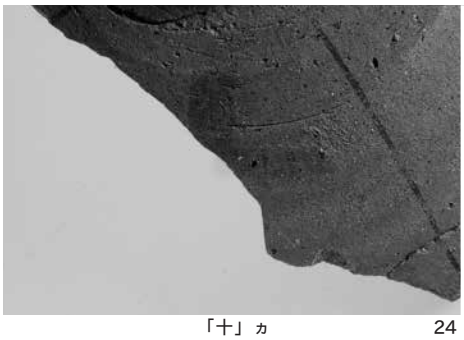
289　〔1:6〕
その他　〔1:3〕



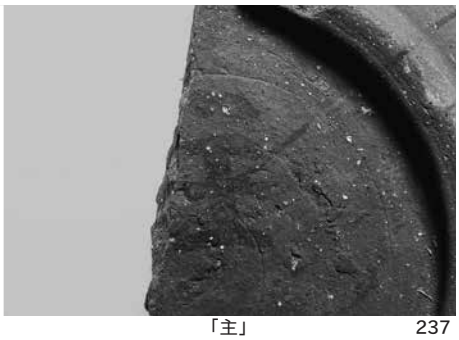
335～350 〔1:6〕 330・331 〔2:3〕 351 〔1:8〕 332・333 〔1:1〕 334 〔1:2〕 その他 〔1:3〕

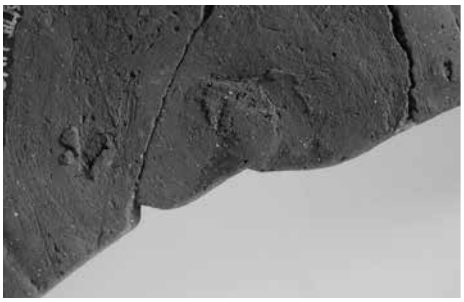


367・382・383〔1:2〕　386～391〔2:3〕　352～363〔1:8〕　372～374〔1:10〕　375〔1:6〕　その他〔1:3〕


「十」ヵ　24

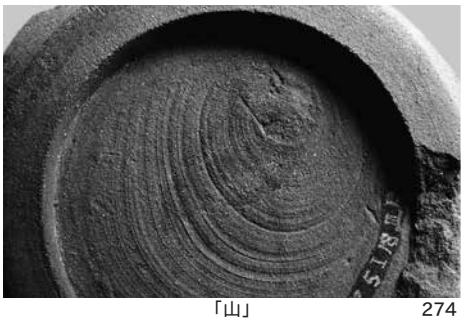
116


「主」　237

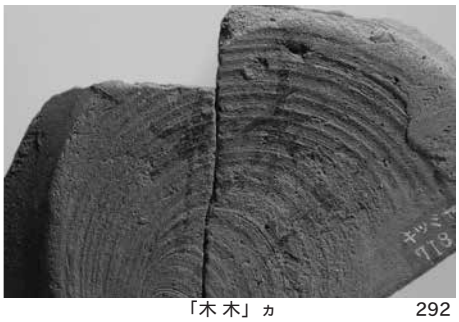

257

「山」　258

「山」　259


「山」　274

「田後」　280


「木 木」ヵ　292

ヘラ記号「×」　281

「真浄」　227

報 告 書 抄 録

ふ り が な	きつのみやいせき
書　　名	狐宮遺跡
副 書 名	一般国道253号　上越三和道路関係発掘調査報告書
巻　　次	Ⅳ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第171集
編 著 者 名	飯坂盛泰・河崎昭一・桐原雅史・加藤　学（埋文事業団）、野水晃子・山下　研（吉田建設）、株式会社加速器分析研究所、株式会社パレオ・ラボ
編 集 機 関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
所　在　地	〒956-0845　新潟県新潟市金津93番地1　　TEL 0250（25）3981
発行年月日	2007（平成19）年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
きつみやいせき 狐宮遺跡	にいがたけんじょうえつし 新潟県上越市 おおあざもんでんしんでんあざ 大字門田新田字 えむかい　ばんち 江向147番地	152269	1475	37度 07分 44秒 (新座標)	138度 16分 50秒 (新座標)	20050411 ～ 20051118	11,200m^2	一般国道253号 上越三和道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
狐宮遺跡	散布地	縄文時代中期・後期～晩期		縄文土器、 石器（尖頭器・打製石斧）	
	狩猟場	古墳時代中期	陥し穴3	木杭	
	集　落	古代（8世紀前葉～9世紀後葉）	掘立柱建物12、竪穴建物2、井戸5、土坑・ピット487、畝状小溝群8、溝132、性格不明2、川跡1	須恵器、土師器、瓦、土製品（土器片円盤）、石製品（石製腰帯具・砥石）、木製品（柱根・礎板・箸状木製品・曲物底板・井戸側部材・用途不明品）	

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第171集

一般国道253号　上越三和道路関係調査報告書Ⅳ

狐　宮　遺　跡

平成19年3月30日印刷
平成19年3月31日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市新光町4番地1
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新潟市金津93番地1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　新高速印刷株式会社
〒950-0963　新潟市南出来島2丁目1番25号
電話　025（285）3311

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第171集『狐宮遺跡』　正誤表　　2019年9月追加

頁	位置	誤	正
抄録	市町村コード	１５２２６９	１５２２２